九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ライフコースからみた乳幼児をもつ母親の育児負担感に関する臨床心理学的研究

宮本, 純子

https://doi.org/10.15017/1398270

出版情報：九州大学, 2013, 博士（心理学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済（公開確認書再提出依頼中）

ライフコースからみた乳幼児をもつ母親の
育児負担感に関する臨床心理学的研究

宮本　純子

目次

第Ⅰ章　女性の多様な生き方と母親の育児負担感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第１節　先行研究と問題点 ・・4
第２節　本研究の目的・・・14
第３節　研究全体の構成 ・・・16
第Ⅱ章　ライフコースからみた乳幼児をもつ母親の育児負担感・・・・・・・・・・18
第１節　乳幼児をもつ母親の育児負担感尺度作成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第２節　ライフコースによる乳幼児をもつ母親の育児負担感の検討 ・・ 27
第３節　第Ⅱ章のまとめ・・30
第Ⅲ章　乳幼児をもつ母親のアイデンティティと育児負担感との関連
―ライフコースからの検討―　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第１節　乳幼児をもつ母親のアイデンティティ地位と育児負担感の関連・・・・32
第２節　第Ⅲ章のまとめ・・42
第Ⅳ章　乳幼児をもつ母親の時間的展望と育児負担感との関連
―ライフコースからの検討―　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第１節　ライフコースからみた乳幼児をもつ母親の時間的展望・・・・・・・・44
第２節　乳幼児をもつ母親の時間的展望と育児負担感との関連・・・・・・・・51
第３節　第Ⅳ章のまとめ・・66
第Ⅴ章　アイデンティティ統合に関わる要因が時間的展望と育児負担感に及ぼす影響 ―ライフコースからの検討― ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
第１節　性役割態度が時間的展望と育児負担感に及ぼす影響 ・・・・・・・・・68
第２節　自己決定感が時間的展望と育児負担感に及ぼす影響 ・・・・・・・・・77
第３節　第Ⅴ章のまとめ ・・・86
第Ⅵ章　ライフコースの文脈からみた母親の育児負担感・・・・・・・・・・・・・・・87
第１節　ライフコース決定の文脈と母親の育児負担感・・・・・・・・・・・・・・・ 88
第２節　妊娠から現在までの生活における母親の葛藤と育児負担感・・・・ 99
第３節　乳幼児をもつ母親へのサポートと育児負担感・・・・・・・・・・・・・・・107
第４節　乳幼児をもつ母親の育児の捉え方と育児負担感・・・・・・・・・・・・・123
第５節　乳幼児をもつ母親の育児期の捉え方と時間的展望・・・・・・・・・・・131
第６節　第Ⅵ章のまとめ・・ 138
第Ⅷ章　総括・・・140
第１節　ライフコースからみた乳幼児をもつ母親の育児負担感の理解・141
第２節　乳幼児をもつ母親の育児負担感を軽減するために・・・・・・・・・・・142
第３節　ライフコースからみた育児負担感の特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・143
第４節　ライフコースの文脈からみた育児負担感の特徴・・・・・・・・・・・・・146
第５節　今後の課題・・・147
引用文献・・・148

第Ⅰ章

女性の多様な生き方と母親の育児負担感

第1節　先行研究と問題点

1.母親の育児負担感

⑴育児不安概念の曖昧さ

「育児不安」は，1970 年代後半から 1980 年代の前半にかけて牧野らによって指摘され（原口，2005），一連の研究（牧野，1982，1985，1987、1988）がなされた。牧野が取り上げた「育児不安」は，一時的あるいは瞬間的に生ずる疑問や心配ではなく，持続し，蓄積された不安の状態を問題にし,「子の現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」を育児不安と定義した。牧野（1982）は，乳幼児をもつ母親の意識や生活上の問題点を分析するための一つの道具として，＜育児不安＞という概念を用いて育児不安尺度を作成している。溝田（2005）は，育児不安の概念は多義的で，研究者間で一致してないと述べている。例えば，大日向（2002）は,「育児不安」を子どもの成長発達の状態に悩みを持ったり自分自身の子育てについての迷いを感じたりして，結果的に子育てに適切に関われないほどに強い不安を抱いている状態と定義している。田中（1997）は，育児不安を少なくともその一部は，育児に対する脅威的・否定的評価（子どもの育てにくさの評価）の結果生じると考え，育児に関連して感じる日常の些細な混乱が蓄積された結果生じると述べている。そして，牧野によって定義された育児不安は，母親関連育児ストレスとみなし，子ども関連育児ストレス（子どもの育てにくさ）は母親関連育児ストレスに影響をすると述べている。田中（1997）は，育児不安の結果として母親の蓄積疲労徴候がもたらせることも見い出している。

一方，岩田（2000）は，育児不安・育児ストレス・育児ノイローゼ・育児疲労などにおいて，明確な定義や相互の関連，相違点についての説明はほとんどなされていないことを指摘し，これらを代表する形で「育児不安」という用語が用いられていると述べている。溝田（2005）は，育児不安の概念が多義的で研究者間で一致しないのは，不安の概念を捉える事の難しさに由来するのではないかと述べている。育児不安を抱える母親が何に不安を抱いているのか認識できない漠然とした状態が育児不安だと指摘し，母親の個別性という状況を考えると，育児不安概念を細分化して検討する必要性を提案している。

しかし，牧野が作った育児不安尺度を詳細にみていくと，育児に関する不安より疲労感や負担感で占められていることがわかる。「自分一人で子どもを育てているのだいう圧迫感を感じてしまう」「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う」といった育児不安尺度の項目は，不安というよりは，育児に対して負担を感じている否定的な感情と言えよう。育児不安の概念を牧野（1982）の育児不安尺度をもとに詳細に見て検討するならば，育児不安を包括するような育児期の母親が感じる負担感という広い枠組みが必要になると考えられる。現代の母親たちは,「親としての役割の担うこと」と自分自身の「自己実現」との狭間で悩んでいることが指摘されている（原田，2008）。育児が母親にとって自己実現を妨げる負担なものとして認識される可能性もあり，今日の母親にとって育児負担感の程度は,「親としての役割の担うこと」と「自己実現」の葛藤の程度を反映するとも考えられる。育児不安を含み，今日の育児期の母親の意識を包括する概念として育児負担感について考えていくこととする。

(2) 育児負担感

近年，痛ましい虐待事件が頻繁に発生し，育児に当たって悩んだり，不安を抱いたりする母親が増加している。川井尚ら(1993）による育児に関する基礎的研究では，3 歳未満の乳幼児を持つ母親 766 名を対象にしたところ，61%が「育児ノイローゼに共感できる」と述べ，また「叱りすぎるなど，子どものことを虐待しているのではないかと思う」者が 23%もいた。20%の者が「母親として不適格であると感じる」と答え，26%の者が「何となく育児に自信がもてないように思う」ことを肯定している。32%が「ひどく疲れやすい」と言い，31%の者が「とても心配性で，あれこれ気にやむことが多い」とも答えている。このように育児に関する不安や疲労や葛藤を感じている母親は予想以上に多く，母親の育児負担感がかなり高いことを示していると言えよう。岡本（1997）は，一般的な普通の母親も「子育てはつらい」「我が子をかわいく思えない」などの気持ちを持つと述べている。かつて，女性は本能として母性を持ち，誰でも育児を上手にこなすものと見られていた。母親にとってわが子の育児は喜びであるという側面のみがクローズアップされていた。そのため，子殺しや遺棄を始めとした虐待行為が発生した場合，原因は母親の個人的要因に帰せられ,特殊な事例として扱われることが多かった。しかし,すでに 1960 年に Andry,R.G は，母親が無関心であったり，暖かい愛情をそそげない場合について述べ，子どもに及ぼす影響を指摘している。その後，日本でも大日向（1988）によって母性の研究が発表され，3 歳児神話がとりあげられるようになった。

今日，「どうしても子どもに手をあげてまう」「イライラしていて激しい言葉を子どもに投げつける」「何もかもいやになって，子どもをほったらかして外に出た」など，母親は虐待とは思っていないにしても,「いつかは子殺しもやりかねない」と人ごととは思えないとして，相談に来る母親が増えてきて，母親たちの行為に対する恐怖と不安が相談機関に寄せられるようになった（武田，1998)。

大日向（1988）は，人間における育児とは，生得的要因の保証を得て成立する側面とともに，社会的・文化的要因のもとに活性化し方向づけを受け，発達変容する側面をもつと述べている。従来，育児は女性独自の生理的特性から生まれる本性であるという考え方が強く，それゆえ普遍的な側面が強調されてきており，人間の育児における文化依存的側面が弱く，母親以外の要因が関与する余地についてあまり関心がはらわれることが少なかった。近年，育児に悩み不安を抱く母親の出現が注目され，育児ノイローゼに陥る事例も少なくない。今日の母親が置かれている育児状況はどのようなもので，母親の育児負担感はどの程度のものなのか。複雑な現代社会において育児を支える条件や何を欠いたための現象かという検討がなされるようになってきた。

(3)他者からのサポートとその限界

佐々木ら（1996）は，横浜市における乳幼児をもつ母親 1,000 名に対するアンケート調査から,「働いている人は職場や保育園での人間関係を持つため育児に不安を感じる人は少ない。半面，専業主婦の人は子どもに接触する時間が長い分，苦痛を感じやすく，不安に陥りやすい」と報告している。また，この調査の結果から,「育児に対する不安に陥りやすい人は，人との関係が希薄な人，人間関係に対して自分から消極的だと思っている人，夫を含めた人間関係の中で一種の孤立感がある人と言える」と結論づけている（今泉, 2001)。

服部ら（1991）は，大阪府下南部のある市において，一年間に生まれた全乳幼児及びその親を就学時点まで追跡調査し，育児における不安をもたらした要因を分析した結果,「密室の中の孤独な育児」が不安をもたらす要因であると考察している。

このように地域の共同体が崩壊し，核家族化する中で，母親一人が育児を背負わなければならないことが示され，育児において不安に陥る母親が相談する相手も見出せないままに悲観的・絶望的な心理状態に陥るという育児ノイローゼのパターンが現代もっとも多いと考えられるようになった。子どもの状態や自分自身の子育てのあり方を客観視できなくなるほど，育児に負担を感じている母親は予想以上に多いことが示唆された。

そのような現状が報告されたことにより，最近では育児に不安を抱く母親を対象とした子育て支援や心理的援助がさまざまな形態で実施されるようになった。牧野の研究（1982，1983，1985）で育児に関する不安の程度は母親の社会的関係の広さや夫との関係に規定されていることを報告した。また，子どもの発達や育児状況は，母親ばかりではなく父親（夫）との相互作用や関係から影響を受ける(数井，1995)として，育児を家族システムの視点からとらえる重要性（数井・無藤・園田，1996）も示唆されている。

家族や社会からのサポートによって育児に対する不安が軽減されると指摘される一方で，他者からのサポートだけでは限界があることも報告されている（石・桂田，2010）。兵庫レポート(原田、2006)に続き、原田(2008)が行った乳幼児をもつ家庭の縦断研究によると，この 20 年の間，母親が受けるサポートは以前より増えたにもかかわらず，母親のイライラ感が増大し，育児における不安が一層高くなっていることが示された。

家族や社会からのサポートという育児を支える条件が整えられている現状にもかかわらず，母親の育児に対する負担感は軽減されず，不安や否定的な感情が未だ緩和されないのは何故であろうか。現代の社会が母親に与えている影響は様々であろうが，社会的・文化的要因が母親に与えた影響とはどんなことが考えられるであろうか。また，それはどんな葛藤を呼び起こしているのだろうか。

2. 女性の多様な生き方

（1）女性のライフスタイルの変遷と葛藤

かつては良妻賢母が女性の唯一の理想の生き方とされた時代があった。女性が子どもを産み育てることがどのように評価され，いかなる問題が生じるかは，時代の趨勢と無関係ではない（大日向，1995)。最近では，女性のライフスタイルも多様化の傾向にある。子育てと仕事をめぐる女性のライフスタイルの変遷について，椋野（1995）は次のように述べている。“女性のライフスタイルは 1970 年代半ばまでの高度経済成長期とそれ以降に分けられ，高度経済成長期には，企業に雇用されるために農村から都市に人口が流入し，結婚して核家族を形成した。既婚女性の就業率が低下し，専業主婦が増加していった。厳しい農作業に追われながら家事育児を行う母親の姿を見て育ったこの時期の若い女性にとってサラリーマンと結婚して専業主婦になることはあこがれの生活だった。1970 年代半ば，専業主婦率はピークに達し「男は仕事，女は家庭」という性別役割分業が最も徹底していた時代だった。しかし，会社人間の夫との核家族世帯で，子育ては母親だけが担うものとなっていった。1970 年代半ば以降，経済は低成長時代に入ったが，雇用者割合，高等教育進

学率は緩やかであるが，さらに進んでおり，既婚女性の就業率が上昇し始める。長時間労働や遠隔地への転勤などを当然とし，家庭より仕事を優先させる企業風土が維持され，子育ての負担が母親に集中していった時期である。1986 年，男女雇用機会均等法が施行され，女性もやりがいのある仕事につく機会は増えたが，そのためには，職場優先の企業風土に合わせた「男性並み」の働き方が求められた。「男は仕事，女は家庭と仕事」という，既婚有職女性にとってはより負担の重い性別役割分業を余儀なくされる時期だった。20 世紀の終わりになって，未婚女性の間に改めて専業主婦志向が高まり，「女は家事と趣味(的仕事)」というのが志向されるようになった”。

このように女性の子育てと仕事をめぐるライフスタイルは，社会的影響を受け変遷してきたと捉える事ができる。しかし，女性は多様な生き方ができるようになったといわれているものの，実際は必ずしも多様な生き方を可能とする余地が少なく，男性と対等に社会参加することは依然として困難な社会状況が背後にあることを考える必要がある(大日向，1995)。女性はかつてのように子どもを産み育てることだけに幸福の価値をおかなくなった。その現状を考えると今日，男性と対等に社会参加することが難しければ，その現実とのはざまで葛藤を抱え込んでいる女性も多いのではないだろうか。

柏木（2001）は，女性＝母親・妻ではもはや幸福な一生とはならないという現代女性の心の変化について述べている。原口ら（2005）も，今日の母親たちは“子育てをしたい”と同時に“自分の生き方を大切にしたい”という葛藤が生じる傾向が高く，その結果，育児を肯定的に捉えることが困難となり，育児不安などの育児負担感を喚起する要因となっていることも示している。つまり，現代女性の心の変化は，葛藤を抱え育児感情にマイナスの影響を及ぼしていると言えよう。

(2) 女性のライフコースの理想と現実

ライフコースとは人々が辿る人生の道筋を（岩井，2010）であり，一生のうち，就学，就職，結婚，出産など，さまざまな出来事を経験し，その選択の積み重ねによってライフコースを分類することができる（佐々木ら、2009)。今日の独身女性の理想のライフコースとして，約 30%の女性が出産後も就業継続を，約 40%が育児後の再就業を望んでいるものの，専業主婦を希望する女性は約 20%にとどまり，その割合は減少傾向にある。また，結婚を機に仕事を辞める女性が 20%であるのに対し，出産を機に仕事をやめる女性が 65%である（渡邊・内山，2011）という現状から，女性と仕事の関わりを考える際のターニングポイントは「出産や育児」であると考えられる。つまり，子育てが女性にとって，ライフコース選択の重要なポイントとなることが示されている。

現代の子育て世代の女性では，いったん離職し，出産・育児後に再就職する「再就職コース」や，出産後も就業を継続し，育児と仕事に並行して取り組む「継続就業コース」を理想とする割合が上昇しているが，「継続就業コース」を理想とする人の中で，それを実現させている割合は 62.3%となっている。また，「再就職コース」を理想とする人の中で，それを実現させている割合は 55.6%である。いずれも希望を実現させている割合は半数強にとどまっている（内閣府，2006)。

過去の経済企画庁国民生活局（1987）の調査では，女性が理想とするライフコースは，結婚ないし出産を機に離職し，子どもが一定の年齢になったら再就職するコースが一番多

く，43.4%を占めた。しかし，再就職がかなり難しいことを反映し，現実には31.3%と低くなっていた。離職せずに仕事を持ち続けるか，専業主婦となるかという選択肢を余儀なくされ，理想のライフコースをとれないままに葛藤を内面に抱え込むことが予想される。この調査から20年たった今日では,再就職よりも就業継続を理想のライフコースとして希望する女性が増えたことがわかる。しかし，未だ女性の理想のライフコースの実現率は低く，保育所，職場環境など社会制度の充実を待たねばならない面があるが，その一方で，理想のライフコースをとれない女性達はどのような人生を歩んでいるのか，その現実に目を向ける必要があるだろう。子育て期に数年後の自分の姿に展望を持てないという不安を抱く母親の姿（大日向，2002）は，内面に抱え込んでいた葛藤が，子育て中の閉塞感とともに浮上してきたとも考えられる。

また，名越ら（1997）の母親のライフコースと育児不安の程度との関連の調査では，結婚・出産前に専業主婦を希望していた母親群が，他のライフコースを希望していた母親群と比較して育児不安の程度が有意に高いことを明らかにしている。就業を希望する女性が多くなってきている一方で，キャリアウーマンややりがいのないパートの仕事を選択するより専業主婦を希望する女性が出現しているが，家庭に入った女性が実際にはどのように感じて日常を過ごしているのだろうか。専業主婦を希望した母親は，その後のライフコース希望で，結婚・出産前と現在では大きな変化が見られ，就業希望へと変化している母親が大多数であったということも名越ら(1997)の調査で示された。現代の母親の不安とは，育児に関する不安だけではなく，自分自身の生きがいがないことや，社会に出て自分の能力が発揮できないという状況への不安も大きな要因ではないかと思われる。ふれあいスペース事業や電話相談事業などで出会った母親達の声を聴いた田中（2001）は，子育て不安は生活不安，母親自身の人生の不安だと報告している。母親が自分の人生に不安を抱いているのならば，日常，行われている育児はどのように受け止められているのだろうか。子どもを産み育てることに高い評価が得られた時代に比べ，女性が多様な生き方を選択できるようになった今日では，育児は価値あるものではなく，女性の人生において多様な生き方を阻む負担なものという認識が芽生えてきているのではないだろうか。

（3）育児期の女性のアイデンティティ

アイデンティティとは，Erikson,E.H.による構成概念であり，彼の後成的・漸成的（epigenetic）発達図式（1959）において，幼児期以来形成されてきた個別的な多数の同一化（idetifications）が，青年期において取捨選択され再構成されることによって成立する，社会的かつ現実的な自我の確立の状態として位置づけられている。青年期以前の同一化が，多くは遊戯的で一貫性を欠くのとは対照的に，青年期に形成されるアイデンティティは自覚的かつ現実的で，一貫性と発展性とをあわせもっている。この極めて包括的で抽象度の高いアイデンティティ概念を実証的研究の対象とするために，多くの試みが行われてきているが，それらはアイデンティティを概念化する様式において 2 群に大別できる。まず第1群は，アイデンティティを「拡散」と「統合」とを両極とする第1次元をなすものとしてとらえるアプローチである。アイデンティティの達成の程度は，それに付随すると考えられる諸特徴の水準に基づいて，1 次元の上に位置づけられる。ここでは，アイデンティティが成立する仮定および機構は，必ずしも問題にされていない。

アイデンティティを概念化する第2の様式は，Marcia,J.E.（1966） によるアイデンティティ地位（identity status）アプローチである。このアプローチはアイデンティティ形成の機構それ自体を解明することを意図して，アイデンティティの状態を規定する心理社会的要因として「危機」と「自己投入」の2変数を仮定し，半構造化面接によってその情報を集め，4つのアイデンティティ地位に分類した。

さらに，加藤（1983）は，この「危機」と「自己投入」の2変数を「現在の自己投入の」水準，「過去の危機」の水準，「将来の自己投入の希求」の水準の3時点での有無との関係から各個人のアイデンティティの状態を捉え，アイデンティティ地位を判別している。青年期に確立したアイデンティティが，どのような危機を経て，育児期の女性のアイデンティティへと変化しているのだろうか。

アイデンティティは，個の確立によって発達，進化していく側面と同時に，他者との関係性によって成熟していく側面も存在する（岡本，1995）。特に，成人期においては，人はさまざまな社会的役割や家庭的役割を担う。女性は，職業，家庭，個というさまざまなアイデンティティを内部で統合しつつ，成人期を生きる(園田ら、1996)。

岡本（1986）は，成人期におけるアイデンティティの発達経路の分析で女性特有のアイデンティティ形成プロセスがどのように展開していくかということを重要な課題とした。育児期は，職業を持つ持たないにかかわらず，個としてのアイデンティティと母親としてのアイデンティティの葛藤が顕在化する時期である（岡本，1996）。育児期にアイデンティティの葛藤が顕在化するならば，育児期の母親の育児感情は内面のこの葛藤と大いに関係していることが予想される。

育児期の女性のアイデンティティ葛藤と統合のあり方についての調査（岡本，1996）では，子供を持つすべての女性が母親であることを受容し，母親である自分を自己の生き方の中に統合しているわけではないことが示唆された。今日においては，育児期においてさえも，母親としての役割だけでは自己のアイデンティティを支えきれない（岡本，1997）という問題があげられている。

多くの女性の場合は，20代後半から40代までは出産・育児期にあたり，一つのアイデンティティ葛藤の時期にあたると考えられる。すなわち，結婚・出産までに形成してきた個としてのアイデンティティと，新たに母親になることによって獲得されるべき母親アイデンティティが，しばしば葛藤を引き起こすことが指摘されている。個としてアイデンティティが，幼児期からの重要な他者への数々の同一化の主体的選択と統合の結果として獲得されるのに対して，母親アイデンティティは，母親役割の反映として獲得されるアイデンティティ（refrected identity）である。この両者を自己の中でどのように両立，調和させ，統合させていくかは，現代女性にとっては必ずしも容易なプロセスではない（岡本，1996）。

武田（1998）は乳幼児虐待の要因のひとつとして自己評価の低さをあげ，母親になったこと，育児中心の生活になったことによって，これまで自分自身が価値をおいていたものが失われていくという喪失感を指摘している。このことは，母親役割を担うことによって，個としてのアイデンティティが閉塞してしまい（岡本，2002），自分の価値を見出せずに葛藤していることが予想される。

母親の役割を果たすことで自己の存在意義をしっかりと確信でき、親となることにより

人格が発達した（柏木・若松、1994）時代に比べ，女性が人生で実現できる選択肢が増えた現代は，多くの母親に葛藤をもたらすことになった。かつて，母親である自分を自己の生き方の中心にすえ子育てを生きがいとし，疑うべくもなく親から受け継いだ伝統的な生き方ができた時代に対し，今日においては，女性の高学歴化，生き方の多様性が求められるようになり，従来の価値観とは違った生き方が問い直されるようになった。理想のライフコースをとれない母親や，母親としての役割だけでは自己のアイデンティを支えきれない母親は，子育てという責任と自己を実現したいという欲求の間で板挟みになり，母親としてのアイデンティティと個としてのアイデンティティを統合できずにいるのではなかろうか。そして，この問題は，母親の育児感情にも影響を与え，子育ては自己実現を妨げるものとして認識され，母親にとって子育てが一層負担になっているのではないだろうか。

河村ら（2001）は，青年期のアイデンティティの確立において，特定の人に偏った狭い範囲の交流のみではなく，さまざまな領域の活動に通じて多くの他者とかかわることで，自他ともに尊重する相互的交流を体験することが重要であることを明らかにした。おそらく，これは育児期の女性にも通用することではないかと思われる。現代の育児期の母親の孤立化は，河村ら(2001)の研究が示したことによるとアイデンティティの統合をも阻むことになっている。育児期の女性が，アイデンティティ統合にとって難しい環境に囲まれているのならば，育児期の女性のアイデンティティはどのような状態にあり，母親の育児感情はどのような影響を受けているのであろうか。

アイデンティティの獲得について都筑（1993）は，時間的展望が確立される必要があるとして，アイデンティティの達成は，過去，現在，未来の時間的流れの中での自己についての継続性や統合性の意識の上に初めて成り立つと述べた。アイデンティティの感覚の一つの側面は，現在が過去に根ざし，過去の上に現在の自分が確実に築き上げられているというような意識と確信であり，このような確信の上に立って個人の未来がはっきりと具体性をもって現実的なものとなる（比嘉・岡本，2007）と言える。結婚や出産という過去をを経験した育児期の女性はどのような時間的展望を確立しているのだろうか。

白井（2011）は，McAdams(2008)が提唱したアイデンティティのライフ・スト―リー・モデルは，過去・現在・未来という時間的展望の視点が入っていることを指摘している。ライフストーリーとは，内面化され進化する自己の語りであり，人々はそれを構成することによって過去・現在・未来を統合し，統一・目的・有意味の感覚を人生にもたらすものである。アイデンティティのライフ・ストーリー・モデルとは，現代社会では人々は青年期から成人期にかけて自分の人生を進化するストーリーとして構成し始め，再構成された過去と予期された未来を統合し，人生に統一と目的をもたらすという考え方を言う。大野ら(2010)もさまざまな統合のモデルを提唱しているが、過去から未来に向かうライフ・ストーリーという主体的でポジティブな進化する語りは時間的展望を確立し，アイデンティティの統合に向かう手立てになると考えられる。

（4）育児期の女性の時間的展望

時間的展望のもっとも一般的な定義は,“ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体”(Lewin, 1951)である。時間的展望は，time perspectiveの訳語であるが，これ以外にも time orientation, temporal orientation, temporal

perspectiveなど，微妙なニュアンスの違いを伴うことから，時間的展望の概念定義が曖昧であるという状態は続いている(都筑,1982)。初めて時間的展望の概念を提出したのは，Frank(1939)で,文化的に決定された時間性に関する態度および過去や未来の間の力動的な相互作用が現在の人間の行動に影響を与えると主張した。次いで，Lewin(1942)は，時間的展望を場の理論における生活空間の要素のひとつとして位置づけ，個人の生活空間が現在だけではなく未来や過去をもその中に含んでいると考えた。これは主として時間的展望の認知的側面を定義したものであり，過去と未来の両方を含んだものとして捉えている。それに対してWallace（1956）は，時間的展望を「個人的な未来のでき事に関する時間的調節と配列化」と定義し，未来に限定して捉えている。また，時間的展望を情緒的な側面から定義した（Hultsh & Bortner, 1974）ものもあり，時間的展望には個人が自己の過去や未来にどのような出来事を想起あるいは予想するかという認知的側面と個人が自己の過去や未来に対してどのような感情をもっているかという情緒的（態度的）側面の2つが含まれている。この両者を区別して用いる場合もあるが，勝俣（1995）が指摘している通り、定義が不明確である。そこで、本稿では時間的展望を広義の意味として捉え，認知的側面と情緒的側面が含まれると考え,過去や未来の両方を含んだものとして捉えることとする。

Lewin(1942)は,個人の生活空間に現在だけでなく過去や未来もその中に含まれていると述べた。したがって，個人の行動の意味を明らかにしようとすれば，過去・現在・未来の力動的な相互作用の中でそれをとらえなければならない（都筑，1993)。つまり，ある個人が自分の人生において，どのような内容の目標や希望を思い浮かべ，それに対していかなる意味づけをしているのか，という時間的展望の中身を明らかにすることが重要になる。

時間的展望の獲得とは，より遠くの将来や過去の事象が現在の行動に影響を及ぼすという時間的展望の広がりが拡大すること，将来に希望をもち現在の生活に充実を感じ過去を受容するという時間的展望の感覚をもつことをいう（白井，1995)。過去や未来を肯定的に意味づけることができれば，時間的展望の広がりが拡大すると言えよう。

Erikson(1959)は,青年期における重要な発達課題の一つとしてアイデンティティの獲得をあげたが,その基礎に時間的展望の確立が必要である。アイデンティティの達成は過去，現在，未来の時間的流れの中で自己についての継続性や統合性の意識の上に初めて成り立つことから，都筑（1993）はアイデンティティの達成した者と拡散した者を比較し，時間的展望の違いを明らかにした。アイデンティティが拡散した者は，過去・現在・未来のすべてについてネガティブにイメージしており，また，過去・現在・未来をバラバラなものとして捉えていることが示された。

青年期から成人期への移行期である20歳代は，卒業・就職・結婚などという未経験で人生の重要な転換となるライフイベントが次々生起する時期であり，自分の人生を切り開くために時間的展望を大きく変えていく（白井，2004）時期である。行動を決定していくために，個人の過去・現在・未来をどのように意味づけ繋げていくかということは，時間的展望を確立する上で重要になることと言えよう。

時間的展望の確立は青年期の課題であり，育児期はかつて時間的展望を獲得しているとみなされていたであろう。しかし，今日，女性の寿命が延び，子育てが終わってからも長い人生を送ることになり，子育て終了後，どのように生涯を終えていくべきか，考える必要が出てきた。今日においては，子育てが一段落した数年後に訪れる自分自身の生活に展

望を持てないという不安を訴える母親が最近急増していると大日向(2002)は述べている。未来に対してネガティブなイメージを母親が抱いている。

また，子育てのほかに，仕事という新たな価値を見出した女性達にとって，結婚や出産は将来を決める人生の転換点であり，場合によっては時間的展望が大きく変わる時であろう。前項で述べたように希望のライフコースを選択できなかった母親は葛藤を抱え，過去を肯定的にイメージすることが難しいのではないだろうか。過去を受容して時間的展望を確立することが難しくなること，それは過去や未来を含む現在の生活空間，育児期の日常生活にどのような影響を及ぼすであろうか。

(5) アイデンティティ統合に関わる要因

1) 性役割態度について

アイデンティティの統合については,青年期において時間的展望と関係している(都筑,1993）ことは，すでに前項で述べた。成人期ではさまざまな役割の統合，その一つとして性役割の統合との関連が示唆されている（岡本，1996)。育児期の女性のアイデンティティは，母親役割を受容して統合していく一方，この時期はさまざまな社会的な役割や家庭役割を担うため，職業，家庭，個というさまざまな自我同一性を内部で統合しつつ生きると岡本（1996）は述べている。性役割もその一つとしてあげられる。

性役割とは,“男女にそれぞれふさわしいとみなされる行動やパーソナリティに関する社会的期待・規範およびそれらに基づく行動”とし，性役割態度は“性役割に対して，一貫して好意的もしくは非好意的に反応する学習した傾向である”（鈴木，1994）と定義される。高橋ら（2000）は，日本に以前から根強く存在している「男は仕事，女は家庭」という性役割分業観は，近年減少し，性役割に変化が起こっていることを指摘した。しかし，その一方で女性が男性よりも平等志向的であるという，多くの研究結果と一致した結果を見いだし，依然として性役割態度における男女のズレがあることを示した。性役割態度における夫婦間のズレや夫の性役割態度に対する妻の認知のしかたによっては，複雑な葛藤を抱える可能性がある。育児期にこのような葛藤が潜むならば，その葛藤は母親の育児感情にも影響を及ぼすものと思われる。

また，性役割態度が平等志向的であるということは，母親が育った家庭で自分の母親を通して形成されてきた性役割態度と，現在の家庭生活で配偶者とのパートナーシップを通して形成されてきた性役割態度が平等志向的であることと強く関係していた(高橋,2000)。つまり、性役割態度は他者から影響を受けている。そして、その性役割態度は女性の就業形態に影響を与えているという報告もされている（杉田、2011)。

結婚後の個人の女性のライフスタイルの決定は，自分ではコントロールできない事情に影響されることがある。女性は，就業を継続していても，結婚，子育て，夫の転勤，家族の介護などの事情に合わせて離職したり，パート，アルバイト勤務に変わるなど多くの場合はフルタイムの就労から後退する方向で，さまざまなライフコースを選択してゆく。パートナーシップのありよう，周囲からのサポートを如何に得てゆくかなど主体的に考えてゆけるところもあるが，個人の努力だけでは解決できないことも女性の人生には多いと思われる。女性は定年までのフルタイム就労や，就労しないことも含めたさまざまな生き方を選択している。しかし，それは妻・母という女性の役割を優先させることによって生じ

る多様性であり，女性のライフコースの選択が一見自由でバラエティに富むようであっても，女性は社会が期待する女性役割に根本では規定されていることが多い（野村，1995）。その葛藤を抱えつつ生きることが現実には女性に求められている。多様化した生き方が目の前に繰り広げられているように見えていても，それが実現できる割合は低いこと，実現できない女性にとっては，むしろそこに生まれる葛藤をしっかり抱えられる力が必要になる。今日の育児期の女性達の悩みや不安，イライラ感，疲労感などは，この葛藤が背後で影響を与えていると考えると，今日における母親の育児負担感が未だ緩和されないことが理解されないであろうか。

2）自己決定感について

アイデンティティ形成について畑野（2010）は，様々な文脈の中で社会や他者といった様々な「他者」との関係性の中で自己を定義づけるプロセスであると述べている。社会状況や文脈の変化の中で自己の多様性を捉え，どの領域において自らのアイデンティティを形成するかが，個人の自己決定という主体性と強く関連すると指摘している。また，無藤ら（1996）は，成人期のアイデンティティの再構成が行われるにあたって，これまでの危機がどのように起こりそれをどう解決してきて現時点に繋がっているか，生涯発達展望に基づく観点が重要と述べ，葛藤の対処やその統合には他者との関わりの体験の中で形成される自己観・人間観・人生観が重要であるとも述べている。他者との繋がりの中で形成される自己観や価値観は，自己と他者の欲求が拮抗していると感じられる状況において，自己を実現していく上での阻害要因になりやすい（罪悪感を強めるなど）。しかし同時に，そのような状況の中での自己選択や判断の体験と，他者とのつながりの中で対処した体験は，自己にとって肯定的に作用すると予想している。つまり，他者との欲求が拮抗している状況で，自己決定し，対処していくことがアイデンティティ再構成に肯定的な影響を与える可能性が高いと言えよう。

自己決定は，青年期におけるアイデンティティの統合や成人期のアイデンティティ再構成において重要な働きが示唆されたが，藤原（2005）は，ライフコース理論の中からいかなる困難な状況においても，自らの選択によって人生をよりよいものにすることができるという「人間の力の原則」をとりあげ，大学生のライフコース展望において，自己決定の重要性をあげている。自己決定とは，自分の欲求の充足を自ら自由に選択することである。萩原・櫻井（2008）も，やりたいこと探しの動機における自己決定性と進路について検討し，やりたいこと探しの動機が自己決定的であるほど，進路決定への心理的困難は低く，自己決定的に遂行された行動は適応的な結果と関連があるという結果を見出している。また，桜井（1993）は，自己決定性の高い内発的に動機づけられた行動に着目し，自己決定している感覚である「自己決定感」や自己決定への欲求である「自己決定欲求」を測定する質問紙を作成している。育児期の母親にとっても，自己決定することは，再就職の決定のような子育て後の人生の方向付けをはじめ，さまざまな状況での心理的困難を低くし，育児期の女性の将来展望に影響を及ぼすのではないだろうか。さらに自分で決定し，自分の道を切り開いていける感覚は，育児に圧倒されることなく自分をコントロールすることができ，育児負担感も弱まるのではないだろうか。

第2節　本研究の目的

第 1 節で述べた女性の多様な生き方と母親の育児負担感に関する先行研究と問題意識から，本研究では，乳幼児をもつ母親の育児負担感について以下の 6 点から検討を行い，ライフコースからみた乳幼児をもつ母親の育児負担感の理解と育児負担感軽減への示唆を得ることを目的とする。

1. ライフコースからみた育児負担感（第Ⅱ章）

乳幼児をもつ母親の育児負担感を把握するために尺度を作成し,現実のライフコース(就業継続型・再就職型・専業主婦型・再就職希望型）から育児負担感を検討し，乳幼児をもつ母親の育児負担感をライフコースの視点から把握する。

女性の就業形態が多様になり，結婚後の女性の日常生活は仕事を続けている女性と家庭に入り子育てに専念している女性では，かなり育児負担感が違うものと推察される。就業形態に基づいた四つのライフコースから育児負担感を把握することは、状況に応じた母親の育児負担感の理解に繋がると考える。

2. アイデンティティと育児負担感との関連（第Ⅲ章）

育児期の女性のアイデンティティの統合を把握するために，アイデンティティ地位によって分類し（加藤，1983），アイデンティティの統合と母親の育児負担感が関連があるかどうかをライフコース別に検討する。

育児期の女性のアイデンティティは様々な役割を統合して，アイデンティティが発達していることはすでに示唆されている。今日，母親としてのアイデンティティと個としてのアイデンティティが必ずしも統合されていないことが指摘されている。母親の内面で，母親役割が統合されていないならば，それは育児負担感にも影響を及ぼす可能性がある。

3. 時間的展望と育児負担感との関連（第Ⅳ章）

乳幼児をもつ母親の時間的展望を既存の尺度によって確認し，ライフコースから検討する。Ⅱ章と同じように現実の四つのライフコースによって時間的展望に差異がないかどうかを検討する。次に時間的展望の高低によって育児負担感に差異が出るかどうかをライフコース別に検討する。その際，ライフコース別に希望したライフコースと一致しているか一致していないかという視点からも検討する。

Ⅲ章でアイデンティティと育児負担感の関連を検討し，本章ではアイデンティティと関連のある時間的展望と育児負担感の関連を検討する。乳幼児をもつ母親が，過去を受容しているか，将来に目標や希望を持っているか，現在を充実して過ごしているかどうか（過去・現在・未来を肯定的にうけとめているか）ということが，育児負担感と関連するかどうかを検討する。

4. アイデンティティの統合に関わる要因が時間的展望と育児負担感に及ぼす影響（第Ⅴ章）

アイデンティティの統合に関わる要因として，性役割態度，自己決定感をとりあげ，こ

の二つが時間的展望と育児負担感にどのような影響を及ぼすかを検討する。

成人期ではさまざまな役割の統合，その一つとして性役割の統合との関連が示唆されており，青年期では自己決定感が示唆されている。また，結婚，出産というライフイベントを女性が経験し，その後子育てをどうするか，家庭の役割をどうするか，夫婦間で決めなければならないさまざまなことが出てくるであろう。その際，女性がどの程度自己決定できるのか，性役割をどう考えているのかということは，自分自身のライフコースの決定においても重要であり，時間的展望にも影響を及ぼすのではないだろうか。

5. ライフコース決定の文脈と育児負担感（第Ⅵ章）

女性のライフコース決定は，どのような文脈においてなされたのかを面接調査の母親の語りの内容から検討する。さらに育児期の母親の生活における育児負担感を把握し，ライフコース決定の文脈はその後の母親の育児負担感に影響を与えているのか，時間的展望にも影響を及ぼしているのかを検討する。

また，乳幼児を持つ母親の日常生活における葛藤は，それぞれ処理され，日々暮らしていると想像できる。最終的に育児をどうとらえているかという点が，自分なりに折り合いをつけた点とみなし，母親の育児の捉え方を検討する。その際，時間的展望はどのように関わっているのか，育児負担感を緩和する働きをしているのかという点も検討する。

第３節　研究全体の構成

以上の目的から，本研究の全体像を以下のように構成した（図Ⅰ-1-2)。

まず第Ⅰ章で，先行研究の問題点として，これまで乳幼児をもつ母親の意識や生活上の問題点を分析するための道具として用いられていた育児不安という概念の曖昧さとサポートの限界について述べた。そして，乳幼児をもつ母親の意識や生活上の問題点を育児負担感という視点から把握することと，女性の多様な生き方という視点から今日の乳幼児をもつ母親の問題を捉えていくことを述べた。そして，目的を整理し，全体の構成についてまとめた。

第Ⅱ章から第Ⅴ章では質問紙調査研究による検討を行う。第Ⅱ章では，乳幼児をもつ母親の育児負担感の尺度を作成し，ライフコースから検討する。

第Ⅲ章では，育児期の母親のアイデンティティの統合が問題になっていることから，アイデンティティと育児負担感の関連を検討する。

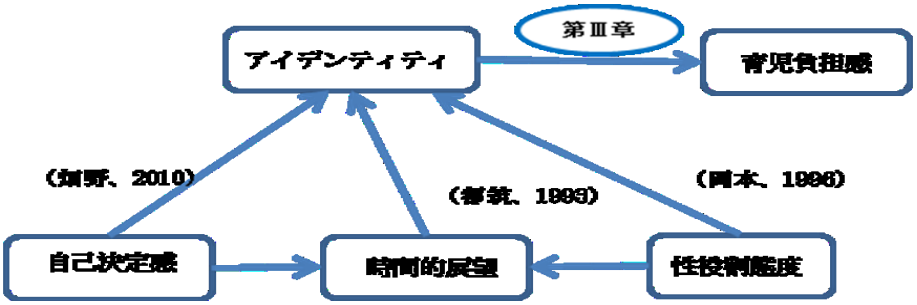
第Ⅳ章では，アイデンティティの確立に重要である時間的展望をとりあげる。育児負担感との関連を検討する。その際，ライフコースから検討し，希望のライフコースと現実のライフコースが一致しているかどうかという視点からも検討する。

第Ⅴ章では，時間的展望を高める要素として，アイデンティティ統合に関わる性役割態度と自己決定感をとりあげ，時間的展望と育児負担感に及ぼす影響をライフコース別に検討する。

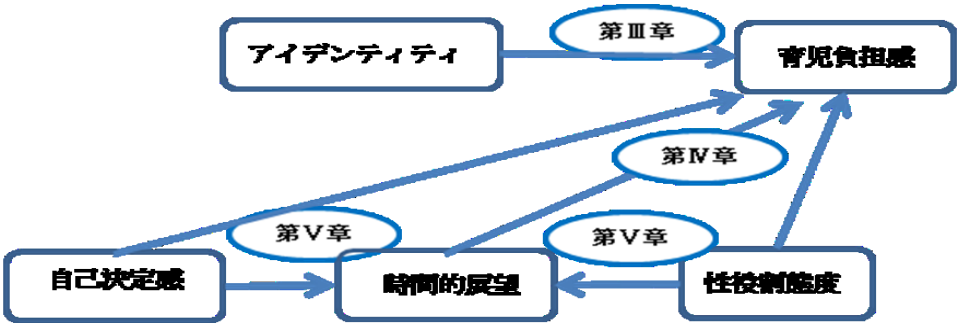
第Ⅵ章では，ライフコース決定の文脈を面接調査で把握するとともに，質問紙で明らかになったこと（Ⅱ章からⅤ章まで）の検証と新たな知見を得るために面接内容を検討する。

最後に第Ⅶ章で研究全体の総括を行う。

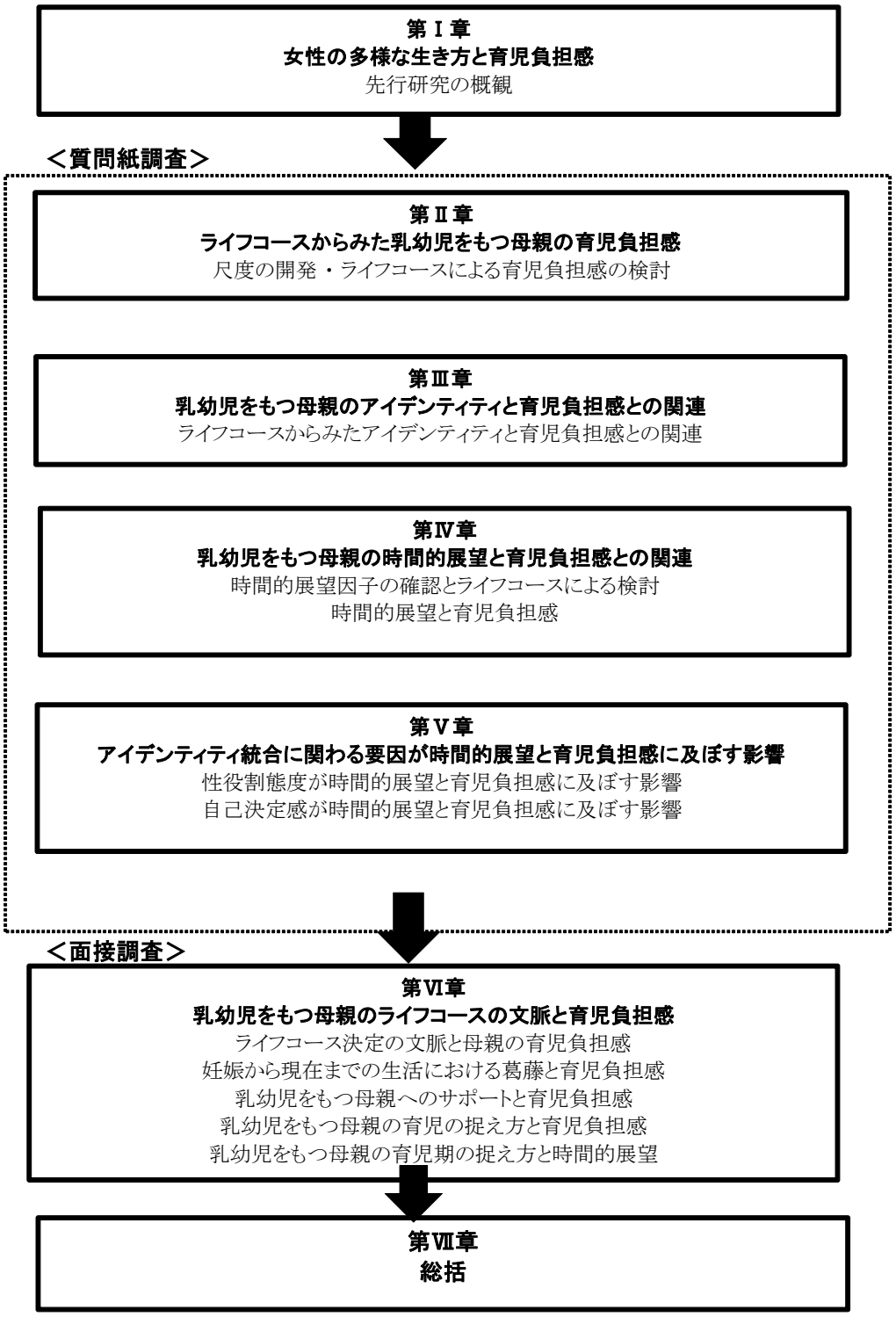
本研究で用いる概念間の関連を図Ⅰ-1-1a，図Ⅰ-1-1b に示す。



【図Ⅰ-1-1a】先行研究に基づいた本研究で用いる概念の関連



【図Ⅰ-1-1b】本研究の構成



図Ⅰ-1-２　研究全体の構成

第Ⅱ章

ライフコースからみた
乳幼児をもつ母親の育児負担感

第 1 節　乳幼児をもつ母親の育児負担感尺度作成

1. 目的

牧野の育児不安尺度は，もともと，「蓄積的疲労徴候調査」による 6 つの特性（一般的疲労感，気力の低下，イライラの状態，身体の不調徴候，精神的な不安徴候，労働意欲の低下）をもとに，5 つの特性（一般的疲労感，一般的気力の低下，イライラの状態，育児不安徴候，育児意欲の低下）をとりあげ，育児期の母親達が自分達の生活感情や意識を表明した言葉を，新聞の投書，乳幼児学級などでの発言などから収集・分類し，対応させたものである。「蓄積的疲労徴候」とは，「何日間か継続して，あるいは滞留して感ぜられるような症状徴候」のことで，「健康な生活の維持増進を阻害するような負荷事象（過重負担）を主観を通して把握する」ことの重要性（牧野，1982）が述べられ，育児不安はこの負荷事象を主観的に表明したものと言っている。育児不安が，そのような過重負担を表しているものならば，蓄積的疲労に関わる内容によって育児不安の程度を示すことになるという論拠に基づいている。つまり，育児をすることによる負担が身体症状など疲労感を伴い，不安という形をとってあらわれていることになる。しかし，育児への負担がなにゆえに不安という形をとったのであろうか。そこで，他の育児不安の尺度についても触れてみたい。育児不安尺度については，牧野とは違った立場からも作成されている。育児不安の概念がそれぞれの研究者によって幾分異なっていることに由来するが，子どもの授乳や排泄などの具体的な心配事に由来する立場，育児困難・不安・心配などのストレスとして捉える立場，育児に限らず家事や生活の総体から生み出される母親の生活ストレスとして捉える立場など，さまざまである（吉田ら，1999）。森山ら(2008)の調査によれば，質問紙法を使って育児不安を調べた調査の中で牧野の育児不安尺度を利用していたものが約三分の一，次に使用されていたのが吉田ら（1999）の尺度であった。吉田ら（1999）は，育児不安を，育児に伴う自信のなさや不安，子どもと関わることの疲労感，子育てからの逃避願望，育児による社会からの孤立感などとして捉え，育児不安の項目をこの観点に沿って採用している。また，岩田（2000）は，牧野の尺度に拒否的感情や充実感や幸福感を測定できる項目，閉塞感や犠牲感を伴う項目も加えて尺度を作り，「母親の不安尺度」と命名している。

このように育児不安の尺度は，いろいろな立場や考え方に基づいて作られていることから，その内容はさまざまなものが含まれていることも推察される。育児不安の枠が広く，その定義も研究者によってさまざまであることから，それを包括的に捉える意味でも育児不安という枠ではなく，もっと広い枠で，育児期の母親の感情や意識を捉え，その内容や構造を把握することが，育児期の女性の育児感情を理解する上で役に立つのではないだろうか。溝田（2005）が母親の個別性という状況にも対応し得る尺度の必要性を述べたように，育児不安概念を細分化して検討するというよりも，育児不安も含めた母親に生じる育児負担感や意識を広い枠組みで構造的に捉えることにより，個別の対応が見えやすくなる可能性がある。

そこで，本研究では，「育児行為の中で生じる育児への戸惑いや自信を持てない気持ち，疲労感，犠牲感，逃避願望など育児を担うことによる負担の感情や態度」を育児負担感とと定義し、育児不安より広い枠組みの育児負担感をとりあげる。本研究の目的は先行研究の育児不安尺度をふまえ，育児負担感尺度を作成することである。

2. 方法

(1) 調査対象者

乳幼児（0―6 歳児）をもつ母親 2026 名を対象とし，回答が有効だった（有効回答率 85.20%）1726 名（公民館の育児サロンに参加している母親 803 名，保育園に子どもを通わせている母親 923 名）を分析対象とした。平均年齢は 34.20 歳（*SD*= 5.48）で，子どもの数は，１人が 49.13%，２人が 37.60%，３人以上が 13.27%であった。

(2) 調査手続き

福岡市内の公民館(70 館)と保育園(12 園)に質問紙調査を依頼した。研究協力の依頼文に，研究目的，回答内容が漏れないこと，個人が特定されないことを明記した。公民館は主事に質問紙を依頼し，後日，筆者が直接回収した方法と郵送で回収した 2 通りの方法をとった。1123 部配布し，952 部回収(回収率 84.78%)した。保育園は先生に質問紙を依頼し 2 週間後に回収した。1705 部配布し，1074 部回収(回収率 62.99%)した。回収票は 2026 部であった。なお，調査は 2010 年 9 月―12 月に行われた。

(3) 調査内容

1)育児負担感を測定する項目　育児不安尺度の内容は，不安だけではなく，疲労感，閉塞感，孤立感など育児を行うことによる母親が感じる負担感が含まれている。そこで，いくつかの育児不安尺度を中心に育児負担感と思われるものを選択した。広く利用されている牧野の育児不安尺度（1982），母親の不安尺度（岩田，2000），育児不安スクリーニング尺度（吉田・山中・巷野・太田・中村・山口・牛島，1999），母親と父親の育児不安尺度（住田・中田，1998），育児関連ストレス項目（佐藤・菅原・戸田・島・北村，1994）など既存の尺度を参考にして筆者が 42 項目を選択し，さらに臨床心理学を専攻する大学院生 4 名で検討し，22 項目を選択した。評定は 4 件法で回答してもらった。

2) 自尊感情を測定する項目　妥当性検証のため，Rosenberg(1965)の作成した「自尊感情尺度」（RSES）を Mimura and Griffiths (2007)によって翻訳された日本語版 RSES（RSES-Ｊ）10 項目を用いた。この尺度は，内田・上埜（2010）によって信頼性および妥当性が検証され，多くの翻訳版がある自尊感情を測定する尺度の中でも，十分な信頼性と妥当性が備わっていると考えた。評定は 4 件法で回答してもらった。

3) 母親の役割受容を測定する項目　妥当性検証のため，大日向（1988）の作成した母親の役割受容尺度を用いた。自分自信が母親であることをどのように受け止めているかという，母親役割の受容に対する姿勢を明らかにするものである。１２項目のうち，６項目は母親であることに対する積極的・肯定的な意識を，残りの６項目は消極的・否定的な意識を内容としている。評定は 4 件法で回答してもらった。（天井効果の出た 3 項目を外して妥当性の検証に使用した）。

3. 結果

(1)育児負担感尺度の因子構造の検討

育児負担感についての 22 項目に対して，フロア効果が見られた 3 項目を外し，19 項目で因子分析（最尤法・Kaiser の正規化伴うオブリミン回転）を行ったところ，4 因子が抽出された。累積寄与率は 50.98%（表Ⅱ-1-1）。

第 1 因子は，“自分ひとりで子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう”“子

どもとばかりいて孤立した感じがする”などの項目の因子負荷量が高かった。これらの項目の内容は，育児のために自分ひとりが犠牲になり，孤独な育児をしていることを表していると解釈されたので，（育児による）閉塞感・犠牲感と命名した。

第 2 因子は“いつも疲れている感じがする”“毎日くたくたに疲れている感じがする”などの項目の因子負荷量が高かった。これらの項目の内容は，育児や生活に対する疲労感を表していると解釈されたので，（育児による）疲労感と命名した。

第 3 因子は“自分の子どもの育て方はこれでいいのだろうかと思うことがある”“自分は子どものことをわかっていないのではないかと思うことがある”などの項目の因子負荷量が高かった。これらの項目の内容は，子どもの育て方や子ども理解に自信がないことを表していると解釈されたので，（育児への）自信なさと命名した。

第 4 因子は“子育てを離れて一人になりたい気持ちになることがある”“家事や育児など何もしたくない気持ちになることがある”などの項目の因子負荷量が高かった。これらの項目の内容は，育児など何もせず一人になりたいことを表していると解釈されたので，（育児からの）離反願望と命名した。

また，尺度の信頼性の指標としてα係数を算出したところ，第 1 因子の閉塞感・犠牲感が.85，第 2 因子の疲労感が.75，第 3 因子の自信なさが.80，第 4 因子の離反願望が.75 となった。このことから，各尺度の内的整合性は高く，ほぼ満足のいく水準であると言える。さらに下位因子間の相関は.318～.527 と中程度の相関が見られた。

表Ⅱ-1-1育児負担感尺度(最尤法 Kaiserの正規化を伴うｵﾌﾞﾘﾐﾝ法回転)

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
(閉塞感･犠牲感)				
自分ひとりで子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう。	**.789**	-.094	-.027	-.103
子どもとばかりいて孤立した感じがする。	**.785**	.100	-.069	-.066
子どもにかまけてばかりで、自分の能力や意欲を活かしているという充実感がない。	**.717**	.022	.023	.059
何か心が満たされず空虚である。	**.492**	-.135	-.059	.212
だれも自分の子育ての大変さをわかってくれないと思うことがある。	**.454**	-.090	-.038	.212
子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う。	**.436**	-.068	.029	.309
(疲労感)				
いつも疲れている感じがする。	.042	**-.876**	-.011	-.103
毎日くたくたに疲れる。	-.018	**-.761**	.007	-.048
生活の中にゆとりを感じる。(*)	.039	**.511**	.049	-.076
朝めざめがさわやかである。(*)	-.035	**.444**	-.013	-.074
(自信のなさ)				
自分の子どもの育て方はこれでいいのだろうかと思うことがある。	.027	.023	**-.821**	-.033
自分は子どものことをわかっていないのではないかと思うことがある。	.002	.007	**-.812**	-.043
子どものことでどうしたらよいかわからなくなることがある。	.069	.008	**-.699**	.013
自分は子どもをうまく育てていると思う。(*)	.049	.062	**.479**	-.085
(離反願望)				
子育てを離れて一人になりたい気持ちになることがある。	.075	.024	-.016	**.761**
家事や育児など何もしたくない気持ちになることがある。	.011	-.149	-.052	**.659**
子どもがわずらわしくてイライラしてしまう。	.038	-.019	-.218	**.425**

因子相関行列	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ		-.318	-.465	.527
Ⅱ			.399	-.505
Ⅲ				-.494
Ⅳ				

(*)は逆転項目

(2) 育児負担感尺度の妥当性の検討

育児負担感得点と自尊感情得点及び母親役割受容得点との相関係数を協力可能だった乳幼児をもつ母親 923 名で算出した（表Ⅱ-1-5)。育児負担感は自尊感情及び母親役割受容との間で有意な負の相関がみられた。自尊感情と閉塞感・犠牲感，自信なさとの間に中程度の負の相関，疲労感及び離反願望との間にやや低めの負の相関が見られた。育児負担感とはやや高めの中程度相関が見られた。母親役割受容と閉塞感・犠牲感，自信なさ，離反願望との間にやや高めの負の相関，疲労感とはやや低めの相関が見られた。育児負担感とは高めの相関が見られた。概ね，整合的な相関が見られ，妥当性を有した尺度と考えられる。

表Ⅱ-1-2 育児負担感尺度項目の平均値と標準偏差

項目	平均値	標準偏差
（閉塞感・犠牲感）	**2.08**	**(.64)**
自分ひとりで子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう。	1.97	(.91)
子どもとばかりいて孤立した感じがする。	1.81	(.80)
子どもにかまけてばかりで、自分の能力や意欲を活かしているという充実感がない。	2.05	(.87)
何か心が満たされず空虚である。	2.16	(.86)
だれも自分の子育ての大変さをわかってくれないと思うことがある。	2.02	(.80)
子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う。	2.46	(.76)
（疲労感）	**2.81**	**(.57)**
いつも疲れている感じがする。	3.14	(.75)
毎日くたくたに疲れる。	3.27	(.69)
生活の中にゆとりを感じる。 (*)	2.64	(.80)
朝めざめがさわやかである。 (*)	2.20	(.82)
（自信のなさ）	**2.69**	**(.57)**
自分の子どもの育て方はこれでいいのだろうかと思うことがある。	2.95	(.70)
自分は子どものことをわかっていないのではないかと思うことがある。	2.75	(.72)
子どものことでどうしたらよいかわからなくなることがある。	2.74	(.73)
自分は子どもをうまく育てていると思う。 (*)	2.33	(.68)
（離反願望）	**2.64**	**(.65)**
子育てを離れて一人になりたい気持ちになることがある。	2.67	(.83)
家事や育児など何もしたくない気持ちになることがある。	2.82	(.75)
子どもがわずらわしくてイライラしてしまう。	2.44	(.79)
	2.50	(.47)

(*)は逆転項目

表Ⅱ-1-3 自尊感情尺度項目の平均値と標準偏差

項目	平均値	標準偏差
私は、自分自身にだいたい満足している。	2.61	(.67)
時々、自分はまったくダメだと思うことがある。 (*)	2.37	(.75)
私にはけっこう長所があると感じている	2.57	(.62)
私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる。	2.79	(.62)
私には誇れるものが大してないと感じる。 (*)	2.65	(.72)
時々、自分は役に立たないと強く感じることがある。 (*)	2.77	(.72)
自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている。	2.85	(.62)
自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う。 (*)	2.22	(.68)
よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう。 (*)	2.89	(.75)
私は、自分のことを前向きに考えている。	2.97	(.66)
	2.67	(.47)

(*)は逆転項目

表Ⅱ-1-4 母親役割受容尺度項目の平均値と標準偏差

項目	平均値	標準偏差
子どもを育てることが負担に感じられる。 (*)	2.92	(.85)
母親としてふるまっているときがいちばん自分らしいと思う。	2.49	(.79)
母親であることに生きがいを感じている。	3.19	(.79)
育児に携わっているあいだに、世の中からとり残されていくように思う。(*)	3.17	(.88)
母親になったことで気持ちが安定して落ち着いた。	2.79	(.82)
自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなる。 (*)	2.99	(.81)
自分は母親として不適格なのではないだろうか。 (*)	2.77	(.86)
母親であることに充実感を感じる。	3.19	(.80)
母親であるために自分の行動がかなり制限されている。(*)	2.32	(.89)
	2.87	(.52)

(*)は逆転項目

表Ⅱ-1-5 育児負担感と自尊感情および母親役割受容との相関

	閉塞感・ 犠牲感	疲労感	自信なさ	離反願望	育児 負担感	自尊感情	母親役割 受容
閉塞感・犠牲感	1	.377(**)	.470(**)	.598(**)	.866(**)	−.425(**)	−.615(**)
疲労感	.377(**)	1	.322(**)	.406(**)	.658(**)	−.320(**)	−.378(**)
自信なさ	.470(**)	.322(**)	1	.500(**)	.723(**)	−.472(**)	−.498(**)
離反願望	.598(**)	.406(**)	.500(**)	1	.788(**)	−.387(**)	−.622(**)
育児負担感	.866(**)	.658(**)	.723(**)	.788(**)	1	−.523(**)	−.695(**)
自尊感情	−.425(**)	−.320(**)	−.472(**)	−.387(**)	−.523(**)	1	.447(**)
母親役割受容	−.615(**)	−.378(**)	−.498(**)	−.622(**)	−.695(**)	.447(**)	1

** 相関係数は 1% 水準で有意（両側）。

4. 考察

本研究では尺度作成を通して，乳幼児をもつ母親の育児負担感の 4 つの下位因子が得られた。これらの下位因子から育児期の母親が育児に関わることによって生じる心理状態が窺える。

(1)「閉塞感・犠牲感」因子では，外出もままならない数カ月の乳幼児をもつ母親は，家に引きこもりがちで孤独とともに閉塞感や圧迫感などを感じていることが示されたと言えよう。核家族の孤立化や夫の日中の不在など，育児責任を一人で背負っている母親達が，犠牲感を伴いながら育児に取り組んでいること，また，育児のために自分が犠牲となって，

やりたいことができず，充実感が感じられない状態（岩田，2000）が示唆された。服部ら（1991）が「密室の中の孤独な育児」が育児不安をもたらす要因であると考察したが，「密室の中の孤独な育児」は閉塞感や犠牲感をもたらし、充実感の欠如を生みだして、育児負担感を高めていると言える。

(2)「疲労感」因子は，乳幼児をもつ母親が育児や生活に対していつも疲れている状態であることを示した。川井尚ら（1993）の 3 歳未満の乳幼児を持つ母親の 766 名を対象にした調査では，32%がひどく疲れやすいと答えている。牧野（1982）は，育児期の母親の状態を，「蓄積的疲労徴候」の問題と共通するところが多いと指摘した。「蓄積的疲労徴候」とは，何日か継続して，あるいは滞留して感ぜられるような症状徴候」である。「健康な生活の維持増進を阻害するような負荷事象（過剰負担）を主観を通して把握する」ことの必要性が牧野（1982）によって述べられている。育児負担感は，まさに負荷事象に対する主観が身体とともに意識に上って示されたと考えられる。

(3) 育児への「自信のなさ」因子は，乳幼児期の自分の子どもを育てることに対して，自信がなく不安があることを示している。川井らの調査でも 26%の母親が「何となく育児に自信を持てないように思う」と肯定している。乳幼児期の子どもを育てていれば，育て方についていろいろな心配や悩みを感じるのはある意味で自然のことである。しかし，今日では，低年齢の子どもの自殺や非行の発生，家庭内暴力など，子どもをめぐる問題についての情報が大量に届けられ，多くの母親達が子育てに人ごととは思えない不安や自信のなさを感じていることだろう。育児における不安や自信のなさは，深刻な問題が発生する以前のむしろ，ごく一般的な育児の状況のなかに多様な形で存在していることが示されたとも言えよう。また，その自信のなさは母親の育児負担感に繋がっていることも示唆された。これから親になろうとする 20 歳前後の大学生の調査（牧野，1981）では，青年たちに育児に対して不安を感じている人がかなり多いことが報告された。女子学生の約 4 分の 1 弱が大変自信がないと答え，約半数弱が少し自信がないと答えていた。育児経験が全くないこと，知識の不足，自分自身が未熟であること，などが自信を持てない理由であった。育児に関するさまざまな不安や自信のなさは，親になる前から感じていることも示されており，それは育児を行う前から育児に対する負担感に繋がる可能性もある。

(4) 育児からの「離反願望」因子は，子どもに煩わしさを感じ育児期の母親が育児から逃避したい気持ちになるとともに，家事もすべてやりたくなくなるほど離れたい気持ちが存在していることが示された。時には子育てから離れてのんびりしたいと思う母親の気持ちは自然であろう。しかし，育児期の母親の感情に閉塞感や犠牲感が存在することがすでに示されたことから，子どもや家庭から離れたい気持ちは，一時的な自然な気持ちを超えて，母親の育児の負担から逃れたい強い気持ちが存在していると推察される。離反願望の程度は，母親の育児負担感を示し，自分の気持ちをコントロールし上手に気分転換などで育児と距離をとることが重要で，子どもと二人で孤独な育児に陥っている場合は，育児ノイローゼや幼児虐待に繋がる可能性も考えられ，適度に育児から離れることが育児の負担を軽減し重要であることが示唆された。

以上，育児期の母親は，子どもを連れて外出することができないような時期をはじめとして，閉塞感に陥いりやすく，子どもにばかりかまけて充実感がないと感じ犠牲感をもちやすく，離反願望も高くなることが示された。毎日同じことの繰り返しと認識する場合は，

疲労が高くなることが予想される。育児への自信のなさや不安なども存在し，育児負担感尺度は育児期の母親に起こりうるであろう母親の育児感情を把握できるものと思われる。

しかし，今後の課題としては，①今回の尺度は主に既存の育児不安尺度の中から項目を選んだため，不安に関わらない項目が抜け落ちた可能性があり，さらなる検討が必要と思われる。例えば，育児に関わり，何かわからずにイライラして子どもにあたる自分に罪悪感を感じていたり，仕事との両立で子どもに時間を割けないことに後ろめたさを感じていたり，自分を責めるよう葛藤による負担感が含まれていない。また，密室の中の育児に関わる項目など，主に専業主婦には該当する項目が多くなった点も，検討していきたい。さらに②育児負担感と育児困難感の違いを明確にしていくことも課題と思われる。育児に関わることで，ある程度の負担感は存在することを考えると，育児困難に至る違いがどのような点になるのかを明確にできるような尺度になると，今後，臨床的知見を得る上で有用と思われる。小原（2005）が指摘した育児困難感と母親の情動共感性や情緒応答性といった視点に着目し、共感性や応答性が母親に育まれない場合はどのような状況であるのかも考えていく必要があるであろう。

また，今回の尺度は，負担感に焦点を当てたが，③育児を行う負担ばかりではなく，ポジティブな面に焦点を当てることで，育児を行うことで母親に起こる感情が全体的に描き出されると考えられる。ポジティブな面もありながら，負担を感じている母親の感情の様相を捉えることができると援助の視点が見極めやすくなると思われ，今後は両面を含めた尺度に発展させていくことが望まれる。

第 2 節　ライフコースによる乳幼児をもつ母親の育児負担感の検討

1. 目的

牧野（1983）は，職業をもつ母親は，専業主婦よりも，「毎日はりつめた緊張感がある」「毎日くたくたに疲れる」という感じをより強くもっていること，専業主婦の母親は，有職者よりも「子どものことでどうしたらよいか分からなくなることがある」「毎日同じことの繰り返ししかしていないと思う」という感じを強くもっていたことを報告している。職業を有しているかどうかによって母親の育児感情に差異があるのであれば，ライフコースによっても差異があることが予想される。

そこで，本研究では，乳幼児をもつ母親の育児負担感をライフコースの違いから検討することを目的とする。

なお，本研究におけるライフコースとは，「就業形態による人生の道筋」として定義する。

2.　方法

(1) 調査対象者・調査手続き：第Ⅱ章 1 節と同じ。

(2) 調査内容

1) ライフコースを問う項目　就業継続型，再就職型，専業主婦型の三つの型（内閣府，2006）をⅠ就業継続型，Ⅱ再就職型（すでに現在就業している），Ⅲ専業主婦型（今後もずっと専業主婦の予定），Ⅳ再就職希望型（育児がひと段落してから就業希望）の四つの型に変えた。育児期の母親がすでに再就職している場合と，子どもがもう少し大きくなってから再就職しようと考えている場合では，母親の状況が違うため，区別して検討し援助の視点を得ることが適切と考えた。四つのライフコースの中から現在のライフコースと希望していたライフコースを記入してもらった。

2) 育児負担感を測定する項目　第 1 節で作成した育児負担感尺度 17 項目。この尺度は，“閉塞感・犠牲感”，“疲労感”，“自信なさ”，“離反願”の 4 因子からなり，代表的な項目は，順に“自分ひとりで子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう”“いつも疲れている感じがする”“自分の子どもの育て方はこれでいいのだろうかと思うことがある”“子育てを離れて一人になりたい気持ちになることがある”である。全 17 項目 4 件法である。

3. 結果

ライフコース別に育児負担感得点と下位尺度得点の平均値と標準偏差を算出し，分散分析を実施後，多重比較を行なった。

結果，閉塞感・犠牲感において，就業継続型が再就職型，専業主婦型，再就職希望型に比べ有意に低く，再就職型が専業主婦型より，閉塞感・犠牲感得点が有意に低かった。

疲労感においては，就業継続型と再就職型が専業主婦型と再就職希望型より有意に高かった。有職者の方が無職の母親より疲れていることが示された。

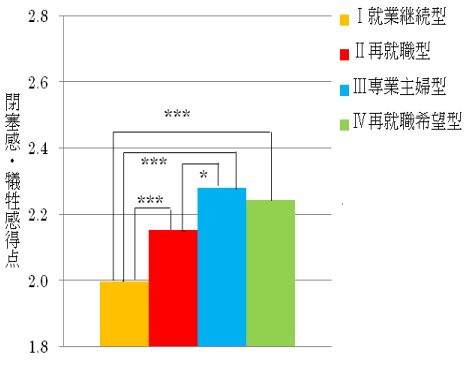
育児への自信のなさにおいて，再就職型が就業継続型と再就職希望型より有意に高かった。

育児からの離願望では，就業継続型と再就職希望型が再就職型と専業主婦型より有意に低かった（表Ⅱ-2 -1 ）。

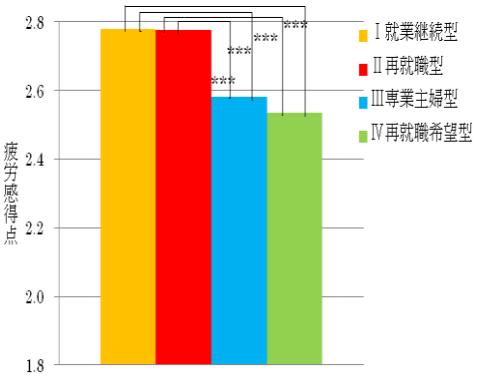
表Ⅱ-2-1 ライフコース別育児負担感得点の平均値と標準偏差及びF値

	Ⅰ 就業継続型 (533人)	Ⅱ 再就職型 (468人)	Ⅲ 専業主婦型 (379人)	Ⅳ 再就職希望型 (346人)	F値 自由度 (3,1722)	多重比較 5%
育児負担感得点	2.42 (.43)	2.53 (.48)	2.52 (.48)	2.45 (.45)	6.01**	Ⅰ<Ⅱ, Ⅲ
閉塞感・犠牲感	2.00 (.60)	2.15 (.64)	2.28 (.62)	2.24 (.64)	18.6***	Ⅰ<Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ Ⅱ<Ⅲ
疲労感□	2.78 (.58)	2.78 (.58)	2.58 (.56)	2.53 (.55)	20.98***	Ⅲ, Ⅳ<Ⅰ, Ⅱ
自信のなさ	2.62 (.55)	2.71 (.57)	2.69 (.55)	2.60 (.49)	4.35**	Ⅰ, Ⅳ<Ⅱ
離反願望	2.55 (.64)	2.71 (.64)	2.71 (.67)	2.56 (.64)	8.08***	Ⅰ, Ⅳ<Ⅱ, Ⅲ

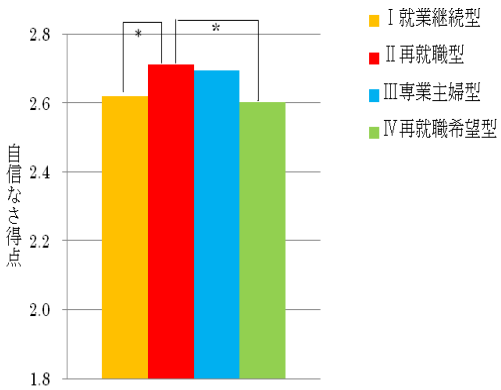
( )内は標準偏差、*p<.05 **p<.01 ***p<.001



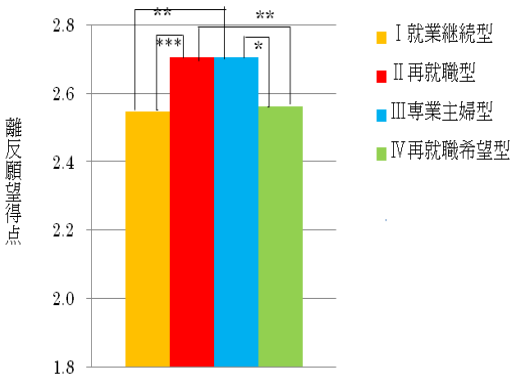
ライフコース別閉塞感・犠牲感得点



ライフコース別疲労感得点



ライフコース別自信なさ得点



ライフコース別離反願望得点

4. 考察

今泉（2001）が，職業をもつ母親は職場や保育園での人間関係を保つために、専業主婦よりも閉塞感・犠牲感が低く育児不安になる人が少ないと述べたが，一方，専業主婦は「密室の中の孤独な育児」に陥りやすく，一人で閉塞感を高めてしまうという先行研究を支持する結果になった。また，就業継続型と再就職型は疲労感が高く，仕事と育児の両立の大変さが窺われた。さらに再就職型は子育てに自信がないことが示された。内藤ら（1998）は，現実自己と理想自己の矛盾の程度が自尊感情に影響を与えるという視点から，母親の現実の役割と内面で求めている理想的な役割との間に開きがなければ，母親自身に肯定的な影響を与えると述べた。育児期に仕事を再開した再就職型の母親が，自ら望んで仕事についたのか，あるいは希望した仕事につくことができたのかなど，検討される必要があるだろう。再就職型の母親が自分の理想に近い生活をしているならば，母親に肯定的な影響を与え，自尊感情が高く，育児への自信も高いのではないだろうか。今後の課題としたい。また，再就職型と専業主婦型が，育児からの離反願望が強いという結果がでたことについては，育児への疲れや自信のなさ，閉塞感・犠牲感の高さなどから考えて，離反願望が高くなったものと推察される。

また，就業継続型が，疲労感を除くすべての育児負担感因子の得点が低かった。就業継続型は，第Ⅴ章で述べる平等主義的性役割態度の夫の認知得点が他のライフコースより低く（表Ⅴ-1-3），夫のサポートが高いものと推察される。また，自己決定欲求と自己決定感とのズレが小さく(表Ⅴ-2-3)，希望したライフコースの実現率も高い（表Ⅳ-1-3）ことから葛藤が低いことも，育児負担感が低いことに影響を与えていると考えられる。

5. まとめ

乳幼児をもつ母親の育児負担感について，現実のライフコースから検討した。

有職（就業継続型や再就職型）の母親は疲労感が高いが，閉塞感・犠牲感は無職(専業主婦型や再就職希望)の母親より低く，働いている母親は忙しく疲れているが，仕事を通して社会と繋がり，閉塞感や犠牲感は低いという結果になり，仕事をもっている女性の特徴が現われた結果になった。また，再就職希望型と就業継続型が育児への自信なさが低く離反願望も低いという結果を示し，仕事への継続性や一度離職しても継続しようという意志が育児期の母親の育児感情に影響を与えているのではないかと推察された。一方，再就職という形で同じように仕事を継続させている再就職型は，仕事をしているにも関わらず育児への自信なさや離反願望が高かった。不本意に仕事をしている可能性が考えられ，抱えている葛藤も高いことが予想される。再就職型が抱えている葛藤については，今後，面接調査で明らかにしていくことが重要と思われる。

第 3 節　第Ⅱ章のまとめ

本章では，第 1 節で従来使われていた育児不安尺度を，さらに乳幼児をもつ母親の理解を深めたり，個別に対応できるように，構造的で枠の広い尺度の作成を試みた。育児に関する不安だけではなく，乳幼児をもつ母親の育児に関する負担感を全般的にとらえているという意味で育児負担感尺度と命名した。育児負担感尺度は，閉塞感・犠牲感，疲労感，自信なさ，離反願望という四つの因子に分かれ，妥当性も検証され，乳幼児をもつ母親が育児に関わることによっておこる育児負担感を捉えられていることが示された。

第 2 節では，乳幼児をもつ母親の育児負担感をライフコースから検討した。乳幼児をもつ母親の育児負担感は，ライフコースによって違いがあり，再就職型や専業主婦型は育児負担感が高いことが示された。特に再就職型は，育児に自信がないことや離反願望，疲労感なども高いことが示唆され，不本意な勤め方をしていることも考えられ，今後の課題とされた。一方，同じように有職でありながら，継続して仕事を続けている就業継続型は疲労感は高いが，育児負担感は低いことが示された。

本章では，乳幼児をもつ母親の育児負担感をライフコースの視点から検討し四つのライフコースの母親の育児負担感の違いを把握した。

第Ⅲ章

乳幼児をもつ母親のアイデンティティと育児負担感との関連

―ライフコースからの検討―

第1節　乳幼児をもつ母親のアイデンティティ地位と育児負担感の関連

1　目的

第Ⅱ章では，育児負担感尺度を作成し，乳幼児をもつ母親の育児負担感を四つのライフコースの視点から把握した。本章では，第Ⅰ章で述べられていた，育児期女性のアイデンティティの葛藤をとりあげる。

岡本（1996）は，幼児期からの重要な他者への数々の同一化の主体的選択と統合の結果として獲得される個としてのアイデンティティに対して，母親としてのアイデンティティは母親役割の反映として獲得されるアイデンティティであり，この両者を自己の中でどのように両立，調和させ，統合させていくかは，現代女性にとっては必ずしも容易なプロセスではないと述べている。子どもを持つ全ての女性が母親であることを受容し，母親である自分を自己の生き方の中に統合しているわけではないことを示唆した。

また，母親である自分を自己の生き方の中心にすえ子育てを生きがいとし，疑うべくもなく親から受け継いだ伝統的な生き方をしていればよかった時代に対し，今日においては，女性の高学歴化，生き方の多様性が求められるようになり，従来の価値観とは違った生き方が問い直されるようになった。母親の役割だけではアイデンティティを支えきれなくなった母親がどのようなライフコースを歩み，どのようにアイデンティティを統合していくのであろうか。ライフコース毎に育児期の女性のアイデンティティの状態を知ることは，ライフコースによるアイデンティティの違いを知る手だてとなるとともに現代の育児期の女性のアイデンティティの状態を知る手だてになると思われる。今日，普通の母親が育児に対して否定的な感情を抱くようになったと言われる。現代の育児期の女性のアイデンティティ確立における葛藤は，最近になって急増した虐待や育児ノイローゼなどと無関係ではない可能性があり，母親の育児負担感と関係があるのではないだろうか。

そこで本研究の目的は，以下の二つとする。

(1)アイデンティティの状態をアイデンティティ地位で捉え，ライフコース別に育児期の女性のアイデンティティ地位の分布を検討する。

(2) ライフコース別にアイデンティティ地位と育児負担感との関連を検討する。

2　方法

(1) 調査対象者：調査手続き

第Ⅱ章第１節に同じ。

(2) 調査内容

以下の構成からなる質問紙調査を実施した。

1) 育児負担感尺度：第Ⅱ章１節で開発した尺度。「閉塞感・犠牲感」「疲労感」「自信なさ」「離反願望」の 4 因子からなる。代表的な項目は，順に「自分ひとりで子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう」「いつも疲れている感じがする」「自分の子どもの育て方はこれでいいのだろうかと思うことがある」「子育てを離れて一人になりたい気持ちになることがある」である。評定は，「よくある」「時々ある」「ほとんどない」「全くな

い」の 4 段階で回答を求め，それぞれ順に 4 点，3 点，2 点，1 点とした。

2) ライフコースを問う項目：フェイスシートで 3 つに分類したライフコースの中から○をつけてもらった。ライフコースはⅠ就業継続型（結婚・出産後も仕事をやめずに継続している），Ⅱ再就職型（すでに現在就業している），Ⅲ専業主婦型（今後もずっと専業主婦の予定），Ⅳ再就職希望型（育児がひと段落してから就業希望）の 4 群である。

3) 自我同一性地位判別尺度：加藤（1983）の作成した尺度で，Marcia の同一性地位概念を踏まえて「現在の自己投入」の水準，「過去の危機」の水準」「将来の自己投入の希求」の水準の 3 つの変数の値から，6 つの同一性地位に分類するものである。全 12 項目で回答は「全くそのとおりだ」「かなりそうだ」「どちらかといえばそうだ」「どちらかといえばそうではない」「そうではない」「全くそうではない」の 6 段階評定で，それぞれ順に 6 点，5 点，4 点，3 点，2 点，1 点とした。

3. 分析方法

(1) ライフコース別自我同一性地位の分布：加藤（1983）の指摘した分類基準（図Ⅲ-1-1）に従って，乳幼児をもつ母親の自我同一性地位をライフコース別に分類し，χ2 乗検定を行なう。

(2) ライフコース別育児負担感と自我同一性地位の関連：

ライフコース（4 水準）と自我同一性地位（6 水準）を独立変数，育児負担感合計得点及び育児負担感因子（閉塞感・犠牲感，疲労感，自信なさ，離反願望）得点を従属変数とする 2 要因の分散分析を実施する。

表Ⅲ-1-1 自我同一性地位判別尺度の平均値と標準偏差

項目	平均値	標準偏差
（現在の自己投入）	**14.67**	**(4.05)**
私は今、自分の目標をなしとげるために努力している。	3.41	(1.28)
私には、特に打ち込むものはない。 (*)	3.97	(1.33)
私は、自分がどんな人間で何を望み、行おうとしているのかを知っている。	3.54	(1.16)
私は、「こんなことがしたい」という確かなイメージをもっていない。 (*)	3.76	(1.29)
（過去の危機）	**16.20**	**(3.06)**
私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことはない。 (*)	4.73	(1.14)
私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということをかつて真剣に迷い考えたことがある。	4.04	(1.36)
私は、親やまわりの人間の期待にそった生き方をすることに疑問を感じたことはない。 (*)	3.99	(1.15)
私は以前、自分のそれまでの生き方に自信がもてなくなったことがある。	3.44	(1.38)
（将来の自己投入の希求）	**15.35**	**(2.64)**
私は、一生懸命にうちこめるものを積極的に探し求めている。	3.76	(1.21)
私は、環境に応じて、何をすることになっても特にかまわない。 (*)	3.48	(1.10)
私は、自分がどういう人間であり、何をしようとしているのかを、今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている。	3.50	(1.16)
私には、自分がこの人生で何か意味あることができるとは思えない。 (*)	4.61	(1.07)

(*)は逆転項目

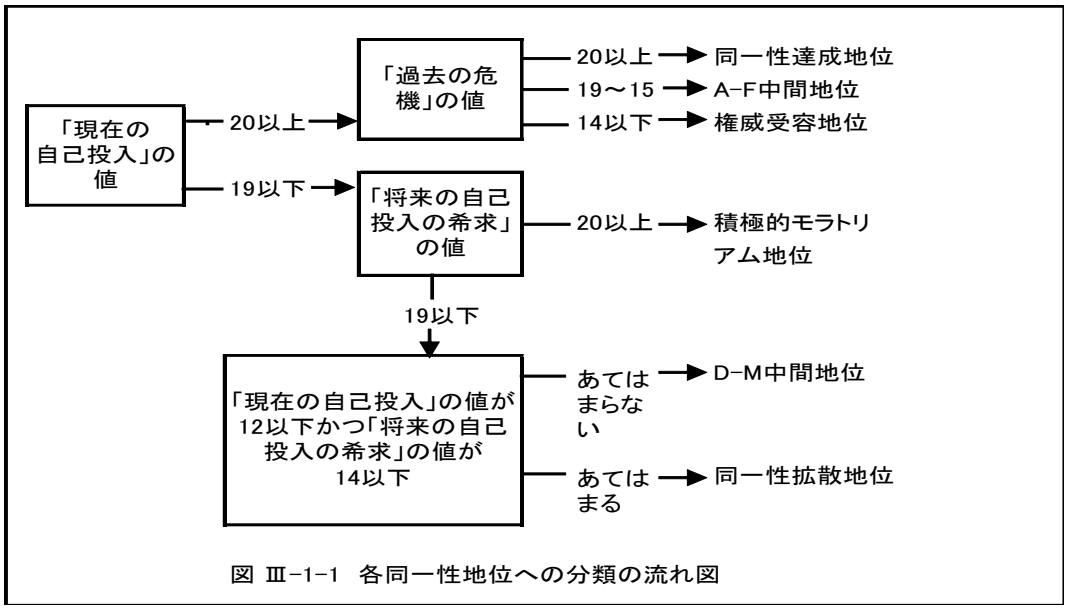


図 Ⅲ-1-1 各同一性地位への分類の流れ図

4. 結果

(1)ライフコース別自我同一性地位の分布

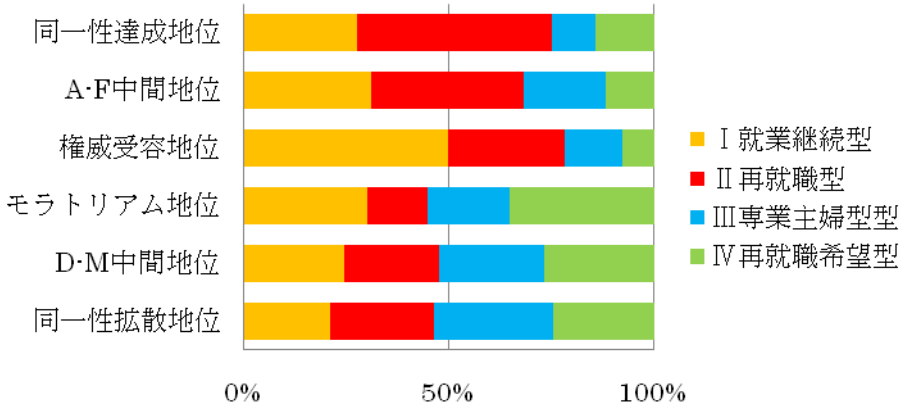
ライフコース別自我同一性地位の分布は，表 Ⅲ-1-1，図-1-1 のとおりである。調査対象の内訳は，就業継続型，再就職型，専業主型，再就職希望型の順に述べると，A：同一性達成地位（attainment）18 人，27 人，5 人，6 人 B：同一性達成―権威受容中間地位（A-F 中間地位）44 人，46 人，20 人，7 人 C：権威受容地位（foreclosure）20 人，10 人，4 人，2 人 D:積極的モラトリアム地位（moratorium）21 人，9 人，10 人，16 人 E:同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位（D-M 中間地位）344 人，286 人，255 人，246 人 F；同一性拡散地位（diffusion）86 人，90 人，85 人，65 人であった。

検定の結果，自我同一性の分布差に有意差があった（χ^2＝57.89　df=15　p<.001)。残差分析では，同一性達成地位群において，再就職型が多く（p<.01），専業主婦型が少なかった（p<.05)。同一性達成―権威受容中間地位群では，再就職型が多く（p<.01），再就職希望型が少なかった（p<.01)。権威受容地位群では，就業継続型が多く（p<.01），再就職希望型が少なかった（p<.05)。同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位では，再就職型が少なく（p<.05），再就職希望型が多かった（p<.05)。同一性拡散地位群では，就業継続型が少なく（p<.05)，専業主婦型が多かった（p<.05）（表Ⅲ-1-2,図Ⅲ-1-2)。

表Ⅲ-1-2 ライフコース別自我同一性地位の分布　( )内は%を示す

自我同一性地位	自我同一性地位の定義	就業継続型 533人	再就職型 468人	専業主婦型 379人	再就職希望型 346人	計 1726人
A:同一性達成	過去に高い水準の危機を経験し、現在高い水準の自己投入	18 (3.4%)	27 (5.8%) **	5 (1.3%) *	6 (1.7%)	56 (3.2%)
B:A-F 中間	同一性達成－権威受容中間地位	44 (8.3%)	46 (9.8%) **	20 (5.3%)	11 (3.2%) **	121 (7.0%)
C:権威受容	過去に低い水準の危機しか経験せず、現在高い水準の自己投入	20 (3.8%) **	10 (2.1%)	4 (1.1%)	2 (0.6%) *	36 (2.1%)
D:積極的ﾓﾗﾄﾘｱﾑ	現在高い水準の自己投入をしていないが将来の自己投入を強く希求	21 (3.9%)	9 (1.9%)	10 (2.6%)	16 (4.6%)	56 (3.2%)
E:D-M中間	同一性拡散－積極的ﾓﾗﾄﾘｱﾑ中間地位	344 (64.5%)	286 (61.1%) *	255 (67.3%)	246 (71.1%) *	1131 (65.5%)
F:同一性拡散	現在低い自己投入しかしておらず、将来の自己投入の希求も弱い	86 (16.1%) *	90 (19.2%)	85 (22.4%) *	65 (18.8%)	326 (18.9%)

※プラスの残差に網掛け　　**p<.01 *p<.05



図Ⅲ-1-２アイデンティティ地位におけるライフコースの分布

(2) ライフコース別自我同一性地位と育児負担感との関連

結果は，表Ⅲ-1-3 ， Ⅲ-1-4 ， Ⅲ-1-5 ， Ⅲ-1-6，Ⅲ-1-7（および図Ⅲ-1-3，Ⅲ-1-4 ，Ⅲ-1-5 ， Ⅲ-1-6 ， Ⅲ-1-7)のとおりである。アイデンティティ地位の主効果は閉塞感・犠牲感，疲労感，自信なさ，離反願望，育児負担感において有意であった（順にF(5, 1702)=14. 43, p<. 001, F(5, 1702)=3. 95, p<. 01, F(5, 1702)=14. 45, p<. 001, F(5, 1702)=8. 33, p<. 001，F(5, 1702)=16. 26, p<. 001）。ライフコースは疲労感においてのみ主効果がみられた（F(3, 1702)=5. 15, p<. 01, ）が，他の育児負担感因子では主効果がみられず，ライフコースによる有意差がないことが明らかになった。交互作用がなかったことから，アイデンティティ地位と育児負担感の関連，ライフコースと育児負担感（疲労感のみ）の関連が示された。アイデンティティ地位と育児負担感の関連において多重比較の結果を記述する。

まず，アイデンティティ地位と閉塞感・犠牲感の関連においての多重比較の結果は，同一性拡散地位群が積極的モラトリアム地位群を除いたすべての群より閉塞感・犠牲感が高

かった。同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位群が，同一性達成地位群，同一性達成－権威受容中間地位群，権威受容地位群より閉塞感・犠牲感が高かった。積極的モラトリアム地位群が，権威受容地位群より閉塞感・犠牲感が高かった。

アイデンティティ地位と疲労感の関連においての多重比較の結果は，同一性拡散地位群が同一性達成－権威受容中間地位群と同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位群より疲労感が高かった。

アイデンティティ地位と自信なさの関連においての多重比較の結果は，同一性拡散地位群が積極的モラトリアム地位群を除いたすべての群より自信なさが高かった。同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位群が，同一性達成－権威受容中間地位群，権威受容地位群より自信なさが高かった。積極的モラトリアム地位群が，権威受容地位群より自信なさが高かった。

アイデンティティ地位と離反願望の関連においての多重比較の結果は，同一性拡散地位群が同一性達成地位群と積極的モラトリアム地位群を除いたすべての群より離反願望が高かった。同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位群が権威受容地位群より離反願望が高かった。積極的モラトリアム地位群が権威受容地位群より離反願望が高かった。

アイデンティティ地位と育児負担感の関連においての多重比較の結果は，同一性拡散地位群が積極的モラトリアム地位群を除いたすべての群より育児負担感が高かった。同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位群が，同一性達成－権威受容中間地位群，権威受容地位群より育児負担感が高かった。積極的モラトリアム地位群が，権威受容地位群より育児負担感が高かった。

また，ライフコースの主効果が疲労感においてのみみられ，就業継続型が専業主婦型と再就職希望型より有意に疲労感が高いことが示された。その他の育児負担感因子得点はライフコースの主効果がないことが示された。

表Ⅲ-1-3　閉塞感・犠牲感得点の平均値と標準偏差

	A 同一性達成地位（56人）	B A-F中間地位（121人）	C 権威受容地位（36人）	D モラトリアム地位（56人）	E D-M中間地位（1131人）	F 同一性拡散地位（326人）	F値 ライフコース別	F値 地位別	F値 交互作用	多重比較
Ⅰ就業継続型（533人）	1.78 (0.60)	1.65 (0.56)	1.66 (0.62)	2.10 (0.71)	2.02 (0.57)	2.17 (0.61)				
Ⅱ再就職型（468人）	2.12 (0.85)	1.78 (0.59)	1.75 (0.65)	1.80 (0.58)	2.18 (0.60)	2.34 (0.61)	1.50	14.43 ***	1.20	F>A,B,C,E E>A,B,C D>C
Ⅲ専業主婦型（379人）	1.90 (0.65)	1.93 (0.76)	1.67 (0.33)	2.18 (0.61)	2.25 (0.62)	2.51 (0.53)				
Ⅳ再就職希望型（346人）	1.53 (0.44)	1.98 (0.59)	1.42 (0.59)	2.41 (0.62)	2.26 (0.64)	2.27 (0.63)				

表Ⅲ-1-4　疲労感得点の平均値と標準偏差

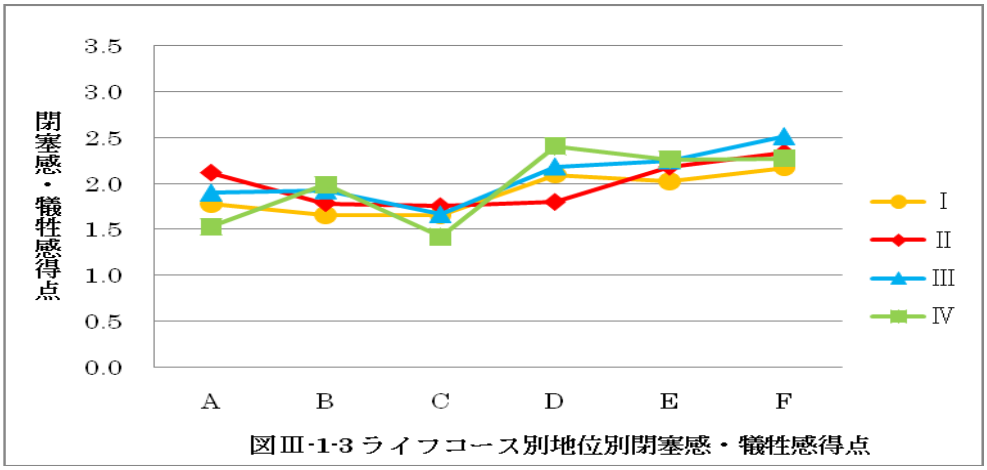
	A 同一性達成地位（56人）	B A-F中間地位（121人）	C 権威受容地位（36人）	D モラトリアム地位（56人）	E D-M中間地位（1131人）	F 同一性拡散地位（326人）	F値 ライフコース別	F値 地位別	F値 交互作用	多重比較
Ⅰ就業継続型（533人）	2.94 (0.76)	2.55 (0.57)	2.84 (0.55)	2.74 (0.74)	2.77 (0.56)	2.91 (0.58)				
Ⅱ再就職型（468人）	2.76 (0.58)	2.73 (0.58)	2.65 (0.82)	2.50 (0.68)	2.74 (0.54)	2.98 (0.60)	5.15 **	3.95 **	1.21	Ⅰ>Ⅲ, Ⅳ F>B,E
Ⅲ専業主婦型（379人）	2.45 (0.72)	2.45 (0.67)	2.38 (0.52)	2.63 (0.63)	2.57 (0.53)	2.67 (0.63)				
Ⅳ再就職希望型（346人）	2.88 (0.80)	2.55 (0.85)	1.88 (1.24)	2.72 (0.52)	2.52 (0.53)	2.55 (0.53)				

表Ⅲ-1-5　自信なさ得点の平均値と標準偏差

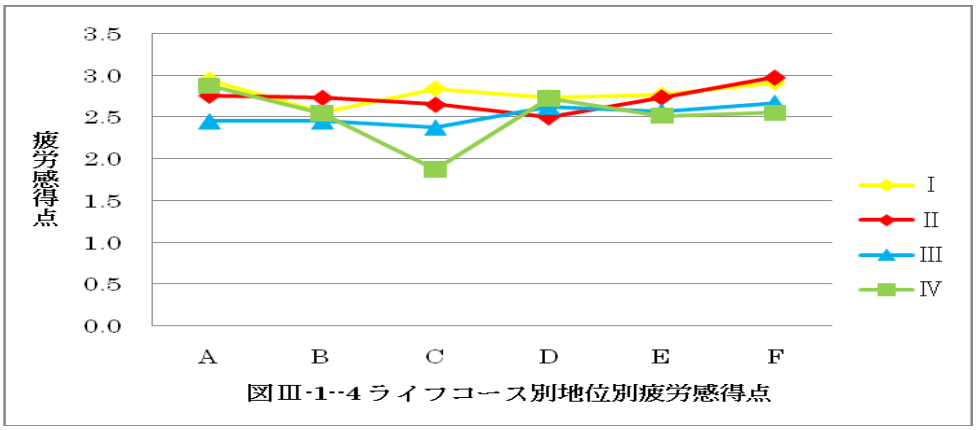
	A 同一性達成地位（56人）	B A-F中間地位（121人）	C 権威受容地位（36人）	D モラトリアム地位（56人）	E D-M中間地位（1131人）	F 同一性拡散地位（326人）	F値 ライフコース別	F値 地位別	F値 交互作用	多重比較
Ⅰ就業継続型（533人）	2.61 (0.65)	2.35 (0.53)	2.34 (0.61)	2.60 (0.44)	2.61 (0.52)	2.86 (0.55)				
Ⅱ再就職型（468人）	2.61 (0.72)	2.47 (0.50)	2.05 (0.61)	2.53 (0.29)	2.74 (0.54)	2.86 (0.58)	1.42	14.45***	0.95	F>A,B,C,E E>B,C D>C
Ⅲ専業主婦型（379人）	2.50 (0.31)	2.61 (0.41)	2.06 (0.72)	2.63 (0.54)	2.67 (0.55)	2.84 (0.53)				
Ⅳ再就職希望型（346人）	2.25 (1.01)	2.27 (0.41)	1.75 (1.06)	2.69 (0.59)	2.60 (0.46)	2.71 (0.46)				

表Ⅲ-1-6　離反願望得点の平均値と標準偏差

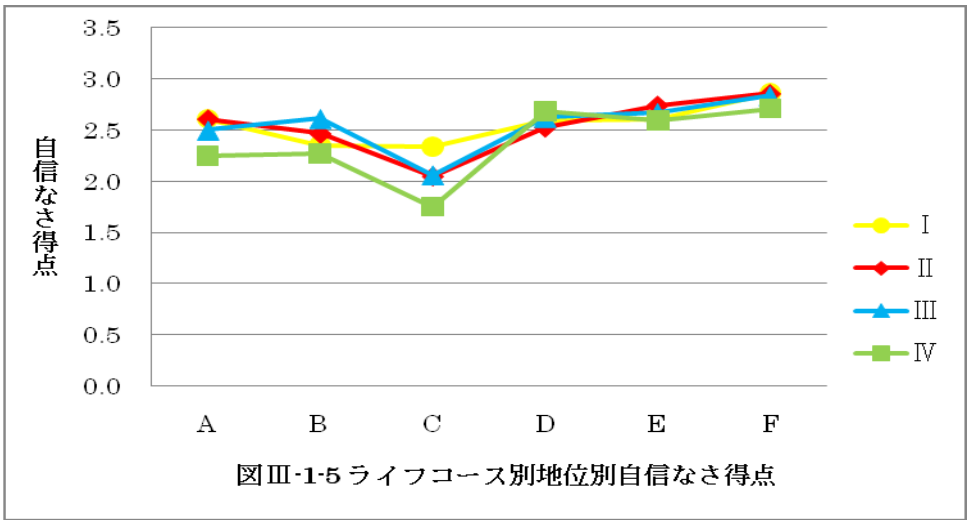
	A 同一性達成地位（56人）	B A-F中間地位（121人）	C 権威受容地位（36人）	D モラトリアム地位（56人）	E D-M中間地位（1131人）	F 同一性拡散地位（326人）	F値 ライフコース別	F値 地位別	F値 交互作用	多重比較
Ⅰ就業継続型（533人）	2.43 (0.64)	2.18 (0.59)	2.20 (0.94)	2.68 (0.71)	2.56 (0.60)	2.76 (0.58)				
Ⅱ再就職型（468人）	2.70 (0.74)	2.46 (0.62)	2.03 (0.84)	2.26 (0.55)	2.72 (0.62)	2.91 (0.55)	2.26	8.33***	1.47	F>,B,C,E E>C D>C
Ⅲ専業主婦型（379人）	2.53 (0.38)	2.75 (0.58)	2.58 (0.50)	2.80 (0.71)	2.65 (0.68)	2.88 (0.64)				
Ⅳ再就職希望型（346人）	2.67 (0.92)	2.48 (0.35)	1.50 (0.71)	2.73 (0.74)	2.54 (0.65)	2.64 (0.59)				



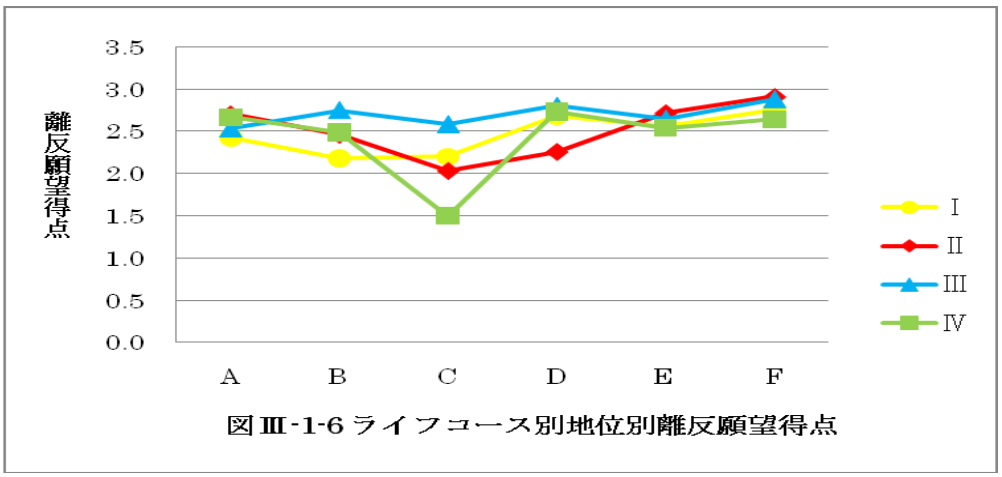
図Ⅲ-1-3 ライフコース別地位別閉塞感・犠牲感得点



図Ⅲ-1--4 ライフコース別地位別疲労感得点



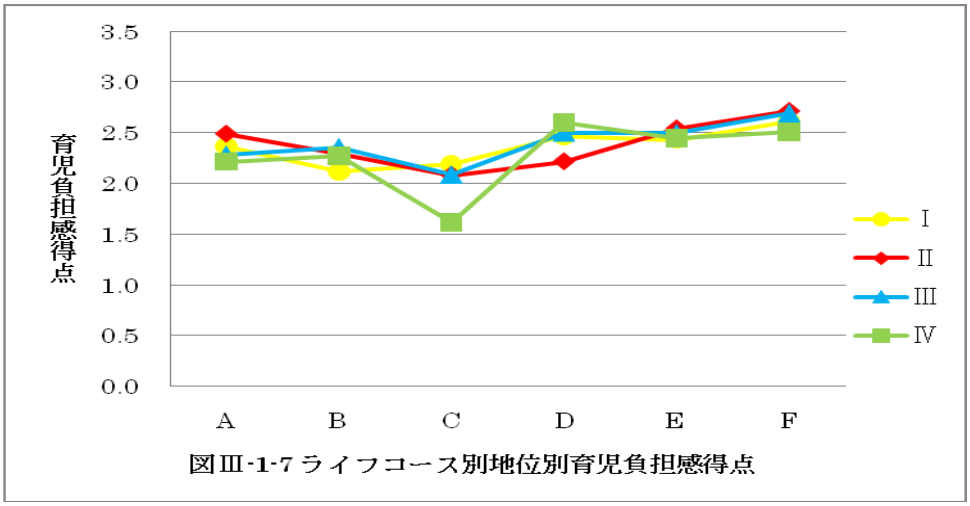
図Ⅲ-1-5 ライフコース別地位別自信なさ得点



図Ⅲ-1-6 ライフコース別地位別離反願望得点

表Ⅲ-1-7　育児負担感得点の平均値と標準偏差

	A 同一性 達成地位 (56人)	B A-F中間 地位 (121人)	C 権威受容 地位 (36人)	D モラトリア ム地位 (56人)	E D-M中間 地位 (1131人)	F 同一性 拡散地位 (326人)	F値 ライフ コース別	F値 地位別	F値 交互 作用	多重比較
Ⅰ就業継続型 (533人)	2.36 (0.51)	2.12 (0.34)	2.19 (0.52)	2.47 (0.47)	2.43 (0.41)	2.61 (0.40)				
Ⅱ再就職型 (468人)	2.49 (0.60)	2.29 (0.46)	2.08 (0.59)	2.22 (0.47)	2.54 (0.45)	2.71 (0.46)				
Ⅲ専業主婦型 (379人)	2.28 (0.49)	2.36 (0.51)	2.09 (0.36)	2.50 (0.52)	2.49 (0.48)	2.69 (0.42)	0.79	16.26***	1.18	F>A,B,C,E E>B,C D>C
Ⅳ再就職希望型 (346人)	2.22 (0.66)	2.27 (0.41)	1.62 (0.87)	2.60 (0.46)	2.44 (0.44)	2.51 (0.44)				



図Ⅲ-1-7 ライフコース別地位別育児負担感得点

5. 考察

(1)ライフコース別自我同一性地位の分布

自我同一性地位の分布では,専業主婦型や再就職希望型が就業継続型や再就職型に比べ,同一性達成群や同一性達成－権威受容中間地位群の割合が有意に低く,同一性拡散地位群,同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位群の割合が高いことが示された。

加藤（1983）は，同一性の状態を規定する心理社会的要因として「危機」と「自己投入」の 2 変数を「現在の自己投入の」水準,「過去の危機」の水準,「将来の自己投入の希求」の水準の 3 時点での有無との関係から各個人の同一性の状態を捉え，自我同一性地位を判別した。同一性達成群や同一性達成－権威受容中間地位群は，「現在の自己投入」が高く「過去の危機」を経験している群である。専業主婦型や再就職希望型において，就業継続型や再就職型に比べ，同一性達成群や同一性達成－権威受容中間地位群の割合が低いのはなぜだろうか。

経済企画庁国民生活局（1987）の調査では，女性が理想とするライフコースは，結婚ないし出産を機に離職し，子どもが一定の年齢になったら再就職するコースが一番多く，

43.4%を占めた。しかし，再就職が難しいことを反映し，現実には31.3%と低くなる。離職せずに仕事を持ち続けるか，専業主婦となるかという選択肢を余儀なくされ，理想のライフコースをとれないままに葛藤を内面に抱え込んでいる可能性がある。つまり，この結果から就業継続型や専業主婦型の中に理想のライフコースををとれずに葛藤を抱えている女性が存在することが示唆された。しかし，再就職型や再就職希望型の中にも理想のライフコースではない母親が存在していることも十分予想される。大日向（2002）は，子育て期に数年後の自分の姿に展望をもてないで不安を抱いている母親が専業主婦に多いことを述べている。母親にこのような葛藤が潜むならば，「現在の自己投入」が難しいものと予想される。また，名越ら（1997）の調査でも，結婚・出産前に専業主婦を希望していた母親群が,その後就業希望へと変化している母親が大多数であったと述べていることからも，専業主婦をしている母親群の中には現在のことに自己を投入できない割合が多いことが考えられ，専業主婦型や再就職希望型に自我同一性達成群が低くなったとも考えられよう。

一方，積極的モラトリアム地位群の割合は，ライフコースによって差異が出ないことが示された。どのライフコースにおいても模索している母親は同じように存在していることを示し，有職の母親が必ずしも希望の職種についているわけではなく，模索しながら働いていることを示しているとも言えよう。また，青年期までにどの程度アイデンテンティが達成しているかという点が本稿では示すことができないため，達成されてきた発達課題や結婚後の夫婦の親密感なども含めて，今後，検討する必要があるかと思われる。

(2) ライフコース別アイデンティティ地位と育児負担感との関連

ライフコースとアイデンティティ地位は交互作用がなく，それぞれ主効果がみられたため，ライフコースによる育児負担感の検討，アイデンティティ地位による育児負担感の検討の二つに分けて述べることにする。

1) ライフコースによる育児負担感の検討

ライフコースの主効果は，疲労感においてのみであり，他の育児負担感因子では，ライフコースの主効果はなかった。多重比較により，就業継続型が専業主婦型や再就職希望型より疲労感が高いことが示された。アイデンティティを達成していても達成していなくとも，就業継続型が専業主婦型や再就職希望型より疲れていることが示唆され，仕事と育児の両立の忙しさが推察された。家事や育児に専念できる専業主婦型や再就職希望型に比べ，就業継続型は家事や育児と仕事との間で葛藤が生じる可能性が高いことが考えられる。就業を継続している成人期女性の場合，仕事と育児との間で感じる罪悪感をどのように処理していくかということの難しさが報告されている（無藤ら，1996）。また，再就職型に比べ，就業継続型は仕事の責任も重くなり，育児との両立の上でストレスがたまりやすい可能性も考えられる。

2)アイデンティティ地位による育児負担感の検討

アイデンティティ地位の主効果が示され，すべての育児負担感因子において，同一性拡散地位群がすべてのライフコースにおいて有意に育児負担感が高かった。育児負担感因子のうち，疲労感以外はほぼ同じ特徴を示していたため，育児負担感全体について述べることにより，各因子の特徴も把握できるものと思われる。そこで，アイデンティティ地位による育児負担感全体を検討し，疲労感については，その後に触れることにする。

育児負担感は，同一性拡散地位群がモラトリアム地位群を除くすべての地位群より高かった。同一性拡散地位群は同一性拡散―モラトリアム中間地位群より有意に育児負担感が高く，育児負担感因子も同一性拡散地位群と同一性拡散―モラトリアム中間地位群との間に有意差がみられ，この二つの地位群の間には一線があるように推察された。同一性拡散地位群とは「現在低い自己投入しかしておらず，将来の自己投入の希求も弱い」群である。将来への望みもうすく，現在も漠然としたような過ごし方をしていることが予想され，育児負担感が高いものと思われる。青年期のアイデンティティの達成という課題がそのまま達成されずに育児期を迎えてしまったのか，あるいは，一度達成されたアイデンティティが，結婚し，新たな役割を統合している過程で拡散した状態になっているのか確定できないが，いずれにせよ，母親になった自分が何ものであり，現在何をなし，将来へどのようにつながっていくのか，展望を見いだすことができない群である。アイデンティティ達成群や危機を経ないで達成した権威受容地位群より育児負担感が高いのは，自分の中で統合できない葛藤が潜んでいることも要因として十分考えられる。また，同一性拡散―モラトリアム中間地位群，モラトリアム地位群も育児負担感がアイデンティティ達成―権威受容地位群や権威受容地位群より育児負担感が高いことが示され，アイデンティティが達成の方向に向かっている場合は育児負担感が低いことが示唆された。この傾向は，閉塞感・犠牲感，自信なさ，離反願望でも見られ，アイデンティティをしっかりと確立できるように模索していくことが，育児負担感の軽減につながっていくことが示された。ただ，疲労感についてだけは，同一性拡散群は同一性達成群や権威受容地位群と有意差がなかったことから，疲労感はアイデンティティの達成とはあまり関連がないことも示された。

また，権威受容地位群が積極的モラトリアム地位群，アイデンティティ拡散－積極的モラトリアム中間地位群，アイデンティティ拡散地位群に対して有意に育児負担感が低かった。権威受容地位群とは「現在の自己投入が高いが，過去に低い水準の危機しか経験していない」群で，同一性達成地位群のように高い水準の危機を経験しているわけではない。しかし，育児負担感が有意に低いのは，高い水準の危機を経験した同一性達成地位群ではなく，低い水準しか経験していない権威受容地位群であるのはなぜだろうか。原口ら（2005）は，今日の母親たちは，「自分で子育てをしたい」と同時に「自分の生き方を大切にしたい」という葛藤が生じる傾向が高く，その結果，現実自己と理想自己との間に生じたギャップが，育児を肯定的に捉えることを困難にさせ，育児不安などの育児負担感を喚起する要因となっていることを示唆している。同一性達成地位群では，同一性が達成したがゆえに求める理想自己が高いとするならば，現実自己とのギャップが大きく，育児不安が高くなる可能性が考えられる。「子育てをすること」と「自分の生き方を大切にする」ことの二つの折り合いをどのようにつけるかということが，アイデンティティ達成地位群では重要になるのではないだろうか。

また，積極的モラトリアム地位群と同一性拡散地位群は，すべての育児負担感因子において違いがでなかった。モラトリアム地位群は将来の希求が高い群であることから，同一性拡散地位群と同じ程度に育児に負担を感じていても，かなり質の違った葛藤が潜んでいるものと推察される。将来への希求が高いモラトリアム地位群では，現在，育児を行っている自分と将来何かを見い出そうとしている自分との間で，「自分で子育てをしたい」と同時に「自分の生き方を大切にしたい」という葛藤が生じる傾向が高いことが予想され，

拡散群のように将来への意欲が低い場合とはやや違った様相を示すものと思われる。今後，面接などでどのような葛藤があるのか把握する必要があるであろう。

第 2 節　第Ⅲ章のまとめ

成人期の女性は，アイデンティティが再構成されたり，アイデンティティ危機に遭遇すると言われている（岡本，1996）ことから，アイデンティティの統合と育児負担感は関係があるのではないかという仮説のもとに，アイデンティティと育児負担感の関連をライフコース別に検討した。アイデンティティ拡散地位の母親はモラトリアム地位の母親を除くすべての地位の母親より，閉塞感・犠牲感，自信なさ，離反願望が高かった。アイデンティティ達成に向かうほど育児負担感は低い傾向が見られ，アイデンティティの確立が育児負担感を軽減することが示唆された。

一方，アイデンティティ達成地位の母親が必ずしも権威受容地位の母親に比べ，育児負担感が低いわけではないことも示された。それについては，アイデンティティが達成したがゆえの理想の高さが「子育てをすること」と「自分の生き方を大切にする」ことの葛藤を高めている可能性もあると考察したが，面接調査などで今後，検討する必要があるであろう。また，積極的モラトリアム地位の母親も同一性拡散地位の母親と育児負担感に差がなかったが，内面に抱えている葛藤の内容には違いがある可能性が高いため，葛藤の内容や育児感情については，面接調査などで把握することが必要である。

第Ⅳ章

乳幼児をもつ母親の時間的展望と育児負担感との関連

―ライフコースからの検討―

第 1 節　ライフコースからみた乳幼児をもつ母親の時間的展望

1. 目的

第Ⅲ章では,アイデンティティと育児負担感の関連をライフコース別に検討したところ,アイデンティティの確立が育児負担感を軽減することが示唆された。都筑（1993）は，アイデンティティの確立には，時間的展望の確立が関連していることを報告している。アイデンティティの達成は過去，現在，未来の時間的流れの中で自己についての継続性や統合性の意識の上に初めて成り立つことから，アイデンティティと時間的展望との関連がすでに青年期や成人期で示されている（白井，2003，2010)。時間的展望の確立はアイデンティティの確立に繋がり,アイデンティティの確立は育児負担感を軽減する(第 3 章)。つまり，時間的展望の確立は，育児負担感を軽減することになる。では，時間的展望の確立とはどのようなことであろうか。白井(1991)が将来に希望を持ち現在の生活に充実を感じ過去を受容するという感覚を持つことを時間的展望の獲得と述べた。つまり，時間的展望の確立とは，過去・現在・未来を肯定的に受け止め，見通しを持てるということであろう。

今日は，女性のライフコースが多様化し，女性の生き方の選択の可能性が広がった。しかし，その反面，理想通りのライフコースを選択できている女性は半数程度と報告されている（内閣府，2006)。希望したライフコースを選択できずに，結婚・出産を経て，その後の人生を送っている育児期の女性は過去の選択を納得しているのか，現在は充実しているのか，将来の見通しは立っているのかと考えると，いわゆる時間的展望の確立が問題になると言えよう。本章では，育児期の女性の過去・現在・未来への意識を時間的展望という概念を用いて表し，Ⅱ章と同じ四つのライフコース（就業継続型，再就職型，専業主婦型，再就職希望型）の視点から，育児期の女性の過去・現在・未来への意識を検討する。さらに希望したライフコースの場合とそうでない場合では，育児期女性の過去・現在・未来への意識はどのように違うのかを把握する。

本研究の目的は以下の二つである。

（1）四つのライフコースにおいて、母親の時間的展望にどのような差異があるか

（2）希望のライフコースと同じライフコースを選択できたかどうかによって，母親の時間的展望にどのような差異があるか。

2.　方法

(1) 調査対象者

第Ⅱ章と同じ。1726 名（公民館の育児サロンに参加している母親 803 名，保育園に子どもを通わせている母親 923 名）を分析対象とした。平均年齢は 34.20 歳（*SD*= 5.48）で，子どもの数は，１人が 49.13%，２人が 37.60%，３人以上が 13.27%であった。

(2) 調査手続き

第Ⅱ章と同じ。福岡市内の公民館と保育園に質問紙調査を依頼した。研究協力の依頼文に，研究目的，回答内容が漏れないこと，個人が特定されないことを明記した。公民館は主事に質問紙を依頼し，後日，筆者が直接回収した方法と郵送で回収した 2 通りの方法をとった。保育園は先生に質問紙を依頼し 2 週間後に回収した。なお，調査は 2010 年 9 月―12 月に行われた。

(3) 調査内容

1) 時間的展望を測定する項目　白井（1994）の作成した時間的展望体験尺度を使用した。白井によれば,“時間的展望とはある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体”と定義されている。この尺度は，“現在の充実感”，“目標指向性”，“過去受容”，“希望“の下位項目から構成されており，時間的展望の体験的側面を測定している。代表的な項目は，順に“毎日の生活が充実している”　“私には，だいたいの将来計画がある”　“過去のことはあまり思い出したくない”　“私には未来がないような気がする”である。全 18 項目からなり，回答は「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の 5 件法によった。集計にあたっては，順に 5 点，4 点，3 点，2 点，1 点と得点化した。

2) ライフコースを問う項目　就業継続型，再就職型，専業主婦型の三つの型（内閣府，2006）をⅠ就業継続型，Ⅱ再就職型（すでに現在就業している），Ⅲ専業主婦型（今後もずっと専業主婦の予定），Ⅳ再就職希望型（育児がひと段落してから就業希望）の四つの型に変えた。育児期の母親がすでに再就職している場合と，子どもがもう少し大きくなってから再就職しようと考えている場合では，母親の状況が違うため，区別して検討し援助の視点を得ることが適切と考えた。四つのライフコースの中から現在のライフコースと希望していたライフコースを記入してもらった。

3. 結果

（1）時間的展望因子の確認

因子分析（最小 2 乗法・ブロマックス回転）を行ったところ，先行研究と同様の 4 因子が得られた。累積寄与率は 50.88%。第 1 因子から，将来の目標指向性，現在の充実感，過去の受容,将来の希望と命名した。尺度の信頼性の指標として α 係数を算出したところ，順に.83, .78, .78, .80 となった（表Ⅳ-1-1）。

表Ⅳ-1-1 時間的展望体験尺度〈ブロマックス回転後の因子パターン〉

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
（将来の目標指向性）α =.83				
私には、将来の目標がある。	.936	-.086	-.008	-.018
私には、だいたいの将来計画がある。	.837	-.046	.052	-.005
将来のためを考えて今から準備していることがある。	.599	.022	-.020	.018
私の将来は漠然としていてつかみどころがない。 (*)	.575	.158	-.022	.107
10年後、私はどうなっているのかよくわからない。 (*)	.352	.252	.065	.142
（現在の充実感）α =.78				
毎日が同じことの繰り返しで退屈だ。 (*)	.046	.773	-.039	-.150
毎日の生活が充実している。	-.098	.704	.049	.012
今の自分は本当の自分ではないような気がする。 (*)	.003	.650	-.047	.156
毎日が何となく過ぎていく。 (*)	.206	.590	-.040	-.074
今の生活に満足している。	-.083	.483	-.006	.171
（過去の受容）α =..78				
私の過去はつらいことばかりだった。 (*)	-.022	-.034	.924	-.077
過去のことはあまり思い出したくない。 (*)	.057	-.078	.768	-.057
私は過去の出来事にこだわっている。 (*)	-.023	.069	.669	-.015
私は、自分の過去を受け入れることができる。	-.025	-.003	.407	.195
（将来の希望）α = .80				
私の将来には、希望がもてる。	-.032	.009	-.062	.938
自分の将来は自分で切り開く自信がある。	.168	-.058	-.052	.700
将来のことはあまり考えたくない。 (*)	.154	.056	.187	.398
私には未来がないような気がする。 (*)	-.076	.211	.251	.386

因子相関行列	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ		.401	.127	.543
Ⅱ			.408	.619
Ⅲ				.505
Ⅳ				

(*)は逆転項目

（2）現実のライフコースによる時間的展望の検討

ライフコース別に時間的展望合計得点と下位尺度得点の平均値と標準偏差を算出し，分散分析を実施後，多重比較を行なった。

現在の充実感において，再就職型が就業継続型と再就職希望型に比べ，充実感が有意に低いという結果になった。

目標指向性においては，就業継続型が，専業主婦型と再就職希望型より目標指向性得点が有意に高かった。

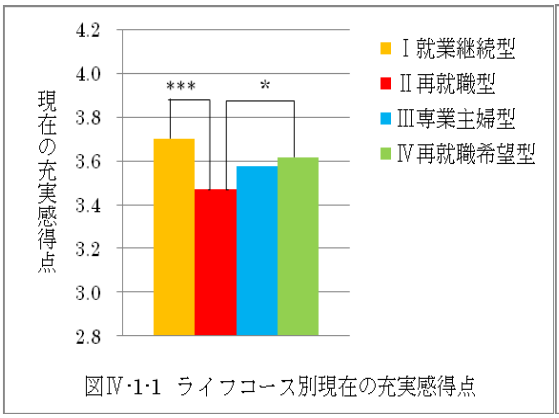
過去受容においては，就業継続型が再就職型と専業主婦型より有意に高く，また再就職希望型が専業主婦型より高いことが示された。

希望においては，再就職希望型が再就職型と専業主婦型より有意に高く，就業継続型は専業主婦型より有意に高かった（表Ⅳ-1-2 ）。

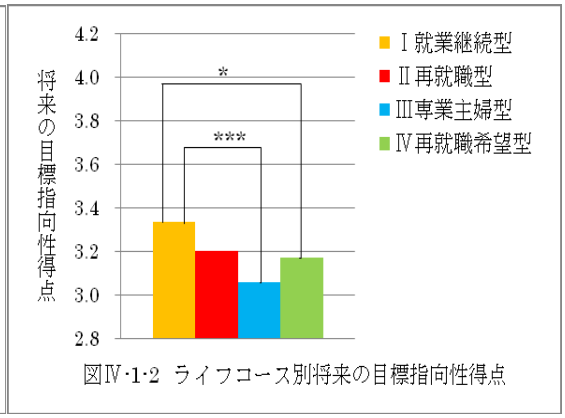
表Ⅳ-1-2 ライフコース別時間的展望得点の平均値と標準偏差及びF値

	Ⅰ 就業継続型 (533人)	Ⅱ 再就職型 (468人)	Ⅲ 専業主婦型 (379人)	Ⅳ 再就職希望型 (346人)	F値 自由度 (3,1722)	多重比較 5%
時間的展望得点	3.70 (.60)	3.54 (.69)	3.52 (.58)	3.65 (.55)	8.92***	Ⅰ>Ⅱ, Ⅲ Ⅳ>Ⅲ
現在の充実感	3.70 (.74)	3.47 (.81)	3.58 (.72)	3.61 (.71)	7.84***	Ⅰ, Ⅳ>Ⅱ
将来の目標指向性	3.33 (.84)	3.20 (.94)	3.05 (.82)	3.17 (.77)	8.21***	Ⅰ>Ⅲ, Ⅳ
過去の受容	3.90 (.85)	3.76 (.91)	3.70 (.89)	3.91 (.85)	6.20***	Ⅰ>Ⅱ, Ⅲ Ⅳ>Ⅲ
将来の希望	3.97 (.73)	3.84 (.83)	3.87 (.71)	4.03 (.68)	5.29***	Ⅰ>Ⅱ Ⅳ>Ⅱ, Ⅲ

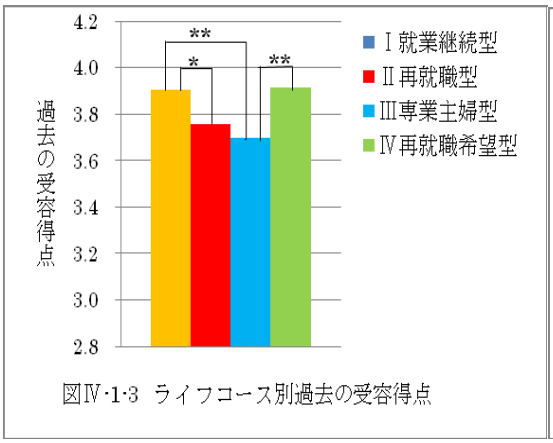
( )内は標準偏差、*p<.05 **p<.01 ***p<.001



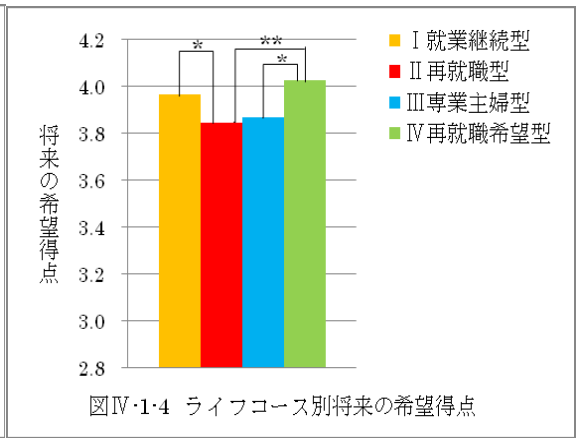
図Ⅳ-1-1 ライフコース別現在の充実感得点



図Ⅳ-1-2 ライフコース別将来の目標指向性得点



図Ⅳ-1-3 ライフコース別過去の受容得点



図Ⅳ-1-4 ライフコース別将来の希望得点

(3) 希望のライフコースと現実のライフコースの一致・不一致による時間的展望の検討

1726 名のうち欠損値を除いた 1498 名を分析対象とした（表Ⅳ-1-3）。現実のライフコース，希望していたライフコースと一致・不一致を独立変数，時間的展望合計得点と下位尺

度得点を従属変数とする 2 要因 4×2 水準の分散分析を行った。多重比較には Tukey 法を用いた（表Ⅳ-1-4）。結果，現在の充実感では，現実のライフコース，希望のライフースとの一致・不一致の主効果が有意だった。多重比較では，就業継続型と再就職希望型が再就職型より現在の充実感が有意に高かった。また，将来の目標では交互作用 $F(3,1490)=3.14$, $p<.05$ が確認された。さらに就業継続型における一致群不一致群の単純主効果 $F(3,1490)=11.87$, $p<.001$，希望のライフコース一致群における現実のライフコースの単純主効果 $F(3,1490)=6.32$, $p<.001$ が見られた。それぞれの多重比較を図に示した（図Ⅳ-1-5）。過去の受容では，現実のライフコース，希望のライフースとの一致・不一致の主効果が有意だった。多重比較では，再就職希望型が再就職型と専業主婦型より過去受容が高く，就業継続型が専業主婦型より有意に過去受容が高かった。離反願望では，現実のライフコース，希望のライフースとの一致・不一致の主効果が有意だった。多重比較では，再就職希望型が再就職型と専業主婦型より将来の希望が有意に高かった。

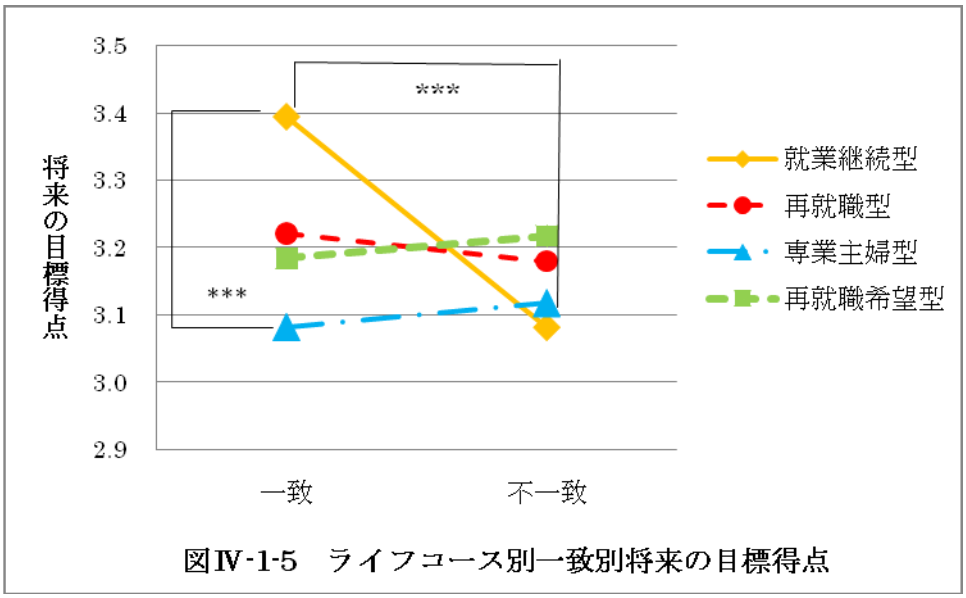
表Ⅳ- 1-3　　希望したライフコースと同じ群・違う群における母親の人数

現在のライフコース	Ⅰ 就業継続型 (511)		Ⅱ 再就職型 (401)		Ⅲ 専業主婦型 (332)		Ⅳ 再就職希望型 (255)	
希望していたライフコース	希望と同じコース (401)	希望と違うコース (110)	希望と同じコース (128)	希望と違うコース (273)	希望と同じコース (170)	希望と違うコース (162)	希望と同じコース (137)	希望と違うコース (118)
Ⅰ 就業継続型	401 (78.5%)			123 (30.7%)		73 (22.0%)		75 (29.4%)
Ⅱ 再就職型		6 (1.2%)	128 (31.9%)			15 (4.5%)		13 (5.1%)
Ⅲ 専業主婦型		64 (12.5%)		99 (24.7%)	170 (51.2%)			30 (11.8%)
Ⅳ 再就職希望型		40 (7.8%)		51 (12.7%)		74 (22.3%)	137 (53.7%)	

表Ⅳ-1-4　ライフコース別一致別ごとの時間的展望の平均値と分散分析結果

	Ⅰ 就業継続型		Ⅱ 再就職型		Ⅲ 専業主婦型		Ⅳ 再就職希望型		F値			
	一致	不一致	一致	不一致	一致	不一致	一致	不一致	ライフコース別	一致別	交互作用	多重比較
N	401	110	128	273	170	162	137	118				
時間的展望												
現在の充実感	3.74 (.74)	3.53 (.74)	3.47 (.79)	3.45 (.81)	3.60 (.73)	3.57 (.73)	3.71 (.68)	3.62 (.72)	4.74**	4.21*	1.14	Ⅰ,Ⅳ>Ⅱ
将来の目標	3.39 (.85)	3.08 (.74)	3.22 (.88)	3.18 (.95)	3.08 (.87)	3.12 (.76)	3.18 (.72)	3.22 (.80)	1.66	2.30	3.14*	
過去の受容	3.95 (.83)	3.78 (.86)	3.89 (.87)	3.72 (.93)	3.71 (.91)	3.74 (.87)	4.06 (.80)	3.89 (.86)	4.16**	6.21*	1.08	Ⅳ>Ⅱ,Ⅲ Ⅰ>Ⅲ
将来の希望	4.00 (.72)	3.83 (.77)	3.91 (.79)	3.81 (.85)	3.92 (.75)	3.90 (.65)	4.13 (.59)	4.04 (.71)	4.83**	5.05*	0.51	Ⅳ>Ⅱ,Ⅲ

（ ）内は標準偏差、***p<.001　**p<.01　*p<.05



図Ⅳ-1-5　ライフコース別一致別将来の目標得点

4. 考察

(1) 現実のライフコースからみた時間的展望

ライフコースと時間的展望因子との関連では，充実感，目標指向性，過去受容，希望それぞれにおいて，就業継続型が有意に高く，ついで再就職希望型が高いことが示された。就業継続型は，すでに育児負担感が低いことが第Ⅱ章で示されている。夫のサポートが高いことや自己決定欲求と自己決定感のズレも小さく，希望したライフコースが実現している母親がおよそ 80%近くいることから，他のライフコースより過去を受容し，充実感が高く，目標や希望も高いであろう。再就職希望型において，社会に出て自分の能力を発揮することや発揮する時が来るであろう期待をもって生活することは，現在の充実感や未来の目標，希望に繋がることと予想される。一方，再就職型が現在の充実感や将来の希望が低いことが示された。乳幼児を抱えている育児期に再就職した母親は，希望も低く，充実感

が持ちにくいようなさまざまな事情を抱えている可能性が示唆された。また，専業主婦型は過去の受容が低く，将来の目標や希望も低いことが示された。専業主婦が将来展望に対する不安感情をもっていること（永久，1995）を支持する結果となった。専業主婦の場合は，将来の展望を見いだせるような援助の方法に焦点を当てることが重要と思われる。

⑵希望のライフコースと現実のライフコースの一致・不一致からみた時間的展望

現実のライフコースの主効果が，現在の充実感，過去の受容，将来の希望で見られ，多重比較の結果がでた。前項の 1726 名を分析した現実のライフコースからみた時間的展望の結果と本稿の結果では若干の違いが見られるが，本項は欠損値により，ライフコースの人数のばらつきが前項と変わったという点が影響しているものと考えられる。現実のライフコースによる結果は，前項の方が人数も十分であることから本項では述べず，本項では希望したライフコースと一致しているか否かという視点から乳幼児をもつ母親の過去・現在・未来の意識との関連を考察したい。ただし，将来の目標についてだけ，前項と違い，現実のライフコースの主効果が見られず，交互作用が現れたため，希望したライフコースと一致しているか否かという視点と絡めて考察したい。

希望したライフコースを選択することができた母親が，希望したライフコースを歩んでいない母親より，過去の受容が高く，現在の充実感も高く，将来の希望も持てるという結果だった。特別な場合を除いて，希望したライフコースを歩めた場合の方が，過去の選択を納得し，充実した生活を送り，将来の見通しも立てやすいと推察される。将来の目標に関してだけは，そのような結果は出なかった。就業継続型において，希望したライフコースを選択することができた母親が選択できなかった母親より将来の目標指向性が高かったが，他のライフコースにおいては，希望したライフコースを選択していようといまいと将来の目標指向性に変わりはなかった。希望して仕事を辞めた女性と希望に反し仕事を辞めざるを得なかった女性において将来の目標指向性に差がないということは，仕事をやめるということが将来の目標指向性には大きな関わりがあると言えよう。谷（2001）は，同一性の感覚において，自分が自分であるという一貫性・連続性，時間的連続性をもっているという感覚が重要であるとした。結婚しても仕事を継続する就業継続型は，自分であるという一貫性・時間的連続性の感覚を持ちやすく，将来の目標も持ちやすいのではないだろうか。一方，継続する仕事を持たずに家庭に入る女性は，それが望み通りであろうと一貫性・時間的連続性の感覚が持ちにくくなることが予想され，必然的に将来の目標も捉えにくいのではないだろうか。

また，希望して就業継続型を選択できた場合，将来の目標指向性が専業主婦型や再就職希望型より高く，望まずに就業継続をしている場合は，他のライフコースを選択した母親と目標指向性はかわりないことが明らかになった。将来の目標指向性は，過去の受容，現在の充実感，将来の希望に比べ，ライフコースが希望通りであるかどうかという点で，就業継続型と他のライフコースとの違いに差が出た。目標指向性の高さは，就業継続型のように時間的連続性がある場合は希望したライフコースであるかどうかということに関係し，一度，仕事を辞めるという時間的連続性に変化があった場合は，希望していたライフコースであるかどうかに目標指向性は関連せず，他の要因に関係してくるものと思われる。今後の課題としたい。

第2節　乳幼児をもつ母親の時間的展望と育児負担感との関連

1. 目的

第１節では，乳幼児をもつ母親の時間的展望を第Ⅱ章と同じように現実のライフコースから検討し，さらに希望のライフコースと現実のライフコースの一致不一致という視点から検討した。本稿では，その時間的展望を高群と低群にわけ，育児負担感が時間的展望高群低群によって差異が出るかどうかを検討し,時間的展望と育児負担感の関連を検討する。その際，時間的展望は過去の受容，現在の充実感，将来の目標と希望の四つの因子から構成されているため,四つの因子それぞれを高群と低群に分けて検討することにより,過去・現在･将来における育児負担感との関連のしかたの違いをより詳細に理解できると考える。また，育児負担感も，閉塞感・犠牲感，疲労感，自信なさ，離反願望の因子ごとに検討することにより，母親の感情をより具体的に理解できると思われる。さらに，それをライフコースから検討することにより，ライフコースごとに把握できるものと思われる。

そこで，本研究の目的は以下の２つである。

(1)　ライフコースから過去の受容・現在の充実感・将来の目標・希望と育児負担感因子との関連を検討する。

(2)　現実と希望のライフコース一致・不一致から過去の受容・現在の充実感・将来の目標・希望と育児負担感因子との関連をライフコースごとに検討する。

2.　方法

(1)調査対象者調査・調査手続き：第Ⅳ章Ⅰ節と同じ。

(2)調査内容

1)時間的展望を測定する項目　白井(1994)の作成した時間的展望体験尺度を使用した。白井によれば,“時間的展望とはある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体”と定義されている。この尺度は，“現在の充実感”，“目標指向性”，“過去受容”，“希望”の下位項目から構成されており，時間的展望の体験的側面を測定している。代表的な項目は，順に“毎日の生活が充実している”　“私には，だいたいの将来計画がある”　“過去のことはあまり思い出したくない”　“私には未来がないような気がする”である。全18項目からなり，回答は「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の５件法によった。集計にあたっては，順に５点，４点，３点，２点，１点と得点化した。

2)ライフコースを問う項目　就業継続型，再就職型，専業主婦型の三つの型（内閣府，2006）をⅠ就業継続型，Ⅱ再就職型（すでに現在就業している），Ⅲ専業主婦型（今後もずっと専業主婦の予定），Ⅳ再就職希望型（育児がひと段落してから就業希望）の四つの型に変えた。育児期の母親がすでに再就職している場合と，子どもがもう少し大きくなってから再就職しようと考えている場合では，母親の状況が違うため，区別して検討し援助の視点を得ることが適切と考えた。四つのライフコースの中から現在のライフコースと希望していたライフコースを記入してもらった。

3)育児負担感を測定する項目　第Ⅱ章１節で開発した育児負担感尺度

3. 結果

(1) ライフコースからみた時間的展望と育児負担感の関連

時間的展望下位尺度の現在の充実感，将来の目標指向性，過去の受容，将来の希望得点をそれぞれ上位 25%High 群(H 群)，下位 25%Low 群(L 群)に分類した。現実のライフコース（4）と現在の充実感 HL 群(2)，現実のライフコース（4）と将来の目標指向性 HL 群(2)，現実のライフコース（4）と過去の受容 HL 群(2)，現実のライフコース（4）と将来の希望 HL 群(2)を独立変数とし，育児負担感下位尺度得点を従属変数とする 2 要因 4×2 水準の分散分析を行った。多重比較には Tukey 法を用いた（表Ⅳ-2-1，Ⅳ-2-2，Ⅳ-2-3，Ⅳ-2-4)。

1) 現在の充実感高低による育児負担感因子得点の検討

現在の充実感 HL 群と現実のライフコースを独立変数とした 2 要因の分散分析の結果,現在の充実感 HL 群の主効果が有意で，閉塞感・犠牲感，疲労感，自信なさ，離反願望において，H 群が L 群より低かった。

ライフコースの主効果が有意で，多重比較の結果，閉塞感・犠牲感において，就業継続型が再就職型，専業主婦型，再就職希望型に比べ有意に低く，再就職型が専業主婦型と再就職希望型より閉塞感・犠牲感得点が有意に低かった。疲労感においては，就業継続型と再就職型が専業主婦型と再就職希望型より有意に高かった。有職者の方が無職の母親より疲れていることが示された。育児からの離反願望では，就業継続型と再就職希望型が再就職型と専業主婦型より有意に低かった。育児への自信のなさにおいて，ライフコースの主効果は有意でなかった。(表Ⅳ-2 -1)。

表Ⅳ-2-1 ライフコース別充実感高低による平均値と分散分析結果

	Ⅰ 就業継続型		Ⅱ 再就職型		Ⅲ 専業主婦型		Ⅳ 再就職希望型		F値			
	H	L	H	L	H	L	H	L	ライフコース	HL別	交互作用	多重比較
N	165	116	112	141	75	96	80	79				
閉塞感 犠牲感	1.58 (0.45)	2.48 (0.55)	1.67 (0.53)	2.64 (0.58)	1.62 (0.49)	2.81 (0.51)	1.74 (0.53)	2.75 (0.52)	14.07***	394.32**	1.95	Ⅰ<Ⅱ<Ⅲ,Ⅳ
疲労感	2.59 (0.54)	3.12 (0.52)	2.46 (0.57)	3.04 (0.56)	2.22 (0.53)	2.87 (0.50)	2.33 (0.61)	2.85 (0.54)	24.39***	116.60**	1.36	Ⅰ,Ⅱ>Ⅲ,Ⅳ
自身なさ	2.39 (0.54)	2.88 (0.56)	2.41 (0.53)	3.02 (0.55)	2.34 (0.55)	2.98 (0.56)	2.32 (0.53)	2.87 (0.43)	2.60	130.63**	0.78	
離反願望	2.22 (0.66)	2.92 (0.50)	2.30 (0.73)	3.08 (0.52)	2.16 (0.70)	3.13 (0.54)	2.08 (0.65)	2.92 (0.52)	5.21**	201.69**	1.48	Ⅰ,Ⅳ<Ⅱ,Ⅲ

( )内は標準偏差、***p<.001 **p<.01 *p<.05

2) 将来の目標指向性高低による育児負担感因子得点の検討

将来の目標指向性HL群と現実のライフコースを独立変数とした2要因の分散分析の結果，将来の目標指向性 HL 群の主効果が有意で，閉塞感・犠牲感，疲労感，自信なさ，離反願望において，H群がL群より低かった。

ライフコースの主効果が有意で，多重比較の結果，閉塞感・犠牲感において，就業継続型が再就職型，専業主婦型，再就職希望型に比べ有意に低く，再就職型が専業主婦型より閉塞感・犠牲感得点が低かった。疲労感においては，就業継続型と再就職型が専業主婦型と再就職希望型より有意に高かった。育児への自信のなさにおいて、就業継続型と再就職希望型が再就職型より有意に低く、再就職希望型が専業主婦型より低かった。育児からの離反願望では,就業継続型と再就職希望型が再就職型と専業主婦型より有意に低かった(表Ⅳ-2 -2)。

表Ⅳ-2-2 ライフコース別将来の目標高低による平均値と分散分析結果

	Ⅰ 就業継続型		Ⅱ 再就職型		Ⅲ 専業主婦型		Ⅳ 再就職希望型		F値			
	H	L	H	L	H	L	H	L	ライフコース	HL別	交互作用	多重比較
N	155	102	138	134	63	112	75	84				
閉塞感 犠牲感	1.73	2.25	1.85	2.41	1.74	2.49	1.98	2.37	8.91***	92.47***	1.88	Ⅰ<Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ Ⅱ<Ⅲ
	(0.57)	(0.63)	(0.62)	(0.63)	(0.52)	(0.60)	(0.63)	(0.63)				
疲労感	2.63	3.02	2.63	2.99	2.28	2.74	2.39	2.63	27.69***	41.88***	1.37	Ⅰ,Ⅱ>Ⅲ,Ⅳ
	(0.60)	(0.59)	(0.59)	(0.57)	(0.53)	(0.57)	(0.61)	(0.55)				
自身なさ	2.42	2.88	2.46	2.96	2.30	2.88	2.46	2.73	3.50*	76.14***	1.91	Ⅰ,Ⅳ<Ⅱ Ⅳ<Ⅲ
	(0.56)	(0.62)	(0.58)	(0.55)	(0.51)	(0.56)	(0.52)	(0.51)				
離反願望	2.28	2.79	2.44	2.95	2.33	2.88	2.32	2.69	6.23***	62.69***	0.52	Ⅰ,Ⅳ<Ⅱ,Ⅲ
	(0.64)	(0.64)	(0.71)	(0.55)	(0.69)	(0.64)	(0.75)	(0.57)				

( )内は標準偏差、***p<.001 **p<.01 *p<.05

3) 過去の受容高低による育児負担感因子得点の検討

過去の受容 HL 群と現実のライフコースを独立変数とした 2 要因の分散分析の結果,過去の受容 HL 群の主効果が有意で，閉塞感・犠牲感，疲労感，自信なさ，離反願望において，H群がL群より低かった。

ライフコースの主効果が有意で，多重比較の結果，閉塞感・犠牲感において，就業継続型が再就職型，専業主婦型，再就職希望型に比べ有意に低く，再就職型が専業主婦型より閉塞感・犠牲感得点が低かった。疲労感においては，就業継続型と再就職型が専業主婦型と再就職希望型より有意に高かった。育児からの離反願望では，就業継続型と再就職希望型が再就職型と専業主婦型より有意に低かった。育児への自信のなさにおいて，ライフコースの主効果は有意でなかった（表Ⅳ-2 -3 ）。

表Ⅳ-2-3 ライフコース別過去受容高低による平均値と分散分析結果

	Ⅰ 就業継続型		Ⅱ 再就職型		Ⅲ 専業主婦型		Ⅳ 再就職希望型		F値			
	H	L	H	L	H	L	H	L	ライフコース	HL別	交互作用	多重比較
N	154	118	110	133	73	108	95	73				
閉塞感 犠牲感	1.82 (0.55)	2.18 (0.62)	1.82 (0.56)	2.45 (0.62)	1.92 (0.59)	2.48 (0.63)	2.11 (0.75)	2.47 (0.63)	15.08***	64.32***	2.07	Ⅰ<Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ Ⅱ<Ⅲ
疲労感	2.68 (0.55)	2.95 (0.56)	2.60 (0.60)	2.97 (0.54)	2.39 (0.51)	2.77 (0.55)	2.40 (0.58)	2.70 (0.56)	20.39***	36.03***	0.33	Ⅰ,Ⅱ>Ⅲ,Ⅳ
自身なさ	2.51 (0.55)	2.77 (0.59)	2.49 (0.52)	2.92 (0.54)	2.46 (0.55)	2.88 (0.53)	2.49 (0.48)	2.77 (0.53)	2.12	44.36***	0.95	
離反願望	2.36 (0.65)	2.71 (0.65)	2.45 (0.64)	2.96 (0.61)	2.45 (0.65)	2.88 (0.67)	2.40 (0.70)	2.84 (0.65)	5.08**	48.44***	0.82	Ⅰ,Ⅳ<Ⅱ,Ⅲ

( )内は標準偏差、***p<.001 **p<.01 *p<.05

4) 将来の希望高低による育児負担感因子得点の検討

将来の希望 HL 群と現実のライフコースを独立変数とした 2 要因の分散分析の結果,将来の希望 HL 群の主効果が有意で，閉塞感・犠牲感，疲労感，自信なさ，離反願望において，H 群が L 群より低かった。

ライフコースの主効果が有意で，多重比較の結果，閉塞感・犠牲感において，就業継続型が再就職型, 専業主婦型, 再就職希望型に比べ有意に低く, 再就職型が専業主婦型より，閉塞感・犠牲感得点が低かった。疲労感においては，就業継続型と再就職型が専業主婦型と再就職希望型より有意に高かった。育児からの離反願望では，就業継続型と再就職希望型が再就職型と専業主婦型より有意に低かった。育児への自信のなさにおいて，ライフコースの主効果は有意でなかった（表Ⅳ-2 -4 ）。

表Ⅳ-2-4 ライフコース別希望高低による平均値と分散分析結果

	Ⅰ 就業継続型		Ⅱ 再就職型		Ⅲ 専業主婦型		Ⅳ 再就職希望型		F値			
	H	L	H	L	H	L	H	L	ライフコース	HL別	交互作用	多重比較
N	151	120	110	144	77	101	94	67				
閉塞感 犠牲感	1.72 (0.55)	2.31 (0.61)	1.78 (0.60)	2.50 (0.56)	1.85 (0.57)	2.58 (0.55)	2.02 (0.63)	2.53 (0.60)	15.26***	20.38**	1.16	Ⅰ<Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ Ⅱ<Ⅲ
疲労感	2.66 (0.61)	3.02 (0.57)	2.54 (0.57)	3.09 (0.51)	2.43 (0.59)	2.79 (0.50)	2.47 (0.62)	2.79 (0.44)	17.96***	60.57***	1.16	Ⅰ,Ⅱ>Ⅲ,Ⅳ
自身なさ	2.46 (0.57)	2.84 (0.59)	2.42 (0.48)	3.01 (0.54)	2.35 (0.55)	2.98 (0.52)	2.47 (0.55)	2.84 (0.46)	1.50	92.92***	2.10	
離反願望	2.28 (0.67)	2.79 (0.56)	2.38 (0.67)	3.01 (0.53)	2.43 (0.69)	2.98 (0.65)	2.41 (0.72)	2.80 (0.60)	539**	71.01***	1.02	Ⅰ,Ⅳ<Ⅱ,Ⅲ

( )内は標準偏差、***p<.001 **p<.01 *p<.05

（2）ライフコース別にみた時間的展望高低と希望したライフコースの一致不一致による育児負担感の検討

1726 名のうち欠損値を除いた 1498 名を分析対象とした。前項と同様に時間的展望下位尺度の現在の充実感，将来の目標指向性，過去の受容，将来の希望得点をそれぞれ上位 25% High 群(H 群)，下位 25%Low 群(L 群)に分類した。現在の充実感 HL 群(2)と希望していたライフコース一致・不一致群（2)，将来の目標指向性 HL 群(2)と希望していたライフコース一致・不一致群（2)，過去の受容 HL 群(2)と希望していたライフコース一致・不一致群(2)，将来の希望 HL 群(2)と希望していたライフコース一致･不一致群(2)を独立変数とし，育児負担感下位尺度得点を従属変数とする 2 要因 2×2 水準の分散分析をライフコース別にそれぞれ行った（表Ⅳ-2-5，表Ⅳ-2-6，表Ⅳ-2-7，表Ⅳ-2-8)。

1）現在の充実感高低とライフコース一致・不一致による育児負担感因子得点の検討

結果，現在の充実感 HL 群と希望していたライフコース一致･不一致群を独立変数とした 2 要因の分散分析では，現在の充実感 HL 群の主効果が有意で，すべてのライフコースにおける閉塞感・犠牲感，疲労感，自信なさ，離反願望得点は，H 群が L 群より低かった。

ライフコース一致別の主効果は，就業継続型では疲労感，自信なさにおいてみられ，再就職型では閉塞感・犠牲感，疲労感，自信なさ，離反願望の育児負担感因子すべてにおいてみられ，専業主婦型では離反願望においてのみみられた。再就職希望型では，ライフコース一致別の主効果はみられなかった（表Ⅳ-2-5)。

表Ⅳ-2-5 現在の充実感HL別・ライフコース一致別ごとの平均値と分散分析結果

	一致・不一致群	一致群		不一致群		F値		
	充実感HL群	H群	L群	H群	L群	一致別	HL別	交互作用
Ⅰ 就業継続型	N	131	85	26	34			
	閉塞感・犠牲感	1.57 (0.45)	2.53 (0.59)	1.62 (0.46)	2.39 (0.41)	0.30	67.63***	0.96
	疲労感	2.58 (0.55)	2.99 (0.55)	2.68 (0.54)	3.34 (0.42)	8.83**	24.06***	1.78
	自信なさ	2.32 (0.55)	2.86 (0.54)	2.65 (0.45)	2.84 (0.61)	4.14*	11.17***	3.01
	離反願望	2.20 (0.64)	2.94 (0.49)	2.27 (0.79)	2.88 (0.47)	0.52	31.20***	0.98
Ⅱ 再就職型	N	29	39	64	86			
	閉塞感・犠牲感	1.51 (0.44)	2.45 (0.50)	1.77 (0.56)	2.73 (0.56)	14.09***	81.65***	1.10
	疲労感	2.47 (0.62)	2.87 (0.45)	2.54 (0.54)	3.10 (0.57)	7.47**	19.49***	0.67
	自信なさ	2.22 (0.53)	3.01 (0.53)	2.50 (0.54)	3.05 (0.56)	6.02*	39.10***	1.30
	離反願望	2.05 (0.78)	2.99 (0.44)	2.44 (0.66)	3.12 (0.54)	9.37**	48.87***	2.61
Ⅲ 専業主婦型	N	38	48	29	48			
	閉塞感・犠牲感	1.59 (0.47)	2.73 (0.50)	1.64 (0.52)	2.82 (0.51)	0.78	113.85**	0.22
	疲労感	2.24 (0.56)	2.79 (0.57)	2.19 (0.49)	2.86 (0.47)	0.11	25.91***	0.30
	自信なさ	2.32 (0.50)	2.91 (0.54)	2.35 (0.62)	3.06 (0.58)	0.99	31.43***	0.70
	離反願望	2.09 (0.66)	3.04 (0.62)	2.36 (0.71)	3.22 (0.48)	4.21*	49.16***	1.89
Ⅳ 再就職希望型	N	25	39	20	33			
	閉塞感・犠牲感	1.71 (0.62)	2.60 (0.39)	1.71 (0.57)	2.78 (0.54)	0.37	44.12***	0.90
	疲労感	2.32 (0.70)	2.71 (0.41)	2.34 (0.65)	2.95 (0.46)	1.73	15.46***	1.12
	自信なさ	2.36 (0.62)	2.81 (0.41)	2.25 (0.50)	2.90 (0.48)	0.11	20.26***	0.73
	離反願望	2.21 (0.77)	2.89 (0.39)	1.98 (0.63)	2.95 (0.56)	0.75	26.95***	0.83

( )内は標準偏差、***p<.001 **p<.01 *p<.05

2) 将来の目標指向性高低とライフコース一致・不一致による育児負担感因子得点の検討

将来の目標指向性HL群と希望していたライフコース一致・不一致群を独立変数とした2要因の分散分析では，就業継続型の閉塞感・犠牲感において，交互作用が$F(1,250)=3.22$, $p<.05$が確認された。さらにライフコース一致群における将来の目標指向性HLの単純主効果$F(1,250)=26.85$, $p<.001$，将来の目標指向性H群におけるライフコース一致・不一致の単純主効果$F(1,250)=4.00$, $p<.05$がみられた（図Ⅳ-2-1）

就業継続型の自信なさにおいて，交互作用が$F(1,250)=4.47$, $p<.05$が確認された。さらにライフコース一致群における将来の目標指向性HLの単純主効果$F(1,250)=22.59$, $p<.001$，将来の目標指向性H群におけるライフコース一致・不一致の単純主効果$F(1,250)=7.21$, $p<.01$がみられた（図Ⅳ-2-2)。

就業継続型では疲労感において，将来の目標指向性HL群の主効果がみられ，H群がL群

より有意に疲労感が低かった。また，ライフコース一致・不一致群の主効果もみられ，一致群が不一致群より疲労感が有意に低かった。さらに就業継続型では離反願望においても，将来の目標指向性 HL 群の主効果がみられ，H 群が L 群より有意に離反願望が低かった（表Ⅳ-2-6）。

再就職型では自信なさにおいて，交互作用が $F(1,234)=3.14$, $p<.05$ が確認された。さらにライフコース一致群における将来の目標指向性 HL の単純主効果 $F(1,234)=18.01$, $p<.001$, ライフコース不一致群における将来の目標指向性 HL の単純主効果 $F(1,234)=13.09$, $p<.001$, 将来の目標指向性 H 群におけるライフコース一致・不一致の単純主効果 $F(1,234)=10.65$, $p<.01$ が見られた（図Ⅳ-2-3）

再就職型では離反願望において，交互作用が $F(1,234)=4.42$, $p<.05$ が確認された。さらにライフコース一致群における将来の目標指向性 HL の単純主効果 $F(1,234)=17.28$, $p<.001$, ライフコース不一致群における将来の目標指向性 HL の単純主効果 $F(1,234)=8.88$, $p<.001$, 将来の目標指向性 H 群におけるライフコース一致・不一致の単純主効果 $F(1,234)=14.68$, $p<.001$ が見られた（図Ⅳ-2-4）

再就職型では閉塞感・犠牲感，疲労感において，将来の目標指向性 HL 群の主効果がみられ，H 群が L 群より有意に閉塞感・犠牲感および疲労感が低かった。また，ライフコース一致不一致群の主効果もみられ，一致群が不一致群より有意に閉塞感・犠牲感および疲労感が低かった。

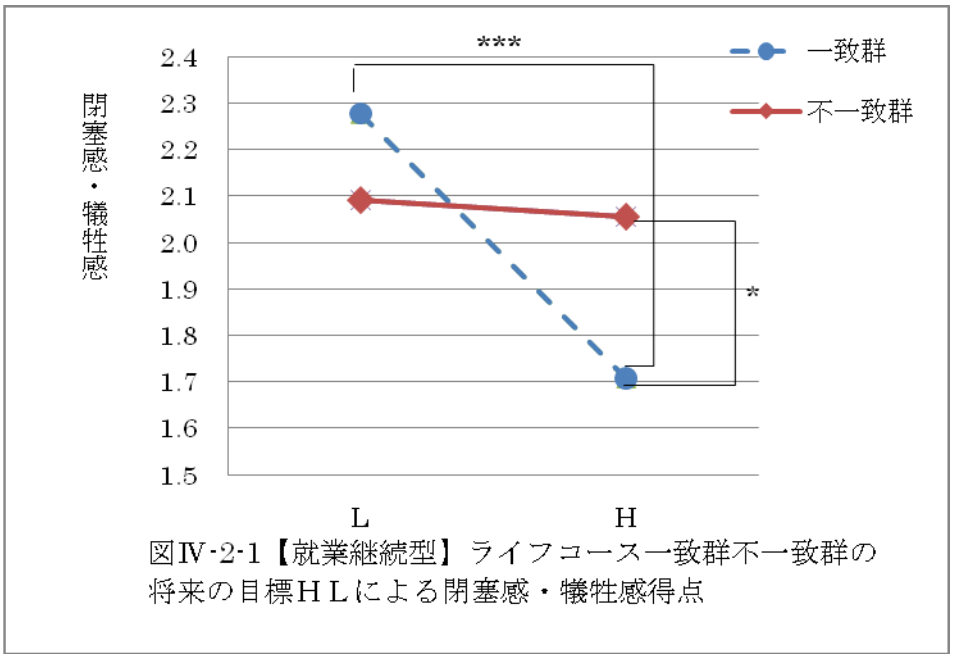
専業主婦型と再就職希望型では，閉塞感・犠牲感，疲労感，自信なさ，離反願望のすべての育児負担感因子において，将来の目標指向性 HL 群の主効果が有意で H 群が L 群より低かった。また，専業主婦型の離反願望において，ライフコース一致不一致群の主効果が有意で一致群が低かった（表Ⅳ-2-6）。

。

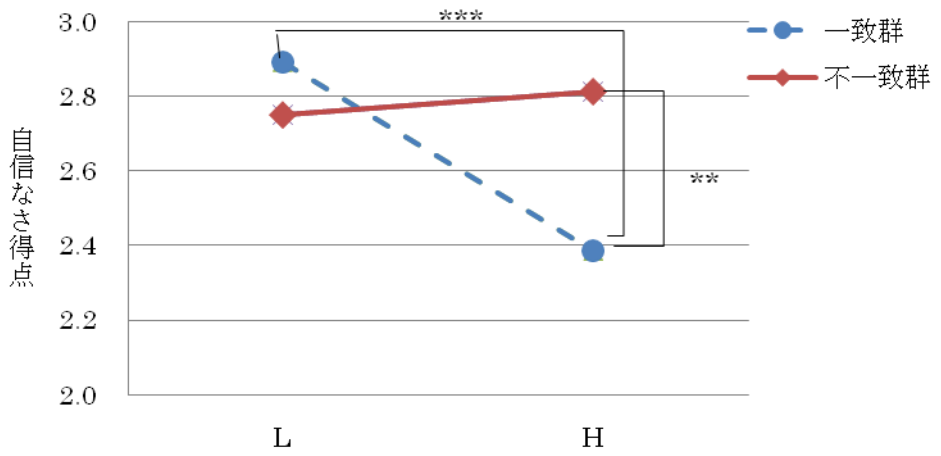
表Ⅳ-2-6　将来の目標HL別・ライフコース一致別ごとの平均値と分散分析結果

	一致・不一致群	一致群				不一致群				F値		
	将来の目標HL群	H群		L群		H群		L群		一致別	HL別	交互作用
Ⅰ 就業継続型	N	131		78		12		33				
	閉塞感・犠牲感	1.71	(0.56)	2.28	(0.68)	2.06	(0.73)	2.09	(0.47)	0.29	4.34*	3.22*
	疲労感	2.60	(0.61)	2.95	(0.61)	3.02	(0.61)	3.10	(0.51)	9.66**	5.27**	1.23
	自信なさ	2.39	(0.55)	2.89	(0.60)	2.81	(0.64)	2.75	(0.64)	3.55+	4.02*	4.47*
	離反願望	2.24	(0.64)	2.83	(0.63)	2.50	(0.63)	2.66	(0.66)	0.06	5.95**	2.21
Ⅱ 再就職型	N	28		37		82		91				
	閉塞感・犠牲感	1.58	(0.55)	2.31	(0.58)	1.93	(0.63)	2.42	(0.60)	11.9***	26.00***	0.98
	疲労感	2.51	(0.63)	2.95	(0.52)	2.71	(0.58)	2.95	(0.58)	6.95**	10.25***	2.15
	自信なさ	2.15	(0.61)	2.96	(0.52)	2.54	(0.55)	2.96	(0.55)	7.45**	30.28***	3.14*
	離反願望	2.07	(0.78)	2.94	(0.51)	2.57	(0.67)	2.95	(0.53)	9.21**	25.73***	4.42*
Ⅲ 専業主婦型	N	31		58		22		45				
	閉塞感・犠牲感	1.70	(0.55)	2.43	(0.59)	1.71	(0.53)	2.46	(0.62)	0.31	30.74***	0.14
	疲労感	2.27	(0.50)	2.69	(0.61)	2.26	(0.63)	2.78	(0.54)	0.31	12.46***	0.15
	自信なさ	2.33	(0.55)	2.86	(0.50)	2.36	(0.48)	2.87	(0.64)	0.53	16.39***	0.26
	離反願望	2.17	(0.69)	2.87	(0.71)	2.50	(0.66)	2.93	(0.54)	3.82+	13.73***	0.93
Ⅳ 再就職希望型	N	27		37		29		33				
	閉塞感・犠牲感	1.84	(0.65)	2.32	(0.84)	1.98	(0.55)	2.35	(0.74)	0.68	10.51***	0.15
	疲労感	2.46	(0.61)	2.57	(0.50)	2.35	(0.64)	2.79	(0.48)	1.05	3.81*	1.47
	自信なさ	2.42	(0.66)	2.68	(0.42)	2.48	(0.47)	2.73	(0.54)	0.06	4.39*	0.54
	離反願望	2.22	(0.75)	2.70	(0.55)	2.28	(0.80)	2.69	(0.70)	0.01	9.20***	0.18

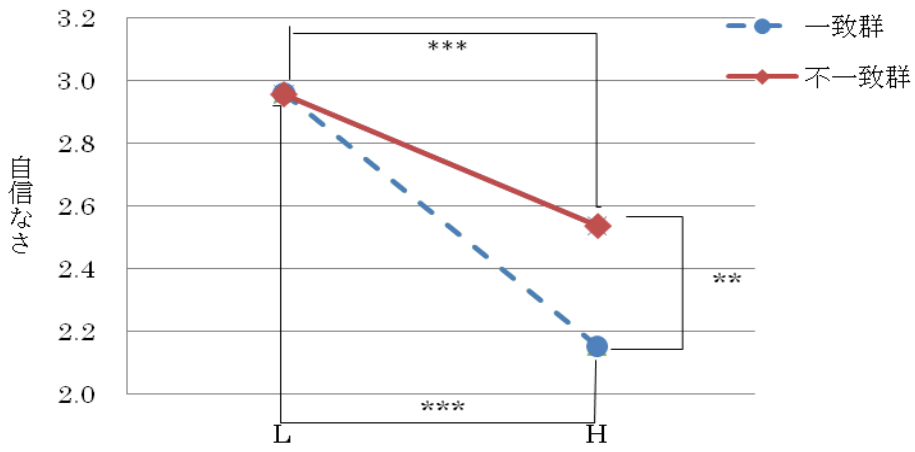
（　）内は標準偏差、***p<.001　**p<.01　*p<.05



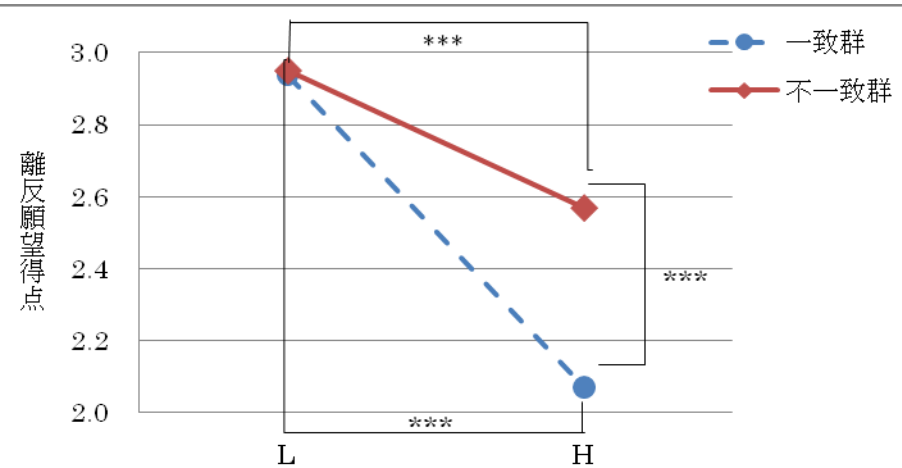
図Ⅳ-2-1【就業継続型】ライフコース一致群不一致群の将来の目標ＨＬによる閉塞感・犠牲感得点



図Ⅳ-2-2【就業継続型】ライフコース一致群不一致群の将来の目標ＨＬによる自信なさ得点



図Ⅳ-2-3【再就職型】ライフコース一致群不一致群の将来の目標ＨＬによる自信なさ得点



図Ⅳ-2-4【再就職型】ライフコース一致群不一致群の将来の目標ＨＬによる離反願望得点

3）過去の受容高低とライフコース一致・不一致による育児負担感因子得点の検討

過去の受容 HL 群と希望していたライフコース一致･不一致群を独立変数とした 2 要因の分散分析では，再就職希望型の閉塞感･犠牲感において，交互作用が $F(1,125)=3.44$, $p<.05$ が確認された。さらにライフコース一不致群における過去の受容 HL の単純主効果 $F(1,125)=4.69$, $p<.01$，過去の受容 H 群におけるライフコース一致の単純主効果の傾向 $F(1,125)=3.84$, $p<.10$ がみられた（図Ⅳ-2-5）。

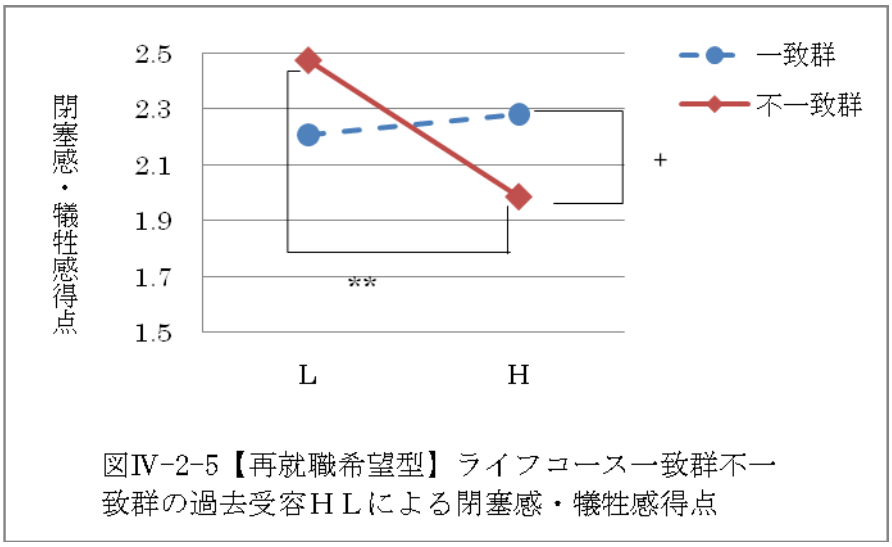
再就職希望型の閉塞感・犠牲感を除くすべてのライフコースにおけるすべての育児負担感因子において，過去の受容 HL の主効果がみられ，H 群が L 群より育児負担感因子得点が有意に低かった。

ライフコース一致別の主効果は，就業継続型では疲労感において，再就職型では閉塞感・犠牲感，疲労感，離反願望においてみられ，ライフコース一致群が閉塞感・犠牲感，疲労感，離反願望が有意に低かった。専業主婦型と再就職希望型では，ライフコース一致別の主効果はみられなかった（表Ⅳ-2-7）。

表Ⅳ-2-7　過去の受容HL別･ライフコース一致別ごとの平均値と分散分析結果

	一致･不一致群	一致群				不一致群				F値		
	過去の受容HL群	H群		L群		H群		L群		一致別	HL別	交互作用
Ⅰ 就業継続型	N	115		90		21		38				
	閉塞感･犠牲感	1.81	(0.56)	2.20	(0.64)	1.80	(0.53)	2.21	(0.55)	0.02	9.89***	0.04
	疲労感	2.65	(0.56)	2.86	(0.54)	2.89	(0.54)	3.14	(0.55)	10.25**	5.87**	0.94
	自信なさ	2.49	(0.55)	2.79	(0.58)	2.57	(0.61)	2.72	(0.59)	2.02	3.53*	2.96
	離反願望	2.36	(0.66)	2.74	(0.57)	2.37	(0.69)	2.62	(0.73)	0.32	5.59**	0.34
Ⅱ 再就職型	N	31		33		55		87				
	閉塞感･犠牲感	1.72	(0.49)	2.38	(0.56)	1.86	(0.54)	2.47	(0.60)	5.05*	26.18***	0.42
	疲労感	2.40	(0.51)	2.80	(0.46)	2.71	(0.60)	3.01	(0.53)	9.34**	8.86***	1.66
	自信なさ	2.51	(0.51)	2.83	(0.62)	2.53	(0.53)	2.94	(0.53)	2.15	9.79***	0.39
	離反願望	2.24	(0.62)	2.89	(0.54)	2.59	(0.58)	2.95	(0.64)	5.50*	15.16***	1.79
Ⅲ 専業主婦型	N	35		53		31		55				
	閉塞感･犠牲感	1.90	(0.56)	2.48	(0.61)	1.91	(0.60)	2.52	(0.62)	0.56	20.69***	0.20
	疲労感	2.36	(0.54)	2.79	(0.55)	2.45	(0.44)	2.76	(0.60)	0.51	10.43***	0.36
	自信なさ	2.54	(0.46)	2.80	(0.51)	2.36	(0.63)	2.92	(0.58)	0.12	12.04***	1.94
	離反願望	2.41	(0.66)	2.87	(0.68)	2.59	(0.61)	2.91	(0.70)	2.43	7.50***	0.27
Ⅳ 再就職希望型	N	43		25		30		31				
	閉塞感･犠牲感	2.28	(0.82)	2.21	(0.54)	1.98	(0.62)	2.47	(0.60)	0.06	1.73	3.44*
	疲労感	2.41	(0.57)	2.58	(0.40)	2.42	(0.46)	2.88	(0.47)	1.87	5.28**	1.69
	自信なさ	2.60	(0.48)	2.78	(0.38)	2.40	(0.45)	2.81	(0.55)	0.54	5.92**	1.40
	離反願望	2.51	(0.69)	2.88	(0.51)	2.33	(0.68)	2.81	(0.70)	1.13	7.49***	0.36

（ ）内は標準偏差、***p<.001 **p<.01 *p<.05



図Ⅳ-2-5【再就職希望型】ライフコース一致群不一致群の過去受容ＨＬによる閉塞感・犠牲感得点

4）将来の希望高低とライフコース一致・不一致による育児負担感因子得点の検討

過将来の希望 HL 群と希望していたライフコース一致･不一致群を独立変数とした 2 要因の分散分析では，再就職型の疲労感において，交互作用が $F(1, 219)=3.18$, $p<.05$ が確認された。さらにライフコース一致群における将来の希望 HL の単純主効果 $F(1, 219)=3.78$, $p<.05$, ライフコース不一致群における将来の希望 HL の単純主効果 $F(1, 219)=26.22$, $p<.001$，過去の受容 H 群におけるライフコース一致の単純主効果の傾向 $F(1, 219)=2.81$, $p<.10$，過去の受容 L 群におけるライフコース一致の単純主効果の傾向 $F(1, 219)=9.54$, $p<.01$ がみられた（図Ⅳ-2-6)。

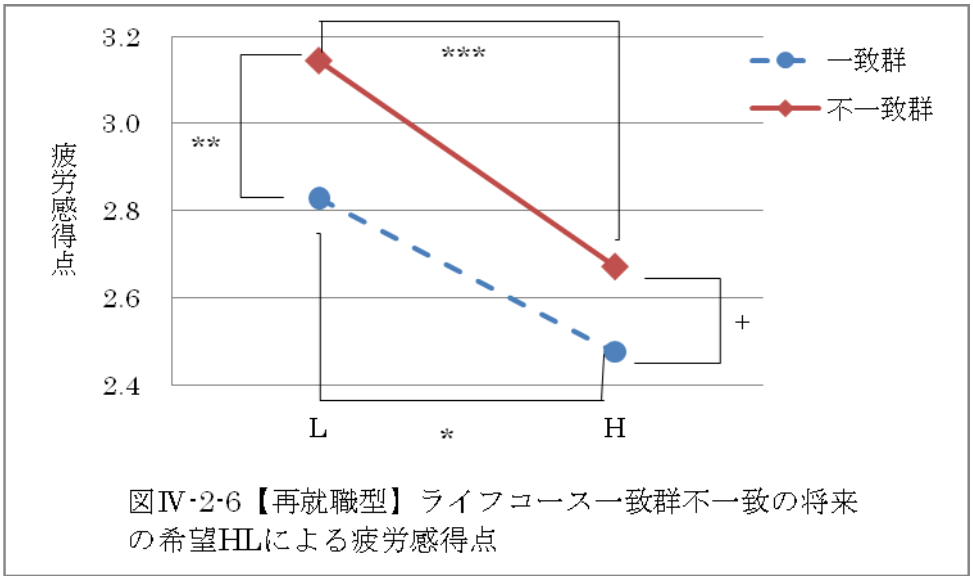
すべてのライフコースにおけるすべての育児負担感因子において，将来の希望 HL の主効果がみられ，H 群が L 群より育児負担感因子得点が有意に低かった。

ライフコース一致別の主効果は，就業継続型では疲労感と自信なさにおいて，再就職型では自信なさを除くすべての育児負担感因子においてみられ，ライフコース一致群が育児負担感因子得点が有意に低かった。専業主婦型と再就職希望型では，ライフコース一致別の主効果はみられなかった（表Ⅳ-2-8)。

表Ⅳ-2-8 将来の希望HL別・ライフコース一致別ごとの平均値と分散分析結果

	一致・不一致群	一致群				不一致群				F値		
	将来の希望HL群	H群		L群		H群		L群		一致別	HL別	交互作用
Ⅰ 就業継続型	N	107		93		24		38				
	閉塞感・犠牲感	1.66	(0.52)	2.36	(0.66)	1.88	(0.52)	2.25	(0.48)	0.21	22.17***	2.10
	疲労感	2.66	(0.63)	2.97	(0.57)	2.82	(0.56)	3.21	(0.58)	8.34**	14.53***	0.29
	自信なさ	2.41	(0.59)	2.85	(0.55)	2.72	(0.55)	2.81	(0.65)	4.59*	7.26***	2..50
	離反願望	2.23	(0.69)	2.81	(0.50)	2.46	(0.55)	2.67	(0.69)	0.01	9.70***	2.50
Ⅱ 再就職型	N	31		35		57		100				
	閉塞感・犠牲感	1.71	(0.51)	2.40	(0.48)	1.85	(0.63)	2.50	(0.57)	5.06*	31.23***	0.21
	疲労感	2.48	(0.53)	2.83	(0.46)	2.67	(0.55)	3.15	(0.48)	8.15**	16.81***	3.18*
	自信なさ	2.32	(0.56)	2.92	(0.50)	2.49	(0.46)	3.03	(0.55)	3.05	26.03***	0.36
	離反願望	2.24	(0.62)	2.96	(0.46)	2.55	(0.63)	3.01	(0.55)	4.49*	23.87***	1.43
Ⅲ 専業主婦型	N	36		48		32		45				
	閉塞感・犠牲感	1.89	(0.62)	2.55	(0.56)	1.73	(0.49)	2.59	(0.53)	0.10	35.39***	2.09
	疲労感	2.48	(0.57)	2.74	(0.56)	2.41	(0.56)	2.86	(0.50)	0.33	10.50***	0.61
	自信なさ	2.42	(0.51)	2.91	(0.52)	2.30	(0.61)	3.06	(0.51)	0.48	28.98***	1.50
	離反願望	2.44	(0.66)	3.01	(0.60)	2.48	(0.68)	3.03	(0.63)	1.34	17.10***	0.89
Ⅳ 再就職希望型	N	36		22		38		31				
	閉塞感・犠牲感	2.10	(0.69)	2.32	(0.51)	1.98	(0.61)	2.53	(0.65)	0.31	6.19**	1.07
	疲労感	2.49	(0.66)	2.67	(0.26)	2.43	(0.64)	2.92	(0.43)	1.23	6.86**	1.21
	自信なさ	2.57	(0.63)	2.69	(0.45)	2.38	(0.53)	2.85	(0.41)	0.02	6.11**	2.18
	離反願望	2.43	(0.83)	2.79	(0.48)	2.40	(0.66)	2.75	(0.59)	0.31	4.69*	0.07

（ ）内は標準偏差、***p<.001 **p<.01 *p<.05



図Ⅳ-2-6【再就職型】ライフコース一致群不一致の将来の希望HLによる疲労感得点

4. 考察

(1) ライフコースによる時間的展望と育児負担感の検討

時間的展望の四つの因子である現在の充実感，将来の目標指向性，過去の受容，将来の希望の高低が，育児負担感（閉塞感・犠牲感，疲労感，自信なさ，離反願望）にどのような差異をもたらしているのかを四つのライフコース（就業継続型，再就職型，専業主婦型，再就職希望型）から検討した。

現在の充実感，将来の目標指向性，過去の受容，将来の希望が高い方が育児負担感を軽減していることがすべてのライフコースで示された。どのライフコースにおいても過去・現在・未来に肯定的な思いを寄せれることが，育児に対して閉塞感・犠牲感が低いことに繋がり，疲労感も感じにくく，離反願望も低いものと推察される。育児に対する自信も，過去・現在・未来を肯定的にとらえることができるということが，自分への信頼や自信に繋がり，育児に対する自信も高まるものと推察される。

一方，四つのライフコースの主効果が示され，多重比較をしたところ，第Ⅱ章 2 節の結果に類似した結果が出ている。どのライフコースにおいても，閉塞感・犠牲感では，就業継続型が低く，疲労感は就業継続型と再就職型が高く，離反願望は再就職型と専業主婦型が高いという結果を示し，第Ⅱ章 2 節の結果を支持した。育児の自信なさだけは，ライフコースによる有意差がほとんどなく，将来の目標の高低による母親 863 名を分析した結果のみ，再就職希望型が専業主婦型や再就職型より自信なさが低いという結果になった。育児への自信については，四つのライフコースによる違いより，母親の自信，生きていく上での自尊感情や自己信頼など，どのライフコースの母親も同じようにもちうる感情が伴うと考えられ，差異が出にくいものと推察される。それに反し，閉塞感・犠牲感，疲労感，離反願望などは，それぞれのライフコースがもつ特徴（有職の母親は疲れやすかったり，専業主婦は孤立しやすく閉塞感も高くなりやすいなど）が関連し，差異が出たものと考えられる。

(2) ライフコース別にみた時間的展望高低と希望したライフコースの一致不一致による育児負担感の検討

ライフコースごとに希望したライフコースと一致している群としていない群では現在の充実感の高低，将来の目標指向性の高低，過去の受容の高低，将来の希望の高低によって，育児負担感因子得点に差があるのかを検討した。すべてのライフコースにおいて過去・現在・未来への肯定的な意識が高い方が，育児負担感が低いことが示された。過去を受容し，将来の見通しをもって現在を充実して生きることは育児負担感を軽減することが示唆された。それはどのライフコースにおいても時間的展望の確立によって育児負担感が軽減されるということが示された。

また，希望したライフコースと一致しているかどうかということが育児負担感に関連があるかでは，主に就業継続型と再就職型において希望したライフコースと一致している方が育児負担感が低いことが示され，専業主婦型や再就職希望型ではライフコースが希望と一致しているか不一致であるかは，育児負担感にほとんど有意差がないことが示された。就業継続型や再就職型で示されたライフコースが一致している方が育児負担感を軽減する結果は前項までの結果を支持したが，専業主婦型や再就職希望型で示された結果は，望ん

で専業主婦をしている母親も不本意ながら専業主婦をしている母親も育児負担感に差がないことが示された。名越ら（1997）の母親のライフコースと育児不安の程度との関連の調査では，結婚・出産前に専業主婦を希望していた母親群が，他のライフコースを希望していた母親群と比較して育児不安の程度が有意に高いことを明らかにした。希望のライフコースと一致して専業主婦になった母親の方が育児不安が高かったという結果である。また，母親のライフコース希望は，結婚・出産前と現在では大きな変化が見られ，就業希望へと変化している母親が大多数であったと述べている。望んで専業主婦になった母親が就業希望へとライフコースが変化しているということは，現代の母親の育児不安は育児そのものへの不安とともに，自分自身の生きがいがないことや，社会に出て自分の能力が発揮できないという状況への不安も大きな要因ではないかと推察される。育児をすることにより，母親が自分の生き方ができないという葛藤が，育児負担感を高めることも考えられる。本研究で望んで専業主婦をしている母親も不本意ながら専業主婦をしている母親も育児負担感に差がないということは，望んで専業主婦になった母親のなかには，実際に育児をする生活をしてみて，育児そのものが想像と違っていたり，社会から切り離された生活を送ることになり閉塞感を感じ，自分の生き方ができずに育児負担感を抱かざるを得ない状況が予想される。一方，望んで専業主婦になったわけではなかったが，実際に育児をしてみたところ，そこに喜びを見出し，あまり育児負担感を感じずにすむこともあるだろう。専業主婦型と再就職希望型において，希望したライフコースと一致したライフコースであろと不一致であろうと育児負担感に差がないことについて，先行研究から考察することはできるが，その中身はかなり個人によって違いが出てくると考えられる。詳細については，やはり今後面接調査などによって深めていく必要があると思われる。

次に，ライフコースごとに交互作用が見られた点を中心に考察を進めたい。

就業継続型では，閉塞感・犠牲感と育児の自信なさにおいて，将来の目標指向性の高低とライフコース一致群と不一致群で交互作用がみられ，希望したライフコースと一致している群では将来の目標指向性が高い方が閉塞感・犠牲感，自信なさは低く，希望したライフコースと一致していない場合は将来の目標指向性が高くても低くても閉塞感・犠牲感，育児の自信なさは変わらないことが示された。母親が望んで就業を継続している場合は，将来の目標をもって生きることが，閉塞感・犠牲感を軽減し，育児の自信を強めることになるが，反対に不本意ながら仕事を継続している場合は，目標をもって生きていても閉塞感・犠牲感を軽減することや育児の自信に繋がらないことが示唆された。一方，希望して就業継続をしていても，将来の目標を持てないような場合は，閉塞感・犠牲感や育児への自信なさが高くなり，不本意に就業継続をしている母親と変わりがないことも示された。よって，希望して就業継続している母親は目標をもって生きることが重要であり，不本意ながら就業継続している母親は，将来の目標をもつということではなく他の視点が必要と推察される。内藤ら（1998）は，現実自己と理想自己の矛盾の程度が自尊感情に影響を与えるという視点から，母親の現実の役割と内面で求めている理想的な役割との間に開きがなければ，母親自身に肯定的な影響を与えると述べた。育児期に仕事を継続している就業継続型の母親の中で，本当は家庭に入ることを望みながら理想に反して仕事についているのであれば，母親の現実の役割と内面で求めている理想的な役割との間に開きができ，犠牲感が高まったり，自尊感情へ影響を与え，その影響が育児の自信にも影響を及ぼしてい

るのではないだろうか。不本意で就業を継続している母親の犠牲感を弱めたり，育児への自信を高めるためには，母親の現実の役割と内面で求めている理想的な役割との間の開きを縮めることに焦点を当てて考えることが必要と思われる。

再就職型では，育児の自信なさ離反願望において，将来の目標指向性の高低とライフコース一致群と不一致群で交互作用がみられ，疲労感において，将来の希望の高低とライフコース一致群と不一致群で交互作用がみられた。ライフコースと一致している群も一致してない群ともに将来の目標指向性や希望が高いことは低いことより自信なさ,離反願望,疲労感が低いことが示された。しかし，将来の目標指向性が高くなる場合と希望が高くなる場合において，次のような違いがみられた。将来の目標指向性が低い場合は，ライフコース一致群も不一致群も自信なさや離反願望において違いがないが，目標指向性が高い場合は，ライフコース一致群の方が不一致群より自信なさや離反願望が低いという結果になった。一方，将来の希望が低い場合は，ライフコース一致群が不一致群より疲労感が低いが，将来の希望が高い場合は，疲労感においてライフコース一致群と不一致群にあまり差がないという結果になった。つまり，ライフコース不一致群の将来の希望が高くなることによって，疲労感が軽減され，ライフコース一致群と差異がなくなることを示した。再就職型において，望んで再就職したのではない母親にとって希望を高くもつことが，疲労感をより効果的に軽減させると言えよう。また，反対に望んで再就職した母親は将来の目標をもつことが，自信なさや離反願望を効果的に弱めることから，就業継続型の場合と同じように，仕事をもって育児をする母親は，望んだライフコースを歩んでいるならば，目標をもつことが育児負担感を弱めることに繋がることが示唆された。目標があること，計画を立てて見通しを持てることは，自分の人生の安心感に繋がり，肯定的な感情が育児にも影響を及ぼし，育児負担感を軽減すると考えられる。

再就職希望型では，閉塞感・犠牲感において，過去の受容の高低とライフコース一致群と不一致群で交互作用がみられ，希望したライフコース一致群では，過去の受容が高いことは低いことと閉塞感・犠牲感において変わりがなく，希望したライフコース不一致群では過去の受容が高いことが過去の受容が低いことと比べると，閉塞感・犠牲感が低いことが示された。再就職希望型では，望んだライフコースを選択できなかった母親が過去を受容することができるならば，閉塞感，犠牲感を効果的に軽減することができることが示唆された。再就職希望型のように，結婚して一度仕事をやめて家庭に入る女性は，自分を家族としてのあり方の中で受容することが重要になるであろう。無藤ら（1996）は，成人期の女性の葛藤と統合のプロセスにおいて，成人期女性にとっての危機や葛藤が本人個人のものであるというよりは，家族としてのあり方を模索しながら，それに対処していることを示唆した。自分の過去の選択を納得し，自分を家族との関わりや家族のライフサイクルの中で創造していくことが可能になれば，閉塞感・犠牲感はさらに軽減されるものと思われる。

育児負担感を軽減するために，ライフコースと時間的展望という視点から論じてきた。どのライフコースにとっても過去・現在・未来に対する肯定的な意識を高めることは育児負担感を軽減することにつながること，希望したライフコースと一致している場合に育児負担感が低いのは，就業継続型や再就職型のように有職の母親であること，希望したライフコースと一致してない場合に育児負担感を弱める場合に，過去・現在・未来に対するど

の部分の肯定的な意識に焦点を当てることが重要であるかということは，ライフコースによって違いがあることが示唆された。

第 3 節　第Ⅳ章のまとめ

第Ⅳ章第 1 節では，時間的展望体験尺度（白井，1995）の因子構造を育児期の母親で確認したところ，ほぼ同じ構造だった。次に第 I 章と同様に四つの現実のライフコースから時間的展望因子（現在の充実感，将来の目標指向性，過去の受容，将来の希望）を検討し，次に希望のライフコースと一致・不一致かという視点から検討した。就業継続型が，現在の充実感，将来の目標指向性，過去の受容，将来の希望すべておいて有意に高かった。希望したライフコースと一致か不一致かということについては，就業継続型が不一致の場合には，一致の場合と比べると将来の目標得点が有意に低くなることが示された。他のライフコースは一致していようといまいと将来の目標指向性は変わらないが，就業継続型は違っていたため,不一致の場合は逆に目標を意識して高くもってみるのも重要かと思われる。

第 2 節では，時間的展望因子（現在の充実感，将来の目標指向性，過去の受容，将来の希望）高低による育児負担感得点は時間的展望因子高群の方が有意に育児負担感は低かった。ライフコースごとに時間的展望因子高群低群とライフコース一致不一致で検討したところ,ライフコースによって違いが示された。希望のライフコースと一致していなくとも，過去・現在・未来を肯定的に受け止めることにより，育児負担感を軽減する場合もあり，ライフコースによる違いが見られた。しかし，過去を受容し，将来の見通しを持てることは，すべてのライフコースにおいて育児負担感を軽減することが示唆された。

そこで，次章では，過去・現在・未来を肯定的に受け止めること，時間的展望を高め，育児負担感を軽減するにはどんな要因が関連するかを検討する。

第Ⅴ章

アイデンティティ統合に関わる要因が時間的展望と育児負担感に及ぼす影響
―ライフコースからの検討―

第1節　性役割態度が時間的展望と育児負担感に及ぼす影響

1 目的

第Ⅲ章では，アイデンティティと育児負担感の関連を検討し，アイデンティティの確立が育児負担感を軽減することが明らかになった。アイデンティティの確立には時間的展望の確立が必要であることはすでに先行研究（白井，1991）で示されていたので，第Ⅳ章では時間的展望と育児負担感の関連を検討した。過去を受容し現在に充実感を感じ将来に目標や希望をもつこと，つまり時間的展望の確立が育児負担感を軽減することがすべてのライフコースで示された。育児期の女性の時間的展望の確立にはどのようなことが影響するだろうか。時間的展望とアイデンティティは関連すること（都筑，1993）から，アイデンティティの統合に関わる要因が時間的展望と関連するのではないだろうか。

育児期の女性のアイデンティティは，職業，家庭，個というさまざまなアイデンティティを内部で統合しつつ生きると岡本（1996）は述べている。性役割もその一つとしてあげられる。育児期の女性のアイデンティティの統合に関わる性役割態度は，夫婦間で結婚生活や育児をどのように捉えるかという問題を始め，女性のライフコースの選択や結婚後の女性の時間的展望にも影響を及ぼすのではないだろうか。野村（1995）が女性のライフコースの選択が一見自由で多様であっても，女性は社会が期待する女性役割に根本では規定されていることが多いと述べたように，女性の性役割態度は女性の時間的展望に影響を及ぼす可能性もあるだろう。

そこで本研究では，性役割態度，時間的展望という観点から，育児負担感との関係を検討する。本研究では以下の 2 つを目的とする。

（1）育児負担感，役割態度，時間的展望をライフコースから検討する。

（2）ライフコース別に，性役割態度が時間的展望と育児負担感にどのような影響を与えているのかを検討する。

なお，性役割態度とは，“性役割に対して，一貫して好意的もしくは非好意的に反応する学習した傾向である”と定義する。

2 方法

（1）調査対象者

A 市の乳幼児を持つ母親 993 名（公民館の育児サロンに参加している母親 467 名，保育園に子どもを通わせている母親 526 名）を対象とした。分析対象は無回答の項目があるものや回答内容に不備のあったものなどを除いた 863 名分のデータ（公民館の育児サロンに参加している母親 420 名，保育園に子どもを通わせている母親 443 名））であった。平均年齢は 33.21 歳（ SD 5.83 ）であった。

（2）調査手続き

2005 年 8 月中旬～10 月初旬に公民館と保育園に質問紙調査を行なった。

公民館では，筆者が直接出向き質問紙の主旨を説明した後その場で記入回収した方法と公民館の主事に依頼して後日回収した 2 通りの方法をとった。保育園は，先生に配布して頂き 2 週間後に回収した。なお，回収率は 75%であった。

（3）調査内容

以下の構成からなる質問紙調査を実施した。

1）育児負担感を測定する質問項目：牧野（1982）の作成した育児不安尺度 14 項目から先行研究(江上，2005)にて有効性が高いと認められた 10 項目を使用した。評定は，「よくある」「時々ある」「ほとんどない」「全くない」の 4 段階で回答を求め，それぞれ順に 4 点，3 点，2 点，1 点とした。

2）ライフコースを問う項目：フェイスシートで 4 つに分類したライフコースの中から現在のライフコースと望んでいた（望んでいる）ライフコースに○をつけてもらった。ライフコースはⅠ就業継続型，Ⅱ再就職型（すでに現在就業している），Ⅲ専業主婦型（今後もずっと専業主婦の予定），Ⅳ再就職希望型（育児がひと段落してから就業希望）の 4 群である。

3）性役割態度を測定する質問項目：鈴木（1994）の作成した平等主義的性役割態度スケール短縮版を使用した。鈴木は，性役割を“男女にそれぞれふさわしいとみなされる行動やパーソナリティに関する社会的期待・規範およびそれらに基づく行動”と定義し，性役割態度を“性役割に対して，一貫して好意的もしくは非好意的に反応する学習した傾向である”と定義した。男女の性役割態度における平等志向性，あるいは伝統志向性のレベルを客観的に測定する尺度として，40 項目あった平等主義的性役割態度スケールを 15 項目に短縮したものである。回答は 5 段階評定（1～5 点）で求め，各項目得点の合計を尺度得点とした。得点が高いほど性役割について平等志向的な態度であることを示し，低いほど伝統志向的な態度であることを示す。

4）時間的展望を測定する項目：白井（1994）の作成した時間的体験尺度を使用した。白井によれば,“時間的展望とはある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体”と定義されている。この尺度は，希望，目標指向性，充実感，過去受容の下位項目から構成されており，時間的展望の体験的側面を測定している。全 18 項目からなり，回答は「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の 5 件法によった。集計にあたっては，順に 5 点，4 点，3 点，2 点，1 点と得点化した。

3. 結果

(1) 各尺度の基礎的検討

1)育児負担感尺度　因子分析（主因子法）を行ったところ，先行研究と同様の 1 因子が得られた。先行研究（江上，2005）では，牧野（1982）の育児不安尺度から有効な 10 項目を選択したため，育児不安尺度と命名していたが，本研究では尺度項目の内容から尺度名を育児負担感尺度と命名した。信頼性の指標として α 係数を算出したところ，.79 となった。（表Ⅴ-1-1）。

2)時間的展望体験尺度　因子分析（最小 2 乗法・プロマックス回転）を行ったところ，先行研究と同様の 4 因子が得られた。累積寄与率は 50.88%であった。第 1 因子から，将来の目標指向性，現在の充実感，過去の受容，将来の希望と命名した。尺度の信頼性の指標として α 係数を算出したところ, 順に.83, .78, .78, .80 となった（第Ⅳ章 1 節，表Ⅳ-1-1）。

3) 平等主義的性役割態度スケール（短縮版因子分析）　因子分析（主因子法）を行ったところ，先行研究と同様の 1 因子が得られた。尺度の信頼性の指標として α 係数を算出したところ，.86 となった。（表Ⅴ-1-2）。

表Ⅴ-1-1 育児負担感尺度

子供を育てるために我慢ばかりしていると思う。	.581
生活の中にゆとりを感じる。 (*)	-.580
子供がわずらわしくてイライラしてしまう。	.557
考え事がおっくうでいやになる。	.548
子供のことでどうしたらよいかわからなくなることがある。	.544
自分一人で子供を育てているのだという圧迫感を感じてしまう。	.514
毎日くたくたに疲れる	.512
自分は子供をうまく育てていると思う。 (*)	-.490
毎日毎日同じことの繰り返ししかしていない。	.455
朝めざめがさわやかである。 (*)	-.452

(*)は逆転項目

表Ⅴ-1-2 平等主義的性役割態度スケール短縮版

女性のおるべき場所は家庭であり、男性のおるべき場所は職場である。 (*)	-.767
家事や育児をしなければならないから、女性はあまり 責任の重い競争の激しい仕事をしない方がよい。 (*)	-.711
主婦が仕事を持つと、家族の負担が重くなるのでよく ない。 (*)	-.680
女性は、家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いた方がよい。 (*)	-.626
娘は将来主婦に、息子は職業人になることを想定して 育てるべきである。 (*)	-.621
女性が、社会的地位や賃金の高い職業を持つと結婚するのが難しくなるから、そういう職業を持たない方がよい。 (*)	-.582
主婦が働くと夫をないがしろにしがちで、夫婦関係にひびが入りやすい。 (*)	-.557
男の子は男の子らしく、女の子は女らしく育てることが非常に大切である。 (*)	-.542
結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである。 (*)	-.522
子育ては女性にとって一番大切なキャリアである。 (*)	-.444
経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい。 (*)	-.434
家事は男女の共同作業となるべきである。	.427
結婚後、妻は必ずしも夫の姓を名乗る必要はなく、旧姓で通してもよい。	.373
女性は子どもが生まれても、仕事を続けたほうがよい。	.366
女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をすることもそれと同じくらい重要である。	.351

(*)は逆転項目

(2) ライフコースと育児負担感，性役割態度，時間的展望との関連

ライフコース別に育児負担感得点，性役割態度合計得点，時間的展望合計得点の平均値と標準偏差を算出し，分散分析を実施後，多重比較を行なった。

結果，ライフコースと育児負担感の関連では，再就職型と再就職希望型において有意差があった。再就職型は，再就職希望型に比べ，育児負担感得点が有意に高かった（表Ⅴ-1-3）。

表Ⅴ-1-3　育児負担感得点、性役割態度得点、時間的展望得点の平均値と標準偏差及びF値

	Ⅰ 就業継続型 （218人）	Ⅱ 再就職型 （246人）	Ⅲ 専業主婦型 （194人）	Ⅳ 再就職希望型 （205人）	F値 自由度 (3,859)	多重比較 5%
育児負担感得点	25.67 (4.52)	25.92 (4.61)	24.86 (4.44)	24.64 (4.41)	4.16**	Ⅱ>Ⅳ
性役割態度（妻）得点	55.3 (10.06)	52.98 (9.10)	50.22 (9.32)	53.64 (9.07)	10.29***	Ⅰ>Ⅱ，Ⅲ Ⅱ，Ⅳ>Ⅲ
性役割態度（夫）得点	49.11 (10.62)	44.57 (9.65)	42.73 (10.59)	45.02 (10.03)	14.71***	Ⅰ>Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ
時間的展望得点	64.88 (12.04)	62.40 (11.61)	63.50 (11.24)	65.30 (10.41)	3.07*	Ⅳ>Ⅱ

（ ）内は標準偏差、***p<.001　**p<.01　*p<.05

ライフコースと性役割態度の関連を検討するにあたって，高橋ら(2000)が示したように依然として性役割態度における男女差が縮まっていないことが予想されるため，妻の性役割態度と夫の性役割態度の場合に分けて検討した。さらに妻と夫の性役割態度のズレについても検討した。その際，育児に関する意識の調査では夫が家事を実際に手伝っている時間より妻がどのように認知しているかということに関連（牧野，1983）していたので，実際の夫の性役割態度よりも妻がどのように夫の性役割態度を認知しているかということが育児負担感に関連する可能性が高く，妻の認知による夫の性役割態度を検討の対象とした。また，性役割態度のズレは，「妻の性役割態度得点－妻の認知している夫の性役割態度得点」の絶対値を性役割態度得点のズレとした。

結果，妻の性役割態度得点も妻の認知による夫の性役割態度得点のどちらも継続就業型の得点が高く，専業主婦型が低かった。妻の性役割態度得点では，専業主婦型が継続就業型，再就職型，再就職希望型のどの群よりも有意に低いことから，専業主婦型は他の群の妻の性役割態度に比べ，伝統志向的であることが示唆された。また，就業継続型は，再就職型と有意差があり，現在どちらも仕事をしているが，妻の性役割態度においては有意な差があることが示された。妻の認知による夫の性役割態度得点では継続就業型が他の群に比べ，有意に高いことが明らかになった。継続就業型の母親が他の群の母親に比べ，夫の性役割態度を高く認知していることが示唆された。また，性役割態度のズレ得点は，ライフコースによって有意差はなかった。（表Ⅴ-1-3）。

ライフコースと時間的展望との関連では，再就職型と再就職希望型とのあいだに有意差

があった。他の群とのあいだには有意差はなく，すでに就業している再就職型が時間的展望が低く，まだ就業してない再就職希望型が時間的展望が高いという結果になった（表Ⅴ-1-3)。

(3) ライフコース別育児負担感に影響を及ぼす要因

ライフコース別に，性役割態度，時間的展望の要素の各変数を順次投入し，育児負担感を最終的な目標変数として重回帰分析を行なった。その際，性役割態度が時間的展望に影響を与える可能性が高いと予測し，先行要因とした。分析の結果，標準偏回帰係数（β）が5%以上の水準で有意になったパスを取り上げ，重決定係数（R^2）とともにダイアグラムに示した（図Ⅴ-1-1，Ⅴ-1-2，Ⅴ-1-3，Ⅴ-1-4)。

1) 就業継続型

育児負担感に対しては，充実感，過去受容から，負のパスが示された（順にβ=-.542，β=-.190　ともに p<.001)。重決定係数（R^2）は，.404（p<.001）であった。目標指向性，希望，性役割態度からは有意なパスは見られなかった。

充実感と目標指向性に対しては，性役割態度（夫）から，正のパスが示された（順にβ=.242，β=.202　順に p<.001，p<.01)。重決定係数（R^2）は，それぞれ.059（p<.001)，.041（p<.01）であった。過去受容と希望に対しては，性役割態度（妻）から，正のパスが示された（それぞれβ=.206，β=.228　順に p<.01，p<.001)。重決定係数（R^2）は，それぞれ.042（p<.01)，.052（p<.001）であった。性役割態度（ズレ）からは有意なパスは見られなかった。

2) 再就職型

育児負担感に対しては，充実感，過去受容，希望から，負のパスが示された（順にβ=-.532，β=-.159　β=-.135　順に p<.001，p<.01，p<.05)。重決定係数（R^2）は，.469（p<.001）であった。目標指向性，性役割態度からは有意なパスは見られなかった。

過去受容に対しては，性役割態度（妻）から，正のパスが示された（β=.134，p<.05)。重決定係数（R^2）は，.018（p<.05）であった。充実感，目標指向性，希望に対するパスは見られなかった。また，性役割態度（夫)，性役割態度（ズレ）からは有意なパスは見られなかった。

3) 専業主婦型

育児負担感に対しては，充実感，希望から，負のパスが示された（順にβ=-.464，β=-.302　ともに p<.001)。重決定係数（R^2）は，.458（p<.001）であった。目標指向性，過去受容，性役割態度からは有意なパスは見られなかった。

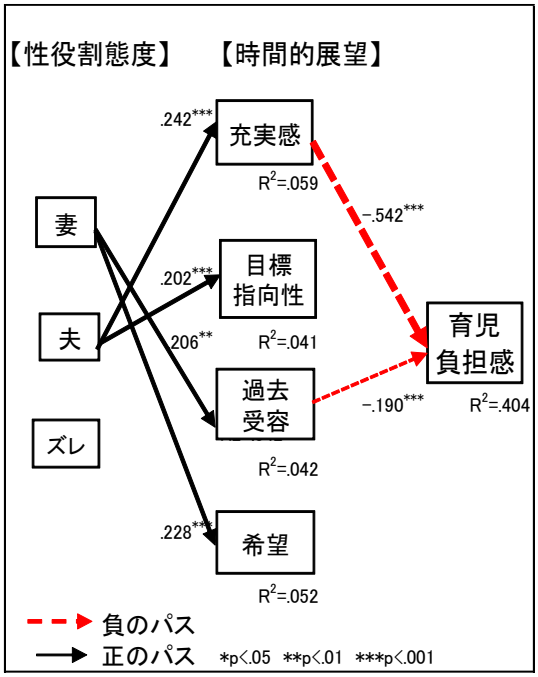
時間的展望の各要素に対しては，有意なパスが見られなかった。充実感，目標指向性，過去受容，希望のどの要素も，性役割態度からは影響を受けないことが示された。

4) 再就職希望型

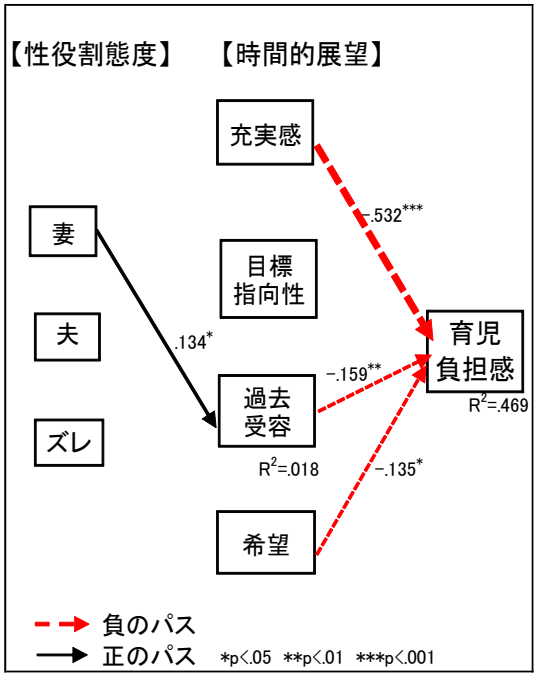
育児負担感に対しては，充実感，過去受容，希望から，負のパスが示された（順にβ=-.499，β=-.204　β=-.170　順に p<.001，p<.001，p<.01)。重決定係数（R^2）は，.446（p<.001）であった。目標指向性，性役割態度からは有意なパスは見られなかった。

充実感に対しては，性役割態度（ズレ）から，負のパスが示された（順にβ=-.155　p<.05)。重決定係数（R^2）は，.024（p<.05）であった。目標指向性に対しては，性役割態度（夫）

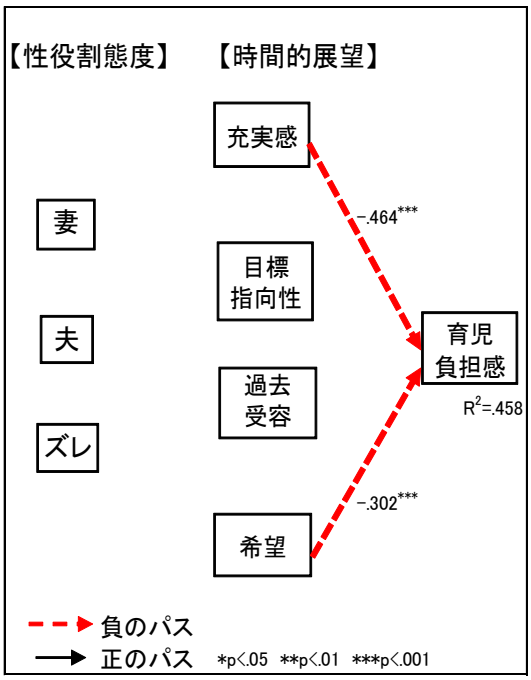
から，正のパスが示された（β=.217，　p<.01）。重決定係数（R^2）は，.047　（p<.01）であった。過去受容と希望に対しては，性役割態度（妻）から，正のパスが示された（それぞれ β=.269，　β=.147　順に　p<.001，p<.05）。重決定係数（R^2）は，それぞれ.073（p<.001），.022（p<.05）であった。



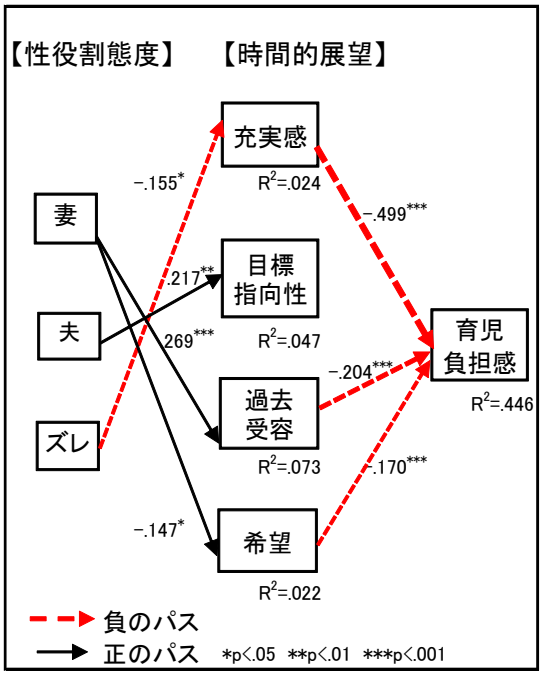
図Ⅴ-1-1　育児負担感に影響を及ぼしている要因のパス図【就業継続型】



図Ⅴ-1-2 育児負担感に影響を及ぼしている要因のパス図　【再就職型】



図Ⅴ-1-3 育児負担感に影響を及ぼしている要因のパス図【専業主婦型】



図Ⅴ-1-4 育児負担感に影響を及ぼしている要因のパス図【再就職希望型】

4　考察

(1) ライフコースと育児負担感，性役割態度，時間的展望との関連

ライフコースと育児負担感との関連では，再就職希望型が再就職型に比べ，育児負担感が有意に低いことが示された。

経済企画庁国民生活局（1987）の調査によると，女性が理想とするライフコースは，子供が一定の年齢になったら再就職するコースで 43．4%を占めた。しかし，そのコースを選択した割合は 31．3%と低く，理想のライフコースをとれないまま内面に葛藤を抱え込んでいる可能性が考えられる。

現在すでに就職してしまった女性の中には，経済的理由や，さまざまな理由を抱えながら，子どもが小さいうちに働かざるを得ないことが予想される。子どもが一定の年齢になったら再就職する理想のライフコースを歩んでいる女性とそうではない女性では，内面に抱えている葛藤も育児負担感の程度も違うであろう。その差が再就職希望型と再就職型に現れたのではないかと思われる。

ライフコースと性役割態度との関連では，ライフコースの違いにより性役割態度に有意な差が出た。妻の性役割態度得点では，専業主婦型が有意に低く，他の群に比べ専業主婦型は伝統志向的な性役割態度であることが示唆された。就業継続型と再就職型とのあいだにも性役割態度において有意な差が示された。どちらも就業していながら，再就職型は就業継続型に比べ，伝統志向的な性役割態度であることが示唆された。ライフコースと妻の性役割態度は大いに関連があり，性役割態度に関する自分の考えがライフコースという人生の選択に影響を及ぼしていると言えよう。

また，妻の認知による夫の性役割態度とライフコースとの関連では，就業継続型の妻の認知による夫の性役割態度得点が他の群に比べ有意に高く，他の群より就業継続型の妻は夫のことを平等志向的であると認知していることが示唆された。就業継続型の女性は夫のことを平等主義的性役割態度であると認知しているとともに，逆に夫のことを性役割態度が平等主義的だと認知している女性ほど就業継続型のライフコースを選択しているとも言えよう。また，性役割態度のズレは有意差がなかったことから，性役割態度のズレはライフコースに関係なく，存在することが示唆された。

ライフコースと時間的展望との関連では，再就職希望型と再就職型において有意な差が示された。実際に現在就業している再就職型が時間的展望が低く，まだ就業していない再就職希望型が時間的展望が高いことが明らかになった。再就職型は，経済的な理由や家庭の事情により再就職した可能性も考えられ，未来を見据えて就職したとは限らず，おそらく，時間的展望が見えにくくなっているのではないだろうか。それに反して，再就職希望型は現実の壁にぶつかっておらず，時間的展望が自分の心の中で繰り広げられている可能性があり，すでに就職している再就職型よりも時間的展望が高いという結果になったと思われる

(2) ライフコース別育児負担感に影響を及ぼす要因

ライフコースごとに育児負担感に影響を与える要因を検討した。どのライフコースも直接的に影響を与えていたのは，時間的展望の構成要素である充実感，過去受容，希望であった。特に充実感は，すべてのライフコースにおいて育児負担感に強い負の影響を与えており，充実した現在を送るということは，育児負担感を弱める可能性が示唆された。目標

指向性は，どのライフコースにおいても影響を与えてはいなかった。また，性役割態度は，育児負担感に直接的な影響を与えておらず，時間的展望の各要素を通して間接的に弱い影響を与えていることが示唆された。

1)就業継続型

育児負担感に影響を与えている要因は，充実感と過去受容であった。妻の性役割態度は過去受容を通して，妻の認知する夫の性役割態度は充実感を通して，間接的に育児負担感に弱い影響を与えていることが示された。就業継続型の母親にとっては，自分自身が男女平等主義的な性役割態度であることが，自分自身の過去の選択や生き方を受けとめやすいことが示唆された。また，夫を男女平等主義だと認知している方が，現在の充実感が高いということが示されたことから，現実に妻も夫と同じように就業を継続することを夫が認めて支持する考え方を持っていると認知できることが充実感に繋がったと考えられる。

また，夫を男女平等主義だと認知できることは，目標指向性にも関連し，夫をどのように認知するかということは，現実のみならず未来への目標に繋がることも示唆された。

2) 再就職型

再就職型で育児負担感に影響を与えていたのは，充実感，過去受容，希望であった。妻の性役割態度は，過去受容に関連して間接的な影響を与えていた。同じように有職でありながら，就業継続型と違うのは，希望が育児負担感に影響を与えていたことだった。やはり，就業継続型に比べ，再就職の場合は，不本意な就職をしている場合も考えられ，将来に希望を持てない場合は育児負担感に繋がる可能性が示唆されたといえよう。時間的展望における充実感，目標指向性，希望と性役割態度は関連が示されなかったことにより，再就職型にとっては，時間的展望の 3 つの要素に関連しているものは，性役割態度よりも違う要因が潜んでいる可能性が示唆された。

3) 専業主婦型

専業主婦型において，性役割態度は時間的展望に影響を与えていなかった。専業主婦型は，性役割態度得点も他のライフコース群に比べ有意に低く，伝統主義的な性役割態度を持つことが示唆されていた。専業主婦にとって，時間的展望の構成要素である充実感や希望に影響を与える要因は性役割態度ではなく，もっと他のことであることが予想される。岡本(2003)は，母親も自己犠牲的に子育てに専念するのではなく，自分らしさを確認できるような時間の確保や活動の実践も必要であることを指摘したが，その実現は必ずしも容易ではないことを示唆した。塩崎・無藤ら（2006）は，母親たちにとって，自分らしさを確認できるような時間の確保や活動の実践と，子育てとのバランスをとることを困難にしている要因として，伝統的な育児観と父親の母子分離に対する意識が母親の子どもとの分離意識に影響を及ぼしていることをあげている。専業主婦の時間的展望に影響を与える要因は，今後いろいろな方向から検討する必要があるかと思われる。

また，育児負担感には充実感と希望の二つの要素が影響を与えていた。永久(1995)が，専業主婦が有職主婦より自分のありかたや将来展望に対する不安感情をもっていることを示し，将来自分のために何がしたいのか分からなくて焦っていることを示唆している。子育て後の人生に希望をもてることができるようになれば,育児負担感は弱まるといえよう。

4) 再就職希望型

再就職希望型においては，育児負担感に充実感，過去受容，希望が影響を与え，再就職

型と同じ特徴がでた。過去を受容できることと，将来の希望が見えることは，再就職してる場合もこれから再就職を希望する場合も，育児負担感を弱める重要な要素であることが示唆された。一度仕事をやめた自分を受容したり，再就職という厳しい現実の中で希望を見いだせるかどうかという不安を解決していくことが重要と思われる。時間的展望に関しては，充実感は性役割態度のズレと負の関係が示され，目標指向性は妻が夫の性役割態度をどのように認知しているかに関係があった。再就職希望型においてのみ，性役割態度のズレと充実感が関連を示すという結果がでた。今後再就職を考え準備していくということを考えれば，性役割態度のズレがないということが重要であるということが示唆されたと言えよう。また，過去受容や希望については，就業継続型と同様に妻の性役割態度との関連が示され，夫ではなく，妻自身の性役割態度が過去を受容し希望へとつなげていくことが示唆された。

5. 今後の課題

ライフコースと育児負担感の関連では，再就職型と再就職希望型で有意差が出たが，就業継続型や専業主婦型では有意差は出なかった。

小林(1996)は3歳児を持つ母親を対象に就労意識と抑鬱との関連を調査し，その結果，就労したいのに専業主婦をしている女性や，主婦をしたいのに就労している女性に抑鬱傾向が見られることを報告した。そして自分の望む生き方ができていないために抑鬱状態になるのだと考察している。専業主婦型や就業継続型のように有意差の見られない群が存在するということ，育児負担感の程度は，現在のライフコースと関連があるというよりも，むしろ理想のライフコースをとれたかどうか，つまり望んだライフコースを選択して現在にいたっているかどうかということに関連するのではないだろうか。今後の課題としたい。

育児負担感に与える影響要因の中で，すべてのライフコースにおいて一番強く育児負担感に影響を及ぼしていたのは，充実感だった。育児期の女性が充実した日々を過ごすということはどのようなことであろうか。

柏木（2001）は，80 年に及ぶ長い一生のうち子育てはほんの一時で，女性＝母親・妻ではもはや幸福な一生とはならないということの予測から生じる，現代女性の心の変化を指摘した。さらに原口ら（2005）は，今日の母親たちは，「自分で子育てをしたい」と同時に「自分の生き方を大切にしたい」という葛藤が生じる傾向が高く，その結果，現実自己と理想自己との間に生じたギャップが，育児を肯定的に捉えることを困難にさせ，育児不安などのネガティブな感情を喚起する要因となっていることも示唆した。育児の他にも自分の時間を持ち，ケア役割に圧倒されることなく，日々を過ごすことが重要であるといえよう。そのような過ごし方は，育児負担感軽減に繋がることが推察される。

また，自分の生き方ができずにケアの役割に圧倒されて充実感が持てない場合は，育児負担感が高くなる可能性が示唆されたので，育児ノイローゼなど育児負担感が極めて高くなっている臨床群の場合は，充実した生き方をするという視点から自分を見つめ直すことも重要と思われる。

また，健康な母親には，充実した生き方について自分自身と向き合い考える時間を持つことを提供することが育児負担感軽減に繋がることが示唆された。

第 2 節　自己決定感が時間的展望と育児負担感に及ぼす影響

1. 目的

第Ⅴ章 1 節では，アイデンティティ統合に関わる要因の一つとして性役割態度をとりあげ，性役割態度が時間的展望と育児負担感に及ぼしている影響をライフコース別に検討した。その結果，性役割態度は時間的展望との関連を通して間接的に育児負担感に影響を与えていること，どのライフコースにおいても現在の充実感が育児負担感に影響を及ぼしていること，ライフコースによっては過去の受容と将来の希望が育児負担感に影響を及ぼしていることが示唆された。

そこで本研究では，母親の時間的展望及び育児負担感と関連した要因についてさらに検討を進めるために，アイデンティティ統合に関わる要因の一つとして自己決定感（桜井，1993）をとりあげる。畑野（2010）は社会状況や文脈の変化の中でどの領域において自らのアイデンティティを形成するかが，個人の自己決定という主体性と強く関連すると指摘している。育児期の母親にとって，未だ根強く残る性役割分業観（高橋・小渕，2000）の中で，育児をしながら自らの生き方や将来を決めることは容易ではない。このように，自己決定感の様相は，再就職などの子育て後の人生の方向付けなど時間的展望に影響すると考えられる。さらに自己決定的に遂行された行動は適応的な結果と関連がある（萩原・櫻井，2008）ことから，育児負担感の緩和と関連すると考えられる。つまり，育児期の母親の自己決定感は，時間的展望に影響を与え時間的展望を介して育児負担感に影響を及ぼすとともに，育児負担感に直接的に影響を及ぼすことが予想される。その関連をライフコースごとに明らかにすることにより，ライフコースに応じた示唆を得ることができると考える。

そこで，本研究では，自己決定感，時間的展望という観点から，育児負担感との関係を検討する。本研究では以下の 2 つを目的とする。

(1) 自己決定感をライフコースから検討する（育児負担感，時間的展望のライフコースからの検討は第Ⅱ章，第Ⅳ章ですでにしているため，本稿では省略する）。

(2) ライフコース別に，自己決定感が時間的展望と育児負担感にどのような影響を与えているのかを検討する。

2. 方法

(1) 調査対象者・調査手続き：第Ⅱ章 1 節に同じ

(2) 調査内容

1)ライフコースを問う項目　就業継続型，再就職型，専業主婦型の三つの型（内閣府，2006）をⅠ就業継続型，Ⅱ再就職型（すでに現在就業している），Ⅲ専業主婦型（今後もずっと専業主婦の予定），Ⅳ再就職希望型（育児がひと段落してから就業希望）の四つの型に変えた。育児期の母親がすでに再就職している場合と，子どもがもう少し大きくなってから再就職しようと考えている場合では，母親の状況が違うため，区別して検討し援助の視点を得ることが適切と考えた。四つのライフコースの中から現在のライフコースを記入してもらった。

2)育児負担感を測定する項目　母親の感情を構造的に捉えるために，広く利用されてい

る一次元の牧野の育児不安尺度（1982）に母親の不安尺度（岩田，2000），育児負担感スクリーニング尺度（吉田・山中・巷野・太田・中村・山口・牛島，1999）など既存の尺度を加え，合わせた 42 項目を臨床心理学を専攻する大学院生 4 名（子育て経験者 1 名）で検討し，22 項目を選択した。評定は 4 件法で回答してもらった。

3)時間的展望を測定する項目　白井（1994）の作成した時間的展望体験尺度 18 項目を使用した。この尺度は，“現在の充実感”，“目標指向性”，“過去受容”，“希望”の 4 因子からなり，代表的な項目は，順に“毎日の生活が充実している”“私には，だいたいの将来計画がある”“過去のことはあまり思い出したくない”（逆転）“私には未来がないような気がする”（逆転）である。評定は 5 件法で回答してもらった。

4) 自己決定感を測定する項目　桜井（1993）の作成した自己決定感尺度 8 項目を用いた。本尺度は，自分自身が行動の起点もしくは出発点であるという知覚を測定する尺度である。結婚後の女性の自己決定感は，夫の影響を受けることが多くなると予想し，質問内容の“他者”を“夫”にかえて質問紙を作成した。評定は 6 件法で回答してもらった。

また，自己決定したい欲求があるにも関わらず現実には自己決定できないという理想と現実のズレは葛藤を生みだし，その葛藤が母親の感情に影響を及ぼすことが予想されるため，自己決定感と自己決定欲求のズレを測定し，育児負担感に与える影響を自己決定感と同様に検討することとした。そこで，桜井（1993）が作成した自己決定欲求尺度 9 項目を使用した。評定は 6 件法で回答してもらった。

3. 結果

(1) 各尺度の基礎的検討

1) 育児負担感尺度　育児負担感についての 22 項目に対して，フロア効果が見られた 3 項目を外し，19 項目で因子分析（最尤法・Kaiser の正規化伴うオブリミン回転）を行ったところ，4 因子が抽出された。累積寄与率は 50.98%であった（Table 1）。第 1 因子から順に，閉塞感・犠牲感，疲労感，自信のなさ，離反願望と命名した。また，尺度の信頼性の指標として α 係数を算出したところ，第 1 因子から順に.85, .75, .80, .75 となり，各尺度の内的整合性は高く，ほぼ満足のいく水準であると言える（第Ⅱ章 1 節，表Ⅱ-1-1）。

2) 時間的展望体験尺度　因子分析（最小 2 乗法・プロマックス回転）を行ったところ，先行研究と同様の 4 因子が得られた。累積寄与率は 50.88%であった。第 1 因子から，将来の目標指向性，現在の充実感，過去の受容，将来の希望と命名した。尺度の信頼性の指標として α 係数を算出したところ，順に.83, .78, .78, .80 となった（第Ⅳ章 1 節，表Ⅳ−1−1）。

3) 自己決定感尺度と自己決定欲求尺度　それぞれ因子分析（主因子法）を行ったところ，先行研究と同様の 1 因子がそれぞれ得られた。尺度の信頼性の指標として α 係数を算出したところ，それぞれ.83, .86 となった（表Ⅴ−2−1，Ⅴ−2−2）。

表Ⅴ-2-1 自己決定感尺度

自分に関わる大切なことほど、夫に決めてもらうことが多い。 (*)	-.749
自分のすることでも、夫に決めてもらうことが多い。 (*)	-.739
夫の考えにこだわらずに自分の考えどおりにしている。	.670
自分がやりたいと思うことでも、夫からやめろと言われたらやめている。(*)	-.632
何かやりたいときには、夫に頼らず自分の判断で決めている。	.597
家族で何をするか決めるときは、夫の意見に従っている。 (*)	-.580
自分の思いどおりに行動している。	.515
自分の生き方は、自分で決めている。	.485

(*)は逆転項目

表Ⅴ-2-2 自己決定欲求尺度

自分に関わる大切なことほど、夫に決めてもらいたい。 (*)	-.721
自分のすることでも、できれば夫に決めてもらいたい。 (*)	-.692
自分の思いどおりに行動したい。	.672
夫の考えにこだわらずに自分の考えどおりにしたい。	.658
自分の生き方は、自分で決めたい。	.658
自分のすることを、夫に指示されたくない。	.656
何かやりたいときには、夫に頼らず自分の判断で決めたい。	.651
家族で何をするか決めるときは、夫の意見に従いたい。 (*)	-.531
自分がやりたいと思うことでも、夫からやめろと言われたら、やめる方である。(*)	-.515

(*)は逆転項目

(2)ライフコースによる自己決定感の検討

ライフコースから自己決定感を検討するにあたって，自己決定欲求と自己決定感とのズレについても検討した。その際，ズレを自己決定欲求尺度と自己決定感尺度の共通する 8 項目の差（自己決定欲求尺度得点－自己決定感尺度得点）の平均値として求めた。ズレが大きい(正の値)ほど，自己決定したいにも関わらず自己決定できないことを示し，負の値は，自己決定したい欲求を超えて自己決定していることを示している。

結果，専業主婦型は自己決定感が有意に低く，就業継続型と再就職型は，専業主婦型と再就職希望型より，自己決定欲求が高いことが示された。また，自己決定欲求と自己決定感のズレは，再就職型が就業継続型よりも有意に高かった（表Ⅴ-2-3)。

表Ⅴ-2-3　ライフコース別自己決定感得点の平均値と標準偏差及びF値

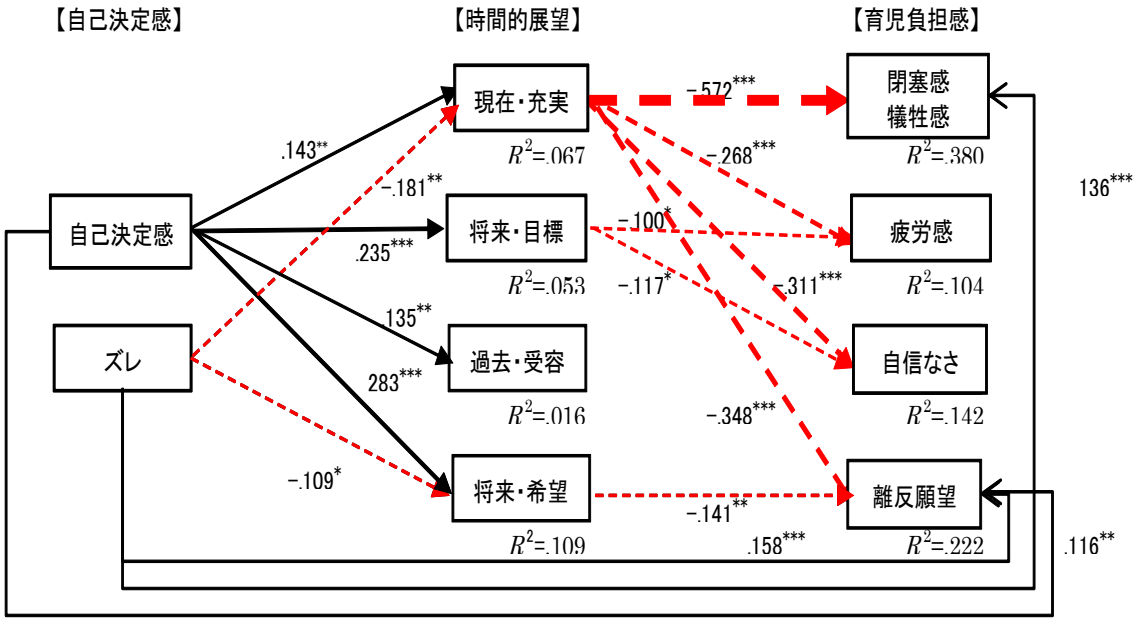
	Ⅰ 就業継続型 (533人)	Ⅱ 再就職型 (468人)	Ⅲ 専業主婦型 (379人)	Ⅳ 再就職希望型 (346人)	F値 自由度 (3,1722)	多重比較 5%
自己決定感	4.30 (.72)	4.18 (.79)	3.91 (.72)	4.06 (.64)	23.49^{***}	Ⅰ>Ⅲ, Ⅳ Ⅱ, Ⅳ>Ⅲ
自己決定欲求	4.42 (.74)	4.43 (.72)	4.12 (.69)	4.23 (.69)	19.28^{***}	Ⅰ, Ⅱ>Ⅲ, Ⅳ
ズレ	.15 (.52)	.26 (.59)	.24 (.55)	.20 (.54)	3.95^{**}	Ⅱ>Ⅰ

( )内は標準偏差、$^{*}p<.05$ $^{**}p<.01$ $^{***}p<.001$

(3)ライフコース別育児負担感に影響を及ぼす要因

ライフコース別に，自己決定感，自己決定欲求とのズレ，時間的展望の要素の各変数を順次投入し，育児負担感因子を最終的な目標変数として重回帰分析（ステップワイズ法）を行なった。その際，自己決定感，自己決定欲求とのズレが時間的展望に影響を及ぼす可能性が高いと予測し，先行要因とした。結果，標準偏回帰係数（β）が 5%水準以下で有意になり，育児負担感因子に直接的，間接的につながるパスを取り上げ，重決定係数（R^2）とともにダイアグラムに示した（図Ⅴ-2-1，Ⅴ-2-2，Ⅴ-2-3，Ⅴ-2-4）。

1) 就業継続型　自己決定感から，時間的展望のすべての因子に正のパスが示され，自己決定欲求とのズレから，現在の充実感と将来の希望へ負のパスが示されたが，分散説明率は高くなかった（説明される変数の割合：R^2）。また，自己決定感から離反願望へ正のパスが，自己決定欲求とのズレから閉塞感・犠牲感，離反願望へ正のパスが示された。現在の充実感からは，すべての育児負担感因子に負のパスが示され，将来の目標指向性からは，疲労感，自信のなさへ負のパスが，希望からは離反願望へ負のパスが示された（図Ⅴ-2-1）。



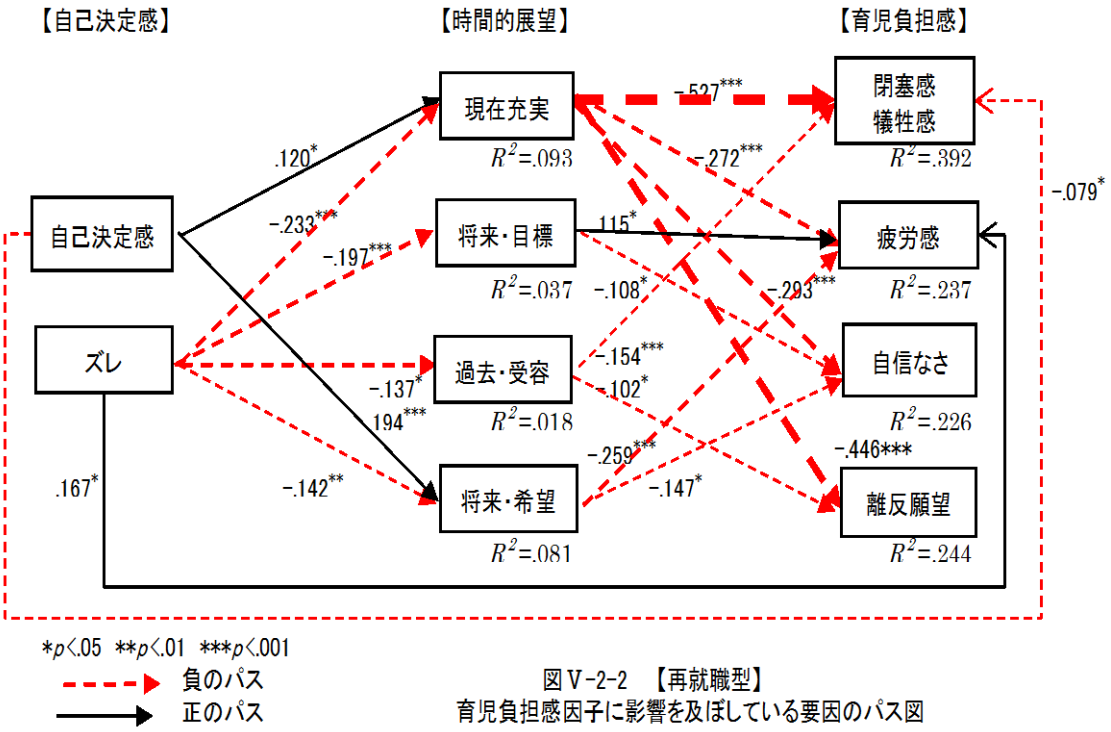
*p<.05 **p<.01 ***p<.001

負のパス

正のパス

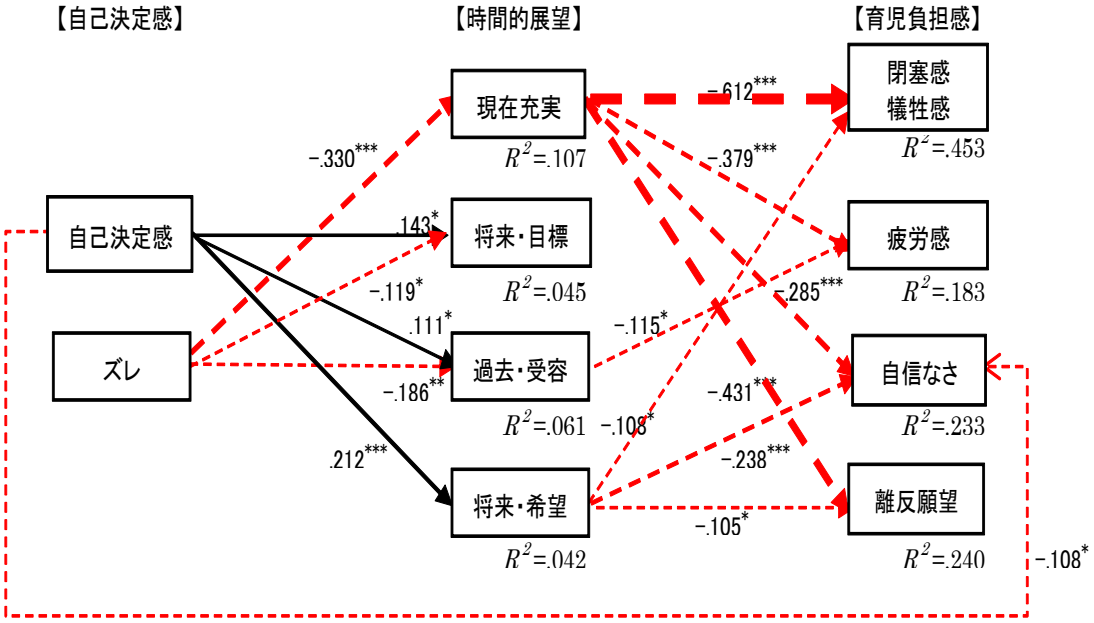
図Ⅴ-2-1【就業継続型】
育児負担感因子に影響を及ぼしている要因のパス図

2)再就職型　自己決定感から，現在の充実感と将来の希望へ正のパスが示され，自己決定欲求とのズレからは，時間的展望のすべての因子に負のパスが示されたが，分散説明率は高くなかった。また，自己決定感から閉塞感・犠牲感に負のパスが示され，自己決定欲求とのズレからは，疲労感へ正のパスが示された。現在の充実感から，育児負担感のすべての因子に負のパスが示され，将来の目標指向性からは疲労感へ正のパスが，自信のなさへ負のパスが示された。また過去の受容からは閉塞感・犠牲感，離反願望へ負のパスが，将来の希望からは疲労感，自信のなさへ負のパスが示された（図Ⅴ-2-2）。



図Ⅴ-2-2　【再就職型】
育児負担感因子に影響を及ぼしている要因のパス図

3) 専業主婦型　自己決定感から，過去の受容，将来の目標指向性，希望へ正のパスが示され，自己決定欲求とのズレから，現在の充実感，将来の目標指向性，過去の受容へ負のパスが示されたが，分散説明率は高くなかった。また，自己決定感から，自信のなさへ負のパスが示された。現在の充実感から，育児負担感のすべての因子へ負のパスが示され，過去の受容からは疲労感へ負のパスが，将来の希望からは閉塞感・犠牲感，自信のなさ，離反願望へ負のパスが示された（図Ⅴ-2-3）。



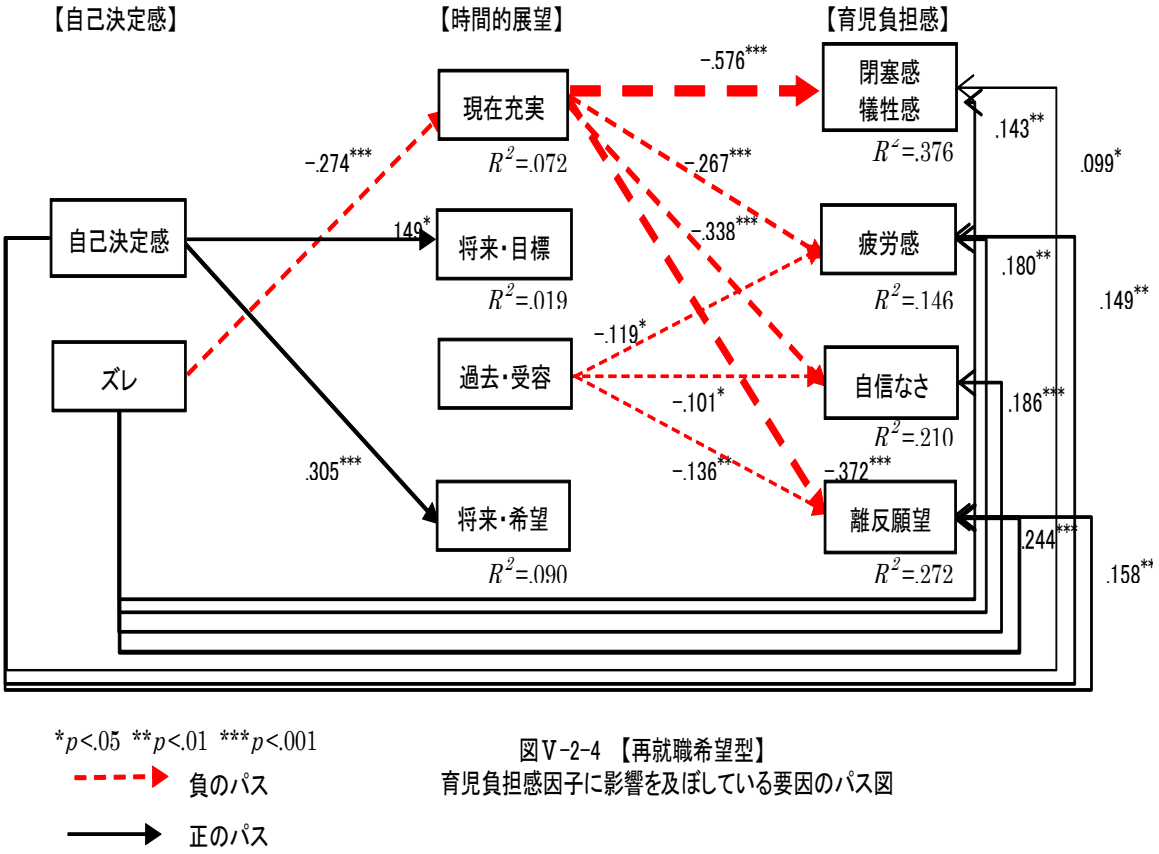
*p<.05 **p<.01 ***p<.001

負のパス

正のパス

図Ⅴ-2-3　【専業主婦型】
育児負担感因子に影響を及ぼしている要因のパス図

4) 再就職希望型　自己決定感から，将来の目標指向性と希望へ正のパスが示され，自己決定欲求とのズレから現在の充実感へ負のパスが示されたが，分散説明率は高くなかった。また，自己決定感から，自信のなさを除く育児負担感のすべての因子へ正のパスが，自己決定欲求とのズレからは，育児負担感すべての因子へ正のパスが示された。現在の充実感から，育児負担感すべての因子へ負のパスが，過去の受容からは，閉塞感・犠牲感を除く育児負担感すべての因子へ負のパスが示された（図Ⅴ-2-4）。



*p<.05 **p<.01 ***p<.001

負のパス

正のパス

図Ⅴ-2-4 【再就職希望型】
育児負担感因子に影響を及ぼしている要因のパス図

4. 考察

(1) ライフコースによる自己決定感の検討

専業主婦型が，四つのライフコースの中で自己決定感が一番低いことが示された。専業主婦型は，伝統志向的な性役割態度をもつこと（宮本，2007）を考えると，夫の考えに従い，自分で決めることが他のライフコースより少ないと考えられ，先行研究を支持した。また，就業継続型と再就職型が専業主婦型と再就職希望型より自己決定欲求が高いことが示され，有職の母親の方が自分で決めたい欲求が高いことが示唆された。働いている女性は，社会的に自己の判断を求められることが多いと予想され，家庭においても夫が決めるのでなく自分で決定したいと考えていることが示唆されたと言えよう。しかし，その自己決定欲求が就業継続型と再就職型において高いにも関わらず，自己決定感とのズレは，就業継続型と再就職型に有意な差があることが示された。就業継続型は自己決定欲求と自己決定感のズレが小さいが，再就職型はズレが大きく，妻の自己決定が希望通りには実現できないと認識されていることが示唆された。再就職型の母親は就業継続型の母親より伝統志向的であるため（宮本，2007），自己決定したい欲求が高いにも関わらず，夫に従わなければならないという葛藤が存在し，自己決定を難しくさせているのではないだろうか。

(2) ライフコース別育児負担感に影響を及ぼす要因

ライフコースごとに育児負担感に及ぼす影響を検討した。自己決定感と自己決定欲求とのズレは直接的に育児負担感に影響を及ぼすとともに，時間的展望に影響を及ぼして間接的に育児負担感に影響を与えた。どのライフコースにおいても，自己決定欲求とのズレが現在の充実感に影響を及ぼし，充実感を介して間接的にすべての育児負担感因子に影響を与えた。そこで，自己決定感と自己決定欲求とのズレが育児負担感に直接的，間接的に及ぼす影響を中心に考察を進めたい。

1)就業継続型　自己決定感が高くなることが，現在の充実感，将来の目標指向性と希望を高め，育児負担感を軽減することが示された。しかし，その一方で，自己決定感が高くなることは育児からの離反願望を高めることも示され，一人で決定する反面，一人で育児を背負いすぎ，逆に離反願望が高くなっている可能性がある。

自己決定欲求とのズレが大きくなることは，直接的，間接的に，閉塞感・犠牲感や育児からの離反願望を高めることを示した。就業継続型は，夫に対して平等志向的であるという性役割態度の認知が高い（宮本，2007）ことから，夫婦間での決定においても平等であるという期待が大きく，自分の欲求が通らない場合は育児負担感が芽生えることが示唆された。

2)再就職型　自己決定感が高くなることは現在の充実感と将来の希望を高め育児負担感を軽減すること，直接的に閉塞感・犠牲感を軽減することが示された。また，自己決定欲求とのズレを小さくすることが，時間的展望因子すべてを高め育児負担感を軽減すること，直接的に疲労感を軽減することを示した。しかし，時間的展望の因子の中で，将来の目標指向性は，疲労感を高めるという結果を示した。同じ有職でありながら就業継続型が目標をもつことが疲労感を軽減するという結果を示したのに反し，再就職型は疲労感を高めた。再就職型の場合は，目標をもつことが焦りに通じたり，目標と現実の壁との間で疲れを感じている可能性が考えられる。

3)専業主婦型　自己決定感が高くなることが過去の受容と将来の希望を高め育児負担感を軽減し，自己決定欲求とのズレを小さくすることが現在の充実感と過去の受容を高め育児負担感を軽減することが示された。また，自己決定感が高くなることは直接的，間接的に育児への自信を高めることも示された。専業主婦型は，伝統志向的な性役割態度をもつ（宮本，2007）と指摘されていることから，一般に夫に従うことが多い。専業主婦型の母親にとって，自己決定しているという感覚は，育児への自信を強め，過去の受容，将来の目標と希望を高める重要な感覚であることが示唆された。特に将来の希望が高まることは育児負担感を軽減することから，将来展望に対する不安感情を抱いている専業主婦（永久，1995）にとって，自分の将来を見つめ考えることが，現在の安定に繋がると考えられる。

4)再就職希望型　自己決定欲求とのズレを小さくすることが直接的，間接的に育児負担感を軽減することが示された。しかし，自己決定感が高くなることは，直接的に閉塞感・犠牲感，疲労感，離反願望を高めることを示した。また，間接的に将来の目標と希望を高めても育児負担感の軽減に繋がらないことも示された。再就職希望型は一般に，自分で決めて(あるいは夫と相談して)仕事を辞めたけれど，働きたい(働かなければならない)という葛藤を強くもっているのではないかと考えられる。将来への目標や希望は，働きたいという葛藤を高めてしまう可能性があり，育児負担感軽減に繋がらないと推察される。また，自己決定感が高くなることは，充実感や過去の受容を高めないことも示されていることから，仕事を辞めた過去や仕事をしていない現在の生活に対して肯定的な思いが伴いにくく，将来への思いとの間で葛藤を生み出し，育児負担感に繋がっていると考えられる。一方，自己決定感から影響を受けていない過去の受容が育児負担感を軽減することが示された。結婚・出産で一度仕事をやめて家庭に入った自分を家族としてのあり方の中で折り合いをつけ受容することが心の安定に繋がることが示唆された。

以上，ライフコースによる育児負担感への直接的，間接的な影響の違いが見られた。直接的には，専業主婦型や再就職型において自己決定感は育児への自信なさ，閉塞感・犠牲感を軽減したが，就業継続型や再就職希望型においては離反願望，閉塞感・犠牲感，疲労感を高める危険性も示唆された。間接的には，就業継続型において，自己決定感と自己決定欲求とのズレは将来の目標指向性と希望を介して育児負担感を軽減し，再就職型においては過去の受容，将来の目標指向性と希望を介して，専業主婦型においては主に将来の希望を介して育児負担感を軽減した。ライフコースに応じて，援助の視点の違いを考慮する必要性が示唆された。

5. 今後の課題

畑野（2010）は，青年がどのように将来の生き方を自己決定し，その中で文脈がどのように影響与えているのかといった点に焦点を当てる重要性を述べた。育児期の母親の自己決定もどのような文脈の中でなされたのかに着目する必要があるだろう。今後は面接調査によって，社会や家族の中での関係性における育児期の母親の文脈という視点から，自己決定や時間的展望，育児負担感を捉えることが必要である。

第 3 節　　第Ⅴ章のまとめ

第 1 節で，性役割態度が時間的展望や育児負担感に影響を及ぼし，乳幼児をもつ母親の育児負担感を軽減するかどうか検討したが，性役割態度は育児負担感には直接的な影響を及ぼさず，時間的展望を介して育児負担感に影響を及ぼしていた。その及ぼし方はライフコースによって違いがあることも示された。また，すべてのライフコースにおいて時間的展望因子の充実感を高めることが育児負担感軽減に繋がることが示された。健康な母親には，自分自身と向き合い，充実した生活を送ることは自身にとってどういうことなのか考える時間を持つことを提供することも重要であることが示唆された。

第 2 節では，自己決定感が時間的展望や育児負担感に及ぼす影響を，筆者が作成した育児負担感尺度をを用いて，育児負担感の因子ごとに及ぼす影響を検討した。ライフコースによって育児負担感に与える影響はかなり違っていた。しかし，すべてのライフコースにおいて, 充実感を高めることは第 1 節と同じように育児負担軽減に繋がることが示された。また，充実感を高めるためには，自己決定欲求と自己決定感のズレを小さくすることが重要であることも示された。さらに，育児期の母親がどのような文脈の中で自己決定しているのかに着目する必要があることが提案され, 面接調査によって育児負担感, 時間的展望, 自己決定などを把握する必要性が述べられた。

そこで，第Ⅵ章では面接調査で，ライフコース決定の文脈に注目する。ライフコースの決定の文脈が母親のその後の日常生活や育児負担感に影響をもたらしているのか，探索的に検討する。

第Ⅵ章

ライフコースの文脈からみた
母親の育児負担感

第１節　ライフコース決定の文脈と母親の育児負担感

1.　目的

第Ⅴ章では，すでに自己決定欲求と自己決定感のズレを小さくすることが充実感に繋がり，育児負担感を軽減することが示された。

畑野（2010）は，青年が将来の生き方を自己決定していく中で文脈が与えている影響に焦点を当てることが必要であると述べた。育児期の母親の自己決定もどのような文脈の中でなされたのかに着目する必要があるだろう。特にライフコースの選択においては，社会や家族の関係性の中で，育児期の母親がどのような文脈で自己決定しているかという視点は重要であろう。第Ⅴ章で，育児期の母親において，母親自身の自己決定したい欲求と自己決定感とのズレを小さくするような主体的な態度は重要と考えられる一方，夫婦間でバランスのとれた決定をいかにしていくかという点に配慮することの必要性が示唆された。母親の主体性と自己の欲求との折り合いを母親は実際にどのようにしているのであろうか。そして，その決定のしかたによっては，その後の育児生活に何らかの影響をもたらすのではないだろうか。

原田（2008）は，現代の母親たちは「親としての役割を担うこと」と自分自身の「自己実現」の狭間で悩んでいると指摘し，その悩みは，夫のちょっとした手伝いや近所の話し相手の存在などでは解決されないほど，人生の根幹にかかわる根が深いものであると述べた。母親のライフコースの決定は，この人生の根幹にかかわる重大な決定になる場合もあろう。ライフコースの決定が自己実現できる方向に向かう決定となればよいが，自己実現できるような決定になりえないからこそ，母親の精神的ストレスは，ここ 20 数年で急激に増大しているのではないだろうか。

そこで，本稿では，乳幼児をもつ母親のライフコースの決定において，どのように自己決定されたのか，文脈に着目し，その決定の状況や気持ちを語りの中から把握する。その際，ライフコース一致群と不一致群の母親にわけて語りを把握し，ライフコース決定の文脈が母親の育児感情に影響を与えているかどうかについて検討する。

2. 方法

調査協力者： 乳幼児（0－6 歳）をもつ母親。質問紙調査の際，面接調査に同意して下さった方 16 名の中から，ライフコース（一致不一致も含めて）の群間の偏りが小さくなるように，育児負担感得点に配慮し選定した 12 名。

調査手続き：面接場所については，協力者と合意の上，決定。面接時間は概ね 60 分~90 分。質問の内容は，表Ⅵ-1-1 に示した。以下の①，②，③，④の点を中心に，ある程度柔軟性をもって進める半構造化面接を実施した。面接では協力者に，①ライフコースを決める時の状況や気持ち，②妊娠から出産を経て現在の生活に至るまで，育児に関してどのように感じたり考えたりしてきたか，育児についてサポートがあったか，③育児をどのように捉えているか，④自分の過去・現在・未来など，自由に語ってもらった。なお，いつでも，面接を途中でやめることができることなど伝え，倫理的な配慮をしながら進めた。なお，調査は 2010 年 12 月―2011 年 2 月に行われた。

表Ⅵ-1-1　質問内容

ライフコースを決める時の状況や気持ち
妊娠から出産を経て現在の生活に至るまでの気持ち
育児についてサポートがあったか（夫、親、友人、地域など）
虐待についてどう思うか
自分にとって子育てとは？
子育てをしている現在という時期について（自分の過去・現在・未来の中で）
自分の将来について（10年先、もっと先について）
育児中の後輩ママにひと言

3. 結果

調査協力者のプロフィールと質問紙調査の結果を表Ⅵ-1-1 に示す。16 名を，希望したライフコースと現実のライフコースが一致・不一致の 2 群に分類した。ライフコース一致群 9 名，ライフコース不一致群 7 名に分類された。そのうち，それぞれの群の特徴を面接調査から把握するためにを各群 6 名ずつ計 12 名を選定した。その選定基準は不一致群で育児負担感得点の高い 4 名の中から育児負担感得点が一番低かった G をはずし，一致群で育児負担感が低い 6 名の中から，育児負担感得点が一番高い i と，低い o，p をはずした。選定した 12 名は育児負担感得点が 55 点から 61 点と 36 点から 41 点の幅で分布する。2 群は，不一致群（A，B，D ，h，l，m），一致群（C，E，F ，j，k，n）である。群ごとの調査協力者の語りに共通性があるかを把握するため，結果を 6 名ずつの事例として記述し，考察はライフコースに着目してまとめて記述する。

母親のライフコース決定の語りを示し，さらに語りの中でライフコース選択の基準になったキーワードをとりあげ，表の中に示した（表Ⅵ-1-3，Ⅵ-1-4，Ⅵ-1-5，Ⅵ-1-6）。

表Ⅵ-1-2 面接協力者のプロフィール

	年齢	子の年齢	性別	家族	学歴	希望のライフコース	現実のライフコース	ライフコース一致・不一致	生きがい 1子育て	2仕事	3趣味	4地域	5模索	閉塞感・犠牲感	疲労感	自信なさ	離反願望	**育児負担感**	自己決定	決定欲求	差	現在の充実感	将来の目標	過去の受容	将来の希望	時間的展望
A	30代	3,1	ff	核	高	Ⅲ	Ⅳ	不	1		3			23	14	13	11	**61**	22	34	12	9	20	7	8	44
B	40代	2	f	核	大	Ⅰ	Ⅳ	不		2			5	20	12	15	12	**59**	23	48	25	10	21	7	16	54
D	30代	5,1	fm	核	短	Ⅰ	Ⅱ	不	1	2				18	14	14	12	**58**	27	34	7	15	10	10	12	47
C	30代	3,2	f.m	核	大	Ⅲ	Ⅲ	一致					5	20	14	12	12	**58**	26	40	14	13	14	13	15	55
E	30代	3,2	mm	核	専門	Ⅰ	Ⅰ	一致	1	2	3			20	13	12	12	**57**	32	42	10	15	13	13	13	54
F	30代	3	f	核	短	Ⅱ	Ⅱ	一致					5	20	10	14	11	**55**	28	32	4	12	7	11	12	42
h	30代	1	f	核	短	Ⅰ	Ⅲ	不	1		3			10	10	11	10	**41**	39	37	-2	18	19	20	20	77
l	30代	6,2	m,f	核	大	Ⅰ	Ⅲ	不	1		3			9	9	11	9	**38**	40	48	8	25	21	20	18	84
m	30代	3,1	m,m	核	大	Ⅰ	Ⅳ	不	1			4		13	10	8	7	**38**	34	46	12	24	21	20	20	85
j	30代	1	f	核	短	Ⅲ	Ⅲ	一致	1					12	10	10	7	**39**	38	46	8	19	19	18	17	73
k	30代	6,3	f,m	核	短	Ⅲ	Ⅲ	一致			3			11	7	11	10	**39**	34	35	1	16	10	20	17	63
n	30代	3	f	核	大	Ⅳ	Ⅳ	一致	1		3	4		12	7	8	9	**36**	35	45	10	20	14	14	18	66
G	30代	3	m	核	短	Ⅳ	Ⅰ	不		2				15	15	12	10	**52**	28	45	17	12	13	10	11	46
i	30代	0	m,f	核	大	Ⅰ	Ⅰ	一致	1					15	11	9	5	**40**	43	53	10	22	17	15	15	69
o	20代	2,0	f,m	核	高	Ⅲ	Ⅲ	一致	1		3			10	9	8	7	**34**	23	26	3	23	20	10	13	66
p	30代	0	m	核	大	Ⅲ	Ⅲ	一致	1		3			6	8	5	7	**26**	39	40	1	25	21	20	16	82

(1) ライフコース不一致群の母親

希望と現実のライフコースが不一致である A,B,D,h,l,m を検討する。

A は妊娠と同時に喘息が悪化しており，仕事を辞めて専業主婦をしている。質問紙には専業主婦を希望していたと書かれていたが，面接の語りの中では夫が専業主婦を望んでいて，A 自身は子どもができても産休が取りやすい職場に変えて仕事を継続したいと思って

いたことが語られた。喘息のため，今のところは諦めて折り合いをつけているが，体調が落ち着き，子どもが成長したら，仕事を再開したいと考えている。ライフコース決定のキーワードとして「夫の希望」「子ども」「病気」をとりあげた。

Bは夫と同じ職場で働いていたが，転勤と出産後の育児が重なり，仕事を辞めている。しかも，転居先で夫の父親との同居の生活が始まる。仕事を続けていたかったがしかたがないという諦めもある。それでも，心理カウンセラーという新たな道で，転勤に対応できるように自分の仕事を開拓している。キーワードは転勤の時に育児が始まったことから，「転勤」「タイミング」とした。

Dは，転職をして仕事を始めようとしたところで，妊娠がわかる。できちゃった婚と語っている。その後は，子どもを産んだばかりでは職場もなかなか見つからず，早く帰れる職場など，仕事を条件で探そうと思ったらなかなか見つからず，就業継続を希望していたが，できなかったと語る。キーワードは「子ども（妊娠)」,「職場の条件」とした。

hは転勤で夫について仕事を辞めてX市に来る。職安などで技術を身につけて，仕事を探そうと思った矢先に妊娠した。このタイミングに何か意味があるのではないかと感じている。以前やっていた仕事をこちらで営業してやろうとしたら，小さな子どもがいたのでは難しく，仕事も夜11時まであるようなハードなものだったので，結婚してそこまで夫は望まないのではないかと夫のことも考えている様子である。キーワードは「転勤」「仕事内容」「夫の望み」「子ども」「タイミング」「意味」。

1は，社内恋愛で結婚し，夫が上司に当たるので，結婚退職ということにした。しかも，辞めた職場は1にとって，辞めたかった職場なので，1としては辞めたことに対する後悔のようなものはない。ずっと仕事を続けたい希望はあっても勤めていた職場ではないことがわかる。キーワードは「社内恋愛」「辞めたかった」。

mは，結婚しても仕事を続け，他県から通うが，2年後，正社員を辞めて契約になり，夫と同じ県に住むことになった。その後，妊娠し，産休もあると言われたが，職場に迷惑をかけられない，子どもに無理はかけられないという思いもあり，契約社員を辞める。キーワードは「職場迷惑」「子ども」である。

A,B,Dの3例が決定したライフコースは本人の希望通りではなく，そのことに対して不満を感じている様子が窺われた。

h,l,m の3例のうち，1例は仕事を持って生きたい願望はあっても辞めたい職場であったことから仕事に対する未練はない。他の2例は，仕事を続けたい意志があったにもかかわらず，1例は子どもができたことにタイミングや意味を見い出し，もう1例は職場や子供に迷惑をかけれないと自分の意志でやめており，自分の中でおさまりがついている様子だった。

(2) ライフコース一致群の母親

希望と現実のライフコースが一致しているC,E,F,j,k,nを検討する。

Cは結婚してから，夫の転勤のため始めから自分の仕事も短期のアルバイトで調整し，職場に迷惑をかけないように出産まで職場を転々としてきた。ライフコースの選択として，子どもを預けてまで働くメリットはないため専業主婦をしていると語った。キーワードは，「転勤」「子ども」「職場迷惑」にした。

Eは就業継続で仕事を続けていたが，夫の転勤で職場を変えていた。専門の仕事は夜，

アルバイトで働いていた。試験を受けて民間から大学病院に入った研究職から，離れたことに対する悶々とした気持ちが存在することは伝わってきた。就業継続をすることに対しては，社会と繋がっていたいことや，収入を自分で得たいことも語られた。キーワードは「転勤」「社会との繋がり」「扶養」とした。

F は夫の転勤で仕事を辞め，辞めたくなかった，女性はあきらめなきゃいけないということを語っている。キーワードは「転勤」とした。

j は夫の転勤で 10 年勤めた仕事を辞めているが，仕事はもう十分という気持ちがあること，子どもを預けてまで働く気がないこと，自分の母親もそうだったと語っている。キーワードは「環境（転勤)」「子ども」「親の影響」とした。

k は保育士だったため，子どもは自分で育てたいと思い，専業主婦になった。キーワードは「子ども」とした。

n は,仕事をしながら子育てをしたのでは子どもの成長をみられないという思いと親と 3 歳まで一緒にいたという自分の経験も語られた。キーワードは「子ども」「親の影響」とした。

C,E,F の 3 例は就業形態は希望通りであるが，職場が変わっていたり，夫の転勤にあわせて短い期間だけ働ける職場にいたり，決定したライフコースの内容が本人の希望通りではなかった。

j,k,n の 3 例は子どもが小さいうちは自分で子どもを育てたいという気持ちがあった。

表Ⅵ-1-3 乳幼児を持つ母親のライフコース決定の文脈

		希望コース	現実コース	ライフコース決定の文脈	キーワード【選択】
不一致群	A	Ⅲ専業主婦型（Ⅰ就業継続型）	Ⅳ再就職希望型	・専業主婦、だんなは専業主婦の方がいいと、まあ私も本当は働きに行きたかったんですけれども、体がこんな調子なんで、しばらくは専業主婦かな。中学生・高校生くらいに、小学生だとちょっと寂しい思いさせそうなので。それくらいになれば行ってもいいかなくらいを。一日中家にこもるのも、息が詰まりますしね。 ・結婚してからもパートで働きに行ってたんですけど、もう歩けないので妊娠して辞めましたね。本当はそこ、全然産休とかも取りやすいんですけど、続けるつもりだったんですけどね。妊娠しても働き続けるようなところに職を変えたんで。仕事もしたかったし、せっかくそのつもりで始めた職場なのに。産後もねえ、子育てしながら働きやすい職場って、望み通りのところに入ったつもりが。へこみますね。	夫の希望 子ども 病気
	B	Ⅰ就業継続型	Ⅳ再就職希望型	・前していた仕事は、もちろん続けたかったですが、職場結婚で、転勤でこっちにきたんですけど、こちらの支社で前は働くこと、できたんですけど、ま、ちょっと今、難しい状況になっていて、そちらにはもう、戻れないので、別の仕事をしようと思っていて、それが、心理カウンセリングなんですけど・・・それは、もう7、8年くらい続けていて、・・・時々、知り合い系というのでやったりもするんですけど、まだ、軌道に乗せてやってるという感じではなくて、まだ、お勉強というとかトレーニングとかメインにしていこうと思って。 ・仕事をやめたのと育児が始まったのがほぼ同時っぽい感じですね。やめざるを得ない、物理的にも・・・子どもができてしまったし・・・転勤というのは物理的な理由なので仕方ないという・・・ぶつくさ文句言ってたんですけど・・・子どもが関東で生まれたとしても、なんだかんだ言って続けていきたい仕事ではあったんです。ま、それは、いろんなタイミングでできなかったということですか・・・	転勤 タイミング
	D	Ⅰ就業継続型	Ⅱ再就職型	・仕事はもともと短大卒業して営業やっていて、ちょっと違う仕事に向かおうかなと思った時に、お腹に居るっていうのがわかって。できちゃったなんですよ、一人目はですね。 ・仕事ができないじゃんみたいな、でそういう子どもができてしまうと普通に仕事ができないですよね。すぐ休める所じゃないといけないとか、いろんな条件が出てくるから。	子ども（妊娠） 職場条件

不一致群	h	Ⅰ就業継続型	Ⅲ専業主婦型	・私の場合は転勤でこっちに来ていて、ちょうどX県に来て一年目で妊娠をした。本当は仕事をしようと思っていた矢先に妊娠したので、もうこれは専業主婦だなあと・・ ・前の仕事がちょっと制作の仕事だったんで、徹夜したりとか、連ちゃんで帰ってこれなかったりとかいうこともあったんで、こちらで紹介してもらったのもそんな感じだったので、・・・結婚して、彼もそこまでは望んでいなかったので。制作とかあっちの仕事というのは、子どもがいる状態だとなかなか受けてくれないし、じゃ、フリーでやるとなるとこちらではまだ人脈を作ってなかったので、もうこれは専業主婦にならざるを得ないなあと自分でももう、わり切っちゃいました。 ・どこで折り合いをつけるかっていうのを・・・・子どもが生まれたことで学べたというか・・・・欲張っちゃいかんじゃないですけど…自分のためには十分生きたので…と思えるように妊婦の時になれたんで・・・ ・30まで仕事をしっかりやったから、それからは仕事じゃないところをしっかりやろうと自分でうすうす気がついて・・・あったのかもしれないですね。 それの決定の一番の要因は子どもだったのかもしれません。制作系の仕事は一応採していて、一年たって始めようと思っていたんですけど、そのときにちょうど妊娠したので、ああ、これはもうやらんでいいことかもしれんて・・・いろんなタイミングというのがあって、それはきっと意味があるかもしれないって思っている。 ・多分、何かの区切りできた声かけだったり、自分の意志は多分外れないなあという、そういうふうな縁とか運とか大きいですね、それに乗ってやるというか。	転勤 仕事内容 夫の望み 子ども タイミング 意味
	l	Ⅰ就業継続型	Ⅲ専業主婦型	・社内恋愛だったので、もともと・・・やりずらくなったので・・・主人が上の立場だったので。他の人たちも私に接しにくくなるし・・私も仕事がやめたかったので、いいきっかけだし・・ ・もともと仕事やめてから結婚したので、・・・結婚を期に仕事をやめたから、まず、専業主婦から始まった。	社内恋愛 辞めたかった
	m	Ⅰ就業継続型	Ⅳ再就職希望型	・結婚して4年目に子どもができたんですね。5年目に生まれたんです。ちょっと間があいたんです。その間はちょっと仕事をしてたんですけど・・・・最初、私はX県で仕事をしていて、主人はY県だったので、結婚して2年くらいは、かよってたんですよ。それもちょっと出産を考えると、難しいかもしれないということで、いったん仕事をやめて、契約という形でX県で仕事に就いたんですよね。契約で1年働いて、育児休暇もありますよ。産休もありますよという話はいただいたんですけど、やっぱり子供抱えて仕事するには迷惑かける部分もある仕事だったので、あきらめて専業主婦になったという経緯があったんですね。生まれてしまったら、子どもは無理はできないからということでやめました。7ヶ月くらいたってやめた。	職場迷惑 子ども

表Ⅵ-1-5 乳幼児を持つ母親のライフコース決定の文脈

		希望コース	現実コース	ライフコース決定の文脈	キーワード【選択】
一致群	C	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・夫が転勤があるんですよ。その都合でいつ転勤になるかわからないので、ちゃんとした仕事は永住先が決まるまではできないだろうなと思っていた。とりあえずは子どもがまだ小さいので、預けてまで働くメリットがあんまりないので、たぶん当面は専業主婦ということにしてるんだと思います。 ・物理的に転勤があるので、ご迷惑がかかるので、子どもができるまでも短期のアルバイトのようなこと。6か月とか3ヶ月とか決まったやつしかしていないんですよね。妊娠して辞めたんじゃなくて、期限付きをもともとしてたので、うまい具合に妊娠してすぐ辞めた感じですね、期限切れで。主人の転勤が7月なので、6月までとかそういうバイトをわざと選んで、あんまり迷惑かかるので。	転勤 子ども 職場迷惑
	E	Ⅰ就業継続型	Ⅰ就業継続型	・ずっと続けてます。そのかわり時間が短くなったりとか、正社員からパートになったりとか、雇用が変わってはいるけど、とりあえずなんとか続けています。結婚と同時にこっちに来て、正社員とパートを掛け持ちしてたけど、出産一年後にパートになった。すぐ二人目を妊娠したので。 ・やめたときには急に取り残された気分がして‥やっぱりいやだというのがあったんだと思います。社会から置いて行かれる見たいな…今まで自分で稼いできて、自分でやってきて、好きなものも買ってというのがあって･･･それが収入が自分の収入が全くなくなったら･･･全部主人からお金をもらってみたいな･･･それも許せないみたいな･･･	転勤 社会との繋がり 扶養
	F	Ⅱ再就職型	Ⅱ再就職型	・主人の転勤で、まあやめざるを得なくて仕事をやめたんですけどね。福岡に来て、しばらくしたら、子供を授かって2年くらい育てているうちに、やっぱり仕事をしたいなっと思って、社会復帰ということで、パート的に、パートタイム的に探してしてたんですけども。再就職というほど大きなものでもないんですけど。 ・できればやめたくなかったです。女性ってやっぱりあきらめなきゃいけないので。ずっとできれば産休があるような会社でですね。続けたかったんですけど、 ・結婚しても仕事は続けてました。何にも変わらず、ただ住むとこだけ変わっただけで、仕事続けていたんですけど、専門学校に行ったりとか。どちらかというと悠々自適というかあまり仕事とは関わらない生活をしていて、そろそろ仕事探さなきゃともってた時に、子どもを授かって、それどころじゃなくなりました	転勤

表Ⅵ-1-6 乳幼児を持つ母親のライフコース決定の文脈

		希望コース	現実コース	ライフコース決定の文脈	キーワード【選択】
一致群	j	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・結婚するときに、地元を離れて主人の職場の方に来たので、その地元でずっと10年くらい働いていたので、それはそれで十分いいと退職して、家に、・・・専業主婦してたんですけど、子どもができるまで…生まれるまではパートしてました。専業主婦というか、一日4，5時間程度の昼間のパートをずっとしてて、子どもがお腹に入ってからやめたかなあ・・・という感じなんですが、実は、この子が生まれるまで、4年5年かな・・Z県の方で主人と二人で暮らしていたんで、お腹が大きくなって、仕事が変わって、ここに来たんで、ここにきてから仕事探してない，というか・・・・ ・自分はどうしても専業主婦というそういうつもりもなくて、環境がそうさせたというか、もし地元で結婚して、親元が近かったりしたら、もしかしたら、協力が無理なくあればしてたかもしれないけれど、もともと、その働きながら子どもを預けてまで、小さい時にやろうというほどの気持ちは最初からなかった。無理ない程度で働けるなら、やっていきたいかなあくらいの気持ちだったから・・・ま、どちらかというと、専業主婦よりの、もともと親がそうだったから。小さいうちはそうしたいなあというのは。あるね。	環境（転勤） 子ども 親の影響
	k	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・私は保育士だったんです。6年やっていて、3年間が幼稚園、3年間保育園。このときにZ市に移っていて、入籍だけしてたんですけど・・・年長を持っていたので、結婚式を一年遅らせた。もともと子どもができたら、自分で育てようと思っていた。一年終わって結婚式を終えて、3月に退職。	子ども
	n	Ⅳ再就職希望型	Ⅳ再就職希望型	・子供ができるかわからなかったんですね。。2回流産をして、もう子供が生まれてきてくれさえすればいいって、いろいろな思いがある中でふと出来た。 ・出来てくれたので、子供が生まれたら、私の場合仕事しながら子育てとかしたら、その子の成長がぜんぜん見えないくらいばたばたした毎日になるのが、すごいもったいないみたいに思えたので、もう仕事はやめたんですね。 ・自分が3歳まで親と一緒にいたから、なんとなく3歳までは親と一緒にいるものって当たり前のようにたぶん思ってたと思うんですけど。だからあの子が3歳になって、今度の春に年少なんですけどそのあたりで少し自分も子離れとかを考えてて、そうなったときに少し自分の仕事のこととかを考え直そうかなって。でもそれでもやっぱりなんか、今働きに出たりすると私がたとえば50歳とか60歳になったときに、あの一生にほんの少ししかない子育ての時間を仕事のことしか覚えてないなあって思ったら絶対後悔するだろうなあって。 小学生の2－3年生になったときに働き場がきちんとあれば働きたいと思ってるんですけど。	子ども 親の影響

4　考察

(1) ライフコース不一致群の母親

ライフコースが不一致であるA,B,Dの場合，その文脈をみると，病気，夫の転勤，転職，予期せぬ妊娠など，自らライフコースを決定したというより，夫の事情であったり，病気という自分の力の及ばぬ状況に出くわし,自分が意志決定した文脈ではないことがわかる。そのため，自分自身がその事態をなかなか受け止めにくいことが推察された。また，この3人は，育児負担感の得点が高い母親である。

一方，h，l，mの場合，育児負担感の得点が低く，過去の受容得点は20点満点である。lは職場を辞めたかったという本人の希望だったので，ライフコースが不一致とはいえ，ライフコース決定の文脈をみる限り本人が納得して決定していることが示されている。それに反し，hとmは仕事を続けることを望みながら仕事を辞めた経緯がある。hは，仕事を続けようと思い，職業安定所に行って勉強し，終了して仕事を探そうと思った矢先に妊娠がわかる。しかし，このタイミングで妊娠したことに意味を見出している。妊娠により仕事を辞めるという自分に起こった状況を積極的にポジティブに受け止めて健全に明らめていることが窺われた。

また，mは仕事を続けたかったという気持ちが語りの中から伝わってきた。しかし，職場に迷惑をかけることや，実際に育児をしてみて，仕事を続けることによって子どもに無理をかけることはできないと判断し辞めている。mの特徴として他者に迷惑をかけないという考え方があげられ，語りの中でその考え方で自分を統制していける強さのようなものを感じた。統制感は時間的展望と関係があることが杉山（1994）によって示されている。mの時間的展望の総合得点が85点とかなり高く，面接協力者の中で一番高い。仕事を辞めるということが,lのように辞めたかったという訳でもなく,hのようにポジティブに意味づけてはいない。しかし，他者に迷惑をかけられないという考えで自分をコントロールすることにより仕事を辞めたことを納得していると推察された。希望通りいかない自分の人生の歩みをhに見られたように意味づけて積極的にポジティブに受け止めていくことやmのように自分を統制していくことは，過去を納得して受容していくことに繋がることが示唆されたと言えよう。

ライフコースが不一致の場合，必ずしもすべての母親が育児負担感が高いのではなく，たとえ希望したライフコースを選択していなくとも，その選択を意味づけたり，自己統制ができて，ライフコース決定の文脈に納得ゆくことができた場合は，育児負担感が低いことが示唆された。

(2) ライフコース一致群の母親

ライフコースが一致しているC,E,Fにおいて，E,Fはライフコース決定の文脈という視点からみた場合，どちらも希望通り仕事をしているが，夫の転勤に伴い職場を変わり，仕事の内容は自らの希望ではない。できれば,以前の職場にいたかったという気持ちが強く，就業形態は希望通りであるが，職場環境や仕事の内容という意味では本人の希望と違い，望み通りの歩みをしていないことが明らかになった。また，Cも夫の転勤について行くため，仕事は常に短い期間で働き，職場に迷惑がかからないように配慮していた。転勤族の夫の仕事の期間に常に左右され，それは本人の意思とは関係ない。本研究で定義したライフコースの一致は就業形態の一致であって,必ずしも仕事の内容の一致ではないことから，

質問紙調査の限界が感じられた。C,E,F は育児負担感得点が高く，ライフコースの決定は自分が決めたことというよりも状況が決めていたり，自分で決めていても制約されていて納得していないように窺われた。女性の人生には，自分ではコントロールできないような事情に影響されることが多い（野村，1995)。育児負担感が高い母親の場合は，ライフコースの文脈において不満や葛藤があることが示唆された。

j,k,n は，ライフコースが一致していて育児負担感が低い母親で，ライフコース決定の文脈の中で「小さいうちは専業主婦で」（j)，「自分が育てよう」（k)，「子どもの成長がみれないのはもったいない」（n）と子どもを優先させた理由をあげている。子どもを自分自身が育てることを願い，それがかなう環境にあり，自分が望んだライフコースを歩めている母親と言えよう。それゆえ，自分の人生の歩みという視点では葛藤が少ないと考えられる。

第2節　妊娠から現在までの生活における母親の葛藤と育児負担感

1. 目的

乳幼児をもつ母親の妊娠から現在までの生活においてどのような葛藤や育児負担感があるか，その語りから把握し，ライフコースの文脈から検討する。

2. 方法

調査対象者・調査手続き：第Ⅵ章第1節に同じ

調査内容：第Ⅵ章第1節でまとめて書かれてい調査内容のうち，妊娠から現在までの生活について尋ねた。

3. 結果

乳幼児をもつ母親の妊娠から現在までの生活の中で育児に対する感情はどのようなものだったのかを把握するために，自由に語ってもらった内容を育児生活の中で育児負担感を引き起こしているであろう葛藤やストレスフルなことを中心に捉え「」で表し，育児負担感よりポジティブな感情が優位な場合は【】で表した(表Ⅵ-1-7, Ⅵ-1-8, Ⅵ-1-9, Ⅵ-1-10)。

1）ライフコース不一致群の母親

希望と現実のライフコースが不一致であるA,B,D,h,l,mを検討する。

Aは,妊娠したことにより喘息がひどくなり,家からほとんど外出できない状態になる。4～5年で自分で外出したのは1回という状況である。子どもを周囲から産むようにせかされたこともあり，産んだものの仕事をもっとしたかったこと，今の状態のようになるのであればもう少し遅くてよかったのではないかという葛藤があった。並大抵ではないストレスフルな生活を送っていた。キーワードは「病気」「不本意な出産」「仕事をしたかった」「外出ができない」とした。

Bは，それほど子どもがほしかったという訳ではなく，仕事が楽しかったので続けていけたらいいなという希望があった。始めの転勤で義理の父との同居生活にストレスを感じている。毎日，義理の父の食事を3食作りながら，初めての子どもを育てるという生活にイライラを感じているが，積極的に外出している。さらに次の転勤では義理の父と離れたものの，新しい土地で友人もできずマンションで子どもと二人の生活が始まる。イライラがたまると思い，子どもを保育園に預けたりアルバイトを始めてセルフコントロールしている。キーワードは,「仕事を続けたかった」「義理の父の食事の世話」「転居後の生活」とした。

Dは二人目も想定外の妊娠で早産してしまう。Dは長い間，摂食障害を抱えながら生活してきていることを後から語る。子どもが未熟児であったため，1年間は手元で育てるように医師から言われており，仕事をしたいという気持ちと葛藤があった。キーワードは「望まぬ出産」「仕事をしたい」とした。

hは想定外でも子どもができたことを喜び，なれない家事を積極的にこなしている様子が感じられた。子どもは生まれたらやるしかないと前向きに取り組んでいる印象を受けた。

毎日，欲望と戦っていると語っている。キーワードは「やるしかない」とした。

1 は子育てをして，初めの子どもは余裕がなく，しつけなど厳しくしてしまったこと，二人目は余裕ができてあまり気にせず育てることができた。一人目の子は二人目を出産すると，2 年間近くオネショが治らなかったと語る。その一方で，子育てをしていると社会から取り残されるのではないかという不安も感じていた，キーワードは「一人目の子の育て方」「社会から取り残される不安」とした。

mは子育て中に社会と繋がりがないことや経済的拠り所がないことを感じ，仕事を残しておくべきだったと思っている。実際に仕事も探している。その一方で布おむつで二人を育てるなど小さな目標を立てて自分に挑戦している姿があった。キーワードは「仕事をしたかった」と葛藤ではないが【小さな目標布おむつ】とした。

A,B,D は仕事をしたかったことを語り，h,l,m からは育児にコミットした話題が出た。

2）ライフコース一致群の母親

希望と現実のライフコースが一致している C,E,F ，j,k,n を検討する。

C,E,F は就業形態は希望通り一致していたが，夫の転勤で短期間しか働けなかったり，職場を変えたり，実際は望んだライフコースではないことが示唆されている。

C は子どもを流産し不育治療を受けた結果，子どもが生まれたので嬉しくてしょうがないと語られている。ただ，産後，実家に帰っても落ち着かず，自分の家に戻ってホッとしている。田舎に転居する前は，子どもを連れていろいろなところに出かけて充実した毎日を過ごしていたが，転勤で田舎に引っ越してからは不便で，家にこもりがちでストレスフルだったと語る。キーワードは「実家」「田舎」「家にこもる」とした。

E は出産の一日前まで仕事をしており，出産後も数ヶ月で職場に復帰している。産後，子どもと二人で家にいる生活はイライラもたまるし，泣く子をどうしたらいいかわからないという生活を送っていたので，ベビーシッターが来て，自由に外に出れるようになった時は嬉しかったと語る。しかし，仕事を始めて朝早くから夜遅くまで保育園に子どもを預ける生活は，子どもが親として自分をみないことに葛藤を覚えている様子である。キーワードは「自由のなさ」「親とみなされない」とした。

F は妊娠中は有意義に過ごせたけれど，生まれてからはこんなに大変だと思わなかったと語る。予定度通りにはすすまず，どうしてと思っているうちに一日が過ぎていった様子が窺われる。子どもをぐるぐる巻きにして外出したり，自分が人と話せればいいと積極的に外に出た。その後は，仕事に復帰したいという気持ちが強く，職種を選ばすに再就職する。キーワードは「育児の大変さ」「外出したい」「仕事復帰」とした。

j は妊娠中は引っ越しの準備で忙しくバタバタしているうちに子どもが生まれ，生まれてからは必至で無我夢中で育てているうちに 1 才になり，今は楽しいと語られた。一生懸命子どもを育てているうちに現在に至った印象。葛藤が少ないことが予想され，キーワードは葛藤ではなく【無我夢中】【楽しい】とした。

k は，妊娠していろいろなことができなくなったことにストレスを感じていた。保育士だったこともあり自分がストレスを感じるとはまさか思わなかった。友達と会うこともなく，家にいて寂しさを感じるが，公民館のサークル活動で友達ができ，元気を回復していく。その後，ダンスにも出会い，新たな夢も持つようになる。キーワードは「できなくなること」とした。

nは，子どもができないと思っていたのに妊娠し，流産しそうにもなるが無事出産する。出産後も寝れなかったりきつい時もあるが，子どもが自分のもとに来てくれたという思いがある。キーワードは葛藤ではなくnの育児生活を表す【来てくれた】とした。

C,E,F の3人は，一時的に家にこもることにストレスを感じている。

j,k,n の3人のうちkには、いろいろなことができなくなった葛藤があるが、 jやnには葛藤が少なく，育児生活に楽しさを見い出していた。

表Ⅵ-1-7 乳幼児を持つ母親の妊娠から現在までの生活と育児感情

		希望コース	現実コース	妊娠～現在	キーワード 葛藤
不一致群	A	Ⅲ専業主婦型（Ⅰ就業継続型）	Ⅳ再就職希望型	・喘息が妊娠出産でだいぶひどくなったんで、今はだいぶ治まったんですけどね。歩くことも、ままならないくらいだったんで。 ・上の子の時の方がひどかったかな。もうちょっと遅くてよかったかなというのがあったので、仕事したかったから。なのでその葛藤はありましたね。早く子ども産め産めといわれてるのと、まだ仕事したいというのと、葛藤があって、いきなり歩けないぐらいひどくなってもう本当に家にこもりっきりだったんで、もう相当ストレスがたまってましたしねえ。それで全身アトピーがグアーっとでたりとか髪とかもバサバサ抜けるし、ストレスですかねえとか言われて。 ・ここ4－5年間、休みの日はだんなに車出してもらえるんですけど、平日は自分で外出することは1回だけだったかな。健診とか病院とかって、それ以外は出たことない。	病気 不本意な出産 仕事をしたかった 外出できない
	B	Ⅰ就業継続型	Ⅳ再就職希望型	・妊娠中はブルーといえばブルーでしたけどね・・・あまり、望んでたとか欲しかったという訳でもなかったので・・・うちの旦那は13上で再婚だから。なので、子どもいらないとか、仕事ずっととか・・バリバリした感じではなかったけれども・・何となくこう、ゆるゆると・・仕事楽しかったし・・・ともて満足してたので。 ・子どもにイライラし始めたのは、しゃべりだしてから。1歳くらいまでは、イライラはおじいちゃんに向けられてましたね。ご飯ご飯ご飯・・・お昼晩お昼晩・・・てね。 ・毎日、どこかしら出かけるようにして、近所にあった子育てサロンみたいなところも毎日毎日通った。 ・(転居後)最初の2，3ヶ月は、前よりもっと密室になっちゃんたんです。やっぱりマンションになって、おじいちゃんがいなくて、お友達もまだいないし、それまで作ってきた関係性とか、毎日のリズムとかもなくなっちゃったんで、結構、そうなると、こうイライラが当たる。子どもは、反抗期っぽくなってくる。これは、お互いのためにまずいぞって、とにかくどこかに預けてあげなきゃまずいと思って、保育園をちょっと探したんですね。自分の就職を考えながら・・・。	仕事を続けたかった 義理の父の食事の世話 転居後の生活
	D	Ⅰ就業継続型	Ⅱ再就職型	・ありえない二人目でしたね。妊婦って幸せってイメージがあるじゃないですか。私はもう、妊婦になることでもう嫌になってたまらないというか、つわりから、頭痛もひどくなるし，寝ないと頭痛くて耐えられなくなるんですよ。一人目はすごくかわいいやろと思って、子ども欲しいと思ってたから、がんばりました。頑張ったんだけど、二人目のときは、もう頭は痛いし腰は痛いし、なんか体調悪いし全然幸せじゃない、早く出てきたらいいのにって。だから二人目早産したんですけどね。 ・1歳8カ月までの二人の生活ですよね。朝起きたらもう、こうしてこうしていかないかんていう、だいたいの生活パターンがあって、やっぱりなんとなく自分は社会と離れてるなっていう気持ちはありました。でも主人とかが仕事から帰ってきて、やっぱり仕事をしてる方が何となくいいなあ、良いよねえって思ってました。ずっと何かそれの気持ちはありましたね。なんとなく。	望まぬ出産 仕事をしたい

表Ⅵ-1-8　乳幼児を持つ母親の妊娠から現在までの生活と育児感情

		希望コース	現実コース	妊娠～現在	キーワード 葛藤
不一致群	h	Ⅰ就業継続型	Ⅲ専業主婦型	・一応子どもがほしかったんで、想定外でも嬉しかったですね。 ・家事が全くできなくてアイロンのかけ方もわかんなかったんですけど、主人に教わったりとかしてたんで、自分の中の欠けた部分を埋める期間だと思っていて・・・なかなか専業主婦も悪くないなあと・・・楽しくて楽しくて・・・ ・子育ては楽なもんだと勝手に思っていたもので・・・勝手に子どもは寝てくれると思ったらそうでもないしとかね・・・ ・やるしかないというか・・・子どもが生まれるとやるしかない。・・でも、またとなりの芝生が気になってしまうというか・・・やっぱりね、働いてい海外旅行行ってきたなんて、やっぱりうらやましいってあるよね。日々、そういう欲望と戦ってる感じですよね。 ・この子の気持ちとか飽きることとか、こんな冷や冷やした気分でお茶を飲んでたのか、本当か、みんな・・そういうのって、子どもがうまれてから・・・社会で起きることを子どもの目線を通して、見れるようになったのかもしれません。	やるしかない
	l	Ⅰ就業継続型	Ⅲ専業主婦型	・最初って、いっぱいいっぱいだったと思うんですね。かわいいとは思うけど、毎日毎日が戦いじゃないけど、二人目は余裕がある。何しても、ああってわらったりできるくらいだから、一人目の時は、何かちゃんと育てなきゃっというのがあって・・・あの食事中にたったらダメっとか・・・こぼしたらダメっとか・・やっぱりあれこれ言いすぎたから、結構石橋をたたいて渡るタイプの子なんですよね。 ・二番目が生まれてから、お兄ちゃんのおねしょが始まったりとか、ちょっとした事で泣いちゃったりとか・・・・情緒が乱れて・・・今、年長さんなんだけど、今もそれが続いて、やっとおねしょをしてないんですけど、2年間おねしょが治らなかったんですよ ・ブランクがあけばあくほど怖くないですか？ 社会から取り残されてるんじゃないか・・一番、結構、大学卒業して2年だから、他の大学の友達は、バリバリ仕事してて、旅行行ったりとか、飲み会とか夜、出たりする中で、自分だけ本当に家にずっといるじゃないですか・・・ほんとに不安で、何か、私いいのかな・・・やっと今くらいから、友達が結婚して第1子が生まれ始めたから、何かちょっと主婦の先輩と言うか、子育ての先輩として付き合えるようにはなったんですけど・・・・その5年くらいは不安で不安で、自分だけ呼ばれないのは寂しいし、それは自分が選んだ道なんだけど、・・・・。	一人目の子の育て方 社会から取り残される不安
	m	Ⅰ就業継続型	Ⅳ再就職希望型	・産んでみるまでは、状況が見えないので、自分でも適応できると思って見てたんですけど、産んで育ててみると、案外経済的拠り所がないこととか、社会的つながりがないこととかはやめなきゃよかった。どこかで残しておくべだったなあという思いにはなりましたね。 ・二人目を産む前とかは、仕事をしたい何かしたいと思って・・・ハローワークに行ってみたこともあるし、試験を受けてみたこともあるんですよね。手が離れた時、自分が辛いような気がして・・・何もないって ・それに戻った時に通用するのかという不安も・・仕事やめて前の仕事に戻るとしたら、3年のブランクが限界かなあと思っていたので、その頃はそうとう考えました。今、つきぬけてしまって・・・二人もできたし・・という感じで、・・もうちょっとしてから考えてもいいのかなあと思えるようになっては来たんですけど・・ばりばり働こうかと思ったら、ちょっとブランクがあると・・ ・子育てについても手抜きしていいんだと・・・言われて始めて楽になる部分もあるし・・・育児書見ても、講座何かいっても、出しは一から取ってとか・・・テレビは見せちゃだめとか・・・食事の後、30分お風呂に入れませんとか・・・・間に受けて生活してたら、本当、無理と思って・・・・ ・一応、どっちも布おむつで育てたんですけど・・・・それは、逆に楽しかった。意外とできるじゃんという自分の自信にも繋がりました。逆に難しいことに挑戦しているという自分の中の挑戦みたいなところでは自信に繋がったりとか・・小さき目標でも、自分で建てた目標に対する達成感。全部は無理でも、ひとつはできると・・・おむつだ。それ以外は手抜きしようと・・	仕事をしたかった 【小さな目標 布おむつ】

表VI-1-9 乳幼児を持つ母親の妊娠から現在までの生活と育児感情

		希望コース	現実コース	妊娠～現在	キーワード 葛藤
一致群	C	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・2回流産しているんですよ。それで不育治療っていうんですか、不妊とはまた違うんですけど。治療をしてすぐ授かったので。病院通い始めて3ヶ月くらいで妊娠したんですよ。だから逆に嬉しくて。やっとできたみたいな。なんかこう夢を描くじゃないですか。赤ちゃん生まれたらあんなことしたいなあ、想像だけですけど。それが楽しくて。 ・実家に帰ってても、母が1カ月入院してしまって、ちょうど帰ってきたときに。全部自分でやらなければならなかったので、逆に戻ってきた方が楽しくて。 ・W県に転勤になって急に環境が変わったの、ちょっと大変だったんです。X県と違ってとても田舎なので、車がないと何もできなくって。運転してなかったので、バスも3時間に1本しかないようなところに子どもプラザみたいなのがあるんですよ。結構こもりっきりでしてね。まあ近所の砂場くらいに行くくらい。たまーに公民館で集まりが、一月に1回あってたまに参加するくらい。	実家 田舎 家にこもる
	E	Ⅰ就業継続型	Ⅰ就業継続型	・その時はまだ、子どもに対する愛着とか愛情とかないんですよ。まだ、実はたぶん。お腹にいるし、見たこともないし、‥まだ自分合って子どもみたいな・ ・出産の1週間前に休みもらったんですけど、次の日には出産しました。 ・初めての子どもで不安が多くて。精神的にいらいらはしてました。最初は。何をどうしたらいいのかわからなくて。しかも出ちゃいけないって言われてたから。先生たちに。首が座るまでは、外にも出しちゃいけないって。家でじっとして。今まで外にずっと出てたから。しゃべり相手もいない。主人も夜遅く帰ってくるみたいな。一人で…泣く子をどうすればいいだろうみたいな。ミルクばっかり飲ませるわけにはいかないし・・・。 ・逆に子どもを預けてる時の方がホッとしました。逆になんか解放されたみたいな・・・シッターさんがきて、自分が外に出るときは嬉しくて逆に、これでいろんな人たちとしゃべれるとか。職場にちょっと顔を出せるとか。外の空気を吸える。自由になれる。そっちの方がうれしかった記憶が。逆に。 ・預けててかわいそうなんですよ。やっぱり。朝、早く預けて、連れて帰ってお風呂に入れて寝かせるだけ。ご飯も朝昼晩も向こうで食べて、・・・・結局親として見ないんですよ。	自由のなさ 親とみなされない
	F	Ⅱ再就職型	Ⅱ再就職型	・早産気味で入院することになってしまって、入院中にラジオ講座で勉強してたんです。 ・生まれてみたら違いました。こんなに大変なんて知らなかった。妊娠中は結構、有意義に過ごしたかなあて、気はするんですけどね。 ・今、考えると一番動きやすかった時期で、ま。自分の買い物とかもできたりとか、デパートとかもうろうろしてましたね。10月生まれで3ヶ月だと寒いので、ぐるぐる巻きにしてベビーカーで出てましたね。あれが産後うつだったのかなって思います。ちょっとおかしかったですね。3ヶ月くらいまでは。その後は、とにかく子供は話せなくても私が話せればいいという感覚で、例えば児童館といいますか。 ・すべてが本当に想像ができなかったことというか,自分のペースですべてが運ばない、もう理屈じゃない。なんでってことが、ほぼ一日中なんでと思ってるような感じで、ほとんど自分の時間がなくなって、でもやっぱ片隅には仕事したいなあって、いう思いはありました。だから結構、産休ですぐ復帰したりだとか、うらやましいなあと思ってはいましたね。やっぱり、きついですよね。勉強する時間とかは全然なくなりました。周りに身寄りはないので、引っ越してきたので、すべて一人でやらなくちゃいけなくて、大変でしたね。 ・一番2歳でこう手がかかって。すごく取り残されたような社会から。とにかく社会復帰しなきゃ、もう職種とか言うよりも、条件ですね。融通がきいたり、子どもが小さいから、そういうところから入っていったので、本当にしたい仕事かといったらそうじゃなかったり。	育児の大変さ 仕事復帰 外出したい

表Ⅵ-1-10　乳幼児を持つ母親の妊娠から現在までの生活と育児感情

		希望コース	現実コース	妊娠～現在	キーワード 葛藤
一致群	j	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・お腹にいたときに、引っ越しでバタバタだったんですね。主人の仕事のことの相談を受けたりとか、引っ越すお家を探さなきゃとか・・・がすごくいっぱいで、妊婦生活を満喫するという、なんかお腹の子どもを慈しむみたいなことは実はなくて、いっぱいいっぱいで、日に日にお腹が大きくなって、で、生まれて始まったという感じ。母親が産後半年間も私の家で過ごして子どもの世話をしてくれた。 ・半年くらいは、たぶん義務だね。生まれて半年くらいは、なんか必至というので、無我夢中で、あんまり覚えてないけど・・・・とにかく、おむつおっぱいのお世話だけで・・・なんか、そこにかわいくて仕方ないという余裕もないし、本当、お世話という感じで日々過ぎて、今の方が逆に一緒におしゃべりできるし、かわいいという感じ。 ・前は、この子の泣き声とかに一つ一つびっくりしたり、あっ泣いたから何か泣かせたら、・・・泣く声聞くのがあんまりいやだから、一生懸命だったんだけど・・・もう、この子がいるのが当たり前になった毎日みたいな…1歳前くらいだよね・・・・そういう風になったら…やっぱり気はってたんだと思う・・・それがなくなったから、楽しい・・	【無我夢中】 【楽しい】
	k	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・・私は、子どもができてもストレスなんて感じない。絶対余裕でできると思っていた。でも、最初、子どもが生まれたら、夜も寝られないし、大変。今まで、仕事で突っ張ってきた。急にさみしくなった。ストレス感じてた。妊娠しているときから、一人。友達がいない。みんな仕事してるし…近所も誰もいなかった。お年寄りばかりで、最近やっと家が建ってきたけれど・・・親は近くだけれど、安心だけど、友達と違う。寂しいなあ・・・って。ちょっとブルーだった。 ・やりたいことができなくなるというのがつらかった。本当に寂しかった。友達に会いたいけど、みんな仕事してるし・・・妊娠中から生後3ヶ月くらいまでがきつかった。手伝ってもらったりして、乗り切って、サークルで友達ができて、今は少し楽になった。 ・子どもたちが寝ているときに泣いたりして、発散していたように思う。それぐらいしかできない。自分の時間がなくなったのがストレスだった。どこにも行けないし、旅行にもいけない。できないこと、できなくなったことを子どものせいにしていた。 ・一人目の時は、仕事辞めなきゃよかったって思っていた。子育てはもっと楽しいものと想定していた。マイナス思考になっていた ・夫が「一生懸命だから悩む」と言ってくれた ・二人目の時は、妊娠中から違う。もう、出歩いてました	できなくなること
	n	Ⅳ再就職希望型	Ⅳ再就職希望型	・何度か出血して、仕事をやめようかなと思ったときもあったけど。8ヶ月まで、9ヶ月に入る手前まで、仕事をした。 ・でもやっぱり最初の頃妊娠が分かったときはなんか突然悲しくなったりとか。今思えばですけど、でもものすごく軽いほうだと思います。ぱんってあったりとか、わーって泣いてしまったりとか。やっぱりあったと思います。多少なりとも、主人にぶつけてました。 ・寝れないのはしんどいって、すごい思ったけど。たぶん私は漠然と子供なんて生まれないと思ってたのに。来てくれただけで、たぶんそれがたぶん、一番大きいのかなって。	【来てくれた】

4　考察

1節でライフコース決定の文脈と育児負担感を検討したところ，希望のライフコースと一致していても，就業形態が一致しているだけで，仕事の内容や職場をかえた場合は不本意なことがあり，時間の経過とともに本来自分が望んでいた歩みでないことに対する葛藤が示された。その場合は，育児負担感が高いことも示され，ライフコース決定の文脈に納得していないことが示唆された（C,E,F)。

また，ライフコースが不一致の場合でも，意味づけたり自分をコントロールすることによって過去を受容し，ライフコース決定の文脈に納得している場合は，育児負担感が低いことも示された（h,j,m)。実際に，専業主婦という生活を送ってみたところ，思ったより快適だったり（h)，出産しても仕事を継続していて職場に迷惑がかかると納得してやめていたり（m)，時間の経過が納得に繋がっていることが示唆された。

そこで,ライフコース決定の文脈から母親の生活における葛藤や育児負担感をを検討するため，ライフコース決定の文脈に納得していない母親A,B,D,C,E,F（育児負担感が高い）とライフコース決定の文脈に納得していた母親h,l,m,j,k,n（育児負担感が低い）に分けて考察することにする。

(1) ライフコース決定の文脈に納得していない母親

A,B,Dは仕事をしたかったという葛藤を抱え,C,E,Fは子どもが小さい時は外出ができないことや転勤先によっては不便で家に引きこもっていなければならなかった生活に精神的ストレスを感じている。D,Fは子どもが2歳近くなってから職種を選ばす，子どもがいても働けるという条件で再就職する。内藤ら（1998）は，現実自己と理想自己の矛盾の程度が自尊感情に影響を与えるという視点から，母親の現実の役割と内面で求めている理想的な役割との間に開きがなければ，母親自身に肯定的な影響を与えると述べた。育児期に仕事を再開した再就職型の母親が，自ら望んで仕事についたのか，あるいは希望した仕事につくことができたのかなど，検討される必要があると第Ⅴ章2節で述べたが，本稿の二人の母親は望んで仕事についてはいるが，希望した仕事にはついていないことが示された。再就職型の母親が自分の理想に近い生活をしているならば，母親に肯定的な影響を与え，自尊感情が高く，育児への自信も高いものと推察されるが，職種を選ばない場合は理想との矛盾が出てくるものと予想される。

また，仕事をしたかったAやBは病気でストレスをためていたり，同居生活や転居後の二人だけの密室の育児にストレスをためている。一方，Cは不育治療で授かった子どもであるということもあり，念願の子どもとの生活を楽しみ，子育てと仕事との葛藤は見られなかった。母親の現実の生活と母親の望む自分のあり方との間のギャップが育児を肯定的に捉えることを困難にさせるという原口ら（2005）の研究をAやBは支持していると言えよう。また，Eは継続して就業しており，保育園に子どもを朝早くから夜遅くまで預けることにより，子どもが親として自分をみないことに対する葛藤を抱えているようだった。仕事を実現しているが，子育てが不十分になることによる葛藤であり，罪悪感に近いものと考えられ，職業を継続している女性に見られる葛藤であった（前川ら，1996)。

ライフコース決定の文脈に納得していない母親の場合について検討したところ，自分の生き方をしたいにもかかわらず育児をすることにより葛藤が生まれている母親は6人中4人いた。該当しない二人のうち，Eは継続して就業をしており，わずか数カ月で職場復帰

している。仕事を休んでいる数ヶ月は育児をすることでストレスを感じているが，仕事を始めると子育てが十分にできない罪悪感に近い葛藤が見られた。C は不育治療で授かった子どもなので，その子どもと過ごす喜びが大きかった。C のように特別な場合を除くと，ライフコースに納得していない母親は，子どもと一緒に過ごすことにストレスを感じていたり，仕事をしたいという葛藤を抱えていた。

(2) ライフコース決定の文脈に納得していた母親

m は仕事と育児の葛藤が存在しており，l には社会から離れている不安がみられたが，h, j, m の 3 人は，子育てをしている日常を語ることが多かった。h は現在を自分のかけた部分をうめる期間だと思い，子どもの目線から社会を見つめることができるようになったと，日々欲望と闘い続ける毎日をポジティブに意味づけている。また，m も布おむつという小さな目標を立て達成していくことで自分を認めているように思われる。武田（1998）が専業主婦になったことにより，自己評価が下がることを指摘したが，小さな身近な目標を立てて，達成していくことは自己評価をあげることにもつながり，育児負担感を軽減する上で重要であることが示唆された。l は二人目も生まれ，一人目の時の育児を振り返るだけの余裕も持てるようになっている。現在の生活で母親が子育てにコミットしていることが窺われた。

j, k, n において，葛藤は k にだけみられた。保育士だった k は望んで専業主婦になり自分で子どもを育てようと思ったが，実際には周囲には友人もなく，仕事もできなくなり，寂しい毎日が続き泣いている状態だったという。夫が「一生懸命だから悩む」と言ってくれたことや，サークルに入り友人ができたこと，ダンスに出会ったことなどで，元気を取り戻していく。名越ら（1997）の母親のライフコースと育児不安の程度との関連の調査では，結婚・出産前に専業主婦を希望していた母親群が，他のライフコースを希望していた母親群と比較して育児不安の程度が有意に高く，その後の母親のライフコース希望は，結婚・出産前と現在では大きな変化がみられ，就業希望へと変化している母親が大多数であったと述べている。k のように専業主婦を望んで家庭に入った女性が予想していた生活とは違う状況があることを，名越らの研究が示していると言えよう。

一方，n は子育てで辛いことがあっても子どもを授かった喜びで n の心の中が満たされていると言えよう。j は 1 才になって子どもが自分の楽しみに変わっている。j の場合は仕事に未練がないことと，自身の母親が産後半年間も j の家で過ごして子どもの世話をしてくれたという恵まれた環境も影響しているものと推察される。この二人に育児と仕事という葛藤は見られなかった。原口ら（2005）が指摘したように，母親の現実の生活と母親の望む自分のあり方との間にギャップが少なく，育児を肯定的に捉えていると考えることができる。

第3節　乳幼児をもつ母親へのサポートと育児負担感

1. 目的

乳幼児をもつ母親の日常生活では，どのようなサポートがあり，母親はどのように受けとめているのかを面接調査を通して把握したい。夫，両親，友達・地域の人々からのサポートの様子を把握し，ライフコースの文脈と育児負担感との関連から検討することを目的とする。

2. 方法

調査対象者・調査手続き：第VI章第1節に同じ

調査内容：第VI章第1節でまとめて書かれてい調査内容のうち，サポートについて尋ねた。夫，両親，友達・地域からのサポートについて。

3. 結果

乳幼児をもつ母親が現在までどのようなサポートを受けたのか把握するために，夫婦間でのサポート，両親や兄弟など家族からのサポート，友達や地域からのサポートの三つに分けて自由に語ってもらった。1例に三つのサポートをまとめて記述する。不一致群（表VI-1-11a，表VI-1-11b，表VI-1-11c　VI-1-12a，VI-1-12b，VI-1-12c)。一致群(VI-1-13a，VI-1-13b，VI-1-13c，VI-1-14a，VI-1-14b，VI-1-14c)。

1）ライフコース不一致群の母親

希望と現実のライフコースが不一致であるA,B,D,h,l,mを検討する。

Aは喘息を患っていたが，夫は忙しく夜遅くにしか帰れないため，手伝ってもらえないストレスがたまってイライラ感を夫に話しても夫にはその気持ちがわからない。ただ，夫がほとんどサポートしない状態でも夫婦関係が険悪にならないのは，料理好きなAを夫が小料理屋の女将に向いているとAを認めている点にあるように思われる。キーワードは「手伝ってもらえない」「わかってもらえない」「小料理屋の女将」とした。両親からのサポートは，実家が遠く，母親が離婚していないこともあり，義理の親に産後子どものお迎えをお願いした程度でほとんどサポートを受けていない。キーワードは「誰も助けてくれない」。喘息のため，友人や地域との繋がりもなく，最近始めたネットのおしゃべりが唯一の交流の場。キーワードは「ネットのおしゃべり」「友達と遊びに行けない」。Aはほとんど誰からもサポートを受けていない状況だった。

Bの夫は，家に帰って来ると何でも手伝ってくれた。ただ，仕事に行って夫がいない間，義理の父との同居生活はストレスフルだった。夫のサポートのキーワードは「協力的」「感謝しなきゃ」である。親のサポートは受けておらず，むしろ，実家の親との関係は心地よいものではなくストレスフルな感じが今もあると語られた。キーワードは「同居が負担」「実家はストレスフル」である。子どもが1歳過ぎてから仲の良い友達ができたが，転勤で新しく住んだマンションでは，社会が出来上がっていて輪に入れない。キーワードは「1歳過ぎてから友達できる」「転居後は友達の輪ができていて入れない」とした。

Dは産後退院しすぐ台所に立ち，夫のお弁当を作っている。産後嫌なことが夫婦間で多かったらしいが，子どもを片親にさせたくないので辛抱したことを語る。キーワードは「産

後も普通に家事」「離婚？」とした。母親を幼いときに亡くしているため，父親が子どもの面倒を見てくれるところもあるが，母への思いが強く，母の死について隠していた父に対して複雑な思いがあった。キーワードは「母への思い」とした。ママ友とは，話をするとほっとするときとうざったい時があるようで，大事な相談は親友にすると語った。キーワードは「話をすることでほっとする」「ママ友ってうざったい」「親友に相談」とした。

h は夫が協力的で，子どもが思うように行かなかったりする時はイライラして，夫に当たる。結婚してから喧嘩が増えたと語る。キーワードは「協力的」「主人にあたる」とした。子どもが生まれて発見したこととして，親が自分のやることを今まで肯定してくれたので，自信を持てたり決断力の一つになっていたことがある。親に頼らず子どもを育て自分が強くなり，甘え過ぎないでよかったと思っていると語った。キーワードは「親が肯定すること」「親に頼っていない」「甘え過ぎないでよかった」とした。親に頼れない代わりに，親に頼れない者同士の絆を強くしていることが多く，車にのせてもらったり，わからないことを上のお母さんに教えてもらったりしている。キーワードは「親を頼れないので絆が強い」「先輩ママが教えてくれる」とした

l は夫が協力的で，日曜日は子どもと遊び，平日も帰りが早いので一緒に食事がとれる。専業主婦をして，資格をとる時も子どもを見てもらったり，夫に感謝している。キーワードは「協力的」「感謝」とした。産後は実の母親が来てくれたり，妹も同じマンションに住んでいたり，家族のサポートがあり，気持ちが楽だと語る。義理の親もほどよい距離間で子どもを分け隔てなく可愛がってもらい感謝している。キーワードは「母が援助」「義理の親にも感謝」とした。産院で友達になった人から勧められ，サークルに入り，周りに恵まれ，住みやすいと語った。キーワードは，「産院の友達」「周りに恵まれている」とした。mは，夫が手伝うことがないことや自分の大変さをわかってもらえないことを語った。最近できたパパ友さんから育児や家事の大変さをやってみてわかったと言われ報われたと語った。キーワードは「手伝ってくれない」「わかってもらえない」とした。実家の母親は遠くて援助してもらえないこと，義理の母親には子どもを預けたくない気持ちがあることを語った。キーワードは「実家の母は遠くて頼みにく」「義理の母とは距離を持ちたい」とした。子どもが生まれてから積極的に外に出たけれど，年配の人の声がストレスになった。子どもの繋がりを持とうと公民館に出て，ママ友と話すようになったのがストレス発散になった。とにかく，ストレスをためないように出回っている。キーワードは「周囲の声がストレス」「ママ友との会話がストレス発散」「ストレスをためないように出回っている」とした。

2）ライフコース一致群の母親

希望と現実のライフコースが一致している C, E, F, j, k, n を検討する。

C は最近は夫が手伝ってくれなくなったが，子どもがもっと小さい時はおむつ替えでも何でもやってくれたと語る。キーワードは「手伝う」とした。実家は田舎なので不便で大変なことも多く，親は離婚していて母が元気にしている。義理の親もまだ仕事をしている。キーワードは「実家は田舎なので大変」とした。マタニティスクールで知り合った友達と親しくしていたこともあるが，ママ友は広く浅い付き合いをしていて，腹を割って話せる友達はいない。キーワードは「マタニティスクールでの出会い」「腹を割って話せる友達はいない」「ママ友は広く浅く」とした。

Eは，夫がそこそこやってくれて，どちらかが子どもを見るような子育ての分担も平等にしていることを語られた。キーワードは「そこそこやってくれる」とした。親は仕事をしているので，3日くらい来て孫の顔を見る程度だが，義理の母親がよく来てストレスがたまる。キーワードは「義理の母親がストレス」とした。公民館には行きたいとも思わない。仕事をしていると場違いという感じがする。保育園のママとは話さない。みんな疲れているので早く帰りたい。たわいもないことは話せても，大事なことは昔からの友達に話す。キーワードは「公民館は場違い」「保育園のママとは話さない」「たわいもないことだけ話す」とした。

Fは，夫の帰りがかなり遅く母子家庭と語る。夫にもう少し気持ちをわかってほしいことも話されたが，子どもを溺愛し，夫なりの援助だと思っている。キーワードは「母子家庭」とした。両親は仕事をしていて頼れる存在ではなく，義理の親は子どもができてから関係がまずくなっている。キーワードは「実家は頼れない」「義理の親はストレス」とした。同じくらいの子どもをもつお母さんと情報交換をして，浅い友達がたくさんできた。サポートと言っても出向かないとない。出向くまでが勇気がいる。話すところがない。子どもにイライラしてそれが自分の中で陰になって閉じこもって子どもに当たって悪循環。キーワードは「浅い友達たくさんできた」「出向かないとサポートない」「話すところがない」「自分の影と悪循環」とした。

jは主人が寂しいかなと語った。二人の生活が長かったので，子どもに気持ちを入れてしまって主人が寂しいんじゃないかと・・・子どもにいらつくというより主人にいらつくと語った。キーワードは「主人が寂しいかな」とした。実家は遠いけれど依存している。里帰りは出産前後一ヶ月半して，母も半年来てくれた。精神的に仲がいい。主人の理解があったからできた．可愛いい時期に子どもを親に見せたかった。キーワードは「実家と仲がいい」「夫の理解ある」とした。サークルに入ったのも大きいけれど，独身の時の友達が遊びに来てくれた。遠くない将来，またその友達と遊んで年配になっても続くのかなと思った。キーワードは「昔の友達との付き合い」とした

kは，夫が理解があると話した。悩んでいたときも『一生懸命だから悩む』と言ってくれた。客観的に見てくれて，やりたい事をやらせてくれる。キーワードは「協力的」「理解ある」とした。母親もそばにいて子どもの面倒を見てくれたり，悩みを聴いてくれた。キーワードは「母に相談」とした。一番元気になれたきっかけは，子育てサークルに入って気のあうメンバーに出会ったことだと語る。今は古カブでサークルのリーダーになっている。サークルは負担が大きく活動する人が少なくなっているが，サロンは人とのつながりが薄い。気軽に相談できる人がいるといい。キーワードは「子育てサークル」「気の合う仲間」「サークルは負担が大きい」「サロンは繋がりうすい」「気軽に相談できるといい」とした。

nは，夫は何もしないので母子家庭みたいと語る。イライラした時も会ったけれど，夫をあてにしないと決めたらほわってなった。キーワードは「母子家庭みたい」「あてにしない」とした。実家は里帰りしても長く居れなくて戻りたくなる。母に求めてしまうけれど，母は自分の親に頼ったことがない人なので，頼らないことにした。キーワードは「里帰りしても戻りたくなる」「母に求める」とした。公民館に初めて行ったとき，輪が出来上がっていて入りにくかったのでしばらく行かなかったけれど，子どもが1歳近くなって友達を

作ろうと思って勇気を出して行った。それから今まで続いていて，今は公民館に恩返しをしたいと考えている。キーワードは「輪が出来上がって入りにくい」「子どもの友達作りのために公民館へ」「公民館へ恩返し」とした。

サポート（夫）

表Ⅴ-1-11a 夫婦関係

		希望コース	現実コース	夫婦関係	キーワード 夫
不一致群	A	Ⅲ専業主婦型（Ⅰ就業継続型）	Ⅳ再就職希望型	・だんなも仕事相当遅いんで。夜12時とかそれくらいが、年間半年はそんな状態で、残り半分が9時10時当たり前。毎日そんなんで。お風呂入れたりとか‥もう大変。手伝ってくれる人もいないし。 ・旦那にも私やばいかもしれない、イライラが溜まり過ぎて、精神科とかそういうとこ行った方がいいのかな、と相談したりとか。まあ旦那のほうは子育てのストレスはあんまりわからないのか、そんな大げさなみたいな。寝れないならまあ、睡眠薬くらいもらえばって。今でも不眠が続くっていうんですか。なかなか寝付きが悪い上にすぐに目が覚めてしまうもんで、それこそ病院行こうかなくらいは考えていますけどね。 ・結婚して十何キロ太らせてしまいましたね。食べさせ過ぎ。旦那はおまえは小料理屋の女将さんに向いているって。	手伝ってもらえない ・わかってもらえない ・小料理屋の女将
	B	Ⅰ就業継続型	Ⅳ再就職希望型	・旦那が協力的だから、文句の言いようがないんですよね。昼間はいないしね。で、そんな感じで、暗闇の中を‥ ・お風呂は、もう、旦那に任せてました。始めのうちはずっとそうでした。家の旦那は、そういう状況はわかっていたので、気持ち的にも協力的で、一生懸命早く帰ってきてくれて･･･早くって言っても8時前ですけど･･･帰ってきて家にいる間は何でもしてくれたんですけど･･･行ってしまえば･･･という感じで‥でも、それはしかたがないので･･･それは、そんななので･･･他の文句が言いようがない状況でした･･･ ・あまりに私がカリカリしてたせいか、夜のアルバイトいいよってなって、子ども見てくれるって言ったら･･･週2回くらい見てくれるってことになって‥火曜日と土曜日かな･･･ ・わりとこう、わがまま言ってもそんないろいろさせてくれるんだなあという感謝はしなきゃいけないなあという感じです。	協力的 感謝しなきゃ
	D	Ⅰ就業継続型	Ⅱ再就職型	産後、実家に戻るというよりも、もう退院して来たら普通に主人が朝早く起きる。お弁当がいる、全部普通にやってましたよ。全部普通に。 ・主人とこう、仲が悪くなる時もあるじゃないですか、特に産後なんかは嫌な事がいっぱいあって、離婚したいとか、なんかこう思ったりしたんですよ。だけど片親にだけはしたくないという、自分が片親だったから片親にだけはしたくないと。	産後も普通に家事 離婚？

表Ⅴ-1-12a　夫婦関係

		希望コース	現実コース	夫婦関係	キーワード 夫
不一致群	h	Ⅰ就業継続型	Ⅲ専業主婦型	・主人が協力的だったというか・・・彼が私をこっちに呼んだことを負い目に感じていて・・そこはすごく救われていたというか・・・ ・主人に当たってます。結婚してから、ケンカが増えたので・・・付き合ってる時はケンカを一回もしなかったので・・・で、だけど、やっぱり、新生児くらいの時は子どもが泣きやまなくて、そこでも怒ったりとか・・今はいまで、2歳近いんですけど、夜泣きするんです。それで、私がこんな時期まで夜泣きするのは、睡眠障害とか、発達が遅れてたらどうするのっとか、訳のわからんことで怒ったりするんで・・・平気な時は平気なんですけど、思った通りにこの子がいかなかったり、やっぱるイライラはしますね。	協力的 主人に当たる
	l	Ⅰ就業継続型	Ⅲ専業主婦型	・主人は、結構協力的で、日曜日遊んでくれるし、普段も早く帰ってくるから一緒にご飯を食べて、朝と晩とご飯を食べたりとか・・・本当に子どもの世話をしてくれて、子育てで悩むということはない。でも、男の人と女の人の考え方は違うから、男の人はちょっとぐずったらハイはいと言うこと聞いたりするから、普段私がやってないようなことでつったりとかするから、もうっと言うことはあります。 ・一応、専業主婦をさせてもらっている時点で、主人に感謝はしてるんですけど、・・・いっぱいいっぱいだったら働かなきゃいけないじゃないですか。子ども小さいうちは一緒にいていいって言ってくれてるし、自分が働きたかったら働いてもいいし、家にたかったら家にいてもいいし・・自分の好きなようにしていいって言ってくれてるから・・資格をとる時もちゃんと続けるんだったら、とるんだったらいいよって・・いってくれたから、そのおかげで・・・その時は主人に見てもらったりして学校に行ったりしたから・・・	協力的 感謝
	m	Ⅰ就業継続型	Ⅳ再就職希望型	・夫が手伝うっていうこと、ないですね。お風呂とかが大変なんですよね。 ・夫の雇用形態としては、朝、9時くらいに行って夜12時くらいまで帰って来ないので、ほとんど、子どもとの接点は朝だけ。休みの日にみるだけかなあ・・ ・思うように勉強もできないし、かといって夫が手伝ってくれるわけでもないし、・・それは・・今までは自分で努力さえすれば手に取れたのに、足かせになってるじゃないけどもこっちにストレスも感じるし、何で夫は同じ親なのに手伝ってくれないのかっていう・・・ ・夫は好きなようにして・・・仕事が忙しい忙しいっていうけれど、こっちは仕事がしたくてもできない状況なんだから。 ・もともと契約で来てたわけじゃなくて正社員だった時期もあるので、そう考えると本当にもう夫の給料で生活する。経済的な拠り所がない。自分で何かしようと思っても夫の許可がいるとかもう、耐えられないですね。戻りたい・・・という・・・ ・最近パパ友さんができて、3ヶ月育児休暇をとって完全にシフトしてしまったんですけど、やっぱりやってみないとわからなかったって。食事の準備から、離乳食もそうだし、全部・・・奥さんの朝食を準備してしたりとか、やってみてその大変さがわかったって・・・・言われて、よその御主人だけど、報われた気がしました。 ・何か、自分の不満も整理されてないので、その都度その都度、当たるだけなので、多分主人にはわからないんだろうなあって思いますね。きちんと1から10まで理解できていて、それをきちんと説明できればいいんでしょうけど、その都度その都度、こうしてもらわないと困ると不満をぶつけるだけで、先に言う訳じゃないので、夫にしてみても、何でいつも切れられているんだろうくらいの感じで終わってるとこ、ありますね。	手伝ってくれない わかってもらえない

表Ⅴ-1-13a　夫婦関係

		希望コース	現実コース	夫婦関係	キーワード夫
一致群	C	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・夫は割と手伝います。遅かったですけど、土日お休みの時には、おむつ替えでも何でもするし、赤ちゃんを扱うのがうまいので、あやしたり遊んだり。今が逆にあんまり、・・・・赤ちゃんの時の方がいろいろとしてくれてましたね。	手伝う
	E	Ⅰ就業継続型	Ⅰ就業継続型	・その頃、公園に行こうって行っても、駐車場について二人一緒に寝てるみたいな・・・疲れて。もう・・ ・・・周りに知り合いはいないし・・親もいないし・・・だから、二人で子どもを見ながらだから・・・どっちか犠牲にならなきゃいけない。仕事を。 ・そこそこやってくれてるのかなあと思います。私が夜仕事だったりとか・・・今は週一、夜なんですね。今日とかが、午後の2時から夜の10時まで仕事なんですね。そうなると、保育園が終わる時間から、帰ってくる10時までは主人が見とく。とかですね。	そこそこやってくれる
	F	Ⅱ再就職型	Ⅱ再就職型	・うちは主人が帰りがかなり遅いので、朝早くて夜遅いという、サラリーマンによくありがちな、ほぼ母子家庭というか。そのかわり、土日はほとんど彼がやってくれて。 ・・よくいわれるのが、主人の妻へのいたわりで子育てをカバーするというのがありますよね。子育てのここがよかったよというよりは、奥さんへの愛情とか声掛けとかによって奥さんが癒されるから子供に優しくなれる、そういう連鎖ですか。けどうちはあんまりそういうのがないんです。あんまりほめるが上手じゃないので、子育てに対して何を考えているかというと。本当にどうしようもないときに声かけをしてくれる。本当にいっぱいいっぱいのときに。そこまでは、子供をすごくかわいがってることで私を助けてると思ってると思うんです。私がいっぱいいっぱいのときに真剣に相談すると、答えはくれるんですけど。 ・普段のきーきーなんとかだったのよっていうのは全く答えてくれない。だから、子育てに何を考えているのかはわからないけど。大きくみれば、そういうたまに、にいざという時に、頼りになるというのもなんか、主人のことだからあれなんですけれども、頼りにさせてもらったりとか、あと子供の面倒を見てくれたりとか、それが彼の子育てのスタイルで、私を間接的にサポートする。どう考えてるんでしょうね、子育てに関しては。とにかくとにかく溺愛はしてますね。考えを聞いたことないです。	母子家庭

表Ⅴ-1-14a 夫婦関係

		希望コース	現実コース	夫婦関係	キーワード 夫
一致群	j	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・主人が寂しいかなあ・・・と。いうのはある。趣味というか。そっちに気持ち入れちゃってね。主人が寂しいというか、ちょっと。二人がずっと長かったから。ちょっとそういう不満がありそうな気がするけど・・・・自分も私が実家から離れて、・・やっぱりずっと仕事もあるから、男は・・・私が頑張っているというのもあって、あまり、言わないけど本当は自分も相手してほしいとか、子どもですよね、そういうとこ、なんというか、他の人はどうかわからないけど、子どもいらつくというより、主人にいらつくことの方が多いような気がする。	主人が寂しいかな
	k	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・主人はやりたいならやったらいいと理解もあるし、協力的で子どもの面倒も見てくれた。悩んでいる時も話を聴いてくれた。主人が私に『一生懸命だから悩む』って言ってくれた。主人に客観的に見てもらえる。私は頑張りすぎてしまう・・・。	協力的 理解ある
	n	Ⅳ再就職希望型	Ⅳ再就職希望型	・ぱっと見すごいやさしそうな夫、パパねとかだんな様ねとか言われるんですけど、家に帰ってきたら何にもしないですね。でも子供はものすごくかわいがりはするんですけど、自分から進んで本を読むとかそういうことはしないんですけど、わりと手伝ってくれるほうだと。言ったらするけど言われなかったら、まったくしない。 ・3ヶ月か4ヶ月くらいのときに、私もちょっといらいらしてて、何でだろうと思ってたときに、主人帰ってくるのは大体11時とか11時半くらいなんですよ。だからなんか帰るのを早く帰ってこないかなって、ずっと待って、あてにしてたんですね。あてにしてるのにって思うとすごくいらいらしたし。なんかすぐ当たってた、当たったりしたけど、何かを境にあてにしないって、心に決めたって同時にほわってなった、あてにしないでおこうと思ったら楽になった。母子家庭みたいって私言ってました。いたらいたでものすごく良いお父さんなんですけど、あんまりいないから、	あてにしない 母子家庭みたい

サポート（両親他）

表Ⅴ-1-11b 家族関係

		希望コース	現実コース	家族関係	キーワード 親
不一致群	A	Ⅲ専業主婦型（Ⅰ就業継続型）	Ⅳ再就職希望型	・マタニティブルーにかかりやすいとか産後うつにかかりやすいような環境っていうんですか。誰も助けてくれないんで、退院してきて即、家事復帰、家事子育て復帰。さすがに二人目の時は、生後1－2週間は外に出したくないなあと、上の子のお迎えに行ってもらっていいですかと。朝は旦那が連れて行って、夜は向こうのお母さんとかお父さんとかに家まで連れてきてもらって。 ・実家に帰ると、実家U県なんで、うちの両親別れてるので、帰ってもお世話してもらえないし。自分の実家近い人はほんと楽だろうなあと思うんですけどね。	誰も助けてくれない
	B	Ⅰ就業継続型	Ⅳ再就職希望型	・ちょうどV市に引っ越しして、V市では、主人の実家だったんですね。それで同居で。おじいちゃんのご飯作りつつみたいな‥感じで、何となくぼーっとしてますね。家にいても‥‥今までは自分だけのことをやってたのに、結構、負担でしたね。 ・学校出て就職して一人暮らしして、ま、実家の親との関係もあまり心地いいものではなかった、私は。実家に帰ると、結構ストレスフルな感じが今でもあるんですけど‥‥でも、ま、離れてしまって、大人になって自分で生計を立てたと思えば、それは離れてお互いねっていう感じになれるじゃないですか。ある程度、自立した感じで。で、それで仕事も好きにやって、たまに実家に帰って我慢すれば‥うまくやって自分は自分の人生をやっているつもりでいたけれども、独立、自立したつもりでいたけれども、‥	・同居が負担 ・実家はストレスフル
	D	Ⅰ就業継続型	Ⅱ再就職型	・私母がいないんですよね。だから実家に戻るとか言うんじゃなくて。実家は近くやし、おじいちゃんがすぐ近くにいるし‥‥ ・確かに二人の生活だけど、おじいちゃんがすごく近くにいるから、おじいちゃんが寝てる間見てくれたりとか。 ・あの私が母を小さくして亡くしてるから母に対する想いっていうのがたぶんどっかにあるんですよ。潜在的に。7か月で、まあ別に私知らなかったし、隠すこともないですが、私の母自殺だったんですよね。産後のひだちですかね、悪かったりするとうつに、だと思います。父はずっと隠してたんですよ。私がわかりだす、中学生で私知ったのかな。それまでは病気で死んだって言われてました。そういうのがあって、だから母の死を知ったときはすごくショックで、私をなんでおいて行ったんだろうって、なんでおいていけたんだろうって、もうちょっとなんで待ってくれなかったんだろうって。だからそういうのがまあ、あったから自分が子ども産んだら絶対死んだりはしないって。思ってきたかなあっていう、一人目子どもはだからすごく欲しくて、自分の子はそんな風にしないで絶対育てるんだって	・母への思い

表Ⅴ-1-12b 家族関係

		希望コース	現実コース	家族関係	キーワード 親
不一致群	h	Ⅰ就業継続型	Ⅲ専業主婦型	・親に今日、辞表出したんだって親に言っても、ああそうなのって。あんたが決めたんならいいよって。そういう親だったので。結構、基本的に私のやることに対して肯定してくれる親だったんで・・・そういうこともルーツであるかもしれません。これは、子どもが生まれて自分で発見した事なんですけどね・・そうだったんかもしれないと・・親が肯定するってことが自分の自信だったりとか・・・その、何か決める時の決断力の一つなんじゃないかと・・ ・逆にそれで自分は強くなったような気がします。親に頼ってないから・・・もう、100パー自分の責任じゃないですか。多分親にもし、私の場合は、多分低い方に流れるタイプなんで、たとえば、この間、帰ったときに、親が子供にキャラメルあげて、私がこんなの上げちゃダメって私、親に凄い怒った。でも、しょっちゅう、そういうのやってたら、孫がかわいくてそういうのやるんだろうけど、例えば、子どもがわがままになったら、じじばばが甘やかすからでしょうって無茶苦茶なことを言ってた可能性がある。でも、今は、たまに会ったじじばばにうんと甘えておいでまで思えるようになってきたんで・・・そこは柔らかくなってきた。私は、帰って親と離れていてよかったと思える。お互い、対等の距離で接することができて、甘え過ぎない。よかったと思います。	・親が肯定すること ・親に頼ってない ・甘え過ぎないでよかった
	l	Ⅰ就業継続型	Ⅲ専業主婦型	・妹も同じマンションに住んでいるんですよ。ちょっと気が楽というか・・・ ・産後は私は母に毎日来てもらって，・・朝はお隣さんが一緒に幼稚園に息子を連れて行ってくれて・・・帰りは母が幼稚園に迎えに行って帰ってきて、ご飯をつくって息子と遊んでくれた。 ・主人の両親は、行事の度には呼んでくれたりとか・・・クリスマスしようかっとか・・誕生日とかもいろいろやってくれるし・・同じ年のいとこがいるんですよね。同じように接してくれる・・ お姉さんのこどもだから・・・私は、嫁の子どもで、向こうは娘の子どもだけど、分け隔てなくしてくれてるのかなって感謝してます。そんなに口は出してこないし、・・・ ・一定の距離というか・・月に一回とか・・顔を出すような感じで、私達が定期的に訪問するというか・・・ ・やっぱり言われたりとか観賞したりするお姑さんの話を聞くと、私は恵まれてるというか。いびられてることもなく、孫たちもかわいがってもらって、すごい感謝してます。	・母が援助 ・義理の親にも感謝
	m	Ⅰ就業継続型	Ⅳ再就職希望型	・自分の実家は熊本で・・・ふたりとも健在なんですけど・・・そんなに近距離でもないし・・・弟のところのお嫁さんが仕事しながら子ども預けているので、そっちの手伝いの方が熱心で、なかなか頼みにくいところもあって、主人の方の両親も近所には住んでいるんですけど、母が不安神経症だったりするので、あまり預けにくいのと預けたくないのと両方あって、頼れないという・・・ ・ちょっと距離が近いので、週末には行かなきゃいけなかったりとか・・・自分が仕事する上でも、夫が転勤する時にはついていってねとか・・・プレッシャーにはなりますよね。子どもは預けたらかわいそうだ・・と言われたりとか、・・じゃ、私はどうなのっていう・・・・手伝ってもらう訳ではないのに、何でそんなこと言われなきゃいけないんだろうと・・・日々感じてます。週1の繋がりじゃなくて、月1くらいでいいのにって思ってしまう。	・実家の母は遠くて頼みにくい ・義理の母とは距離を持ちたい

表Ⅴ-1-13b　家族関係

		希望コース	現実コース	家族関係	キーワード 親
一致群	C	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・実家はちょっと田舎なので家も広くって、家事がしにくいんですよ。こういうコンパクトなとこに住んでた方が家事がしやすくて、しかも田舎なのでお買物とかも近くになかったのですごい大変だったので、逆に福岡の方が楽しいみたいな ・うちの父と母は離婚してるので、母だけが実家にいますけど、義理の親もどっちも元気です。夫のほうはまだ働いてるくらいなので。	・実家は田舎なので大変
	E	Ⅰ就業継続型	Ⅰ就業継続型	・親は3日間くらい来て、ちょっと顔を見て、親も仕事してるから。帰るみたいで。 ・主人のお母さんの方がちょくちょく来る。そっちの方がストレスがたまるから。来ない方が・・・来ないでくれと・・・あまり仲が良くないから。いつもケンカばかりしてるんですね。来るたびに。例えば、仕事は辞めろとか、習いごとは辞めさせろとか・・・全部口をだすから。掃除の仕方がなってないとか。味付けが悪いとか・・本当のお母さんだけど。小1で離婚されてる。	義理の母親がストレス
	F	Ⅱ再就職型	Ⅱ再就職型	・こちらで出産して、母にこちらに一週間・10日くらいきて、母も仕事持ってるので、そんなに長く空けれなくて、10日くらいいてくれて。 ・とってもいい舅さんとお姑さんなんですけど。子どもができてからの方が関係がちょっと悪くなっていると思います。今までの経験もおありだし、考えもおありだと思うので、ちょっと難しいです。そばに住んでてすごく助かってはいるんですけど、一緒に住んでたら、ストレスは増えるかもしれない。それは絶対主人に言えない。自分はストレスと言えばストレスなんだな。ただ幸いに、幸か不幸か、でも、離れているので、そこまでの負担にはなっていない。ただ、先方も私に遠慮はあるでしょうし、ストレスは抱えていると思うんですよ。言いたくても、自分の娘なら言えるでしょうけど。その辺は難しいです。 ・両親はあまり頼りにならない。頼りにならないと言うと失礼なんですけど。二人ともまだ仕事をしているので。実家に帰ってもそんなにこう、すごく助かるとかあんまりなくて。あんまり接することも、年に数回帰省の時だけなんで。私が夜預けてお友達に会えたりとかは助かってる。でも、一つ思うのは、どんな親孝行よりも孫を見せるのが親孝行だと気がつきました。たとえばお小遣いをあげるとか、親孝行にはそうなんですけども、その範疇に入らないなあって。子どもを見せるということは、そんなに早くない子どもなんで、これが親孝行かって思いました。無条件にかわいいでしょうね、孫は。	・義理の親はストレス ・実家の両院は頼れない

表Ⅴ-1-14b 家族関係

		希望コース	現実コース	家族関係	キーワード 親
一致群	j	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・里帰りも、遠いという事で、実家にお願いしようという事で、もう、生まれる前、前後1ヵ月半くらい、結構、長い間、里帰りして、また、母親もこっちに来るとき、半年くらいいてくれたりとか、割と、あの、距離のある割には、実家に依存してるんで、今もほぼ毎日、電話とかちょこっとしゃべったり‥この子としゃべりたいというのがあるみたいだけど、もし、実家に近かったら、実家に入り浸りになっちゃうみたいな結構、精神的仲がいいといえば、仲がいいし、っていうような、・・・ ・飛行機とか使って実家に。本当に短い時だと2カ月。2，3カ月に1回は、帰ったり来たりとか、どっちかがあったりとかしてるんで、そういう意味で、主人が理解があるというか、そういう事では、多少は、不安はないというか、 ・可愛いこの時期を自分の親たちにも見せたい・・・旦那の親にも見せてるけど・・・でも、飛行機もお金がかかるけど、行かせてもらっている、それこそ先より今の方が見えてるようで見えてないような・・・わかんないね・・・2，3ヶ月スパンだな・いつも、じゃ、この季節に、夏の間に、冬の間に、じゃ実家行こうかと・・・そんな感じで考えてる気がする。	・実家と仲がいい ・主人の理解ある
	k	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・子ども生まれてから、親がそばにいてくれた。母が子ども大好きで、面倒見てくれた。それは助かった。わからないことは母に聞いたりもした。自分の悩みを母に聞いてもらったりもした。	・母に相談
	n	Ⅳ再就職希望型	Ⅳ再就職希望型	・うちの親は‥。里帰りしても一刻も早く帰りたくて自分の実家なんだけど、・・・母も働いてて日中はいなくて、6時くらいに帰ってきて、ご飯だけ仕込んどいてって言われて、それはぜんぜんいいんですけど、朝もいなくて、自分なりの考え、母に私が求めてたんです。もうちょっと私が帰ってきたんだから、お仕事休んでもうちょっとここにおってよって。なんとかしてよとか、求めると求めすぎちゃいけないと思って、あんまり頼らないでおこうと思うと気が楽になったりもしたんですけど。 ・実家が目の前なのに、1時間も10分も預かってくれんとって、ばーんと1回だけ言ったことがあって、そしたらうちの母が、うちの母も母に頼らない生活だったらしくって、	・里帰りしても戻りたくなる ・母に求める

サポート（友達・地域）

表Ⅴ-1-11c 友人・その他

		希望コース	現実コース	友人・その他	キーワード 友人・地域
不一致群	A	Ⅲ専業主婦型（Ⅰ就業継続型）	Ⅳ再就職希望型	・友達と遊びに行くとかも出来ないですしね。まだ子ども産んでないのもいるし、産んでるのももう職場復帰してたりとか、家で専業主婦してる人いないんじゃないかな。 ・最近ネットをやり始めたんです。二人目妊娠中の時か、それまではだから他人としゃべることもなくって、話すこともなかったですね。 ・テレビはほとんど見ないんで。本はたまに読みますけど、集中して読まなきゃいけない本とかは、ちょこちょこちょこちょこ泣くんでそれは無理かな、本も好きでしたけど。読む時間を取れないですね。	・友達と遊びに行けない ・ネットでおしゃべり
	B	Ⅰ就業継続型	Ⅳ再就職希望型	・だいぶ1歳過ぎてからは、かなり仲の良いお友達ができたから、お友達の家に行ったりとか、それは結構楽しかったので、福岡に来たら、それがまた0からになったので、それは残念だったんですけど・・・始めの一年は、結構、暗黒でしたね。 ・友達になるママもそういうさばけた感じの人たちばっかりだったので、あんまり子ども同士でねという感じよりは、預けて飲みに行っちゃえ的な友達ができると、それはそれで幸せだった ・（転居後）マンション内で赤ちゃんのころから付き合っていれば社会ができるのかもしれませんが、いきなり転勤族だし、そこに子連れで入ってきても、もう、2歳にもなってると、だいたいお友達できるの0歳1歳くらいだから、	・1歳過ぎてから友達できる ・転居後は、友達の輪ができて入れない
	D	Ⅰ就業継続型	Ⅱ再就職型	・ただ、ママで友達っていうか、公園で遊ぼうとか、そこの公民館に行く、行って子ども遊ばせたりとか、いろんな話をしたりすることでほっとしたりすることもありましたね。 ・保育所なんかではちょっと社交的に付き合うかなっていう。ママ友って結構なんだろう、私としてはうざったい時もあるかなみたいな。忙しいから連絡も、メールもやり取りできないのに、メールとかうわーって来られても困るし、表面的に付き合う方が楽かなって思っています。 ・子ども産んでる親友とかに話聞いてもらったり、相談に乗ってもらったりして、そらそうよ子どもっちゃけん、私も頑張ってけん、Dチャンもがんばらな、みたいな感じで言われて、そっかーって、辛抱せないかんことだって、あるとよ。	・話をすることでほっとする ・ママ友ってうざったい ・親友に相談

表Ⅴ-1-12c 友人・その他

		希望コース	現実コース	友人・その他	キーワード 友人・地域
不一致群	h	Ⅰ就業継続型	Ⅲ専業主婦型	来たばっかりの時に、半年学校に行ったお陰で、あのいろんな年代の友達ができたんで、寂しい思いをしなかったんですね。結構こっちに一人できて、そういうのがノイローゼになるって聞いていたので、・・・・ ・・私の住んでる場所が転勤が多い地域だったり、両親が働いていたりとかで、親を頼れない人が多いので、帰って私達の絆を強くしていることが多い。皆で助け合いじゃないんですけど。今日雨だから、車でマリナタウン行くけど、一緒に行く？って声かけてくれたりとか・・動物園行くから、うちは車がないので、車がある友達が絶えず声かけてくれたりとか・・クリスマスパーティやるからみんなで騒ごうとか・・ま、たまにはお酒持ってきて、子どもは遊びつつ、大人はワイン飲もうとか、なんか主婦の会じゃないんですけど、もう、そういうので、週に3，4回は友達と会っているので・私は・・ ・心配性で・・うちの子他の子と違って、こういうとこがおかしいって言ったら・・・こんな普通だよって・・ちょっと上のお母さんが言ってくれたりとか・・・泣きっぱなしでも、ほっといても死にやしないよとか・・・何か知らんかったわっていうので、・・ね、一人じゃ知らないですもんね。	・親を頼れないので絆が強い ・先輩ママが教えてくれる
	l	Ⅰ就業継続型	Ⅲ専業主婦型	・同じ産院で一日違いの男の子がいて、そのお友達の家が近かったから、やりとりをしてたんですよ。メールとか、・・・私サークルに入ってるんだけど、行ってみないって言われて・・私一人だったら絶対行かなかったし、ポスターなんか見ても、ああなんだろうと思って絶対行かなかった思うし、でも、友達がおいでって言ってくれたから、じゃ、ちょっと行ってみるねって言って行ったのがきっかけで・ ・ありがたいことに周りに恵まれていて、住みやすいというか暮らしやすい。なんかお友達もいい人ばっかりで、こんな幸せでいいのかなって、ちょっと不安になることもあるですよね。逆に今が幸せすぎて、今がピークかもって思うんですよね。	・産院の友達 ・周りに恵まれている
	m	Ⅰ就業継続型	Ⅳ再就職希望型	・どっちかというと外に出たい方だったので、子どもが生まれてからも積極的に外に出るようにはしてたんですけど、やっぱり連れて回ると、外の人から、デパートなんか連れて歩くと、おじいちゃんおばあちゃんたちから、こんなちっちゃい子連れて歩いてとか・・・あと、ベビーカーを押して歩いていれば、子どもは抱っこしなきゃダメって怒られたり・・・スリングに入れていれば、それじゃ骨が曲がると言われたり・・いろんな声を聞かされて、ストレスはたまりましたよね。外に出たら出たで言われるし、自分の思い通りにならないというのが結構ストレスでしたね。 ・2ヶ月くらいまでは家にこもりがちだったんですけど・・・子どもの繋がりを持たなきゃと公民館に出たのが最初ですかね・・4ヶ月検診の翌日に公民館に行ったんですよね。そこで、ママ友さんをつくってからは、出歩く場所も増えたような感じで・・・社会との繋がりは全くないですよね。テレビ見たり新聞読んだりするだけで・・・・あと、夫の話ぐらいで・・・・結構ストレスですよね・・・ ・知ってる方もいらっしゃるけど・・・職場には子ども連れていけないし、皆、何してるかなと思いながら連絡ができないままになってという感じですよね。 ・幸い、鬱状態というのはなかったんですね。ママ友さんが早めにできたから、お互いの同じストレス部分を話すことで解消してたところはありますね。夫が協力してくれないとか、お風呂はこういうところが大変だよね・・・とか・・ていうのを話すようになってから、結構楽でしたね。 ・割と出てないとストレスためる方なので・・どこか精神的におかしいんじゃないかと思うほど出て回ってます。	・周囲の声がストレス ・ママ友との会話がストレス発散 ・ストレスためないように出回っている

表Ⅴ-1-13c 友人・その他

		希望コース	現実コース	友人・その他	キーワード 友人・地域
一致群	C	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・マタニティスクールで知り合ったお友達が近所にいて、ちょうど一緒くらいに生まれるんだったんで、3ヶ月くらいの時に一緒に子連れでランチに行った。 ・今はサークルに行っているんですけど、ちょっとこの子に合わないみたいで、キーキー言うんですよ。それで3月いっぱいでサークルはやめちゃうんですけど。サロンは赤ちゃんが多くって、この子けっこう暴れるので、危なくって。 ・腹を割って話せる友達というのはいないかもしれない。あえてママ友をそんなに作らないようにしているというところはありますね。広く浅く。サークルで代表しているんで、お話はいろんな人としますけど、意識してそんなに深くは付き合ってないですね。ご飯食べに行くとか、ちょっと公園で遊ぶとかはあるんですけど、そこまでは。	マタニティスクールでの出会い ・腹を割って話せる友達はいない ・ママ友は広く浅く
	E	Ⅰ就業継続型	Ⅰ就業継続型	・公民館にはあえて行きたいとも思わない。逆に行って何になるの？みたいな・・・たぶんずっと専業主婦で家にいて、小さい時から行き始めてるお母さんたちは、そこに輪ができて、行きやすいのかもしれないんですけど、仕事とかしてたりすると、どうもこう、場違いとか・・・ ・保育園の人たちとは、そういう話は全くしないです。みんな、もう疲れてるし・・・もう早く終わらせてよみたいな・・・ ・もう、子どもっていやだよねとか・・・なんかちょっと大変だよねっていうのは出来ると思います。例えば、自分がちょっとしたはずみで打ってしまった。殴ってしまったとか、そういったこととかは、本当に信頼している人しか話せない。ですよね。きっと。だから。そうなると、昔っからの中学校とか、高校とかの・・・友達とかにどうしても話してしまうというのは・・・たわいもないことだったら、他の人にも話します。	・公民館は場違い ・保育園のママとは話さない ・たわいもないことだけ話す
	F	Ⅱ再就職型	Ⅱ再就職型	・もう同じくらいの子供をもったお母さんにいろんな話を聞いて情報交換したりとか。言い方悪いんですけど浅い友達がたくさんできました。何人メールアドレス交換したかというくらい。でも多分周りもそうで、みんなと気軽に交換したんですよね。今はもうほとんど途切れているんですけど。けっこう、それでストレス発散というか、「そうよね」「こういうときどうしたらいいの？」みたいな感じでやってましたね。なので、3ヶ月以降は大変は大変だったんですけど、大変さは忘れましたね。 ・なかなかサポート、サポートといっても自分から出向かないと、当たり前ですけどなかなかサポートしてくれる機関はないですよね。出向くまでがやっぱり勇気がいりますね。 ・話すところがないっていうのは、すごくあると思うんですよ。私も今思えば、精神的におかしかったっていうときは、自分以外のみんな、子供をつれているお母さんたちが幸せそうに見えるんですね。自分だけが世の中の不幸をひとりで背負ってるという感じで。私だけだろうなあ、こうやって子供にイライラするのとか。そういうことを思って、それがどんどん自分の中で陰になって、とじこもって閉じこもって、子供に対してあたってという悪循環でずっと。核家族というのがそういうところがひずみがくるのかなって思いますよね。	・浅い友達たくさんできた ・出向かないとサポートない ・話すところがない ・自分の影と悪循環

表Ⅴ-1-14c 友人・その他

		希望コース	現実コース	友人・その他	キーワード 友人・地域
一致群	j	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・サークルに入ったのもおおきいと思うけど ・独身でいる友達が、地元の方から遊びに来てくれて、福岡にライブに来るとか言って、コンサート見に来るとか言って、それこそこの子と交えて遊んだとき、なんか、遠くない将来、この子幼稚園くらいになったら、自分もまた別で、その子たちと、遊んだりとか、ずっと、それだけでつながっている友達だから、自分が年配になっても、遊ぶかなあという自然な絵が浮かんだから、なんか、今はこれにどっぷりいいかなあと、あえてなったかなあ・・・・・その時に・・・	昔の友達との付き合い
	k	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・一番元気になれたきっかけは、長女が1歳半の時に子育てサークルに入った。公民館便りで見たんです。友達作りたいと思っていたので、参加したところ、気のあうメンバーだったこともあって、今も続けている。いろんな仲間と相談し合ったり、公園に行ったり、計画していろんな施設に行ったりした。今は、もう古カブになってサークルのリーダーになっている。 ・1歳半に子どもがなった頃、同じ悩みを持つママたちに会って一緒にやっていくうちに、今まで子どもが小さくて行けなかったところも一緒に行けるようになったし、泣くとすぐに店を出なきゃということもなくなった。 ・サークルはたんさんある。でも、今は実際には、なかなか活動しているところが少ない。。リーダーやメンバーの負担が大きいので、・・サロンはあるけど、みんなの繋がりがうすいかも・・・、自分はいいメンバーに出会えたからかもしれない。逆にあわなかったら大変かも・・・身近に相談できるようで相談できないかも・・・手軽にすぐ相談できる人がいるといいけど、なかなかいない。あらたまっての相談になってしまって、もっと気軽に相談できる感じがいい。そうなるとサークルの仲間になる。	・子育てサークル ・気の合う仲間 ・サークルは負担が大きい ・サロンは繋がりうすい ・気軽に相談できるといい
	n	Ⅳ再就職希望型	Ⅳ再就職希望型	・公民館にこんなにきだしたきっかけのひとつに、高校のときのお友達もすごく近くに住んでて、けっこう産後うつくらいになって、もう出れないって言ってて、私もすごい近所だったけど、それでも2ヶ月くらいの時に1回遊びに行ったけど、そのときは普通に振舞ってたけど、今だから話せるけどって彼女は言うんですけど、もうあのときには戻りたくないとか、もう人と会いたくない、嘘ついてでも用事があるって言って全部断ってたって。 ・公民館に行って3ヶ月のやっと首が座るくらいの娘を連れていってみたときに、もちろん友達最初はいないのはわかってたんだけど、輪になって話してグループがあるように私には見えて、何回か来たけど最初私なじめなかったんですよ。もう1歳になると活動範囲がすごい広がってきて、この子も何か外を自分だけじゃない、ちょっと友達でもないけど刺激求めてるような気がして、ちょっと頑張りどころだよねって、自分では思って、ちょっと行ってみました。 ・この公民館に恩返しがしたくて、楽団の人にこの日この時間に来れる方って聞いたら、クラリネット6人くらいいらっしゃったから、そしたらなんか子供たちがポスターもたくさん張らせてもらって宣伝してたら、結構いっぱい集まってもらって、でなんかトロとかポニョとかなんかそういう子供の知ってる曲だけですけど。	・輪が出来上がってい入りにくい ・子どもの友達作りのために公民館へ ・公民館への恩返し

4. 考察

1）ライフコース決定の文脈に納得していない母親

A,B,D,C,E,F がうけたサポートはそれぞれ違いが見られ，かなり深刻な状況の母親もいて，サポートの現状には幅があった。A は喘息を患っていながら，夫も家族も友人も誰からもサポートを受けられない状況だった。夫も事態の深刻さに気付いてないように思われた。料理という趣味が A を救っているように思われた。F も夫や親のサポートは受けておらず，ママ友は存在していたがあくまでも浅い付き合いとわり切っており，相談する人が身近にいないように思われた。B,C.E は親のサポートはないが，夫が少し協力していた。D は夫の協力はないが，自分の父親が子どもの世話をしてくれたが，亡くなっている母との間に葛藤があった。D,C,E,F はママ友とは一線をおき，深い付き合いをしないようにしている点が共通していた。また，6 人とも実の母親に育児を手伝ってもらっている様子はなかった。A,C は親が離婚，D は母が亡くなっている，B は親との折り合いが悪く， E,F は両親が働いていて援助してもらえる状況ではなかった。サポートの状況としてはあまり恵まれていないことが推察された。

2）ライフコース決定の文脈に納得していた母親

h，l，m ，j,k,n の 6 人に共通していたことは，友人や地域との繋がりがあった。h は親が離れていたので，むしろ絆を深めていた。l はサークル活動をしたり，交流をもっていた。m もママ友と話してストレスを発散しており，j もそれなりに付き合っている様子。k は悩んでいた時にサークルで気の合う友達と出会えたのが立ち直れたきっかけとも話している。n は公民館に音楽活動で恩返しをしたいとさえ言っている。ライフコース決定の文脈に納得していない母親がママ友とは深入りしないように付き合っているというのに対し，ライフコース決定の文脈に納得している母親たちは，絆を深めたり，信頼をおいて付き合っている様子がうかがえた。また，夫の理解や協力は，h，l，j,k の 4 人に見られた。親の援助も l，j,k の 3 人に見られ，ライフコース決定の文脈に納得していない母親に比べるとサポートの状況はかなり恵まれていると推察された。ライフコース決定の文脈に納得している母親が育児負担感が低いのは，このようなサポートに恵まれている点も大きいのではないか考えられる。

原田（2008）の縦断調査で，この 20 年間にサポートが行われているのに対し，育児に対するイライラ感が一層高まっていることが指摘されたが，ママ友と距離をおいて付き合う母親，公民館は場違いと感じる母親達が何を援助として求めているかについて，今後，検討することが必要と思われる。

第 4 節　　乳幼児をもつ母親の育児の捉え方と育児負担感

1. 目的

乳幼児をもつ母親は、「自分の生き方をしたい」「子育てをしたい」という葛藤にどのように折り合いをつけているのだろうか。母親が育児をどのように捉えているかということは、葛藤へ影響を及ぼすものと考えられる。

そこで、本研究では、乳幼児をもつ母親が育児をどのように意味づけ、捉えているかということを把握し、ライフコースの文脈から検討することを目的とする。

2. 方法

調査対象者・調査手続き：第VI章第 1 節に同じ

調査内容：第VI章第 1 節でまとめて書かれてい調査内容のうち，育児とはどう捉えているか尋ねた。

3. 結果

母親の育児の捉え方の語りを示し，さらに語りの中で育児の捉え方のキーワードをとりあげ，表の中に示した（表VI-1-15，VI-1-16，VI-1-17，VI-1-18)。ライフコース一致別にわけて，語りとそのキーワードを記述する。

1）ライフコース不一致群の母親

希望と現実のライフコースが不一致である A,B,D,h,l,m を検討する。

A は，病気を抱えながら大変な日常生活をしゃないと自分で折り合いをつけ，自分の置かれている状況を否定せず「しゃあない」と明るく受け止め，自分の気持ちをコントロールして生きたことが窺われる。キーワードは「しゃあない」とした。

B は子育てをすることにより，忘れていた親との関係とか，解決できてない摩擦とか，そういうものが出てきて，されて嫌だったことを子どもにもしてしまうので，それを繰り返さないように自分をしっかりと見つめていた。キーワードは「自分と向き合う作業」とした。

D は子育ては，子どもを自立させるための仕事であり，それは自分にとって修行であると語った。キーワードは「自立させる仕事」「修行」とした。

h が子育てはやってみなければわからない極致だと語り，子育ては産んで育ててみないと一生分からないと思うと語った。キーワードは「やってみないとわからない極致」とした。

l は，やってみないと分からないしと話し始め，子どものことを先に考えてきた自分が成長していると語り，子どもを産んでなかったらもっと幼かったと思うと語った。キーワードは「成長」とした。さらに「やってみないと」が不一致低群のキーワードになりそうだったので加えた。

m は幸せなものっていうより，子どもはかわいいけれど負担の方が大きいかもと話された。そして産んでみないと見えない状況だと述べた。キーワードは，「負担」として，「産んでみないとわからない」も加えた。

h,l,m の 3 人全員が育児はやってみないと分からない，産んでみないと見えない状況で

あると語り，その大変さは共通していた

2）ライフコース一致群の母親

希望と現実のライフコースが一致しているC,E,F（就業形態は希望と一致しているが，本当は希望した歩みをしていない）j,k,nを検討する。

Cは，24時間子どもと一緒であることを修行と表現している。トイレもついてくるし，いつも気にかけている。無意識で子どもに布団をかけたりしていると語った。キーワードは「修行」とした。

Eはやる気を失った時期もあったが，子どもが習い事を始めたので一緒に学び，ともに目標をもって学んでいくことの大切さを語った。それが，すべてのやる気に繋がっていくということも語られた。キーワードは「共通の目標」とした。

Fは，自分が試されているんじゃないかと思うと語った。自分の力ではどうにもならないことにどう対応するか神様が見ていらっしゃるのではないかと語った。キーワードは「試されること」とした。

j が子どもが生まれて間もないときは育児をやらなくちゃいけないと思っていたけれど，最近では子どもがいい意味で趣味のようになっている。いて当たり前のようになり，楽しいことばかりではないけれど，思ったより楽しかった。キーワードは「趣味」「思ったより楽しかった」とした。

kは子育てをして親の立場がわかるようになったと語る。保育士だったので今まで子どもの目線からお母さん達を見ていたのが，すっかり変わった。子育ては自分の視点を変えたり，成長するものだという実感を語った。キーワードは「親の立場」「成長」とした。

nは，子どもも育つけど自分も育つと表現し，寛大になったことや世界の広がりも感じていた。答えがないから難しい子育てとも語り，子育てをしてきた3年間いつも頭の片隅に子どもが来てくれたことに感謝していた。来てくれたと表現し，キーワードは「ありがとう」「自分も育つ」「答えがない」「寛大になる」とした。

表Ⅵ-1-15 子育てとは

		希望コース	現実コース	子育てとは	キーワード 子育て
不一致群	A	Ⅲ専業主婦型（Ⅰ就業継続型）	Ⅳ再就職希望型	・仕事も好きなんだけど、現状子どもがかわいいっちゃ、かわいいんで。現状これで仕方ないかというようなあきらめも。現実しゃあないか、しゃあないかですね。 ・病気のこともあるので、しょうがないかなあという、子どもができたせいだけじゃなくて自分の、健康の悪化もあるので、だから折り合いつけやすかったのかなと。妊娠したせいで病気が悪化したとか、そんな風な考え方するとやばい方向に行きそうなので。それは。子どものせいでって思ってしまうと、これは危ないぞと。 ・楽しくやろうが、どろどろしながらやろうが、子育てはなくなるわけではないので、それなら明るく考えて、しゃあないかでも良いから、あんまりいらいらはしないようにと。 ・考え方持っていかないと。この環境でたとえば溜め込む方だったらとっくにやばいことになってるんじゃないかと。・・コントロールしてなかったら、今ここにいないかもしれない。	しゃあない
	B	Ⅰ就業継続型	Ⅳ再就職希望型	・自分と向き合う作業。育児することになってしまったら、忘れてしまっていた自分の親との関係とか、自分が今まで物心ついて、心理的なところを蹲いてきたとか、解決できてない摩擦とか軋轢とか、そういうのがでてきて、それが結局フラッシュバックして、されてやだったなあってこと、子どもにもしてしまう。 ・結局、同じことをすりこむのもよろしくないし、自分も嫌だし、子どもも嫌なことだろうと・・・そういうことを解決していかないと、育児自体も、ストレスがなくならないし、そういうことを解決するってことがやっぱり自分と向き合わなくちゃならないことなんだなっていう毎日なので・・・・しかたないからそうなってしまっている。だけなんですけど、そう考えると、普通にストレスなく前進するためには、そうならざるを得ない。	自分と向き合う作業
	D	Ⅰ就業継続型	Ⅱ再就職型	・修行と思ってます。いずれはこの子たちを放さないかんけん、その放すために自立をしていくために、いろいろとできるようにしていかないかん。一人で歩けるようにするまでのことをしてあげるのが、私たちの仕事なのかなっていうふうに思ってますね。 ・こけても何しようが自分で立ち上がる。パパやらママやらがおらんでも、いずれはおらんくなるんやから。そういうふうに思ってますね。	修行 自立させる仕事

表Ⅵ-1-16　子育てとは

		希望コース	現実コース	子育てとは	キーワード 子育て
不一致群	h	Ⅰ就業継続型	Ⅲ専業主婦型	・これは、やってみないとわかんないことの極致だと思っていて、これは、ま、主人とも口論になったんですけど・・・子育ては産んで育ててみないと、一生わからんと思う。 ただ、旦那は、それをみんなが共通認識するために、新聞が育児のことをとりあげたり、テレビだったり、いろんなコメンターだったり、本があって・・みんなそういうのでわかろうとしてるんじゃないかって・・・それとこれは、別もんだって・・・と・言う話で結構ケンカになって・・こればっかりはやらないと分からないし。	やってみないと わからない極致
	l	Ⅰ就業継続型	Ⅲ専業主婦型	・やってみないとわからないし、子育てをしてる中で、自分が成長してる気がします。 ・もし、自分が子どもを産んでなかったら、もっと子どもだった気がします。子どものために犠牲になってると思わないんだけど、子ども中心の生活をしてきたから、例えば、ものとか見に行っても最初に子どものものを買ったりするし、なんかもうすぐ子どものお迎えだから・・・子どもの時間で生活をするのが当たり前になってきてるじゃないですか。 ・でも、もし子供を産んでなかったら、全部自分の時間だし、全部自分のお金だから、考え方ももっと幼かったんじゃないかなと思います。	やってみないと 成長
	m	Ⅰ就業継続型	Ⅳ再就職希望型	・責任の重いのもかな・・・幸せなものっていうよりは・・・負担のほうがおおきいかも・・・心の負担の方が大きいかもしれない・・・楽しさもあるから、とりあえず、解消にもつながるけど、でもやっぱり負担。産んでみないとわからない状況。 ・最初は、3歳で一緒にいたいという理想はあったんですね。産むまでは。産んでみたら、ある程度離さないと、本当にべったりで、逆に社会性も身につかないし・・・という思いから、逆に抵抗はなくなりました。 ・専業主婦も子育ても・・・子育て中のお母さんて楽だと思ってたんです。でもそんなに大変だと思ってなかったし、・・・・・産んでみたら、可愛いのはかわいいけど、出生率を上げるとか、社会の基盤をというけれど、それはあたしじゃなくてもいいんじゃないって思いますね。	負担 産んでみないと

表Ⅵ-1-17 子育てとは

		希望コース	現実コース	子育てとは	キーワード子育て
一致群	C	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・修行みたいかな。24時間一緒にいるので。時間がないって言ったらあれですけど、寝るときも一緒でトイレもついてくるので、時間のやりくりが下手なんでしょうけど、常に気をかけてなきゃいけないですよね。 ・たとえば誰かに預けて外出してても、あー今頃何しているかなって思うし、寝てるときも無意識に、寝ている間も自分でもよく覚えてないけど、布団をかけたりしてますしね。修行、修行、生活ですよね。もう、ほぼ自分の。	修行
	E	Ⅰ就業継続型	Ⅰ就業継続型	・以前、帰ってきて、子どもを遊んで、ご飯作って、お風呂に入れてみたいな・・・・感じで、別に楽しくもなければ、目標もなく、・・・どうせ、仕事もパートだしみたいな感じになってきて・・いまさら、本読んでもなあ・・みたいな感じで、それだったら、一緒に絵本読んであげようかなとか、自分の医学雑誌読むんだったら、一緒に絵本読んであげるしかないか・・・みたいな感じで・・・そういうのが1年くらい続いて・・・ ・でも、その間、楽しくはなかった。たぶん。何の面白味もなく、目標もなく、楽しみもなく。私、何やってるんだろう・・みたいな。常に。何が楽しいんだろう。なんで私がって。自分の子供だから仕方がないんだけど。だんだん大きくなったら、文句も言いだして・・・余計、むかっとして。なんか面白くないなあときてたけれど ・あいた時間に習いごとなど入れてくると、お互い目標ができると、お互いそれに向かって頑張るみたいな・・・感じで、ちょっと楽しくなってくるみたい。今ある目標を一個ずつクリアしていくことの楽しさに切り替えていったみたいな・・・そうなってくると、楽しいぞ。今の自分の子育ては楽しいぞ。目標って大切だなあってその時また思い直して、こう頑張り始めると、軌道に乗り始めて、自分もたまに研修会に行ってみようかと・・・プラスプラスにちょっとずつ最近つながってきてるかなあ・・・	共通の目標
	F	Ⅱ再就職型	Ⅱ再就職型	・私は自分を試されてると思ってます。自分の力だけじゃどうしようもできないことが往々にしてよくあるので、そのときにどう自分が対処するかを神様がみてるんじゃないかと。 ・人とどこかで比べてるんですね。よそのママさんと。ま、お家では何があるかわからないけど、見てる限りでは、みんな幸せそうで、楽しく遊んでいるように見えるので、自分のどこが悪いんだろう、何か間違っているんじゃないかと。 ・うちの子、指シャブリがなおらないんですよ。指シャブリは、し始めて、何ヶ月くらいですかね。4ヶ月くらいですかね、しゃぶってる間は泣かないじゃないですか。それが楽だったんですね。だから指しゃぶりしてるってほっといて、自分のことしてたんですよ。	試されること

表Ⅴ-1-18 子育てとは

		希望コース	現実コース	子育てとは	キーワード 子育て
一致群	j	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・この子が生まれるまえとか、生まれたくらいとかは、・・・なんかやらなきゃいけないような感じがあった気がする。だけど、今は、自分の趣味になったというか、、この子がいるのが当たり前になった毎日みたいな…1歳前くらいだよね・・・・楽しい・・ ・ほんと生活の一部でしかないからな・・自分の一部だけど・・・生活の一部だけど・・最初から楽しいことばかりというイメージでもないし、何か思ったより楽しかったという方が大きいかなあ・・まだ、赤ちゃんだし今、・・・・また何か大きくなったら・・もっと親らしく・・変わって来るんだろうけど	趣味 思ったより楽しかった
	k	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・子育てって、自分を成長させてもらっている。いろんな事が見えてくる。仕事をしていたときは、子どもの立場からしか見えなかった。 ・でも、親になって、どうしたら子どもとつきあっていけるか、ストレスためずに精神的に強くなれるかとか・・・ストレス発散させたりして、自分にゆとりが出てきた。 ・勤めていた時は、子どもの目線だった。幼稚園も保育園も、早くお迎えに来てあげたらいいのにって思っていた。子どもにはいつもお母さんがそばにいてあげたほうがいい。そばにいつも一緒にいてあげようと思った。 ・本当に子供の目線で、親の立場を考えてなかった。全くお母さんの立場を考えてなかった。お母さんたちは大事な仕事をして遅くなる。自分がお母さんになってみて初めてわかることがあった。	成長 親の立場
	n	Ⅳ再就職希望型	Ⅳ再就職希望型	・あの子を・・・、子育て、子育て。あの子が何歳までが子育てなんだろうって思うんですけど、あの子を一人前の人にするための。うーん、難しい。子どもも育つけど自分も結構育ちますし、自分も結構育ったなあって思うことと、子どもがいたから広がった世界もあるし、子どもがいたからできなかったこともあるとかそんな風に思う人もいると思うんですけど・・・・。 ・我慢強くなるとか、寛大になるというか、まだ生まれて3年よねって、ふって思ったりすると、これはできなくて当たり前よねって思う時もあるけど、そう思ってたものが当たり前のようにできてることもあったりして。難しい子育て・・・。何だろう。答えがないから難しい。 ・3年間、生まれてきてありがとうはいつも頭にあったなあって思って。	自分も育つ 答えがない 寛大になる ありがとう

４．考察

(1) ライフコース決定の文脈に納得していない母親

A は病気から今の状況をしゃあないと自分に折り合いをつけ,B は親との関係を非常に客観的に見つめることにより自分の子育ても突き放して見ることができているように感じられた。D も自分の子どもをどのように育てることが良いのか考えることで成長し，それは自分にとって修行だと語っている。亡くなっている自分の母親のことで葛藤を抱えながらも，自分の子どもには同じ思いをさせたくないという強い気持ちも存在した。病気や親との葛藤を抱えている母親達のため,「自分の生き方をしたい」「子育てをしたい」という葛藤以上に病気になったことや自分の親との葛藤が,心の内を占めているものと推察された。

一方，C,F は子育てを修行，試練と捉え，子育てを自分の生き方の中でどうにもならないものと考え，葛藤を抱えている様子が窺われた。まさしく「自分の生き方をしたい」「子育てをしたい」という葛藤を抱え，C は自分が優先順位で二番目で折り合いをつけ，再就職した F は自分の生き方をしたいという葛藤が強くあると考えられた。原田(2010)が母親の自己実現と子育ての問題は,人生の根幹にかかわる根が深いものであることを示唆した。F の「今何してるんだろうと毎日思っている」という語りは，再就職したものの自分の納得した職種ではなく現在に打ち込むことができずに自分を見失いかけているとも言えよう。

E は就業継続型であったが，子どもと習い事という同じ目標をもつことにより，生活に張りが出るという体験をした。就業継続型のライフコース一致群は，目標をもつことにより，閉塞感や犠牲感が弱まることがすでに第Ⅳ章で示されており，子育て期の就業継続型の母親が子どもと一緒に何かを学び同じ目標を持てるということは互いによい影響を及ぼすものと考えられた。母親だけの目標ではなく，子どもとともに持てる目標というのは親子ともに生活に張りを与えるものと推察され，将来の希望も感じられた。

ライフコース決定が納得していない母親の場合，育児負担感をもつことが多いことはすでに示唆されたが，その否定的な感情にどのように折り合いをつけているかということは一様ではなく，F のように自分を見失うほどつらく試練と思う母親もいれば，しゃあないと明らめたり,自分と向き合う作業をしていたり,修行と思って暮らしていることがあり，対処の仕方にかなりの幅があることが示唆された。

(2) ライフコース決定の文脈に納得していた母親

h,l,m の 3 人は子育てはやってみないとわからないと表現した。子育てをする生活には自分なりに納得していたものと推察される。h は育児はやってみないと分からない極致だと表現し，育児をやってみて，子どもの将来のために社会をみつめたり，子どもをもって見えてくる社会に問題意識をもちはじめている。子育てに対する驚きと世界が違って見えてきている様子が理解される。一方，m にとって子どもを産んで見えたものは，こどもは可愛いけれど，育児の大変さであって，それを自分が担わなければならない負担が全面的に出ていた。こんなに大変であれば，子どもを産まなかったとまで語り，女性が大きく変化すると表現した。しかし，自分を見失うような発言はなく，社会や自分自身の変化をしっかりと見つめていた。また，l は育児をやってみてわかったことは母親の偉大さであったり，自分自身が子どもを優先させるようになって成長したという実感だった。

ライフコースが希望と一致していた母親 3 人のうち k は，専業主婦になってみると想像と違い，悩み苦しんだ経緯があるが，現在は自分が成長したと思えるようになっている。k

以外の二人は，子育てに関して，あまり辛いとか負担感というものはなく，感謝や趣味に思えるほど楽しいものだったと語った。これは，希望のライフコースと現実のライフコースが一致しており，ライフコース決定の文脈も，「小さいうちは子どもと一緒にいたい」「自分で育てたい」「成長を見れないのはもったいない」ということから，仕事より子育てをしたいと主体的に考えている点が他の母親と違う点と考えられる。

ライフコース決定の文脈が納得していた母親の場合，育児負担感をもつことが少ないことはすでに示唆されているが，育児の捉え方も「やってみないとわからないもの」，「成長」，「感謝」「趣味」など，ネガティブな捉え方が少ないことが示唆された。ただ，子どもを産んでみないとわからないと語ったｍだけは「負担」と捉えた。しかし，mは二人の子どもを布おむつで育てるような強さやまじめさがあり，負担と捉えている自分自身をもしっかりと見つめている母親だった。

第5節　乳幼児をもつ母親の育児期の捉え方と時間的展望

1.　目的

子育てという時期を過去・現在・未来の中でどのように捉えているかという視点から，母親の過去・現在・未来の連続性や広がりを把握し，母親の時間的展望の確立について、ライフコースの文脈から検討する。

2. 方法

調査対象者・調査手続き：第Ⅵ章第 1 節に同じ

調査内容：第Ⅵ章第 1 節でまとめて書かれてい調査内容のうち，母親の人生の中で育児期をどのように意味づけているかを尋ねた。

3. 結果

母親が子育ての時期を過去・現在・未来の中でどのように意味づけ，自身の過去・現在・未来をどのように語るかを示した。さらに語りの中でキーワードをとりあげ，過去・現在・未来に関わるキーワードは＜＞で表の中に示した(表Ⅵ-1-19, Ⅵ-1-20, Ⅵ-1-21, Ⅵ-1-22)。希望と現実のライフコース一致群不一致群にわけて，語りとそのキーワードを記述する。

(1) ライフコース不一致群の母親

希望と現実のライフコースが一致せず育児負担感が高い A, B, D, h, l, m を検討する。

A は忍耐の時期と表現し，今が一番大変な時として乗り切ろうと試み，過去から未来への連続性の中の今を感じさせた。キーワードは「忍耐の時期」＜今が一番大変＞である。

B は，子育ての時期を無駄ではない経験で，他のことと等しく一つの経験の時期と語った。また，人生の一部と表現し，他と同じ人生の毎日と表現した。過去から未来へ続く人生の中の一時期を表していたようで，仕事がメインストリートで育児はわかれているというイメージをもっていた。けれども，仕事に戻れないし，育児という引きこもりもしょうがないから，一緒くたにして同じところと今は変わった。キーワードは「経験」＜人生の一部＞＜一緒くたの道＞である。

また，D は子育てをしているこの時期に，自分も育つ時期で成長の時期だと語る。自分が幼かったころ亡くなった母のことを思い出すようで,ネガティブに語る場面もあったが,職場に母と同じ世代の人に声をかけられ安らぎを覚えている場面も語られた。キーワードは,「育児」「成長の時期」＜母親＞である。

h は自分がもう一回社会とどうかかわるか，子どもの将来をどうするか考えるきっかけになると語った。キーワードは「子どもの将来を考える」「必要なこと」である。

l は仕事をしていない自分の不安な気持ちも語ったが，母の言葉に支えられ，今を乗り切っている。また，母親が自分を育ててくれた時のことをを思い出す。キーワードは＜今は楽しいけど先が不安＞＜母親＞である。

m は女性にとって大きく変化の時と表現し，産んでみてわかった現実を語り，将来や過去のことは語らなかった。キーワードは＜変化の時＞である。

(2) ライフコース一致群の母親

希望と現実のライフコースが一致している C, E, F （就業形態は希望と一致しているが，

本当は希望した歩みをしていない）j, k, n を検討する。

C は求められて幸せな時期だけれど「もう 40 歳になるのでそろそろ自分のことを考えないと」という自分の将来の不安が語られた。また，子どもを優先させて自分が一番じゃなくなるジレンマも語った。キーワードは「幸せな時」「不安」「ジレンマ」である。

E はやる気の起きなかった一年が過ぎ，子どもの習い事を一緒に学ぶことによって，目標をもち，今まで歩んできた人生とはちょっと違って遠回りしてまた戻ると表現した。キーワードは「学ぶ時期」＜違う道＞である。

F は気がついてみたら 2 年があっという間に過ぎていることやセミナーや育児書を読み過ぎたことなど，過去の自分の子育てに対する後悔の気持ちが語られ，現在の自分のことも何しているんだろうと毎日思っている感じと語られた。キーワードは「試練」「成長」「何してるんだろう」である。

j が現在の状況がいつまでも続かないという感覚をもち，いずれ子どもが成長し，幼稚園，小学校と離れ，秘密を作ったり自分の世界をもっていくことを感覚として受け止めていた。キーワードは「今を一生懸命」＜長く一時続かない（一時）＞である。

k は，今はダンスに出会えて楽しく暮らせるようになったことを語り，皆が悩んで当たり前の時期なんだと語った。キーワードは「悩んで当たり前の時期」である。

n は今が一番楽しい時期と語り，50 才や 60 才になって振り返り，今の時期を楽しく思う自分を想像していた。何歳まで子育てなのか，まだ 3 年よねという思いも語られた。キーワードは＜一生で一番楽しい時期＞である。

表Ⅵ-1-19　子育ての時期

		希望コース	現実コース	子育ての時期	キーワード 子育ての時期
不一致群	A	Ⅲ専業主婦型（Ⅰ就業継続型　）	Ⅳ再就職希望型	・まあ、忍耐の時期。・・かわいいと思うこともあるけれど、大変なことの方が多いような気もするんで。今が一番大変、今が一番大変、今が一番大変と思って呪文のように繰り返し、すっと大変なんですけどね。きっと。 ・子育て終わってからでも遅くはないっていうか、なんていうんでしょうね。子育て終わってそれから好きなこともできるでしょうし、子育て終わってからでも良いじゃないかっていうような。今は我慢我慢、て。	忍耐の時期 ＜今が一番大変＞
	B	Ⅰ就業継続型	Ⅳ再就職希望型	・ちょっと前までは、全体として人生の中の引きこもりだと思っていたんですね。引きこもりというか小休止とそうは思いますけど・・ でも、実際には引きこもりでも小休止でもなくて、一番バリバリと大変な感じですよね。自分にとっては、楽しくて、暖かい毎日じゃなくて、もう、義務感でやってた頃は、もう、これは仕事だと思ってました。育児だという仕事だと思ってました。でも、そう思ってくると、仕事、自分で選んでやってるのに、これ、選べないからやだって思ってたりしてとか・・・今は、ま、それがあっても人生の一部なので、仕事も何もなくこれも経験かなという風に、こういう時期の経験なんだなあと・・・ ・前はなくてもいいと思ってたんですね・・・何というか、おこがましくもそう思ってましたけれども・・・ま、無駄ではない経験なんだろうなという感じであります。それが何かの糧になるとはとても思えなくて、毎日の失敗とイライラの数日が・・だから、ま、他のことと等しく一つの経験の時期だろうと・・・というか育児だけが人生の中で特別なのではなくて、そういうのもある自分の人生の、他と同じ人生の毎日というふうな・・・意識が・・・ ・仕事の道がメインストリートで、子育てがこういう風に分かれているというようなイメージに何となく捉えがちだったけれども、自分としては、もうこっちに戻る道というのもないし、こっちの引きこもりもそれももうしょうがないんだから、これもう、一緒くたにして同じところだという風に変わったかな・・・今は・・・そんな感じですね。	経験
	D	Ⅰ就業継続型	Ⅱ再就職型	・育自だって。自分を育てること。するまでのことをしてあげるのが、私たちの仕事なのかなっていうふうに思ってますね。だからそのためにはやはり、自分が、自分も一緒に育っていかんといけないんでしょうね。自分が成長していかんと。親としてと言ったら変やけど。 ・母が私が7ヶ月の時に死んだから、自分が子どもを産んだら絶対死んだりはしないって思ってきた。工場の中に60歳と54歳の人がいて、母が生きていたらこんな風に年をとって生きているんだろうなあって・・	育自 成長の時期 ＜母親＞

表VI-1-20　子育ての時期

		希望コース	現実コース	子育ての時期	キーワード子育ての時期
不一致群	h	I 就業継続型	III 専業主婦型	・人間一度は結婚して子供を産まないかんと私は思って、・・子どもを産むから、社会とか、世の中の関心度はぐっと高くなるので、子どもの人生の捉え方、もう一回自分が社会とどうかかわって行ってるとか、この子たちの将来をどうするか考えるきっかけになることなんだから、私は必要なことだと思っている。	＜子どもの将来を考える＞ 必要なこと
	l	I 就業継続型	III 専業主婦型	・もっぱら主婦の中の話で、これからどうするなんて・・・あと2，3年したらみんな巣立っていくなんて・・・ああ、働くなんて話になるんですよ。働くってなったときに、長いこと仕事してた人はそれに戻るって・・・看護師だったり、事務だったり・・でも何もないて言うか・・事務の経験も今だったら、5年10年あいたら怖いって・・・スキルも違うし・・・どうするどうするって話で・・・今は楽しいけど、やっぱり先が不安・・・ ・保育園にしようかなって母親に言ったらしかられて、あんたが楽がしたいがために保育園に入れるのは間違ってるって。子どもが小さいうちは、今しかない。もし、本当に働かなきゃいかん状況なら仕方がないけど、まだそんな状況じゃないならちゃんと子どもをみてあげなさいって。 ・本当に大変でお母さん働いてるんだよって、お母さんが背中を見せるんだったらまだしも、保育園に入れてまで働くことはないって言われた。私が間違ってるのかなって。 ・私の母がパートを掛け持ちしながら私たちを育ててくれたんけど、今、私が母親になってあの偉大さがわかる。きっといろいろ我慢してたんだろうなとか・・・私達がやりたいって言ったことは全部やらせてくれたし、わたしだったらできるのかなって、今こうこの母親になって、そこまで私我慢できないかもしれない・・だから、目標は母なんですよ。	＜今は楽しいけど先が不安＞ ＜母親＞
	m	I 就業継続型	IV 再就職希望型	・子供を産んでみてよかったなあと思ったけれど、子どもを産むってこと女性にとって大きく変化の時なんだなあと思って・・・思ってた以上に大きかったです。自己実現の場も失うし、かと言ってこどもを理由にあきらめたと思いたくもなくて悩む部分もあって、・・・・独身の時も結婚してからもこどもができるまではこんなに大変だとは思わなかった。意外と外に出ないと孤立しがちだし・・・産んでみないと見えない状況。 ・やめたって仕事はすぐ見つかると思ってたから・・・なってみたら、こりゃ皆子ども産まないはずだわって思った。この状況が見えてたら、もしかしたら子どもを産まなかったかもしれないと思いますね。	変化の時

表Ⅵ-1-21　子育ての時期

		希望コース	現実コース	子育ての時期	キーワード 子育ての時期
一致群	C	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・今はすごく求められてて、幸せな時期だなあって思うときと、もう40歳になるのでそろそろ自分の時間というか、自分のやりたいことをやっとかないと、間に合わないんじゃないかという不安と、いつもこう葛藤っていうんですか。だから子育ての時期は大事なんですけど、あんまり子育てだけに集中してしまうと、あとから何が残るのかなという不安がちょっとありますね。 ・子供を優先せざるを得ないので。自分を一番でできてたのが、全部自分が一番じゃなくなるので、そのジレンマ。それもちょっと。今だいぶ落ち着いてきましたけど、すごくいやな時も、そのときによりますけど。すんごくいやな時もあります	幸せな時 不安 ジレンマ
	E	Ⅰ就業継続型	Ⅰ就業継続型	・一緒に学ぶって感じですかね。子どもが3才だったら子育ても3歳。子どもが4才だったら子育ても4歳レベル。 ・一瞬で終わってしまうんですけど、学べる時期かなあ・・・ていう気はしてます。一緒に楽しんで学べる。全く違う人生かな。と思います。自分の今まで歩んできた人生とはちょっと違った遠回りじゃないけど・・・いなかったら、たぶん子どもがいなかったら、それなりにキャリアを積んで、普通にいろんなところに行ける。海外も行ける。遊びにも行ける。っていういろんなこともできるけど、また違う道みたいな。遠回りして、また自分の道に戻っていくみたいな。どちらかというと一つ幅を広げてるような感じですかね・・・	学ぶ時期 ＜違う道＞
	F	Ⅱ再就職型	Ⅱ再就職型	・試練というとつらい感じですよね。試練になるのかな。成長ですかね。さんざん成長してきたつもりですけど、全く違う方向に。成長ですかねやっぱり。子供を生まないと学べなかったところって、山ほどあるので、これはありがたい勉強の場ですよね。と冷静には思うんですけどね。冷静に話すと子供に優しくしようって思いますね。 ・必死で生きていて2年とか過ぎてて。あれ、うちの子話すようになってる、という感じで。なんかあと私は育児書を読んだり、セミナーに参加したりとか、行き過ぎたんですよね。なので、何が本当かわからなくなって。 ・自分の方向性も定まってなくて、その中で子どもがいて、今、何してるんだろうと毎日思っている感じで。	試練 成長 何してるんだろう

表Ⅵ-1-22　子育ての時期

		希望コース	現実コース	子育ての時期	キーワード 子育ての時期
一致群	j	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	何か先のことを考えてないから、これだけなんか・・・楽観的に言える気がするし・・・でも、今を一生懸命やることによって、・・これは感じたことなんだけど・・・先もこうであろうという安定感というか、安心感というか・・・そんなものを感じて・・・あんまり・・そんな安心っていうほど、自分がゆったりしてるかっていうとそうじゃない時もある ・ずっと続くとなったら、ここまでどっぷりつかれないような気がするんですけど・・今、この子と一心同体みたいな感じでやってるのは、続かないような気がするっていう感覚。	今を一生懸命 ＜長く続かない（一時）＞
	k	Ⅲ専業主婦型	Ⅲ専業主婦型	・悩んでいた時は、計画がなった。スケジュールがない。今日は、何しよう・・って思ってた。でも、悩んでいるのは自分だけじゃないって伝えたい。弟のお嫁さんが、夜眠れない、疲れてる・・私と同じ・・・私は、保育士だったし何でもできるって思われていた。弟のお嫁さんに、みんな同じ。そうやって悩んだりするって伝えてる。 ・今は、週に3回ダンスに行って、行ってない日は今日は外に遊びに行こうとか・・・・この日は、友達呼ぼうとか・・・私は、子育てを離れて、1時間こどもを預かってやっている。楽しい時間で、このダンスに出会えてよかった。	悩んであたりまえの時期
	n	Ⅳ再就職希望型	Ⅳ再就職希望型	・一生で一番楽しい時期だろうなって、たぶん自分が50・60になったときにふり返ってもあの頃ってすごい楽しかったなあってたぶん思いますね。一緒に楽しく。	＜一生で一番楽しい時期＞

4. 考察

(1) ライフコース決定の文脈に納得していない母親

喘息を患っていたAであるが，今が一番大変今が一番大変と乗り切ろうとしていた。大変な現在を未来は楽になるであろうと自分に言い聞かせていた。Bは過去における自分の母親との関係を自分の子どもとの間で繰り返さないように過去の自分と向き合っていた。Dもなくなった母親のようにはなるまいと思う反面，かなりの葛藤がまだ存在していたが，職場にいる中年の女性に母を見い出し，癒される経験をしていた．3人とも，決して肯定的な過去や現在ではないが，ポジティブに塗り替えようと努力している様子が見られた。Cは40歳になる自分の将来の不安が語られるとともに，現在も肯定的に思える時とそうではない時があることも語られた。子育てと自分のやりたいことの葛藤があり，子育てが終わると何も残っていないのではないかという不安も語られた。Fは気がついてみたら2年があっという間に過ぎていることや現在の自分のことも肯定的に語ることがなかった。都筑（1993）はアイデンティティの拡散した者は，過去・現在・未来のすべてについてネガティブにイメージしていることを示唆した。Fの場合も，自分のやりたいことが見つからないままにアイデンティティそのものも揺らいでいる可能性が推察される。

Eは目標をもつことのよさを語り，今まで歩んできた人生とはちょっと違って子育てという遠回りしてまた戻ると表現した。将来が展望され，目標が希望に繋がり，肯定的な未来が現在に含まれていた。

ライフコース決定の文脈に納得していない母親の場合，過去を受容したり将来を展望するのは，容易ではないことが示唆された。ライフコースの決定だけではなく，それ以前の過去に葛藤を抱えている母親が存在し，同じことを繰り返さないように塗り替える努力を払っている様子も見られた。

(2) ライフコース決定の文脈に納得していた母親

mは，現実の大変さを語り，これほど大変であると知っていれば子どもを産まなかったかもしれないと言った。kは，保育士だった時はわからなかったお母さん達の気持ちがわかるようになったと語り，過去を塗り替えていた。他の母親はほとんど肯定的な過去・現在・未来を語った。hは子どもの将来を考え，今の社会を見つめようとしていたり，lは母の後姿を思い出し，自分の母親としての在り様を母親と照らしあわせていた。子どもだった自分が母親になり，子どもを育てているという時間的連続性が存在していた。また，jは自分の子どもがいずれは幼稚園に行き，小学校に行って次第に離れていき，自分の知らないことが出て来るであろう感覚を感じていて，だからこそ，今，どっぷり子どもに浸れると表現した。子どもに関する肯定的な将来展望が現在の中に含まれていた。同じようにnも，いずれ齢をとった自分が子育ての時期を思い出した時，人生で一番楽しい時期だったと思いだすと語った。二人とも，自分の母親が同じように小さい時に専業主婦で子育てをしてくれたことも語り，過去も肯定的に受容していた。白井（1995）は時間的展望の獲得を将来に希望をもち現在の生活に充実を感じ過去を受容することだと述べた。ライフコース決定の文脈が納得していた母親の場合，時間的展望の獲得をしている母親が多いことが示唆された。ライフコース決定の文脈に自身が納得しているということが過去を受容することに繋がり，時間的連続性に結びつくと言えよう。

第 6 節　第Ⅵ章のまとめ

本章では，面接協力者 12 名を希望と現実のライフコースの一致・不一にわけて，6 事例ずつ検討した。

ライフコース決定の文脈において検討したところ，ライフコース一致・育児負担感高群は，就業形態は希望通りであるが，夫の転勤で職場環境が変わったり，仕事の内容が変わったりしており，必ずしも希望通りの歩みではないことが示された。育児負担感が高い母親は夫の転勤や希望などでライフコースが決定されていることが多く，母親が主体的に決めていることが少なかった。

一方，育児負担感が低い母親の中でライフコースが希望したライフコースと一致した群では，子どもが小さいうちは一緒にいることを希望していたり，自分で子育てをすることを主体的に決めていた。希望していたライフコースが専業主婦であったとはいえ，夫の意向で専業主婦になった場合と違い，子どもを育てたいという積極的な理由だった。また，育児負担感が低い母親におけるライフコース不一致の群で，夫の転勤に伴い仕事を辞め，新しい土地で仕事を始めようとした矢先に妊娠した母親が，そのタイミングで子どもができたことに積極的に意味を見い出し，主体的に受け止め，仕事をあきらめている姿が見られた。結婚し，二人で人生を歩む場合に，必ずしも女性が主体的に人生の方向付けを決めることができない場合がある。自分の望まない事態に遭遇し，そこに積極的に意味を見い出せることが過去を受容したり，育児負担感を軽減していることが示唆された。

育児負担感低群におけるライフコース不一致群の別の例としては，職場に迷惑をかけてはいけない，子どもに無理をかけてはいけないと仕事を辞めた母親は，自分の気持ちを主体的にコントロールしている姿がみられた。自己統制できる強さが過去を受容し，育児負担感を軽減していると考えられた。

次に母親が妊娠してから現在までの生活と育児感情については，ライフコースに納得していない母親においては，育児中心の生活の中で，仕事をしたいという葛藤がみられ，職種を選ばすに再就職する母親も見られた。反対に仕事を継続している母親の場合，子どもを朝から夜遅くまで預けることに葛藤が見られた。一方，希望通りのライフコースではなかったが，ライフコースの選択に納得していた母親は，育児をしている日常生活を語ることが多く，子どもの目線から社会を見たり，兄弟の育て方の違いや布おむつの話などが具体的に子どもに関する話題が出た。また，希望のライフコースで望んで育児をしている母親は育児を楽しんでいる様子が見られた。

乳幼児をもつ母親がうけているサポートについて，夫，両親，友達の視点から検討したところ，地域との繋がりを浅く広く付き合おうという母親と絆を深めて信頼をおいて友達づきあいをしていこうとする母親の二つの特徴が示された。

育児をどのように捉えているかという点については，育児期の母親が自分の親との関係も含めて今までどのような体験をしてきたのかということが反映されていた。自分の親との関係を現在の子育ての中で繰り返さないように考えていたり，自分の母親の後ろ姿を思い出したり，現在という空間の中に自分自身が子どもだった時の親の姿が存在していた。また，子どもの将来，自分の将来もみつめており，過去から未来への広がりが見られた。それはライフコース一致群不一致群の両方で見られていた。時間的展望の語りがみられな

かった母親は，子育てについて負担感が大きかったり試練と感じていたり，ネガティブな意味づけをしている傾向があることが示唆された。育児の捉え方は母親の子どもの頃から母親の現在，未来に及ぶだけではなく，子どもの未来にまでおよび，かなり広い時間的展望の広がりが見られていた。育児をポジティブに捉えようとしている母親ほど，過去・現在・未が広がっていることが示唆され，徳田（2004）の先行研究を支持した。また、育児を少しでも肯定的に意味づけることができるならば、育児負担感が緩和されていることも示唆された。

本研究では、「この子が来てくれて，3 年間ありがとうという気持ちしかなかった」「育児が趣味みたくなった」と明るく語った母親達がいた。育児の捉え方、意味づけ方がポジティブである母親ほど、育児負担感が低く、過去・現在・未来を肯定的に捉えていた。育児期の女性にとって、今後、育児が母親にとっていきいきと生きていくために必要なものと位置づけることができるようになると、育児期の女性のイライラ感やストレスなどは、かなり緩和されることになろう。神谷（1981）は、人間がいきいきと生きていくためには、生きがいほど必要なものはないと述べたが、育児期の女性にとって育児が生きがいとならず、負担にしか感じられないことも本研究で示された。仕事や趣味が生きがいでもよいであろう。しかし、本研究の母親の中に、育児にも仕事にも生活の中すべてにおいて、生きがいというものを失ってしまった母親が存在していた。鶴田（1998）は、他者や自分との出会いを通じて、人生を「生きがい」をもって創造していくことの重要性を述べた。本研究の母親の中には「仕事には戻れないので、子育てと仕事と分けずに一緒くたの道」「また、戻って行く」とさまざまな道を示せた母親もいた。道を創造できる母親は、いずれ生きがいをもつと考えられる。しかし、生きがいも見つからず、道が見えない母親にどのような援助をしていくかが、今後の課題になるであろう。

本研究では，ライフコースからの検討をするためには事例数が少なかったことと，専業主婦が多くなったため，今後は，有職者のサンプル数を多くして知見をためていくことが必要であろう。また，育児経験年数，子どもの数，子どもの年齢，母親の年齢などを配慮した分析をすることが，より援助に適した知見を得られるものと考えられる。

第Ⅷ章

総　括

第1節　ライフコースからみた乳幼児をもつ母親の育児負担感の理解

第Ⅱ章第 1 節で，先行研究の育児不安尺度（牧野，1982）や母親の不安尺度（岩田，2000）など，既存の尺度を参考に育児負担感尺度を作成した。その結果，「閉塞感・犠牲感」「疲労感」「自信なさ」「離反願望」の 4 因子が抽出された。妥当性も検証され，育児期の母親がもつ育児負担感が示された。「自信なさ」は育児不安を示す項目で，育児負担感尺度の中に育児不安も含まれており，妥当性が高いことが示唆された。本論の育児負担感の定義「育児行為の中で生じる育児への戸惑いや自信なさ，疲労感，負担感や犠牲感，逃避願望など，子どもや育児に対する否定的な感情や態度」と一致した尺度が作られたと言ってよいだろう。

第Ⅱ章第 2 節では，乳幼児をもつ母親の育児負担感をライフコースから検討し，ライフコースによって育児負担感にどのような違いがあるのか検討した。閉塞感・犠牲感において就業継続型が他の三つのライフコースより低く，再就職型が専業主婦型より低かった。働く女性の方が閉塞感や犠牲感が低いことが示された。また疲労感は，就業継続型と再就職型が，専業主婦型と再就職希望型より高く，有職の母親の方が無職の母親より疲れていることがわかった。育児の自信のなさは，再就職型が高く，離反願望は専業主婦型と再就職型が高かった。ライフコースの中で，再就職型が疲労感も高く，育児の自信もなく，離反願望も高いなど，総じて育児負担感が高いことが示された。

第Ⅲ章 1 節で，アイデンティティと育児負担感をライフコースから検討した。どのライフコースも同一性拡散地位群は育児負担感が高かった。アイデンティティが達成されるほど，育児負担感は低くなるが，権威受容地位群とアイデンティティ達成地位群は育児負担感に有意差がないという結果になった。しかし，アイデンティティの確立が育児負担感を軽減することが示された。

第Ⅳ章 1 節で，乳幼児をもつ母親の時間的展望を検討するために，時間的展望体験尺度(白井，1995)を因子分析をして確認したところ，先行研究と同様の過去の受容，現在の充実感，将来の目標指向性，将来の希望の 4 因子が抽出された。第Ⅱ章 2 節と同様に，ライフコースから検討した。現在の充実感，将来の目標指向性，過去の受容，将来の希望それぞれにおいて，就業継続型が有意に高く，ついで再就職希望型が高いことが示された。

また，希望したライフコースを選択することができた母親が，希望したライフコースを歩んでいない母親より，過去の受容が高く，現在の充実感も高く，将来の希望も持てるという結果だった。特別な場合を除いて，希望したライフコースを歩めた場合の方が，過去の選択を納得し，充実した生活を送り，将来の見通しも立てやすいと推察される。将来の目標に関してだけは，そのような結果は出なかった。就業継続型において，希望したライフコースを選択することができた母親が選択できなかった母親より将来の目標指向性が高かったが，他のライフコースにおいては，希望したライフコースを選択していようといまいと将来の目標指向性に変わりはないことが示された。

第2節　乳幼児をもつ母親の育児負担感を軽減するために

1. 時間的展望の高低が育児負担感を軽減するのか。

第Ⅳ章 2 節において，時間的展望とネガティブは育児感情の関連をライフコースから検討した。その際，現実のライフコースからの検討と希望のライフコースと一致・不一致からの検討をした。結果，すべてのライフコースにおいて，現在の充実感が高いこと，将来の目標指向性が高いこと，過去の受容が高いこと，将来の希望が高いことの方が，閉塞感・犠牲感，疲労感，自信なさ，離反願望を軽減することが明らかになった。

次に，四つのライフコースごとに検討したところ，現在の充実感が高いことはどのライフコースにおいてもすべての育児負担感因子を軽減することが示唆された。

将来の目標指向性が高いことは，就業継続型において，希望のライフコースと一致した場合は閉塞感・犠牲感，自信なさを軽減し，再就職型においては，希望のライフコースがと一致した場合も不一致の場合もどちらも自信なさと離反願望を軽減したが，希望のライフコースと一致した場合の方が自信なさと離反願望を軽減することが示された。それ以外では，どのライフコースにおいても，将来の目標指向性が高いことはすべての育児負担感因子を軽減することが示唆された。

過去の受容が高いことは，再就職希望型において，希望のライフコースと不一致の場合に希望したライフコースと一致した場合より閉塞感・犠牲感を軽減することが示された。それ以外では，どのライフコースにおいても，過去の受容が高いことはすべての育児負担感因子を軽減することが示唆された。

将来の希望が高いことは，再就職型において，希望のライフコースと一致した場合も不一致の場合も，どちらも疲労感を軽減するが，希望のライフコースと不一致の場合の方が一致の場合より疲労感を軽減することが示された。それ以外では，どのライフコースにおいても，将来の希望が高いことはすべての育児負担感因子を軽減することが示唆された。

以上，時間的展望を高めることは，育児負担感を軽減することが示唆された。ライフコースが希望通りでなかった再就職希望型の母親において，過去の受容が高ければ，閉塞感・犠牲感を弱めることが示唆された。同様にライフコースが希望通りでなかった再就職型の母親においても，将来の希望が高ければ，疲労感を軽減することが示唆された。また，ライフコースが希望通りだった就業継続型の母親においては，将来の目標が高ければ，閉塞感・犠牲感，自信なさを弱めることが示唆された。ただし，将来の目標が低ければ，逆に閉塞感・犠牲感，自信なさは高くなり，ライフコースが希望通りでない母親とかわらない閉塞感・犠牲感，自信なさを感じることも示唆された。

2. アイデンティティ統合に関わる要因が時間的展望を高め育児負担感を軽減するのか

第Ⅴ章 1 節において，性役割態度が時間的展望と育児負担感に及ぼす影響を検討した。結果，性役割態度は時間的展望との関連を通して間接的に育児負担感に影響を与えていること，どのライフコースにおいても現在の充実感が育児負担感に影響を及ぼしていること，ライフコースによっては過去の受容と将来の希望が育児負担感に影響を及ぼしていることが示唆された。

第Ⅴ章2節において，自己決定感が時間的展望と育児負担感に及ぼす影響を検討した。結果，どのライフコースにおいても，自己決定欲求とのズレが現在の充実感に影響を及ぼし，充実感を介して間接的にすべての育児負担感因子に影響を与えた。ライフコースによる育児負担感への直接的，間接的な影響の違いも見られた。直接的には，専業主婦型や再就職型において自己決定感は育児への自信なさ，閉塞感・犠牲感を軽減したが，就業継続型や再就職希望型においては離反願望，閉塞感・犠牲感，疲労感を高める危険性も示唆された。間接的には，就業継続型において，自己決定感と自己決定欲求とのズレは将来の目標指向性と希望を介して育児負担感を軽減し，再就職型においては過去の受容，将来の目標指向性と希望を介して，専業主婦型においては主に将来の希望を介して育児負担感を軽減した。ライフコースに応じて，援助の視点の違いを考慮する必要性が示唆された。

3. ライフコース決定の文脈は，その後の母親の育児生活において育児負担感や時間的展望に差異をもたらしているか

第Ⅵ章において，面接調査により，ライフコースをどのように決めたのか，妊娠から現在までの生活，育児をどうとらえているのか把握した。

ライフコース決定の文脈において検討したところ，育児負担感が高い母親は夫の転勤や希望などでライフコースが決定されていることが多く，母親が主体的に決めていることが少なかった。一方，育児負担感が低い母親は，子どもが小さいうちは一緒にいることを希望していたり，自分で子育てをすることを主体的に決めていた。しかし，夫の転勤に伴い仕事を辞め，新しい土地で仕事を始めようとした矢先に妊娠した母親が，そのタイミングで子どもができたことに積極的に意味を見出し，主体的に受け止め，仕事をあきらめている姿が見られた。自分の望まない事態に遭遇し，そこに積極的に意味を見い出せることが過去を受容したり，育児負担感を軽減していることが示唆された。ライフコース決定の文脈で主体的に決めているかどうか，あるいは積極的に意味づけることができるかどうかなどが，育児負担感軽減に繋がるものと推察された。一方，時間的展望に関しては，子育てに関する語りの中で，現在という空間の中に母親自身が子どもだった時の親の姿を思い出していたり，子どもの将来，自分の将来もみつめた語りがあり，時間的展望の広がりが見られた。それはライフコース一致群不一致群の両方で見られていた。過去や未来の語りがみられなかった母親は，子育てについて負担感が大きかったり試練と感じていたり，ネガティブな意味づけをしている傾向があることが示唆された。育児をポジティブに捉えようとしている母親ほど，時間的展望が広がっている語りがみられ，本研究のⅢ章で示されていた時間的展望と育児負担感の関連が見いだされていた。

第３節　ライフコースからみた育児負担感の特徴

1.　すべてのライフコースに共通していること

育児負担感を軽減するには，現在の充実感を高めることが重要である。

現在の充実感を高めるには，自分自身が決定したい欲求と実際に決定していることとのズレを小さくすることが重要である。

過去・現在・未来を肯定的に受け止めていること（過去を受容し将来に目標や希望をも

ち現在を充実して生きること）が育児負担感を軽減している。

アイデンティティが統合されている方が育児負担感が軽減されている。

2.　ライフコースによって違うこと

(1)　就業継続型の場合

就業継続型は，疲労感が高いけれども閉塞感・犠牲感，自信なさ，離反願望が低く，育児負担感は他のライフコースに比べて低いことが明らかになった。

時間的展望に関しては，過去の受容・現在の充実感・将来の目標や希望のすべてが他のライフコースに比べて高く，過去・現在・未来を肯定的に受け止めていると言えよう。

また，性役割に関しては，男女平等と考える傾向が強く，自分自身が男女平等主義と考えるだけでなく，夫もそうであると認知していることが示された。

育児負担感を軽減するには，平等主義的な性役割態度を自身が持つことと，夫もそう認知すること，そして過去を受容することがあげられる。

就業継続型では，自己決定感は過去から未来のすべてを高める重要な要素であることが明らかになった。自ら決定しているという感覚をもつことが重要であることが示唆された。しかし，自己決定感が高いことは離反願望を高めるという，相反する結果もでたため，，一人で決めて一人で育児を背負い，負担になっている可能性も考えられる。就業継続型はバランス感覚をもった決定のしかたが重要になると思われる。

また，将来の目標や希望をもつことは疲労感や自信のなさ，離反願望を弱めることが示された。就業継続型は将来の展望に焦点を当てて考えることが重要である。特に，ライフコースが希望通り一致している場合は，目標をもつことが育児の自信に繋がり，閉塞感・犠牲感を弱めることも明らかになった。

(2) 再就職型の場合

再就職型は，疲労感が高く，育児に自信がなく，離反願望も強いことが示された。ネガティブな育児感情が他のライフコースに比べて高い。

時間的展望に関しては，現在の充実感が極めて低く，過去の受容，将来の希望もかなり低いことが示された。再就職型は充実感が低く，育児負担感を抱いている母親が多い可能性が示唆された。

また，性役割に関しては，男女平等主義的な傾向がやや強いが，就業継続型のように平等主義的には考えておらず，専業主婦型ほど伝統主義的な性役割の考え方もしていないことが明らかになった。夫に対する性役割の認知は，あまり平等主義的だとは考えていないことも示された。

育児負担感を軽減するには，平等主義的な性役割態度を自身が持つことと，そして過去を受容することと希望をもつことがあげられる。

再就職型では，過去の受容・現在の充実感・将来の目標や希望を高めるためには自己決定欲求と自己決定感のズレを小さくすることが重要であることが示された。 過去・現在・未来が，閉塞感・犠牲感，疲労感，自信なさ，離反願望に影響を与えているため，幅広いスパンの対応が必要であることが示唆された。 また，将来の目標をもつことは疲労感を強

めることが示され，目標が焦りに通じ，目標と現実の壁との間で疲労感を感じている可能性も考えられる。

一方，希望のライフコースと一致している場合も不一致の場合も，目標を高くもつことが育児の自信に繋がり，閉塞感・犠牲感を弱めることも明らかになっている。一致している場合の方が育児の自信を高め，閉塞感・犠牲感を軽減することも示された。また，希望を高くもつことは疲労感を弱め，特にライフコースが不一致の場合に効果的に疲労感を弱めることも示された。

(3) 専業主婦型の場合

専業主婦型は，疲労感は低いけれど，閉塞感・犠牲感が高く離反願望が高いことも示された。育児負担感は，他のライフコースに比べて高い方である。

時間的展望に関しては，将来の目標指向性や希望が低く，過去の受容も低いことが示され，将来の見通しがかなり低かった。

性役割に関しては，専業主婦型がどの群よりも男女平等主義と考えている傾向が低く，伝統志向的であることが示唆された。夫に対しても伝統志向的であると考えている傾向が強いことが示された。

育児負担感を軽減するには，希望をもつことが重要であると示唆された。専業主婦型において，性役割態度は時間的展望に影響を与えていなかった。専業主婦型にとって，時間的展望の構成要素である充実感や希望に影響を与える要因は性役割態度ではなく，もっと他のことであることと考えられる。

また,専業主婦型にとって,自己決定することは育児への自信に繋がることが示された 。将来の希望をもつことは，閉塞感・犠牲感，離反願望，育児における自身のなさを弱めることから，専業主婦型にとって，自分の将来を見つめ考えることが，現在の安定に繋がると考えらる。

専業主婦型では，希望のライフコースと一致している場合と不一致の場合では，育児負担感や時間的展望の違いはみられなかった。専業主婦型の場合は，望んで専業主婦になった母親も本当は違うライフコースを希望していた母親も，育児の感情や過去・現在・未来の意識に違いがないことが示唆された。

第Ⅵ章の事例でも，専業主婦を望んでいたわけではなかったけれども自分の中で折り合いをつけて専業主婦をしていた母親が存在していた。また，納得せず，再就職した母親もいたため，専業主婦をしているということは不本意であっても自分を納得させてセルフコントロールし、道を切り開いている可能性も考えられる。

(4) 再就職希望型の場合

再就職希望型は，閉塞感・犠牲感が高いが，疲労感，自信なさ，離反願望が低く，育児負担感は低いことが示された。

時間的展望に関しては，現在の充実感が高く，過去の受容や将来の希望もかなり高く，将来の目標指向性だけはやや低いが，過去・現在・未来を肯定的に受け止めていると理解される。

また，性役割に関しては，男女平等と考える傾向が強く，専業主婦型に比べると有意に男女平等と考えていることが示された。

育児負担感を軽減するには，過去を受容できることと将来の希望が見えることが重要な要素であることが示唆された。再就職希望型においてのみ，性役割態度のズレを小さくすることが充実感を高めることが示唆された。今後再就職を考え準備していくということを考えれば，性役割態度のズレがないということが重要であろう。また，過去受容や希望を高めるのは，妻の性役割態度が平等主義的であるということで，夫ではなく，妻自身の性役割態度が過去を受容し希望へとつなげていくことが示唆された。

また，再就職希望型では，自己決定感は将来の目標や希望に影響を及ぼし，過去や現在に影響を与えていないことが示された。仕事を辞めた過去や仕事をしていない現在の生活に対して肯定的な思いが伴いにくいことが示唆されたと言えよう。さらに将来への思いとの間で葛藤を生み出し，閉塞感・犠牲感，疲労感，離反願望を高めている可能性が示唆された。一方，自己決定感から影響を全く受けていない過去の受容が，疲労感・自信なさ・離反願望を弱めていた。家庭に入った自分を家族としてのあり方 の中で受容することが大切と思われる。

また，再就職希望型の場合，ライフコースが希望と一致していない母親は，過去を受容することができれば，ライフコースが希望と一致していた母親より，閉塞感・犠牲感を弱めることも明らかになった。

第 4 節　　ライフコースの文脈からみた育児負担感の特徴

１．　ライフコース決定の文脈に納得していない場合

ライフコースの決定は，夫の転勤に伴い職場をやめて，主体的にライフコースを決定していない場合が多かった。就業形態は同じで働き続けていても，仕事の内容が変わり，不本意な場合もあった。育児負担感は高く，仕事をしたかったことに対する葛藤が語られた。

病気だったり,もとの道に戻れないことを明らかに悟った母親はしゃあないとあきらめたり，一つの経験として子育てを受け止めていた。とりあえず，職種を選ばずに再就職し，将来の時間が残り少なくなって焦り出している母親は子育てを試練や修行と捉えていた。子どもの習い事を一緒に目標にしてやりだした母親は，遠回りしてまた元の道に戻ると表現した。子育てを共通の目標で楽しみ学ぶものだと捉えていた。

子育てに対して育児負担感の高い母親たちではあるが，子育ての意味づけ方はそれぞれで，ポジティブ，ネガティブ，どちらでもなく意味づけていた。ポジティブな意味づけは将来に目標や希望が繋がり，自分自身も子育ての時期は違う道にいてまた戻ると表現し，時間的連続性が存在した。ポジティブでもネガティブでもなく意味づけた母親は，一緒くたの道，人生の一つの経験と位置付け，道と表現し，時間的連続性が存在した。育児をネガティブに意味づけていた母親は将来が不安で，先が見えない状況だった。

ライフコースに納得していない母親たちの育児の意味づけ方は多様だった。ポジティブに意味づけることができなくとも，状況を明らかに見て，もとに戻れないと明らめた母親は，ポジティブでもネガティブでもなく子育てを意味づけ，時間的連続性の中で捉え，今の状況を受け入れることができていた。

２．ライフコース決定の文脈に納得していた場合

ライフコースの決定は主体的に選択して家庭に入った場合と，夫の転勤などで不本意であるけれど仕事を辞めて家庭に入り，ポジティブに意味づけている場合，不本意ではあるけれど，自分の心を統制して納得している場合などがあった。どの場合も育児負担感は低かった。

主体的に子育てをしたいと入った場合は，育児の楽しさを語ることが多かった。ただ，子育てをしたくて入ったが，悩んだ母親もおり，夫や地域の友達に支えられたことと，ダンスに出会って立ち直っていったことを語られた。

育児の捉え方はポジティブな捉え方が多かったが，自分を統制して日常を送っている母親は，育児は産んでやってみないとわからないもので，育児期は女性にとって大きく変化する時であり，負担であるとも語られた。一方，子育てをすることを主体的に選択した母親は，育児を趣味，ありがとうという感謝で捉えていた。年を取って今をふり返ると一番楽しい時，いずれ子どもには友達ができ離れていく時が来ることを語り，ポシティブな将来が語られることが多かった。

第５節　　今後の課題

1. ライフコースに応じた援助法の検討

本研究では質問紙調査で，四つのライフコースに分けて分析してきたが，ライフコースによってかなりの違いがみられ，ライフコースに応じた援助の必要性が示唆された。本研究の面接調査の分析では，専業主婦が多くやや偏りがあったため，四つのライフコースに分けて分析するのは難しかった。今後，ライフコースのバランスを考えて調査し，それぞれのライフコースが抱えている課題の違いを詳細に把握することと，その違いの背景や文脈を面接調査や実践において深め，ライフコースに応じた援助法を検討することが重要と思われる。

2. 再就職に至る過程を詳細に把握し，支援の検討

再就職型は充実感が低く，育児負担感を抱いている母親が多いことが示唆されたので，子どもが小さいながらも再就職しているのは，自ら希望したものなのか，希望した職種につけたのかなど，母親の気持ちに焦点をあてて，面接調査で詳細に把握し，支援を検討していく必要がある。

3. 希望したライフコースでないにもかかわらず，克服して生きている事例の検討

「自分の生き方をしたい」「子育てをしたい（子育てをしなければならない）」という葛藤が乳幼児をもつ母親に存在していた。自分の希望したライフコースでない歩みをしている女性たちは，模索して苦しんでいた。しかし，子育てや自分の歩みを意味づけ納得して歩んでいる女性もいた。どこに違いがあるのか，今後，面接調査など事例を通して把握し，援助の視点を得ることが重要と考える。

引　用　文　献

引用文献

Andry,R.G.（1960）. Delinquency and Parental Pathology. Methuen.

江上園子（2005）. 幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全　発達心理学研究, **16**(2), 122-134.

Erikson,E.H.(1959). *Identity and the life cycle*. New York：International Universities Press.（小此木啓吾（訳）(1973). 自我同一性　　誠信書房

萩原 俊彦・櫻井 茂男（2008）.“やりたいこと探し”の動機における自己決定性の検討――進路不決断に及ぼす影響の観点から――　教育心理学研究, **56**,1-13.

原田 正文（2006）. 子育ての変貌と次世代育成支援――　兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防――　名古屋大学出版会

原田 正文（2008）. 子育ての過去・現在・未来　そだちの科学,**10**,33-37.

原口由紀子・松浦治代・矢倉紀子・佐々木くみ子･笠置綱清（2005）. 母親の個人としての生き方志向と育児不安との関連　小児保健研究, 63(2)), 265-271.

畑野 快（2010）. アイデンティティ形成プロセスについての一考察―自己決定を指標として―　発達人間学論叢 13, 31-38.

服部洋子・原田正文　(1991). 乳幼児の心身発達と環境　名古屋大学出版会

比嘉麻美子・岡本祐子（2007）信頼感を基盤とした青年の未来展望形成プロセス　広島大学心理学研究, **7**,　227-243.

Frank,L.K.（1939）. Time perspectives. *Jounal of philosophy,* 4,293-312. Cited by M.Wallace & A.I.Rabin Temporal experience. *Psychological Bulletin*, 1960, 57, p.227

藤原 善美 (2005). 大学生のライフコース展望における自律性尺度の開発――　自己決定理論に基づいて――　　進路指導研究,**23** (2),11-18.

Hultsch,D.F. & Bortner,R.W. (1974). Personal time perspective in adulthood：a time-sequential study. *Developmental Psychology,* **10**, 835-837.

今泉　岳雄　(2001). 母親の育児不安　げ現代のエスプリ **408**　至分堂 31-39.

岩井八郎　(2010). 戦後日本型ライフコースの変容―JGSS－2009 ライフコース調査の研究視角と予備分析―　日本版総合的社会調査共同研究拠点　研究論文集[10] JGSS Reserch Series ,7 ,193-204 .

岩田美佳　(2000). 現代社会の育児不安　家政教育社

神谷美恵子（1980). 生きがいについて　みすず書房

柏木惠子・若松素子（1994).「親となる」ことによる人格発達：生涯発達視点から親を研究する試み　発達心理学研究, **5**, 72-83.

柏木惠子（2001). 子どもという価値, 東京, 岩波書店

加藤　厚　(1983). 大学生における同一性の諸相とその構造　教育心理学研究　　**31**（4）20-30.

勝俣瑛史　(1995). 時間的展望の概念と構造　熊本大学教育学部紀要, 人文科学　**44**, 307-318.

川井　尚他　(1993). 育児不安に関する基礎的検討　日本総合愛育研究所紀要 **30** 集

27-39　1993.
河村茂雄・武蔵由佳　(2001)．自我同一性地位を規定する要因の検討　カウンセリング研究　**34**　23-32.
数井みゆき（1995）．親役割ストレス・夫婦関係・親子関係の父母比較　家庭教育研究所紀要，**17**，73-83.
数井みゆき・無藤　隆・園田菜摘（1996）．子どもの発達と母子関係・夫婦関係・幼児を持つ家族について　発達心理学研究，**7**(1)，31-40.
経済企画庁国民生活局　(1987)．新しい女性の生き方を求めて
小林　真・渡辺亜矢　(1996)．母親であることについての女性の自己意識　富山大学教育学部　研究論集，**3**，63-67.
レヴィン　末永俊郎(訳)　(1954)．時間的展望とモラール K.　レヴィン　社会的葛藤の対決　東京創元社　134-164. (Lewin,K. 1942　*Time perspective and moral*. New York：Houghton Mifflin)
レヴィン　猪股佐登留(訳)　(1974)．社会学における場の理論　誠心書房　(Lewin,K. 1951　*Field theory and social science*. New York：Harper)
前川あさ美・無藤清子・野村法子・園田雅代　(1996)．　複数役割をもつ成人期女性の葛藤と統合のプロセス（その１）日本教育心理学会総会発表論文集，**38 ,** 122.
Marcia,J.E.(1966)　Development and validation of ego identity status.*Journal of .Personality and Social Psychlogy*, **3**, 551-558
牧野カツコ（1981）．育児における〈育児不安〉について　家庭研究所紀要，**2**，41-51.
牧野カツコ（1982）．乳幼児をもつ母親と〈育児不安〉　家庭研究所紀要，**3**，35-56.
牧野カツコ(1983)．働く母親と育児不安　家庭研究所紀要，**4**，67-76.
牧野カツコ(1985)．乳幼児をもつ母親の育児不安　家庭研究所紀要，**6**，11-24.
牧野カツコ(1987)．乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安　家庭研究所紀要，**9**，1-13.
牧野カツコ(1988)．＜育児不安＞の概念とその影響要因についての再検討　家庭研究所紀要，**10**，23-31.
McAdams,D.P.(2008). The role of theory in personality research. In O.P.John, R.W. Robins & L.A.Pervin(Eds.), *HandBook of personality:The theory and research*, 242-262. New York:The Guilford Press.
宮本純子 (2007). 乳幼児をもつ母親の育児不安についての研究　心理臨床学研究, **25**, (3) 346－355.
宮本 純子（2008）．乳幼児をもつ母親の育児不安についての研究――ライフコースと自我同一性との関連から――　九州大学心理学研究, **9**, 215-221.
宮本純子（2009）．乳幼児をもつ母親の育児不安と時間的展望との関係――ライフコースと生きがいとの観点から――九州大学心理学研究, **10**, 191-197.
宮本 純子（2009）．乳幼児をもつ女性のグループ「ほっとサロン」の試み　九州大学心理臨床研究，**28**，81-89
溝田めぐみ（2008）．育児不安研究のレビュー　香蘭女子短期大学研究紀要, **51**，183-187.

森山浩司・宮原恵理 (2008). 育児不安に関する研究動向　白鳳女子短期大学研究紀要, **3**, 1-18.
椋野美智子 (2001).「主婦の保護」から「子育て支援」へ―ライフスタイルの変遷と社会保障―　現代のエスプリ **408**　至分堂 58-68.
無藤清子・園田雅代・野村法子・前川あさ美 (1996). 複数役割をもつ成人期女性の葛藤と統合のプロセス(その 3)　日本教育心理学会総会発表論文集, **38**　124
内閣府 (2006). 平成 18 年版国民生活白書　東京：社団法人時事画報社
内藤直子・橋本有理子・杉下知子（1998). 0～3 歳の乳幼児を持つ（専業母親）の子育て観尺度開発に関する研究―CPS-M97 の妥当性・信頼性の検証―日本看護科学会誌, **188**(3)　1-9.
永久ひさ子　(1995). 専業主婦の生活と心理　現代のエスプリ **331**　至分堂 171-181.
名越清家・小高洋子　(1997). 乳幼児を持つ母親のライフコースと育児不安　福井大学教育学部紀要, **53**, 52-72
野村法子　(1995). 女子青年の心理的葛藤―カウンセラーの視点から　現代のエスプリ **331**　至分堂 103-111.
小原倫子　(2005). 母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難観との関連　発達心理学研究　**16**(1) 92-102.
岡本祐子　(1986). 成人期における自我同一性ステイタスの発達経路の分析　広島大学教育学部紀要　**34**　352-358
岡本祐子　(1995). 成人期のアイデンティティ発達における「関係性」の側面について　広島大学教育学部紀要　**44**　145-154.
岡本祐子　(1996). 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究　日本家政学会誌, **47**（9）849-860
岡本祐子　(1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学　ナカニシヤ出版
岡本祐子　(2002). アイデンティティ生涯発達論の射程　ミネルヴァ書房
大日向雅美(1988). 母性の研究　川島書店
大日向雅美(1995). 母であること　現代のエスプリ, **331**, 至文堂, 182-192.
大日向雅美(2000). 母性愛神話の罠　日本評論社
大日向雅美(2002). 育児不安　こころの科学, **103**, 日本評論社, 9-15.
大野　久・白井利明・都築　学・西平直喜・佐藤有耕(2010). 生涯発達に関するアイデンティティと時間的展望および統合の視点からの接近　日本教育心理学会総会発表論文集, **52**　190－191
桜井 茂男（1993). 決定とコンピテンスに関する大学生用尺度の試み　奈良教育大学教育研究所紀要, **29**,203-208.
佐々木正美　(1996). 育児不安の解消は孤独・孤立の解消から　こどもの未来, 303　12-14
佐々木尚之・岩井八郎・岩井紀子・保田時男　(2009). ライフコースの多様性をとらえる―JGSS－2009 ライフコース調査の設計に関するノート―　日本版総合的社会調査共同研究拠点　研究論文集, **9 ,** JGSS Reserch Series **6**　175-189.
佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島　悟・北村俊則（1994). 育児に関連するストレス

とその抑うつ重症度との関連　心理学研究，**64**(6)　409-416.
塩崎尚美・無藤　隆（2006）．幼児に対する母親の分離意識：構成要素と影響要因　発達心理学研究，**17**(1)，39-49.
園田雅代・無藤清子・前川あさ美・野村法子（1996）．　複数役割をもつ成人期女性の葛藤と統合のプロセス（その１）日本教育心理学会総会発表論文集，**38**　123.
白井利明（1991）. 青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の関連　心理学研究，**62**(4)，260-263.
白井利明(1994)．時間的体験尺度の作成に関する研究　心理学研究，**65**(1)，54-60.
白井利明(1995)．時間的展望と動機づけ　心理学評論，**38**(2)，194-213.
白井利明(2003)．大学から社会への移行における時間的展望の再編成に関する追跡的研究（Ⅴ）大阪大学紀要Ⅳ，**52**(1)，23-31.
白井利明・都築　学・榎本博明・勝真久美子・中村知靖(2010)．アイデンティティと時間的展望の縦断研究―質的分析と量的分析の統合―時間的体験尺度の作成に関する研究　日本教育心理学会総会発表論文集，**52**，172－173.
白井利明(2011)．成人前期と中年期のアイデンティティ発達に関する研究課題　大阪教育大学紀要Ⅳ，**59**(2)，123-138.
石　玲・桂田 恵美子（2010）．保育園児を持つ母親のディストレス―相互協調性・相互独立性およびソーシャル・サポートとの関連―発達心理学研究,**21**,138-146.
杉田あけみ（2011）．有配偶女性が理想と考えるライフコースに影響を与える要因―「男女の能力発揮とライフプランに対する意識に関する調査」から―　千葉経済大学短期大学部研究紀要，**7**，31-41
杉山　成・神田信彦(1996)．青年期における一般的統制感と時間的展望―アパシー傾向との関係性―　教育心理学研究，**44**，418-424.
鈴木淳子(1994)．平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)の作成　心理学研究，**65**(1)，34-41.
住田正樹・中田周作(1999)．　父親の育児態度と母親の育児不安　九州大学大学院教育学紀要，**2**　19-38
高橋道子・小渕　恵（2000）．平等主義的性役割態度に影響を及ぼす要因の検討―夫婦と未婚青年を対象として―　東京学芸　大学紀要，**51**，123-133.
武田京子　（1998）．わが子をいじめてしまう母親たち　ミネルヴァ書房
田中昭夫（1997）．幼児を保育する母親の育児不安に関する研究　乳幼児教育学研究，**6,** 57－64.
田中文子（2001）．21 世紀の子育てのあり方　現代のエスプリ，**408,** 194-203
谷　冬彦（2001）．青年期における同一性の感覚の構造―多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成―　教育心理学研究，**49**，265-273.
徳田治子（2004）．ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から発達心理学研究，**15**(1)　13-26.
鶴田一郎（1998）．カウンセリングと「生きがい」についての一考察　カウンセリング研究，**31** (1) 52-61.

都筑　学：(1982). 時間的展望に関する文献的研究　教育心理学研究, **30 ,**73-86.
都筑　学(1993). 大学生における自我同一性と時間的展望　教育心理学研究, **41**,40-48.
内田　知宏・上埜　高志：(2010). 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討　東北大学大学院教育学研究科研究年報,**58**,257-266
Wallace,M.（1956). Future time perspective in schizophrenia. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 52, 240-245
渡邊 ひとみ・内山 伊知郎（2011). 独身勤労女性のライフコース選択と生活領域からみたアイデンティティとの関連　発達心理学研究, **22**, 189-199.
吉田 弘道･山中 龍宏･巷野 悟郎･太田 百合子･中村 孝･山口 規容子･牛島 廣治（1999）. 育児不安スクリーニング尺度の作成に関する研究　小児保健研究, **58**, 697-704.

謝　辞

調査の実施にあたり，ご協力いただきました保育園の緒先生方，公民館並びに地域支援課の皆様に感謝いたします。お子さんを抱え，お忙しい中をアンケートに丁寧に答えて下さったお母様方，面接を快く引き受けてくださったお母様方に心より感謝いたします。

お母様方の現状に役に立つ研究にするには力が足りず不十分ですが，一つの論文としてまとめることができ，新たな出発点に立つことができました。ご指導いただきました九州大学の緒先生方に心よりお礼申し上げます。

指導演習では，多くのご助言をいただきました。田嶌誠一先生，吉良安之先生，遠矢浩一先生，佐々木玲仁先生，古賀聡先生，優しく厳しく，緊張感のある充実した時間をありがとうございました。カンファレンスでは，実践の香りが漂う中で学ぶことができました。大場信恵先生，増田健太郎先生に感謝いたします。

修士まで指導教員としてご指導いただいた野島一彦先生（現：跡見学園女子大学），副指導教員をお引き受けいただいた針塚進先生，松崎佳子先生には，特に多くの場面でご指導いただき，大変お世話になりました。心からお礼申し上げます。

博士課程に入りましてから，わたくしをいつも温かく細やかにご指導して下さった福留留美先生に心から感謝いたします。本論文をまとめるにあたり，遅々として論文が進まないわたくしを寛容に見守り，励まし，光を照らして下さいました。先生のご指導がなければ，わたくしは論文をこのような形でまとめることができなかったと思います。本当にありがとうございました。心から感謝を申し上げます。

2013 年 2 月

宮本　純子